

東周列国志

詞には
通りに曰く。

徳といえは三皇五帝、功名であれば夏殷周、英雄ならば五覇。ただ英雄五覇春秋をにぎわすも興亡は忽ちに移る。青史に残る名は数行なるも、北邙の墓は無数なり。前人の土地は後人が取る。これより語るは正に竜虎の争いの物語である。

第二回

周宣王 風説を信じみだりに人を殺め
杜大夫 幽鬼となり冤罪を追求

そもそも周朝は、武王が殷の紂王を討つて天子の位に就いて以降、成王、康王がこれを継いで基盤を固め、周公、召公、畢公、史佚らの賢臣が補佐して文治国家として国を富ませ民を安んじてきたのである。武王より八代下つて、九代夷王の時代になると天子拝謁の礼が必ずしも行われなくなり、次第に諸侯の力が強大になってきた。十代目の厲王は

三皇五帝 太皞の帝玉 三皇とは伏羲、神農、女媧、五帝とは黄帝、帝顓頊、帝嚳、帝舜、帝禹

春秋五霸 武力と徳で諸侯に従えた五大覇主 本書は最後の『列国志』で齊桓公、晋文公、楚庄王、宋襄公、秦穆公を挙げているが、宋襄公をはずし呉闔閭、越句踐を五覇に数える等諸説ある。

北邙 洛陽東北にある邙山の麓にある墓地 唐の詩人沈佺期に有名な詩「北邙山」がある。「北邙山上列墳墓、万古千秋对洛城。」
諸侯 封建時代の君主 正式には周王から諸国を支配することを認められた君主

暴虐無道のため殺され（屍に出奔し十四年後に死去、これが長年にわたる混乱の始まりとなるのである。その後周公と召公（建国の元勳、周公旦、召公奭の子孫）が協力して擁立した王が太子静すなわち宣王である。この天子は名君で道理をわきまえ、方叔、召虎、尹吉甫、申伯、仲山甫らの賢臣を登用して文王、武王、成王、康王の世の政治を復活し周室を中興した。詩に言う。

夷王厲王が乱せし綱紀 宣王は賢者を用いて治めたり
共和に中興の主なりせば 周朝どうして八百年を保ちえよう

しかし宣王は政治に熱心であつたが、丹書を戒めにして常に座右に銘を置き自戒に努めた武王には及ばず、中興の主ではあるが、康王の時代のように大々的に教化して広く四方を臣服させるには至っていない。治世三十九年に姜戎が王命に反抗したので、宣王は親征したが千畝（現山西介休）で破れ大損害を被つた。再挙には兵力が不足だったので、王自ら太原へ徵兵に出かけた。太原は今の（原書が書かれた清代の今、固原州で、戎、狄に近隣している。徵兵は現地の戸籍を調べ人口や車馬教物

である。後に下克上の中で晋国は臣下の魏趙韓三氏が、斉国は田氏が国を篡奪した時、実力は周王より大きかったが大義名分を重視し、実力の衰微していた周王に正式に諸侯を認めさせている。

共和 厲王が出奔した後、天子不在の十四年間『史記』に拠ると、周公、召公が協力して共に和して善政を行つたという。この王不在時代を共和という。共和の解釈には他に『竹書紀年』「莊王」等では共伯和が政治を代行した時期であるとする。共伯和の纂奪説と撰政説がある。

丹書 古代統治者はその任を天命によるとした。上の道徳などを天帝の命令として書き記したもので、赤（丹）が口にくわえられたといわれる。別に罪人名簿の意味もある。第64回注に参考。

飼料が豊富か否かを検討するのである。太宰の仲山甫は諫言したが宣王はどうしても聞かず準備を調べて出発した。後人の詩がある。

大豚殺すに何ぞ利剣を辱め 雀を撃つに隋珠を用いん
皇威は地に落ち 民の痛みは報われず

さて、宣王は太原で徴兵を終え、鎬京こうけい（西周の都、現西安近辺）の近くまで帰って来た。その夜のうちに都に入ろうと車を急がせていると、ふと子供たち数十人が群がって手をたいて声を揃え歌を歌っていた。車を止めて耳を澄ますと、その歌詞は

もうすぐお月さま昇り お日さま沈む
槩えんの弓と箕きの箠えびら やがて周は滅ぶだろう

宣王は怒って御者に子供たちを全員捕えてくるよう命じた。子供たちは驚いて逃げ散ってしまい、年長の子と幼い子の二人だけが捕えられて天子の車の下に連れて来られた。

「この歌は誰が作ったのかね」
と宣王がたずねたが、幼い方は恐がつて何も言えない。年長の子が答えた。

「おらたちが作ったんじゃないぜ、三日前に赤い服を着た子が町にやっ来て、なぜか知らんがおらたちにこの歌を声を出して歌わせたんだ。

「太宰 周の中央政府の行政機関である六宮の長を兼ねた日本の首相にあたる

隋珠 隋春秋時代の隋の国君が漢本ぼくすしの靈蛇から恩返しにもらったといふ宝珠 隋偽珠と和氏の璧かしのきは宝玉として並び称される

すぐにあちこちに広がって、今じゃ都中で知らない子はいないよ、歌ってるのはおらたちだけじゃないぜ」

「その赤い服を着た子は今どこにいる」

「おらたちに歌を教えたらどこかへ行っちゃったよ」

宣王はしばらく黙っていたが、子供を返して市の担当官を呼び、「子供がこの歌を歌ったらその親たちも同罪とする」という禁止令を出せと命じ、その夜は宮中に帰ってもこの事は何も話さなかった。

翌朝、三公六卿の挨拶を受けた後、宣王は昨日聞いたわらべ歌のことを話して、それをどう解釈すべきかを下問した。

先ず太宗（礼儀祭事を管掌）伯召虎が、

「槩えんは山桑の木で、弓になりますから槩の弓といい、箕は草の名で編んで矢袋にしますから箕の箠えびらと申します。これは国に事変が起こる前ぶれではないかと考えます」
といい、続いて太宰仲山甫が、

「弓矢は国家の武器であります。今、王は太原で徴兵されて犬戎けんじゅうに報復なさろうとされていますが、もし戦いを続け軍備をお解きにならないければ国が滅びる恐れがあるという事でございましょう」
と意見を述べた。宣王は何も言わず肯いてさらにたずねた。

「この歌は赤い服を着た子が広めたようだが、この赤い服の子とは何者だろうか」

「根も葉もないデマでございましょう。天帝が王に警告なさるため火星に命じて、子供の姿に変えらるべ歌にして子供たちに教えたのです。

小は個人の吉凶を言い、大は国家の存亡にかかわる事を言っております。火星の色は赤です。この歌は天帝の警告でございましょう」

太史（天文、曆、国家記録を管掌、伯陽父がそう答えた。）

「犬戎の罪を許し太原の兵を解いて武器庫の弓矢を焼き捨て、武器の商売を禁止すればその災いは収まるのか」

「天象を観察いたしましたところ、塞外族との戦いではなく王宮内にその兆しがあるようです。大王の後の世に女性が原因で国が乱れる恐れがございます。わらべ歌にありました『月は昇り、日はしずむ』の日は王の象徴で月は女性を表します。日が没み月が昇るという事は、陽が衰え陰が栄える事を意味し、女性が政治に関与するということでありますよう」

「朕は姜后に後宮の管理を任せている。彼女は賢女であり、ほかの女たちもみな十分に調査選抜して入れているから、女性で禍を起すとは考えられんが」

「歌には、もうすぐ昇るだろう、やがて沈むだろうと言っていますので目の前の事ではございせんし、必ずそうなるという事でもありません。大王が徳をお積みになってこれを攘へば、自然凶は吉に変わるであります。弓や矢を焼き捨てる必要はございせん」

宣王は半信半疑で王宮へ戻った。

姜后が迎えて席に着くと、宣王はすぐに大臣たちの話を姜后に詳しく話した。すると姜后も変な事を言いだした。

「今日、宮中で奇妙なことがありましたわ」

「何があったのだ」

「先王に仕えていた五十才になる老宮女が先王の時代に懐妊し、四十年もたった昨夜になってやっと女の子を生んだのです」

「その子はどこにいるのだ」

「不吉な子だと思つて、庭に包んで二十里以上離れた清水河に捨てさせましたわ」

宣王は直ちに老宮女を呼び出し、懐妊の事情をたずねると次のように説明した。

「夏の桀王の末年の事です、褒城（現陝西省漢中）の神が二頭の龍になつて王宮の庭に降りてきてまして、口から涎を流しながら人の言葉で『我々は褒城の二君である』と王に言つたのです。桀王は驚いて二頭の龍を殺そうと思ひ、太史にこれを占わせたら凶と出てしまいました。追出そうと思ひ再び占わせるとまた凶でした。神が降下されるというのは吉祥です、その涎をいただいて保存したら如何でしょう。涎は龍の精気ですからこれを保存すればきつと福が得られます」と太史が言うので又それを占わせると今度は大吉と出たのです。そこで龍の前に供え物をしてお祭りし、金の皿に涎を集めて朱の箱に収めました。収め終わると突然大風雨が起つて二頭の龍は飛び去つて行きました。桀王は朱の箱を宮中の蔵に保管させました。殷の六百四十四年、二十八代の王を経てわが周朝に伝わり更に三百年、いまだかつて箱を開けて見た者はござい

。里 当時の度量衡は出展によりまた年代の前後によっても大幅に異なる場合があるが、本書の度量衡は原則学研「漢字源」の周代の数値を採用している。それによると一里は約3000程度だ。たよつである。

褒 夏王朝の一族は各地に封じられその地名を姓した。褒氏もその一つ。二頭の龍は桀王の一族褒氏の祖先だと言っているのである。後、妖女褒姒との因縁をほのめかしているのであつた。

ません。先王の終わりの頃、箱の中から僅かに光が漏れ出ているのを倉庫責任者が見つけ先王に報告しました。『箱の中には何が入っているのだ』と訊ねられましたので倉庫責任者は由来を書いた記録簿を献上致しました。先王が中身を見ようと、側近の者が開けた箱を受取るうとした時、

ちよつと手を滑らせて落としてしまい、保管してあつた涎は全て庭に流れてしまいました。たちまちそれは小さな黒蜥蜴に変わり庭をはい回っていました。その時わたしは十一才でしたが、たまたまその黒蜥蜴が通つた後を踏んでしまいました。何か妙な感じが致しましたがその後、お腹がだんだん大きくなって懐妊したようになったのです。夫もいないのに子を孕んだという事で幽閉され、すでに四十年になります。昨夜半になつて突然陣痛が起こり女の子が生まれました。王宮の侍従は隠しておけず姜后さまに報告いたしました。姜后さまはこの怪しいものは宮中において置けないと側近の方に川に捨ててくるようにおおせになりました。わたくしの罪は万死に当ります。誠に申し訳ございません」

「これは先朝のことだからそなたにはかわりない事だ」

宣王はそう言つて老女を下がらせ、すぐに王宮の侍従を呼び出し、清水河へ女の赤子の行方を調べに行かせた。やがて、流されてしまつたという報告があり、宣王はそれを聞いて疑わなかつた。

翌日早朝、太史伯陽父に龍の涎の件を話して、

「この赤子は川に流されて死んだのだが、卿^{けい}に妖気が消えたかどうかを占つてもらいたい」

＝卿 本来、卿大夫士民^しの身分の区別の一つであるが、天子や諸侯が二人称としてその重臣を尊んで呼ぶ場合に使われた。

と命じた。太史は占つて卦にでた言葉を献上した。

泣いては笑い、笑つては泣く。羊が鬼に吞まれ、馬が犬に追われる。慎むべし槩^{えん}の弓と箕^きの箠^{えびら}。

宣王はその意味がわからなかつた。伯陽父の説明では、

「十二支から推測いたしますと、羊は未、馬は午であります。泣く笑うというのは悲喜を表しそれは午未の年に起こることです。臣の推測するところ、妖気は王宮からは出ては行きましたがまだ無くなつてしまつてはいないようです」

という。宣王は悩んで、

「都の内外で女の赤子の存在を戸別に調査せよ。該当する女兒は生死に関係なく献納すべし。献納者には賞として織物三百匹（一匹は4丈）を与える。報告せず育てた場合一族斬首とする。同郷の者で命令違反者を訴え出た者には同賞を与える。」

と命じ、上大夫杜伯^{とく}をその専任監督者とした。

さらに卦に出た言葉の中に『槩^{えん}の弓と箕^きの箠^{えびら}』というのがあつたので山桑製の弓、箕の草で作つた矢袋の製造販売を禁じ違反者は処刑すると命じ、下大夫左儒^{さじゆ}を責任者とし市の担当官を督励して店という店を徹底して回らせた。

担当官は直ちに何人かの官吏を連れて諭告方々摘発を行つた。こうして城内^{ちやう}の人はみな遵守したが、城外の者にはまだ知らされていなかった。

＝城 中国男城は、外敵防御のための城壁で囲まれ、その中に住民を住ませ周辺に農地を埒^り原則自給自足を可能とした城^{ちやう}邑^いで諸侯大夫が責任者として管理

翌朝、城外から一組の男女がやってきた。女は矢袋を幾つか抱えていて、その矢袋は正に箕の草を編んだものである。男は山桑の弓十数張を背負つて女の後方からやって来た。彼らは夫婦で遠くの村に住んでいる。早目にやってきて町で商売をするつもりだったのである。ところが城門に入る前に担当官に見咎められてしまった。

「没収しろ」

部下の官吏は先ず女を取押えた。連れの男は危険を感じ桑の弓を投げ出して逃げた。担当官は女を捕えて桑の弓、箕の矢袋と一緒に大夫左儒のもとへ連行した。左儒は、押収した弓と矢袋は歌の通りだし、太史が女が災いをなすと言つていた事に對しても、今女を逮捕したので王の命令の主旨にも添うことができたいと思ひ男の事は不問に付した。女だけ禁忌品の製造販売の咎で法により死刑だと上奏した。宣王は市中でこの女を斬り、その桑の弓と箕の矢袋を焼き捨てて製造販売するものに對するみせしめとした。

善政も天変を鎮めるあたわず 妖言に迷いて婦人を殺め

中興の主といへど疎漏も多し 誰か直諫の臣あらざるや

一方、桑の木の弓を売りに来た男は急いで逃げたが、役人がなぜ我われ夫婦を捕えようとしたのかは判らず、その時はまだ妻の消息を聞くと思つてその夜は十里ほど離れた郊外で寝た。

翌朝、男は、きのう北門で女が桑の弓、箕の矢袋の製造販売禁止令に違反して捕まりすぐに処刑された、という噂を聞き妻が死んでしまったことを知った。彼は人のいない広野で悲しみの涙にくれた。同時に自分だけでも難を逃れる事ができたことを不幸中の幸いだったとも思ひなが

ら十里ほど歩いて清水河に行き着いた。見ると遠方でたくさん鳥が飛び交つて騒いでいる。近づいてみると蓆に包んだものが水面に浮かんでいて、鳥たちが鳴きながらつついたりくわえたりして岸辺のほうへ押してきていた。男は妙な事だと思つて鳥たちを追つ払つて水に入り、蓆の包みを取上げて草の上で解いてみると、泣き声と共に女の赤子が出てきた。

「この子は誰が捨てたか知らないが鳥たちがくわえて助けようとしているのだからきつと高貴な子に違いない。連れて帰つて育てたら将来好い事があるかもしれないぞ」

男はそう思つて、着ているものを脱いでその子を包み、懷に抱いて難を避け知り合いを頼つて褒城へ行つた。

腹中違々として四十年 水に浮かびなお安けき三日間

生れ来しは傾国の妖女なり 王法といへども天理に如かず

宣王は自ら桑の弓、箕の矢袋を売る女を誅殺し、わらべ歌にあつた問題は解決したと考へ安心した。その後は再び出兵の件は持ち出す事なく数年間は問題は起こらなかつた。

宣王の四十三年、先王を祭る大祭の時のことである。宣王は齋宮に寝起きしていたが、二鼓（22時頃）がかすかに聞こえ人声もない真夜中に、ふと美しい女の子が西の方からゆつくりと齋宮の庭に入つて来た。宣王は齋戒の禁制を犯すものだ大声で叱りつけ、急いで近侍を呼んで捕えさせようとしたが誰も返答がない。その女の子は恐れる様子もなく太廟に入り三度大笑いし、三度大泣きをして、慌てず騒がず七柱の先王の位牌を一つに縛つて東の方へ持ち去つた。宣王は立上がつて追いかけよう

としてはつと目が醒めた。夢だったのだ。暫くぼんやりとしていたが氣を取直し廟堂に入り祭祀を終わらせた。儀式を終えて齋宮へ戻り着替えた後、側近に密かに太史伯陽父を呼びにやり夢で見たことを話した。

「三年前のわらべ歌をお忘れでしょうか。あの時、臣は『殿には女難の相があり、妖気はまだ消えていません』とはつきり申し上げました。卦に出た詞に泣いては笑い、笑っては泣くというのがございましたが、殿が見られた夢はまさにこれに符合いたします」

「あの女を誅殺しただけでは『桑弓、箕箒』の予兆を消す事はできなかったのか」

「天理は遠く奥が深いものであります。田舎女一人処分したくらいでは効果としては不十分でしょう」

宣王は考え込んだ。ふと三年前、上大夫の杜伯に担当官を督励して妖女を探させたが徹底されていなかったことを思い出した。大祭の昨（祭祀に供えた肉）を関係者に分け与え儀式を終えて、朝廷に戻った。百官は昨が配られた事を感謝した。

宣王は杜伯にたずねた。

「妖女の情報について何故いつまでも報告しなかったのだ」

「調査は致しましたが結局反応がありませんでした。その後妖婦を誅殺しましたのでわらべ歌の予兆は解決したものと考え、あまり厳しい捜索が続けると民衆を動揺させると考え中止いたしました」

宣王はそれを聞き激怒して、

「そうであれば何故はつきりと報告しないのだ。朕の命令をないがしろにして勝手なことをしたのは不忠ではないか。そんな者にはもう用はない」

と言つて、武士に、朝門へ引つ張り出し見せしめに斬首するよう命じた。百官は驚いて顔色を変えた。その時文官の列から一人進み出て、引かれて行く杜伯を急いで引止め、

「だめです、お待ちください」

杜伯の親友の下大夫左儒であつた。左儒は叩頭して宣王に言つた。

「堯は九年水害が続きましたが帝位を失いませんでした。湯王は七年旱魃を受けましたが王のままでした。天変を防ぐ事は困難ですが、人の言いふらす妖言などもつと信じがたい物です。わが大王がもし杜伯を誅殺なさつたら国中の人々が妖言を撒き散らす恐れがあり、外敵がこれを聞けば我われを侮つて来るでしょう。どうか彼をお赦し願います」

「そなたは友のために君命に背くのか、それは友を重視し王を軽んずることだぞ」

「君が正しく友が誤つておりましたら当然君に従い、友が正しく君が誤つておられれば君に背いても友に従います。杜伯には殺すほどの罪が無いのに殿は殺そうとなさつておられます。世の人はきつと大王を不明の王だと思つてしよう。また臣が諫止申し上げなければ臣を不忠だと言うでしょう。殿がどうしても杜伯を殺すとおっしゃるのでしたら臣も杜伯と共に死を賜りたく存じます」

宣王の怒りは収まらず、

「朕は杜伯を殺す。雑草を抜き取るようにな！そなたはもう余計な事を申すな」

と言つて武士に「早く斬れ」と命じ杜伯を門に引つ張り出して斬らせてしまった。左儒は家に帰り自刎した。

髯翁はこれを称えて言う。

賢臣左儒の直諫逆鱗に触れる

友の言はなれば友に従い 君の言非なれば君にも従わず

志 高潔にして友情を重んじ 刎頸の交り

不変の常理を遵奉して 千載に名を高めたり

杜伯の子の隰叔は、晋に逃れて晋国に仕え士師^{しし}警察^{けいさつ}訴訟^{しうそ}官掌^{くわんしやう}となつて、子孫は士氏^{しし}（後の士会はその後裔）を名乗り、范に封地を得て范氏を名乗つた。後の人は杜伯の忠を哀れみ、杜陵に祠を立て杜主と名づけて右將軍廟とも呼び、今なお現存する。

宣王は翌日左儒が自刎したことを聞き、杜伯を殺したことを後悔し悶々として内宮に戻つた。その夜は眠ることもできず、ついには鬱病にかかり殆どしやべらなくなつて、忘れることも多く朝廷にも出なくなつてしまつた。姜后も病氣だとわかると何も言わなくなつた。宣王四十六年三年後の七月になると体の具合もいくらか改善し、気分も好くなつて郊外に巻き狩りに出るほどの意欲も出てきた。命令が出されて、司空は王の車を準備し、司馬は兵並びに戦車の手配を行い、太史は吉日を占つた。その日王は玉で飾られた馬車に乗り、六駟の馬車を率い、旗旗をはためかせ、右に尹吉甫、左に召虎を乗せ意気揚々と東郊へ出かけた。

本書では、髯翁髯仙、東屏先生、隴西居士、胡曾先生、史官、宋儒等の架空人物に託して作者の心境を表現している。

『逆鱗（君主の怒り）』『韓非子 説難（びな）』に「龍には喉元に二尺程の逆鱗がありこれに触ると必ずその人を殺す。君主にも逆鱗があり、説く者がこれに触れなければ見込みあり」と、説難は人を説得する事の難しさを説いた篇である。

五三二四乗の四頭馬車：北京金盾出版社「東周列国志」校注

その東郊一帯は広い原野で昔から巻き狩りの適地である。宣王は久しぶりにここへやつて来て気分が爽快になった。陣を張つて兵士たちに注意を与えた。

「一つ、穀物畑を踏みつけないこと。二つ、樹木に火を点けないこと。三つ、民家を侵犯しないこと。」

獲物は多少にかかわらず全て献納すること。獲物に応じて賞をとらせる。獲物を隠匿した場合は重罪を課す」

開始号令が下ると、人々は功を立てようと勇猛に先を争つた。前進、後退、回転と御者は技術を駆使して駆け回る。弓を持つた者は射撃の技術を誇り左右前後に矢を射る。鷹や犬は雰囲気に乗つて猛り狂い、狐や兎は恐れて逃げ惑う。弓が響くところ血肉が飛び散り、矢の届くところ毛や羽が乱れ飛ぶ。このように巻き狩りの場はたいへん賑やかで宣王は非常に喜んだ。日が傾いて来ると巻き狩りの終了が告げられ、兵士は捕えた鳥獸類をまとめて縛り凱歌をあげながら帰途についた。

帰途について三、四里も行かないうちに宣王は車でうたた寝を始めた。ふと、遠くに小さな車が見え、こちらに向つて突進してくる。車には人が二人立っていて腕には朱の弓を掛け、手には赤い矢を持つている。

「殿、お変わりはいかがいせんか」

よく見ると上大夫の杜伯と下大夫の左儒である。宣王は非常に驚き、目をこすっているうちに人も車も見えなくなつてしまつた。従者に聞いても何も見えなかったという。不思議に思っていると又杜伯と左儒が小さな車に乗つて宣王の車の傍を行ったり来たりして離れない。

「亡霊め、わしの車の邪魔立てするのか」

宣王は宝剑を抜き空を斬つた。

「無道の暗君、善政を敷かず、罪なき者をみだりに殺したため、本日であなただのご寿命は終了です。われわれは冤罪の報復に参りました。お命を頂戴いたします」

と言うが早いか朱の弓に赤い矢を番えて宣王の胸に向けサツと放つた。宣王はひと声発して車に倒れた。驚いて尹公は脚が麻痺して立てず、召公もまぶたがピクピクして動けない。周りの者が生姜湯を与えて宣王に気をつかせたが、胸の痛みは相変わらず治まらず、急いで車を帰しみなで助けて宮殿へ運び込んだ。兵士たちは賞を受ける事もできないでそそくさと帰っていった。まさに『興にのつて出掛け興さめて帰る』であつた。髯翁の詩あり。

赤矢と朱弓すがた形は神に似て 千軍の中より駆け来たり

因果応報、妄りに人を殺めれば 王といえどもかくの如し。

宣王の命如何なりますか、次回のお楽しみ。

第二回

褒姒の子 父の罪を贖い美人を献上

幽王 烽火を上げ諸侯を動弄

宣王は東郊での巻き狩りで、杜伯、左儒の亡霊に『お命頂戴』と脅されて発作を起こし宮城に運び込まれた。目を閉じれば杜伯、左儒が見える。死を覚悟して薬も服用しなくなり三日後、病状は愈々危篤状態になった。周公はすでに老齢で隠退していたし、仲山甫も亡くなっていたので、老臣尹吉甫と召虎に子を託すことにした。二人が挨拶に行くと、宣王は内侍に助け起こさせ布団にもたれて言った。

「朕は諸卿の力を得て四十六年在位し、南征北伐四海を安定させてきたが、思いがけず病を得てもうだめなようだ。太子の宮涅はいい年だが愚昧だ。卿たちの補佐がなければとても世継はできない、どうか宜しくたのむ」

二人は叩頭の礼をして承諾した。

宮門を出たところで太史伯陽父にばったり出会った。召虎はそと、

「以前、問題のわらべ歌に弓矢の変の恐れがあると申し上げた事がありますが、いま王は亡霊に赤の弓で赤い矢を射られた夢を、覧になって重篤になられたのです。あの時の事が現実になったのですから王の病は難しいのではないでしょうか」と伯陽父に言った。伯陽父はさらに、「天象を見たところでは、妖星が紫微垣（星座の名）に隠れています。国に

紫微垣 北斗星の北東にある十五の星の名その一つが天の軸にあたり、天帝が居る所とされる。転じて王宮を言う。

更に変が起ころ兆候で、王のご一身だけでは済まないのではないかと思われます」

という。尹吉甫は二人の話を聞いていて、

「天は人の上にありますが、人にはまた天に勝るところも有ります。諸君は天道を論じて人のやるべき事を放置しているではありませんか。三公六卿を置いているのは何故ですか」

と言うと、それきりそれぞれ別れて去って行った。

やがて、各官吏は王の見舞いに集まって来て、容態が思わしくないのでそのまま帰らず様子を見ていたが、結局その夜崩御された。姜后は尹吉甫、召虎を呼出し、百官に太子宮、渥を補佐して葬儀を取り行うよう指示させ、柩の前で即位させるよう懿旨（皇太后、皇后の命令）を出した。これが幽王である。詔により翌年を元年に変え、申伯の娘を王后とし、その子宜臼を太子に立て、王后の父親申伯を申侯とした。

史官は宣王の中興の美を次のように称えている。

輝しき宣王の徳 世に遍し 威は広大にして鼎雉の凶兆も吹消せり
外に仲山甫内に姜後の補佐を得て 父業引継ぎ中興の旗翻翻たり

その後、姜后も宣王の死を非常に悲しみ間もなく亡くなった。幽王は暴虐残忍、慈愛の気持ちの少ない人で、行動が常軌を逸している。諒闇の時も小人たちと酒を飲み肉を食って全く親の死を哀悼する気持ち

「鼎雉凶兆 商朝の天子武丁が湯王を祭っていた時 雉が飛来て鼎に止まって鳴いたので臣下の祖に問うと 凶兆だから王に徳を修めよう忠告したという
故事

天子が父母の喪に服する期間

がなかった。姜后が亡くなってからは憚る事なく色に耽けり 全く政治を見なくなった。申侯は何度も諫言したが聞かないので自国へ帰ってしまった。西周の命運もまさに尽きるかのように尹吉甫、召虎たち老臣も相次いで亡くなった。幽王は虢公、祭公、尹吉甫の子尹球を三公に登用した。三人とも人を陥れ、上にはへつらい、地位や禄を貪る連中で、王が望むことであれば時を借します迎合する。ただ司徒（六卿の一、教育担当）の鄭友だけは賢臣であつたが幽王は彼を余り信任しなかった。

ある日、幽王が朝議に出ている時、岐山の責任者が、

「涇、河、洛の三川で同じ日に震災がありました」と奏上した。

「地震で山が崩れるなどしょっちゅうある事だ、そんなことを一々朕に報告してどうする」

幽王は笑いがらそう言つて内宮へ戻つてしまった。太史伯陽父は大

夫の趙叔帯の手をとつて心配そうに言った。

「三川の源はいずれも岐山です。岐山の地震とはどういうことでしょう。昔、伊水、洛水の流れが尽きて夏朝が滅び、黄河の水が涸れて商殷朝が滅びました。今三川が地震のために川上が塞がったら川の水がなくなり山は崩れてしまうでしょう。そもそも岐山は周太王（建国の祖古公亶父）の発祥の地であり、この山が崩れでもしたら周はただではすみません」

「国に変事があるとすればいつ頃でしょう」
伯陽父は指折り数えながら、

「商と殷 湯王が夏桀王を倒し建てた新王朝を自ら「商」と称した。「殷は周武王がこれを滅ぼした後 周人が彼らを呼んだ呼び名である」

「十年以内でしような」

「どうしてわかるのです」

「善が満ちて福となり、悪が満ちれば災いが起こります。十は数が満ちた状態です^㉑」

「天子は政治を顧みようとされず、佞臣^{ねいしん}を登用されます。天子に対し忠言を申し上げるのがわたしの仕事で、臣下としてこれを諫める義務があります」

「でも、言っても無駄でしょう」

二人がしばらく私語^{ひそご}をしている間に早くもこれを號公^{かくこう}石父^{せきふ}に告げ口する者がいた。石父は叔帯^{しゆくたい}が諫言^{かんげん}に来て自分が奸佞^{けんねい}だと指摘されるのを恐れて、伯陽父^{はくようふ}と趙叔帯^{しゆくたい}の私語を幽王^{ゆうおう}に言いつけ、彼らが朝廷を誹謗^{はいご}し、いい加減なことを言っていると人々を惑わしていると讒言^{ざんげん}した。

「馬鹿者どもが国政についてとやかくいい加減な事を言っているんだ、屁^ぺのようなもので聞くに足らん」

さて、趙叔帯は忠義心に燃えて何度も諫言の機会を窺ったがなかなかいいタイミングがなかった。数日して、岐山の責任者が再び上奏文を出してきた。

「三川は全て水が涸れ、岐山が又崩れ無数の民家が押潰^{おしつぶ}されました」

幽王はそれを全く意に介しないで、近臣に美人を捜し求めさせ後宮を充実させることに憂き身をやつしていた。

趙叔帯は上奏文で次のように諫言した。

^㉒この部分史記では「周が減るとすれば十年とはかかる。十は一から始まる数の終りだからだ。天が見放したものは勢の終りに達しない内に亡びるだろう」とある
(平凡社史記周本紀 野口定男他訳)

「山が崩れ川が涸くという事は脂肪と血が同時に無くなるようなもので、高所の危険が下に落ちて来るという事は国家の不吉な兆しであります。まして岐山は周の王業始まり地であり、これが崩れるということは重大事です。政治に尽力され民を慈しまれ賢臣の補佐を得て天変を消滅なさるべきであります。どうか美女を求めるより先ず賢才をお求め願います」

しかし、號石父^{かくせきふ}が、

「国はこの錦京を千秋万歳にわたり国都とすると決めたのです。岐山などすでに履き捨てた靴のようなものでもう何の関係もありません。叔帯は以前から殿を見くびっていて、言いがかりをつけて誹謗しようとしているのです、大王様、どうか賢察願います」

と言うと、幽王は、

「石父の申すこともつともなり」

と言ってついに叔帯を罷免し、田舎へ追放した。

「危険な国には入るべからず、乱れた国には住むべからず。坐して周の『麦秀之歌』^㉓を聴きたくはないものだ」

叔帯はそう嘆いて一族を引き連れ晋国へ去り、後の晋国の大夫趙氏の祖となった。趙衰^{ちようすい}、趙盾^{ちようどん}は彼の後裔である。後に韓、魏とともに晋国を三分し諸侯に列した。

忠臣乱を避け北に去り 国運坂を転げる如く東方に傾く

古来長老は礼遇されしも 今仁賢一度去りて国空虚と化せり

^㉔麦秀之歌 周代になり殷都の廢墟に麦が穂を出ているのを見て紂王の叔父箕子が亡国^{むつこく}の悲嘆を詠った詩「秀穗^{しうすい}仍^{なほ}びぬこの故都^{ここのこ}に 稱^{なづ}葉^はひかる 秀^{しう}の葉^はもあは 狡^{こつ}僮^{どう}紂^{しう}の 仕^し業^{ぎやう}かな われを憎^{にく}みし 狡^{こつ}僮^{どう}」 平凡社史記論(宋徽宗世宗の訳を引用)

さて、大夫褒珣が褒城から出てきて趙叔帯が追放されたと聞き、急いで朝廷に出て、

「天変を怖れず、賢臣を追放なさつては、国に人がいなくなり社稷（国家人民）を保ててなくなります」

と諫言したが、幽王はこれを聞いて激怒し褒珣を投獄した。これより諫言の道は絶たれ賢者、豪傑は身を潜めた。

話は変わって、あの桑の弓や箕の箆（へら）を売っていた男は妖女を抱いて褒城へやって来た。しかし飲ませる乳が無かったので育てられず、ちやうど子が生まれて直ぐ死んでしまった姒大（じだい）という者にちよつとしたお札をつけて、赤児の養育を頼んだ。姒大は承諾し、成長すると褒姒（ほうじ）と名づけた。

褒姒は十四才になると体は十六、七才のように大きくなり、眉目秀麗で、紅い唇に白い齒、鳥の濡れ羽色の黒い髪、細く削った玉を並べたような指、花の如く月の如く、傾城傾国を思わせる美人になった。しかし、姒大の家が僻地であったこと、褒姒の年齢がまだ幼なかつた事もあって大変な美人であつてもどこからも結婚の話は無かつた。

ある日、直諫して投獄された褒珣の子洪徳（ほうとく）がたまたま徴税のためにこの田舎へやつてきた。偶然その時褒姒が外で水汲みをしていたが、身なりは村娘ではあつても天性の美しさは隠せず、これを見た洪徳は驚いた。

「こんな田舎にこんな美人が……。そうだ、父上は都の獄でもう三年も囚われている。もしこの子を天子に献上すれば父上の罪が許されるかもしれないぞ」

近所で彼女の名を聞いて、家へ帰って母親にその話をした。

「父上は天子に逆らつて直諫なさつたため、なかなか許されそうにありません。今の天子は荒淫無道で、あちこちから美人を漁つて後宮を充たそうとしているのです。姒大という者の娘は絶世の美女ですから、その女を買い取つて王に献上し父上の釈放を要求しようと思うのです。これはむかし散宜生（さんぎせい）が文王を救つて出獄させた計略でもあります」

「それができるのならお金は惜しまないで急いで進めなさい」

洪徳は自分で姒家へ行つて姒大に話をし、織物三百匹で褒姒（ほうじ）を買い取り連れて帰つた。香湯で沐浴させ美食を与え美しい刺繍のついた着物を着せ、礼儀も教えて都へ連れて行つた。先ずキーマンの號公（かくこう）を買収し天子への奏上を頼んだ。

「褒珣の罪は万死に当たりますが、珣の子洪徳は父を助けたい一心で父の贖罪のために美人を捜し求め、褒姒（ほうじ）という美女を探し出して献上してまいりました。ご高覧の上褒珣（ほうきゆう）をご赦免いただけますようお願い申し上げます」

幽王は申し出を聞くとすぐに褒姒（ほうじ）を召した。幽王は挨拶が終わつて彼女を見るとたぐいまれなる容姿、色目を使つた時のその見た事もない艶つばさに童顔をほころばせた。今まであちこちから美人が献納されてきたが彼女には万分の一も及ばない。直ちに申后に内緒で褒姒（ほうじ）を別宮に留

散宜生 周の文王 武王の賢臣 関天こうてん 太公望 南宮造かつととともに文王の四友とされる。

め、褒珣を赦し原職に復帰させた。その夜幽王は褒姒と同食し水魚の交わりであつたことは言うまでもない。それからは座れば膝を交え、立てば肩を合わせ、呑めば杯をかわし、食せば器を共にし、十日のあいだ朝廷に出ることはなかった。家臣たちは朝廷に出て王の顔を見ることもできず皆ため息をついて帰つていった。幽王四年（紀元前七八年）のことである。

名花手折り国香と名づけ

田舎娘一朝天子の寵を受く

これ風流天子の常なるも

龍涎に女難伏せしを誰か知る

幽王は褒姒が来てからは琮台に居たままで褒姒の色に耽つて、三ヶ月も申後の屋敷には行かなかつた。早速申後にあれこれと報告するものが居る。申後は頭にきてある日突然、女官を連れていきなり琮台へやつてきた。ちょうど幽王と褒姒は膝を合わせて座っていたが、王后が来ても立つて迎へようとしなかつた。申後はそれを見て我慢できず大声で怒鳴つた。

「内宮を乱しているその卑しい女、いったい何者よ」

幽王は申后が手を出すのを心配して褒姒の前に身を挺して彼女をかばつて言つた。

「これは朕が新しくかかえる事にした人だ。位もまだ決めていない。だからまだ挨拶にも行っていないのだ、怒らないでくれ」

申后は怒鳴り散らして、いまいましそうに帰つて行つた。

「あれ誰なの」

「王后だよ。明日挨拶に行つて来なさい」

褒姒は何も言わず、翌日になつても正宮（王后あるいは王后の屋敷）へは行かなかつた。

一方申後は屋敷で悶々としていた。

太子宜臼がたずねた。

「母上、母上は六宮の主ですのに何をそんなに憂鬱そうにしておられるのですか」

「父上が寵愛している褒姒という女がわたしを無視するのよ。将来この女の思い通りになつたらわたしは居場所がなくなつてしまうわ」

と、褒姒が挨拶にも来ず、自分が行つても立つて迎へようとしなないなど細かく太子に言いながら思わず涙がこぼれてしまつた。

「そんなこと何でもないことです。明日は一日ですから父上は必ず朝廷に出ます。宮女を琮台にやつて花を摘ませたら女は出て来るでしょうから、その時あいつをぶん殴つて母上の鬱憤をはらしてやりますよ。父上に咎められてもわたしの責任でやりますので母上には何の関係もありません」

「騒ぎを起こしちゃいけないわ、落ち着いて相談しましよ」

太子は鬱憤を胸に出て行つた。
一夜明けて翌朝、幽王は太子の言つた通り朝廷に出て、家臣たちの挨拶を受けた。太子は数十人の宮女を琮台の下へ連れて行つて理由も言わず勝手に花を摘ませた。台から褒姒の宮女たちが出てきてそれをさえぎりながら、叫んだ。

六宮 宮中の奥御殿 後宮。天子には王后夫人がいる方の宮殿があた

「この花は褒姒さまがいつでもお楽しみになれるようにと、大王さまがお植えになったものなのよ、勝手に摘むのはよさないよ。大変な罰を受けるわよ」

「わたしたちは東宮さまのご命令で花を摘んで王后さまにお持ちしようとしているのよ。じやまないで」

双方で喧嘩が始まった。褒姒は驚いて出て来てこの騒ぎを見ると怒りがこみ上げてきた。ところが思いもよらず突然太子が現れたので褒姒は何もできない。太子は恨みの女を見つけて目をむいてずかずかと近寄って鬚を掴んで怒鳴った。

「賤しい女め、おまえはいつたい何様だと言うんだ。名も位も無い女が褒姒さまなどと申して眼中人無きがごとき態度は何だ。今日こそおまえにわしの怖さを教えてやる」

そう言つて拳固で殴った。何回かぶつと宮女たちは幽王の罰を怖れて皆跪いて叩頭して叫んだ。

「太子さま、お赦してください。どうか万事大王様のお顔をお立てになつてお引き取りください」

太子も殴り殺してはまずいと思つて手を止めた。

褒姒は痛みをこらえて恥ずかしそうに琤台に戻つて、太子の行為は母親の意趣返しだと気づき無念の涙を流した。

「お泣きになる事はございません。大王様の後ろ盾がお有りになるではございませんか」

宮女がなだめていると幽王が退朝して琤台へやつて来た。褒姒が両の鬢を乱して涙を流しているのを見て、

「今日はどうしてまた髪を梳いてないんだい」

と言うと、褒姒は幽王の袖を引張つて大声で泣いて訴えた。

「太子が宮女たちを連れて来て勝手に台の下の花を摘んで、何もしないわたしを見るなり怒鳴りつけてぶつたのよ、こっちの宮女たちが引止めてくれなかつたらきつとわたし命が無かつたわ。大王さま、どうかわたしの無念をお晴らし下さい」

と言つて咽びながら泣き止まない。幽王は状況を聞いて言つた。

「そなたが彼の母親の王后に挨拶に行かなかつたからこういう事になつたのだよ。これは王后がやつた事で太子の考えではない、誤解してはいけない」

「太子は母親の恨みを晴らすためにわたしを殺すつもりでしたわ。わたしの命など惜しむ程のものではありませんが、大王さまのご恩寵をお受けしてすでに懷妊して二ヶ月になります。わたしの命は二つの命でもあります。お願いです、二人の命を守るためにわたしを宮中からお出しいただけないでしょうか」

「そなたは静かに休養なさい。朕がちゃんと処置するから」

幽王はその日すぐ、

「太子宜曰は勇敢だが礼儀を知らず素直でないところがある。とりあえず申国へ遣つて申侯の教育を受けさせ、東宮太傅、少傅等は補導不行き届きにつき解任する」

という命令を下した。太子は参内して釈明しようとしたが、幽王が宮門の侍衛にそれを許さないと命じておいたのでかなわず、仕方なく申国へ行つた。申后はしばらく太子を見かけないので宮女に聞いただしてやつと申国へ落ちて行つたことを知った。一人では何もできず終日夫を恨み子を持つて涙の日々となつた。

さて、褒姒は懷妊して十月が満ち一子を生んだ。幽王は宝物のように可愛がり名を伯服と付けた。すぐに宜臼を廢嫡してこの庶子を後継にしようと思つたが、然るべき理由が無くて口に出せない。虢石父は王の氣持ちを推し量つて尹球と相談してそつと褒姒に言つた。

「太子はすでに他所に追放されていますので、伯服さまを跡継ぎになさるにはいいタイミングです。内ではお方様が枕辺でお願いなさり、外からは我々二人が協力いたしますのでご心配なさる事はありません」

「お二人にお任せしますのでよろしく願ひします。もし伯服が位を継いだら天下の経営はあなた方と一緒に当たりましょう」

褒姒はその後、そつと心服する側近を遣わして日夜申後の欠点を探り、宮門の内外にも耳目を置いて風の音、草の動であつても全て察知できるような手配しておいた。

さて、申后の方は一人で話し相手も無く一日涙に暮れていた。一つ年上のある宮女が申后の心を知つて、

「王后さま、太子さまの事をお思いでしたら申国の太子さまに謝罪の上表をお書きになられるよう密書をお出しになられたら如何ですか。もし大王さまのお心を動かして東宮に召還なされば、母子がお会いするところがおできになり万々歳です」

「それは確かにいい考えですが、誰か手紙を届けてくれるいい人がいるかしら」

「わたしの母の温媼は医術に心得があります。王后さまが病氣とおつしやつて母をお召しになり脈をとらせ手紙を持ち出すことができれば兄が太子さまに届けますので方が一の失敗もございせん」

申后はそれに従つて早速手紙を書き上げた。概略以下の通り。

天子は無道で妖女を信じて寵愛し、我々母子を離れ離れにしてしまいました。その女は子を生んでその寵愛はますます強まっています。そなたは『前非を悔い改め生まれ変わりますから、お許しください』と罪を認めたように装つた上表文を出しなさい。もし父上から帰朝の許可をもらえれば母子は又会えます。それから別途対策を相談しましょう。

手紙を書き終え、仮病を使つて床に伏せ温媼を呼び脈を取らせた。この事はいち早く褒姒に知らされた。

「必ず手紙のようなものが有るはずですよ。温媼が宮中から出るのを待つて身体検査をして糸口を見つけないさい」

一方温媼が王后の屋敷に着くと先ず宮女が事情説明をしておいた。申后は診察を受けるまねをしてすぐに枕辺の手紙を取出した。

「夜のうちに申国へ届けてください、決して遅れないように」

そして色絹を二端（一端は20尺）を下賜した。温媼は手紙を懷に押し込み手には色絹を持つて得意になつて宮中を出た時、守衛官の検問を受けた。

「この色絹は何処から手に入れたのだ」

「診察の後王后さまから賜つたものです」

「他に何か隠しているものは無いか」

「ございせん」

「調べればわかる事だ」

と言つて媼の手を引張つて向きを変えた。彼女がそわそわと隠し立てをするので守衛官は疑つて更に詳しい検査を行った。何人かで一斉に着

物を引裂くとあの手紙の一部が現われた。申後の手紙が発見されたので直ちに嫗もいっしょに琼台の褒姒の下へ引張って行かれた。褒姒は手紙を見るとかんかんに怒って温嫗を空き部屋に監禁し情報の漏洩を禁止し、色絹は自分で一寸刻みに引裂いてしまった。幽王が入って来て絹の反物が引裂かれているのを見てその理由を聞いた。

「わたくしは宮殿の深奥に入って、大王さまのご寵愛を被ることになりましたが、不幸にも王后さまの嫉妬を買うことになってしまいました。その上子供まで賜り、王后さまのお怒りはますますひどくなってきました。王后さまの太子宛の手紙の末尾に『別途対策を相談しましょう』とあるのはきつとわたしたち親子のことを言っているのですわ。大王さまお助けください」

褒姒は目に涙をたたえて言い、幽王にその手紙を見せた。それが王後の筆跡とわかったので、連絡係は誰かとたずねた。

「温嫗という者で、ただいまここに居ります」

幽王は直ちに引張り出して有無を言わせず剣を抜きその場で両断した。髯仙は詩にした。

深宮の手紙未だ届かぬ前に 冤罪の血散り注ぐ
後に太子事情を知りせば 温嫗の功は第一等

その夜、褒姒は甘えて幽王に言った。

「わたしたち母子の命は太子の思いのままですわ」

「朕が何とかする。太子には何もさせない」

「大王さまがお隠れになったときは太子が王になります。王后はわたしたちを怨み呪っていますからもし太子母子が権力を手に入れたら、わたしと伯服は死んでも葬られる所がございません」

とあるいは咽びあるいは大声で泣いた。

「王后と太子を廃し、そなたを王后に、伯服を太子に立てようと思っている。ただ、家臣たちが従わない恐れがあるのでその対策を考えているんだ」

「家臣は主君の意見に従うのが当然で、主君が家臣の意見に従うのは逆です。大王さまはその考えを大臣におっしゃって彼らの議論をお聞きになられたら如何です」

「そなたの言う通りだな」

その夜褒姒はあらかじめ腹心を遣わし號と尹兩人に明朝までによく検討した答えを準備しておくように伝言しておいた。

翌日早朝の挨拶の後、幽王は公卿たちを昇殿させて彼らに諮問した。

「王后は嫉妬して朕自身を恨んで呪詛しており、天下の母としてあるまじき態度だ。捕えて罰しようと思うがどうか」

「王后は六宮の主ですから罪があるからといって捉えて問責は難しい事でございます。もし王后として徳に問題がありでしたら、むしろこれを廃し別の立派な方をお選びになって天下の母となさるのが長期的にもよろしいのではないのでしょうか」

と號石父が言うと、尹球が続けて言った。

「褒姒さまはご貞淑でもの静かなご性格の方で王后に適任の方とお聞きしております」

「太子は現在申国にいる。もし申后を廃したら太子はどうすべきか」

『母は子を以て貴く、子は母を以て貴し』と申します。太子は罪を得て申国におられ、二両親への孝養の礼は久しく行われておりません。まして母君が廢されればその子は廢されてしかるべきでしょう。臣たちは伯服さまをお守りして東宮になさる事を望んでおりますし国家のためでもあると考えます』

と號石父が答えると幽王は大変喜び、申後の王后を廢し冷宮^{れいぐう}に下げ、宜臼^{ぎやうぶ}の太子を廢して庶人^{しよじん}に落し、代わりに褒姒^{ほうし}を王后に、伯服を太子に立てた。諫言するものは宜臼^{ぎやうぶ}の仲間とみなし極刑にした。幽王九年紀元前七七三年の事である。

文武の多くは内心不満だったが幽王の気持ちは決まっているし、徒に殺されても無益なのでみな口をつぐんでしまった。

「三綱^{さんこう}は既に絶えてしまった、周が滅びるのも時間の問題だな」
太史伯陽父は、嘆いてその日のうちに老齡を理由に引退した。他にも職を捨てて田舎に引きこもる者が多かった。王の側には尹球^{いんきゅう}、號石父^{かくせきふ}、祭公易のような佞臣^{へいしん}だけが残った。

幽王は一日中褒姒^{ほうし}と内宮で楽しんだ。褒姒^{ほうし}は正宮（王后）の位を奪い王の寵愛を独り占めしたけれど、未だかつて笑い顔を見せたことが無い。幽王は彼女の歓心を得ようとして樂士を呼んで鐘太鼓を鳴らし笛や琴を演奏させ、宮女に歌舞を演じさせたが褒姒^{ほうし}は全く喜ばない。

冷宮 寵愛を失い、或降罪を犯した皇妃が幽閉された宮殿

庶人 当時の身分は上位から 王 公 卿 大夫 士 庶人 工商 奴隸の順、あたこのうち、王から士までが貴族階級である。庶人はいわゆる農工である。政治には参加出来ぬが、一応自由民とされた。工商は職人と商人を指す。彼らは奴隸ではないものの完全な自由民でもなく、職業選択の自由が無かった。

三綱 儒教の三つの守べき根本 君臣 父子 夫婦それぞれの間からの秩序

「そなたは音楽は好きじゃないのかな、好きな事はいったい何なんだ」
「好きなものといつても特にには有りませんわ。ただ、以前手で色絹を引裂いた事がありましたがああ時の音は本当にいい音でしたわ」

「絹を裂く音が好きなのか、なぜそれを早く言わないんだ」

すぐに倉庫責任者日進に命じて百匹の色絹を持ってこさせ、宮女たちに裂かせて褒姒^{ほうし}を喜ばせた。しかし、絹を裂くのは好きだがやつぱり笑いは見せなかった。

「どうして笑わないんだ」

「わたくしはこれまでもずっと笑った事はございませんわ」

「朕はそなたを笑わせたいんだよ」

と言つて幽王は直ちに命令をだした。

「宮殿の内外を問わず褒后を笑わせたものには賞千金を下賜する」

號石父は一計を進言した。

「昔西戎（西北部の異民族の総称）が強かった頃、先王がこれが侵攻してくるのを心配して、驪山^{りしん}（現陝西省驪山）の麓に烽火台を二十数ヶ所設置し太鼓を数十台用意しております。賊が侵攻して来れば烽火を焚き大空に煙が昇れば付近の諸侯が救援に駆けつけることになっておりまして、更に太鼓を鳴らしてそれを催促するのです。この数年は天下太平で烽火を焚いたことがございません。大王が王后の笑い顔を、一瞥^{ひとみ}になろうとお思いでしたら、ご一緒に驪山^{りしん}に遊ばれて夜烽火を上げさせれば、諸侯の援兵が必ずやつてきます。来て外敵がいらないのに氣付いた諸侯の顔を、一瞥^{ひとみ}になれば、王后がお笑いになること疑いなしです」

「そりや名案だ」

幽王はそう言つて褒后と驪山^{りしん}へ遊びに行った。

夜になつて驪宮で宴を設け、烽火を上げるよう命じた。この時鄭伯友（鄭国君主）は、司徒として王の車を先導してきたが、この命令を聞いて驚き、急遽驪宮へ駆けつけた。

「烽火は先王が急を要する時に備えるという事で設置され、諸侯の信頼を得ているものです。理由も無く烽火を上げる事は諸侯を翻弄することになり、他日有事の際、烽火を上げても諸侯は信じないで救援に来なくなつてしまいます」

「今は天下太平だ、救援など要らぬわ。朕は王后と驪宮へ遊びに来たので退屈しのぎに少し諸侯と遊ぶのだ。将来の事などそなたが心配しなくてもよい」

鄭伯の諫めを聞かずついに烽火を上げ太鼓をたたいた。太鼓の音は雷鳴のように轟き火の光は天を焦がした。

畿内の諸侯は鎬京（西周京都）に異変ありと思つてそれぞれすぐさま兵を率いてその夜のうちに驪山へ駆けつけた。ところが楼閣からは音楽が聞こえてきて幽王と褒妃は酒を飲んで歓楽に耽り、

「幸いにも外敵はございませんでした。ご苦勞をお掛けいたし申し訳ありません」

と人を介して諸侯に挨拶をさせた。諸侯は顔を見合わせ、旗を巻いて帰つて行つた。褒妃は楼上で欄干にもたれ、諸侯が慌しくやつて来て何事も無く慌しく帰つて行くその様子を見て思わず手を打つて大笑いした。

「笑つたね、笑うと何と可愛いことか、これは號石父の功だ」

幽王はそう言つて大喜びして彼に千金を与えた。今も人々の間でよく言われる『千金買笑』という言葉は、ここから出たものである。

美しき夜の驪宮に仙樂流れ 故なき烽火天を焦がす

哀れなるかな急ぎ駆けつけし諸侯達 褒妃の一笑を得たるのみ

ところで、申侯は幽王が申后を廃して褒妃を立てたことを聞き上奏文を書いて諫言した。

昔、桀王は妹喜を寵愛して夏王朝を亡ぼし、紂王は妲己を愛して商王朝を亡ぼしました。いま、大王は褒妃を寵愛され嫡子を廃し庶子を立て、すでに夫婦の義に背き、父子の情を傷つけてしまわれしました。桀紂の事が今繰り返され夏商の災いは昔の事とは申せません。無謀な命令を撤回され、亡国の災いを除かれますよう伏してお願い申し上げます。

幽王はこれを見て机を叩いて怒つた。

「こやつ、何という暴言だ！」

「申侯は太子を追放されずと恨んでおりました。今回王后、太子とも廃されたので胸に謀反の気持ちがあるのです。だから過去の暴君の過ちを持ち出したのでしょうか」

「奴をどうするか」

「申侯はもともと功績があつたからではなく王后のお陰で爵位を得たのです。今は王后、太子ともに廃されたのですから申侯も爵位を落として元の伯に戻し、問罪の兵を出して後顧の憂いを無くしておくべきでしょう」

幽王は石父の進言を認め、石父に大将を命じて兵・戦車を徴集し、申討伐軍を起すことにした。

この勝負如何なりますか、それは次回のお楽しみ。

第三回

犬戎 鎬京を襲がし

周平王 洛陽に遷都す

申侯が上表した後、申侯の部下が鎬京を探り、幽王が虢公を大将として近いうちに申を討とうとしているという情報を探知し、大急ぎ夜を徹して帰国し申侯に報告した。申侯は非常に驚き、

「わが国は小国で兵力も少ない、王軍を防げるわけがない」と心配すると、大夫呂章が次のような提言した。

「嫡子を廃し庶子を太子に立てるといふ天子の道はずれた行動に、忠臣は下野し万民の怨嗟の聲は高く、天子は孤立の状態です。現在西戎の兵力が非常に強くわが国とは隣国でもあります。大至急戎主（西戎の首領）に手紙を出し兵を借りて鎬京に攻め入り、王后を救つて廃された前太子宜臼殿に譲位するよう天子に要求するというのは如何でしょう。これこそ伊尹、周公旦が行った故事に沿うものです。先んずれば人を制す、機を逸してはなりません」

「そなたの言う通りだ」

申侯は直ちに国書と金銀、絹織物を持たせて西戎に使者を派遣した。併せて鎬京を落としたら国庫にある金銀財宝は自由にしてかまわないと約束した。

伊尹と周公旦 伊尹いんは商湯王に仕え建国の功労者、四代目の王大甲が国政を乱したので追放し自ら摂政となり三年後再び王に迎え臣下に復した。周朝周公旦（しゅこうたん）は周武王の王、武王の死後幼主成王の摂政となり、謀反を起した弟たち管叔、蔡叔を夫々誅殺、流罪とし、国の安定を図た。

「中国^の天子に失政があり、無道^の天子を倒して太子を擁立するようにと国舅申侯から依頼があった。これはわしの考えにぴったりだ」
 戎主はそう言うすぐに戎兵一万五千を三隊に分け、右先鋒に李丁^{ぼてい}、左先鋒に満也速^{まんやそく}、戎主は自ら中軍を率いて出兵した。道を塞ぎ空を覆い隠すほどの武器や旗の列が続き、申侯も申軍を出してこれと連合し堂々と鎬京に侵攻した。意表をつかれ、王城は何重にも包囲され水の漏れ出るすきもなくなった。

幽王はこれを聞いて非常に驚き、

「機密が漏れたらしい。準備ができる前に戎兵に先行されてしまった。どうしたらいいだろう」

「大王、直ちに驪山^{りさん}の烽火^{のろし}を上げさせましょう。諸侯が必ず救援に参ります。内外から挟撃すれば必勝間違いないです」

と虢石父^{かくせきふ}が進言した。幽王はその意見に従い烽火^{のろし}を挙げさせた。しかし、一人の兵士もやって来なかった。おそらく烽火^{のろし}で諸侯をもてあそばせいであろう、どうせまた戯^{たわむ}れに違いないと誰も救援軍を出さなかった。救援軍は来ないし大戎^{たいじゅう}（西北部の異民族西戎の一つ）軍の攻撃は昼も夜も絶え間なく続く。

「敵勢は強いのか弱いのかよくわからない、そなた当たってみてくれ。朕は兵を観閲して後に続く」

と、幽王は虢公^{かくこう}に命じた。虢公は本来戦争などできる将の器ではない。しかし命令だから仕方がない、二百乗^{ひゃくじよう}の戦車を率いて城門を開き突撃した。申侯は陣から石父が出てきたのを見てそれを指差し戎主に、

中国^{ちゆうごく} 当時は主として黄河流域の中原^{ちゆうげん} 地域を中国と言った。
 乗 戦車を数える単位 数頭の馬と一車を引いた 当時の中国では戦車は戦の主

「あいつが大王を騙し国を誤らせた国賊だ、逃がすな」

戎主はこれを聞いて、

「誰かあいつを捕えるものはいないか」

「わたしが参りましょう」

と李丁^{ぼてい}が刀を振り上げ馬に鞭打ち石父にかかって行った。大台も打合わないうちに石父は李丁^{ぼてい}の一刀をあびて車から斬りおとされた。戎主と満也速^{まんやそく}は一斉に軍を前進させ喊声^{かんせい}を上げ大挙して城内に乱入し、家を見れば火をつけ人を見れば殺した。申侯もこれを抑える事ができず彼らのなすがままで都城は大混乱となった。

幽王は軍を観閲する前に情勢が悪化したので小型車に褒姒^{ほうじ}と伯服を載せ後方の宰門を開いて城外へ脱出した。司徒の鄭伯友が後から追いかけてきて、大声で、

「大王ご心配ありません、わたくしがお守りいたします」

と言つて、北門を出て驪山^{りさん}の方へ逃げて行った。途中、後を追つてきた尹球^{いんきう}に遇った。

「大戎は宮殿に火をつけ、蔵のものを略奪して、祭公は乱軍の中で戦死しました」

と尹球^{いんきう}が言うのを聞き幽王は心胆が裂ける思いであった。鄭伯友は再び烽火^{のろし}を挙げた。煙は天高く昇つていったが救援の兵はやはり来なかった。大戎の兵は驪山^{りさん}の下まで追つてきて驪宮を何重にも包囲し、

力で中央に貴族が乗り左右に射手と御者^{ごしや}いて矢の雨を降らせて進んだ。この戦車の数が国力の程度を表したものである。一番は四頭の馬とそれが引く馬車に三人の武装兵が乗り歩兵七十二人が従うので兵合計七十五人 天子の事は「万乗の君」と言うがこれは計算上は四万頭の馬と七十五万の軍を率える王という事になる。

「暗君よ、逃げてでも無駄だ」

と口々に叫んだ。幽王と褒姒は恐れ向き合つて泣いた。

「事は急を要します。微力を尽くしてお守りいたしますので、とにかくこの重圍を脱出して再挙を図るため、ひとまず臣の国においでください」

と鄭伯友は進言した。

「朕が叔父（天子が同姓の諸侯を呼ぶ呼称）の意見を聞かなかつたためこういう事になってしまった。我々夫婦と息子の命は叔父任せろ」

鄭伯は直ちに人を驪宮にやつて火をつけさせ戎兵を惑わせ、幽王を連れて驪宮の後方から飛び出した。鄭伯は長矛を持って先に立ち、尹球は褒后母子を守りながらびつたりと幽王の後に随いて行つた。どれ程も行かないうちに犬戎の少将古里赤にはばまれた。鄭伯は齒嚙みして怒り、すぐ迎え撃つて数合打ち合い古里赤を刺し殺したので、戎兵は鄭伯の勇猛に驚いて一時逃げ去つた。半里はどいくと後方に再び喊声（いっせい）が起つた。先鋒の季丁が大軍を率いて追つてきたのである。鄭伯は尹球に王の車を守つて先に行かせ、自分は一しんがり（いっしんがり）を勤め戦いながら退いた。しかし犬戎の鉄騎が横から突つ込んできて前後に両断され、鄭伯は包圍されてしまったが、それでも全くひるまず神出鬼没の予さばきで犬戎もとても手がつけれない。戎主は四方から放箭を命じた。雨のような矢が相手かまわず降りしきり哀れ一國の賢侯も今万箭の下に戦死した。左先鋒の満也速が幽王の車を取押えた。犬戎主は立派な上衣や帯から車の主が幽王と知り、すぐに車中に斬り込み、伯服も一緒に殺してしまつた。褒姒は美貌のために殺されず、軽車に乗せられてフェルトのテントに連れて来

られなぐさみににされた。尹球も車の中に隠れていたが戎兵に引張り出され斬殺された。

幽王の在位は十一年であつた。桑の弓と箕の箠を売つていた男に清水河辺で拾われて褒國へ逃げた妖女、それこそ君心を蠱惑（こわく）し王后を凌辱し、幽王を今日の破滅に追込んだ褒姒だつたのである。昔のあのわらべ歌、

もうすぐお月さま昇り お日さま沈む

槩の弓と箕の箠 やがて周は滅ぶだろう

まさにこれはこの日の予兆であり、天命はすでに宣王の時に定まつていたのである。東屏先生に次のような詩がある。

褒姒の笑いを得んと手を尽し 烽火の光に揺れる紅粉黛

幽王の自滅は止むなきも 許されざるは西戎による国の蹂躪

又、隴西居士は、

驪山の一笑犬戎の嘖り 真となりし弓と箠の童謡

十八年の後に因果心報 国運取戻すは誰ならん

又、尹球等不善をなせる奸臣の戒めとして、

巧言讒言で暗君に媚び 百年の富貴得んとする

一朝首を揃えて天誅受け 千秋に佞臣の名を残す

又、鄭伯友の忠義を称え、

石父尹球共に果て 今日鄭桓公も勤皇に死す

三卿周家に殉じしも 白骨風の前に何ぞ香らん

一方、申侯は宮中に火がついたのを見て、急いで自国の兵を率いて宮殿に入りともに消火に当たり、先ず申后を冷宮から救出した。琼台へ行って見たが幽王も褒姒も行方がわからない。

「北門から出て行かれました」

という者がいたので驪山へ逃げたのだらうと思ひ急遽後を追った。途中ちようど前から来る戎主と出会い、互いに労をねぎらったが、暗君は殺してしまったという話を聞いて驚き、

「わしはただ王の不明を正したかっただけなんだが、こんな事になつてしまふとは。後世不忠といえは、わしが引合に出されることになるう」

と嘆き、部下に命じて遺体を納棺し丁重に葬った。

「国舅、それはいわゆる『婦人の仁』というものですよ」

戎主はそう言つて笑つた。

さて、申侯は都へ歸つて宴席を設け戎主を歓待した。蔵の財宝は全て運び出し、集めたものを十車にして彼に与へ帰国させようと思つたが、戎主は幽王を殺したことを世にもまれな功績と考え、軍を都に占拠させ一日中酒を飲んでは歓楽に耽り帰国する様子がない。民衆は申侯を恨みだした。申侯はどうしようもなく密書を三通したためて三人の諸侯に届け、勤王の件で会いたいと約束を取付けた。三諸侯とは北の晋侯に届、東の衛侯姫和、西の秦君嬴開である。別に鄭国へも世子掘突に鄭伯が戦死したことを知らせ復讐の兵を挙げるよう要請した。

世子掘突は年齢は二十三才、身長は八尺二尺（二尺二寸）で才知煥発な人である。父親が戦死したと聞くと、悲憤を抑えきれず白装束の喪服を

着て三百乗の戦車を率い昼夜兼行で馳せつけた。早速、物見が大戎主に知らせたので戎の方でも準備を整えていた。掘突は到着するとすぐ攻撃をしかけようとした。

公子成が諫めて、

「わが兵は夜を日に継いで駆けつけたので疲れています。溝を深く掘り壘を固め諸侯の軍が集まつてから一緒に攻撃するのが万全と考えます」と言つたが、掘突は、

「王や父上の仇討ちの挙兵には正義がある。しかも大戎は驕りたかぶつていたので精銳で攻めれば負けることはない。諸侯が来るのを待つていては軍心が緩んでしまふ」

と言つて直ちに兵に命じて城下に迫った。城は旗を伏せ太鼓も静まり全く何の動きもない。掘突は張りのある声で叫んだ。

「畜生め、出てきて俺と決戦しろ」

城からは何の返答もない。掘突は城攻めの用意を命じた。すると突然林の茂みから鉦の音が響き戎軍が飛び出してきた。これはあらかじめ城外に待ち伏せさせていた戎主の罠だったのである。掘突は驚き、急いで槍を構えて戦つた。城の上から又ドラが轟き城門が開いて別の一隊が飛び出してきた。掘突は前に李丁、後ろに満也速と二人に挟撃され抵抗できず大敗を喫して逃げた。戎兵はしつこく三十里余り追撃して引揚げた。掘突は残兵を集めて公子成に言つた。

「卿の忠告を聞かないで大損害を受けてしまった。ここで何か案はあるか」

「ここからは濮陽が近く衛侯は経験が豊富で世事に長じていますから衛侯を頼られたら如何です。鄭と衛が兵を合わせれば目的を達することができましよう」

掘突はその意見に従い濮陽に向かう命じた。二日ほど行ったところで、ほこりを巻き上げて城壁が移動して来るように無数の兵や戦車が見えた。中央には錦の上衣に金の帯をつけ白顔に白髪、飄々とした仙人風の諸侯が坐っている。この諸侯こそ衛の武公姫和であり、この時すでに八十才を越えていた。掘突は車を止めて声高に叫んだ。

「わたくしは鄭の世子掘突です。大戎軍が都を侵犯し父は戦死しました。わが兵もまた敗れ、救援をお願いに参るところでした」

武公は拱手して答えた。

「世子ご安心ください。わが国は国を挙げて勤王です。秦、晋両国の兵も間もなく来ると聞いています。大戎軍など心配する事はありません」掘突は衛侯に先行してもらい、自軍も再び鎭京に後戻りして都城二十里外でそれぞれ分かれて陣営を張った。

秦、晋両国の出兵のようすを調べにやつた者の報告があつた。

「西のほうで鐘太鼓が鳴り響き、車の音が地に轟き大きく『秦』と書かれた旗が見えます」

※ 衛武公姫和 ○○玉 ××公というのは亡くなった後の諡号おくりなで生前は本来の名を使つた。衛の武公は諡号 生前は姫和 姫は姓 周と同姓である。秦君は諡号は襄公 姓名は嬴開 通称は史記等でも便宜上諡号を使っている。

※ 拱手 両手を胸の前で組み合わせてお辞儀をする敬礼 古事には男は左を女は右を上にして、凶事にはその逆にする。

「秦は周の属国ですが風習は戎に倣つたもので、兵は勇猛で戦争が上手です。大戎はきつと脅威に感じるでしょう」

と武公が話しているうちに、北のほうを探っていた物見の報告があつた。

「晋軍が到着して北門付近で陣を張っています」

武公は大変喜び、

「二国の軍が来てくれれば大事は終わったようなものだ」

そう言つて、すぐ人を遣つて秦、晋両君に挨拶した。

まもなく二君は揃つて武公の陣中に来てお互いにねぎらいの言葉を交わした。二君は掘突の全身白い喪服を見て武公にたずねた。

「この方はどなたですか」

「鄭国の世子です」

武公は鄭伯が国難に殉じた事と幽王が殺された事を一通り説明した。

二君は大きいため息をついた。

「年をとつても見識もなく、ただ臣下の義務として駆けつけただけです、臭いものの処分はお二方のお力が頼りです。何か策はございますか」

と武公が言つと、秦襄公が答えた。

「大戎の考えは女と財宝の略奪しかありません。こちらの軍が攻め込めばきつと抵抗しないでしょう。今夜の三更、兵を三分して東南北の三方面から攻め込み、西門だけ逃げ道をあけておいてそこに鄭の世子殿

※ 三更 五更の。日没およそ夕方時から夜明はおよそ朝の時までを2時間づつ五等分し、その第三 およそ午後11時から2時間

に待ち伏せしていただき、出てきたところを不意打ちすれば間違いない
完勝です」

「それはいい案だ」

一方、申侯は都内にいて四ヶ国の軍が揃ったと聞き非常に喜び、
小周公咺と密かに相談して、城攻めになったら開門して内応するこ
とに決めた。そこで戎主に、右先鋒の季丁にとりあえず金銀財宝を国元
へ持帰らせたらどうかと提案してその兵力を削ぎ、左先鋒の満也速に城
を出て迎撃させることを勧めた。犬戎主はいい考えだと承知し申侯の意
見に従った。

満也速は東門の外に陣を構え衛兵と対峙し明日の交戦を約した。そこ
ろが思いもよらず、三更を過ぎた頃、突然衛兵が夜襲をかけてきた。
満也速は急いで迎え撃とうとしたが、戎兵ははらばらになつて逃げ回り、
多勢に無勢で支えきれず皆一斉に逃げだした。三方面の諸侯は呐喊して
城攻めに入った。突然城門が開き、三方から戦車に攻め込まれ全く防ぎ
ようがない。申侯の計略だったのである。戎主は驚いて夢から醒め裸馬
にまたがってまっすぐ西から城を出ようとした。随いて来た者は百人に
満たず、しかもここでまた鄭の世子掘突にはばまれた。絶体絶命の時、
満也速が敗兵を集めてやつてきたので、混戦の中をやつと逃げ出す事が
できた。掘突は無理に追撃はしないで城に入り諸侯と会見した。ちよう
どこのころ夜が明けた。褒姒は彼らが逃げるのに間に合わず、縊首して
死んだ。胡曾先生の詩にいう。

錦綉に囲まれ国母と呼ばれしも あわれ生莫き蛮族の妾
ああ終に得しは自縊の悲しみ 楽しみ多き王妃なりしは今昔

申侯は宴を設けて四諸侯をもてなした。席上、主席の衛武公が箸をお
いて諸侯に言つた。

「王は亡くなり、国は破れてしまった今、われわれ臣下として酒を飲
んでいる時でしょうか」

全員拱手して立ち声を揃えて言つた。

「どうかご高説をお聞かせ願います」

「国は一日たりとも君主なくしては成立ちません。現在、前太子が申
におられます、あの方に王位を継承していただくのは如何でしょうか」

「おっしゃることは文、武、成、康、各先王の霊の思いにもかかな
う事でございます」

秦襄公が言くと、世子掘突が申し出た。

「わたくしにはまだ全く功績がございませんので、新王をお迎えする
件について微力を尽くし、前司徒（父親鄭伯友）の志を継がせていただき
たいと存じます」

武公は大変喜び、杯を上げて労つた。早速奏上文を作り、法駕（王の
車の準備）に入った。各国とも軍を出し援助を申し出たが、掘突は、
「敵に向うものではありませんから多くの兵は必要ではありません、わ
たし方の兵だけで十分です」

と言うと、申侯が、

「わたくし方に車が三百輛ほど有りますので、道案内を担当させてい
ただきたいと存じます」

と申出た。翌日、掘突は早速太子宜臼を王に迎えるため申国へ向かつ
た。

一方、宜臼は申国にいて、出かけて行った国舅の吉凶が未だわからず終日鬱勃としていた。そこへ突然鄭の世子が国舅申侯と共に、諸侯連名の京へ迎えるという上申書をもたらしたので驚くと同時に、幽王が犬戎に殺されたことを知って父子の感情に思わず声を出して泣いた。

掘突は太子に奏上した。

「太子、どうか社稷(国家)を重視され、一刻も早く大位にお就きになられ人心を安んじさせていたただきたくお願い申し上げます」

「わしは今、天下の不孝者だが、こうなった以上は行くしかないな」一日たらずで鎬京に着いた。周公が一足先に入城し宮城を掃除しておいた。国舅申侯は衛、晋、秦三国の諸侯と鄭の世子ならびに文武の朝臣を引率して城外三十里まで出て迎え、吉日を占って入城した。宜臼は宮室が無残に破壊されているのを見てさん然と涙した。先ず申侯に会って指示をし、天子の礼服を着て宗廟に報告し直ちに即位して平王となった。

平王は昇殿し、諸侯百官は参内して祝賀を述べた。それが終わると平王は申伯を昇殿させて、

「朕は廃嫡された者であったがこのように王位を継承することができた。これ全て舅殿のお陰です」

と言って爵位を昇格させ申公にしようとした。申侯は、

「それでは正しい評価とは申せません、国政の汚濁によって滅びた鎬京が復活できたのは、諸侯の勤王の功によるものです。臣は犬戎の暴虐を制止することができず、しかも先王からは罰を受けており、むしろ万死に当たります。とても賞をお受けすることはできません」

と言って三度固辞した。そこで平王は元の侯爵に封じた。

衛武公が再び進言した。

「褒姒母子は寵愛をいいことに人倫を乱しました。虢石父、尹球等は君主を欺き国を誤らせました。たとえその身は死しても全員格下げすべきです」

平王は進言を許可するとともに衛侯を公爵に昇格し、晋侯、仇には河内の土地を加封した。鄭伯友は王のために死んだので、桓という諡号を賜り世子の掘突には伯爵を継承させ、虢石父(一頃は「石」を加増した。秦はもととも属国だったが秦君に秦伯を封じ諸侯に加えた。しょうしゅうこうけん)

小周公咺は太宰を拝命した。申后は太后となり、褒姒と伯服は共に庶人に落とされ、虢石父、尹球、祭公は先王の時代に功があり、王のために死んだ事も勘案して本人の爵位は削らず子孫が継承することを許した。また、告示を出して民を安心させ、都内で被害を受けた民衆を慰撫した。家臣たちには酒食でもてなし皆大いに喜んだ。詩がある。

百官この日恩主に逢い 万民今朝こそつて太平を喜ぶ

是より周朝功德を積み 国を整え中興を目指す

翌日、諸侯は平王に感謝の挨拶をした。平王は再び衛侯を司徒に封じ、鄭伯掘突を卿士(周王朝の執政者)にして太宰咺と共に天子の補佐として朝廷に常駐させた。申、秦両君は本国に戎狄が迫ってきているので挨拶をして帰国した。

申侯は鄭の世子掘突が非常に毅然として立派な青年なので、娘を妻に遣った。これが武姜である。

さて、犬戎は騒ぎを起こしながらも長い間在京していたので中原一帯の道路事情に精通しており、鎬京から追放されたとはいえその鋭鋒はまだ健在である。又、労して功なしという気持ちもあり内心恨みに思っ

ていたので、ついに大軍を率いて周の国境周辺の岐、豊に攻込んで来てその半分を占拠し、次第に鎬京に迫ってきている。そうして烽火は絶え間なく何ヶ月も連なり、一方宮殿は消失して半分も残っていない状態で塀は崩れ建物も傷んでいて如何にも惨めな状態である。国庫に蓄えが無く宮殿再建の力はないこと、大戎が早晚攻め込んで来ることを懸念して、平王は洛陽に遷都しようという気になった。

ある日、朝のあいさが終わった後、大臣たちに諮問した。

「昔、成王が都を鎬京に定めた時、さらに洛陽を建設したのはどういう意味があったのだろうか」

「洛陽は天下の中心にあり、四方から入貢する場合に距離的に便利ですから、成王が召公に家相を占わせ、周公に建設を担当させたもので、東都と称し、宮室の制度は鎬京にならっています。朝見のある年毎に天子が東都へ行幸されて諸侯に接見されました。これは諸侯の便を考えての配慮であります」

「大戎は鎬京に迫っておりどんな災難に遭うかわからないので、朕は洛陽に遷都しようと思うがどうだろうか」

と平王が下問すると、太宰咄も同意見で、

「今王宮は焼き壊されていますが、再建は容易ではなく民を疲弊させ財政を圧迫し民衆の怨嗟をかうことになり、西戎がこれにつけ込んで兵を起したら何とも防衛のしようがありません。洛陽への遷都はこの面から言っても実に当を得ていると考えます」

と奏上すると、文武の官とともに大戎を恐れて声を揃えて、

「太宰のおっしゃる通りです」

と言う。ただ司徒の衛武公だけがうなだれて不満そうだったので、平王はたずねた。

「司徒はどうして黙っているのです」

「臣は年齢が九十才を超えております。大王がこの老いばれをお見捨てならず六卿に任じてくださいました。言うべきことを申し上げなければ不忠になり、皆さんと異なることを言えは和乱す事になるかもしれませんが、それでも王のために申し上げます。そもそも鎬京は左王城は南面しているの左は東に崤山と函谷関があり、右西方面は隴、蜀の山河に守られ、肥沃な土地が広がるすばらしい地形でこれに勝るものはありません。洛陽は天下の中央に位置するとはいえ地勢は平坦で四方から敵を受ける地形であります。ですから先王は二都を建設しましたが西京に本拠を置いて天下の要とし、東都は一時的な巡幸用に留めたのです。大王が鎬京を捨て洛陽に遷都されることによって、今後王室の權威が衰えていくのを心配致します」

「大戎は岐、豊を侵略しその勢いは非常に激しい。しかも宮城は壊され威容が失われている。東遷は止むを得ない事と考えるが」

と平王が言うと、衛侯は更に加えた。

「大戎は豺狼のような性格で不当に宮室に侵入して来ましたが、これは申侯の借兵の失敗で、頭を下げて泥棒を入城させ、宮城を焼かれ前王が殺されたのです。大戎は不倶戴天の仇敵です。大王は志を強く持たれご自分を信じ、節儉愛民、練兵訓武により宣王にならって北伐南征し、あの戎主を捉えて七廟に供え前王の恥をそぐべきであります。仇を

七廟祖先を祀る制度として天子は七代の祖先を七の廟を設けて祀ることとした。天子七廟 諸侯五廟 大夫三廟 士一廟 諸人無廟と礼記に定めてある。天子

避けて退けばそれだけ敵は押し込んできて次第に蚕食され、岐、豊だけで済まなくなります。昔、堯舜は土壇に茅葺きの建物で、禹も小さな宮殿に住まりましたが陋屋だとは考えませんでした。京師の壮観とは宮殿の姿だけを言うのでしょうか。どうか賢察願います」

これに対し太宰喟がまた口を開いた。

「司徒殿の話は平時の事で、非常時には通じません。前王は政治を怠り人倫に外れたため自ら賊の侵略を招きましたが、そのことはもうあまり咎めても仕方ありません。今、大王はそれらをさっぱりさせ名譽を回復されましたが、国庫に蓄えがなく兵力は脆弱で、民衆は犬戎を豺狼の如く怖れています。一旦戎騎兵がやってくると民心は瓦解し国を誤る事になります。その時誰に任せられればいいのでしょうか」

「申公は戎を呼ぶことができたのですから退かせることもできるでしょう。大王が申侯に二下問なさればきつと良策があるはずですよ」

こんな議論をしていた時、国舅申公の使者が緊急の上奏文をもたらし、た。大意は次のような内容である。

犬戎に止む間もなく攻められ、正に亡国の瀬戸際に立っています。親戚の情におすがりいたし、救援軍をお願い申し上げます。

「舅殿は自国の事で手一杯で、朕のことまで構ってられないようだ。東遷のこと、朕はもう決めた」

と言つて平王は太史に東行の日を選ばせた。衛武公は、

「わたしは司馬だ。主上が行かれるとお決めになられた以上、民衆ががばらばらにならないようにするのがわたしの責任である」

七廟とは三昭三穆と太祖の七廟である。二四六世を太祖左に設け昭とい、三五七世の廟を右に設け穆といつた。

と言つて民衆に対し直ちに揭示板に

『王に随いて東遷する者は早速準備にかかり一斉に出発すべし』と告示し、祝史は遷都の理由を起草し宗廟に祀つて報告した。

遷都の日が来た。大宗伯が七廟の位牌を抱いて車に乗り先導した。秦伯嬴は、平王が東遷を決定したと聞き、自ら兵を率いて護衛に就いた。これに多くの民衆も老幼を助けながら付き従つた。

昔、宣王が大祭の夜、美しい少女が三度大笑し、三度大泣きして慌てず騒がず、七廟の位牌を一つに束ねてゆつくりと東のほうへ去つて行つたという夢を見たが、大笑三声は褒姒が驪山の烽火で諸侯を玩んだ事。大哭三声は幽王、褒姒、伯服の三人の命が絶たれた事。位牌が束ねられて東へ行つたことは今日の東遷の事に正に符合する。宣王の夢はことごとく現実となつたのである。それから、太史伯陽父が『泣いては笑い、笑つては泣く。羊が鬼に吞まれ、馬が犬に追われる。よくよく慎め、緊の弓と箕の箠』と卦に出た詞を言つたが、その『羊が鬼に吞まれ』というのは宣王の四十六年に鬼に出会つて亡くなつたその年が羊年であつた。『馬が犬に追われる』は犬戎が侵攻してきたのは幽王十一年庚午であり、ここに西周は終に滅びたのである。天運とはこのように定まつたものであり、伯陽父の占いが正に神占であつたことが明らかになつた。

さて東遷後如何になりますか、それは次回のお楽しみ。

祝史 神に仕え祝を司る官 弓術 馬術 医 トその他百工すなわち広範に技術関係も司つた。

第四回

秦文公 夢告げにより郊天の祭を舉行
鄭庄公 地を掘つて母に会う

平王は遷都して洛陽へ移った。街は賑やかだし宮殿は豪華で美しく、鎬京と何も変わらなかった。平王は喜んだ。都が定まり諸侯たちがそれぞれ献上物を持って祝賀に訪れた。しかし荊国 楚 だけが来なかった。平王はこれを討伐しようと思ひに諮つた。

「荊は文化圏外の蛮国で宣王は当初これを討つて服従させましたが、毎年祭祀に供える酒を漉すための青茅(草の名)一車だけ貢納させ他は免除して繋ぎ止めているのでございます。今は遷都したばかりで民心もまだ安定していませんので、遠征するのは順序が逆だと思われまふ。心を広くお持ちになり恩を感じて従うように仕向けられたほうがいいでしょう。いつまでも強情を張つて改めなければ軍を發動して討伐することにしても決して遅くはございません」

家臣たちがそういうので南征の件は取止めることにした。

秦襄公が帰国の挨拶に來たので、

「いま岐、豊の地の半分は大戎に占拠されていますが、卿が犬戎を驅逐できればそこは全て卿に差し上げ、少ないですが遷都に協力いただいた功勞の報償とします。西方の地は長く経営すればきつと良くなりますよ」

秦襄公は叩頭の礼をし、拝命して帰つていった。帰国すると直に犬戎を討伐するために軍を整備し、三年弱で犬戎を攻めて蹴散らした。

叩頭の礼頭を地に打ちつけてする非常に敬意を込めた礼

大将の季丁、満也速は共に戦陣に没し、戎主は遠く西へ逃げ落ちて行つた。岐、豊一帯は秦のものになり千里の土地を開拓し遂に大国になったのである。

髯翁詩に言う。

文王武王出世の地 何故に軽々秦に与えしや

岐豊の良地与えなば 秦如何ぞ始皇を称え得ん

さて秦は帝顓頊の後裔で、後に堯の治世に皋陶が士師官(司法官)に就いた。皋陶の子伯翳は大禹(後に舜より禪讓を受け夏朝の始祖)の治水を助け、山や沢を焼いて猛獸を駆逐し、その功で嬴の姓を賜わり、舜の治世には牧畜で仕えた。伯翳には若木と大廉という二人の子がいた。若木は徐に封じられ夏朝、商朝を通して諸侯であつた。紂王の時に大廉の子孫で蜚廉という者がいた。走るのが得意で一日に五百里を走る事ができたといひ、その子惡来はすごい力持ちで素手で虎豹の皮を剥いだといひ。この父子は勇猛だったが紂王の寵臣となつて紂王と一緒に残虐をはたらいたため、武王が商を亡ぼした時に共に誅殺されてしまった。蜚廉の末子は季勝、その曾孫は造父といひて馬車を扱うのが上手で周穆王の寵愛を受け趙に封じられ後に晋の趙氏の祖となつた。その後非子という者が出て大丘に住み馬の飼育に堪能だったので周孝王に用いられ、汧水、渭水兩川の間で馬の飼育を命じられた。そこで馬の繁殖に功が有つたので孝王は喜び、彼に属国である秦を与え嬴姓の繼承者として嬴秦と呼んだ。六世の後胤襄公になつて、勤王の功により秦伯に封じられ岐、豊の地を得て勢力を強め、都を雍に定めて諸侯と交流を始めた。襄公が没し子の文公が継いだのは平王の十五年である。

ある日、秦文公は夢を見た。酈邑ふりゅうの野に黄色い蛇が天から山の斜面に降りてきた。頭は車輪ほどでその頭が地に着いても尾はまた天にあるという大蛇である。これがにわかにも男の子に変身して、「われは天帝の子なり。天帝は汝を白帝に任じ西方の祭事を司るようにとのご下命があつた」

と文公に言うはずに見えなくなつてしまつた。翌日太史敦とんを召してこれを占わせた。

「白は西方の色ですから、殿に西方を司れとの天帝のご命令です。大変おめでたい事でございます」

敦が占つた結果そう言うので文公は酈邑に高台を築き白帝廟を建て酈時ふじは天地神明と帝王を祀るところと名付け白牛を犠牲にして祭つた。

同じ頃陳倉ちんそうという所で、ある狩人が、猪に似ていてたくさん針がある獣けものを捕えた。叩いても死なないし名も分からない。文公に献納しようと上京する途中、二人の童子に出会つた。その子が指差して、

「この獣は『猾』いというんだよ。何時もは地中に隠れていて死んだ人の脳を食べているんだ。首を棒で叩けば直ぐお陀仏だよ」と言う。その猾も人の言葉で、

「この子供たち二人は雉の精で『陳宝』ちんほうというんだ、雄を捕まえれば王になれ、雌を捕まえれば覇者になれるんだよ」

と言つたので二人は見破られて慌てて雉に変身してバサバサと飛び去り、雌は陳倉山の北斜面で右の鶏になつた。猾も消えうせてしまつた。

狩人は驚いて急いで文公に知らせた。文公はそれを聞いて陳倉山に陳宝祠を立てた。

他にも不思議なことがある。終南山しゅうなんざんに大きな梓あけきの樹があつた。文公はこれを宮殿の材木にしようと思つて伐採を命じた。ところが樵夫きこりが鋸で挽こうとしても斧で切り倒そうとしてもとても歯がたたない。突然風雨が激しくなつたのでその日は引揚げた。

山の麓で宿つていた男が夜中に、妖怪たちが集まつてその樹に向かつて、

「人間の鋸や斧もあなたにはなんともならなかつたね」

と祝いを言い、樹の精もそれに応じてるのを聞いた。

「もし、さんばら髪をふり乱した秦の人があなたに赤い絹糸を巻き付けたらどうしますか」

と或る妖怪がいうと、その樹の精は悄然と黙り込んでしまつた。

翌日、この男は妖怪の話を文公に報告した。文公は彼の話に従つて切らせてみると簡単に切り倒すことができ、樹の中から青い牛が出てきてすぐに雍水ようすいに跳び込んでしまつた。その後、河の近くの住民が時々青牛が河から出るのを見たというので、文公は騎士に待機させてこれを討たせようとしたが、青牛はすごい力で突進し兵士は突き倒され、髪がざんばらに乱れて顔に被いかかつた。青牛はこれを見て恐れて水の中へ隠れ、再び出て来なかつたという。秦文公は軍中でのさんばら髪を禁止し、ここにも怒特祠どくし(特は牛の意)という祠を建て梓の樹の精を祀つた。

魯の恵公は、天子が天帝を祀るやり方を秦が勝手に真似ていると聞いて、太宰の讓を周に派遣し平王に天子の郊禘の礼を魯が準用する事の許可を願ひ出たが、平王はこれを許さなかった。

「わが祖先の周公は周朝建国に偉大な貢献がありました。国家の儀式的形式も周公が決めたものであります。われわれ子孫がそれに倣つてなげいけないのでしょうか。秦が許される手続きをどうして魯には許されないのでしょうか」

恵公はそう言つて、とうとう郊禘の礼の手続きを許可なく準用してしまつた。平王はこれを知つてもあえて糾弾しなかつた。そんなことがあつて以来王室は次第に力が弱まり、諸侯は権限をほしいままにして、互いに侵略を繰り返して天下は次第に騒がしくなつていつた。史官は詩の中で嘆いている。

古来王と侯は礼を異にす 諸侯の郊禘の礼は寡聞なり

秦魯諸侯越権の端緒となり 列国の大権侵犯は加速せり

鄭の世子掘突は位を継承して武公となつた。武公は周の混乱に乗じて東虢と鄭の地を併呑し、鄭に遷都して新鄭と呼び、祭陽を京城と呼んで制邑（虎牢）に閼所を置いた。鄭は非常に強大となり、衛武公と共に周朝の卿士であつたが、平王十二年（紀元前七五八年）衛武公が亡くなり、鄭の武公が単独で朝政を担当した。祭陽と洛陽は近いので周朝と国元へは常時往來していた。

郊禘 天子が行う天をまつる祭祀と先祖をまつる祭祀

京城は城市 邑の固有名詞で首都と言う意味はない。（北京金盾出版校注）
制邑 またの名を虎牢とも呼び鄭国の天然の要害である

ところで、鄭武公夫人は申侯の娘姜氏（武姜）である。二子を生み長男は寤生、次男を段といつた。寤生という名を付けたわけは、姜氏が出産の時、夢の中で産み落とし、夢から醒めてから生まれたことを知つて不快だつたという気持ちでその子に寤生と名付けたということである。次男の段は顔立ちがよく白面紅唇、その上力もあり弓を善くし武芸が堪能であつた。姜氏は段を偏愛し、君位の継承で寤生より十倍優れていると、しきりに夫の武公に次男に継がせるべきだと要求していた。

「長幼の序というものがある。みだりにこれを乱してはいけない。しかも寤生に過失がないのに長を廢して幼を立てる事などとてもない」武公はそう言つて結局寤生を世子に立て、段にはちつぽけな共城（現河南滑縣）を食邑として与え、呼び名を共叔とした。姜氏は内心不快をつのらせた。武公が亡くなると寤生が即位し鄭庄公となり、そのまま父の周の卿士を引継いだ。姜氏は共叔が何の権限も無いのが不満であつた。

「そなたは父上の位を継いで数百里の土地を持つているけれど段はちつぽけな土地しかないのよ。それでもそなたは何ともないのかえ」

「母上はどんなさりたいのですか」

「制邑を段にやつたらどうなの」

「制邑は險阻で有名な軍事上最重要地です。父上に生前あそこは誰にも渡してはいけないと言われています。それ以外であれば考えましよう」

寤生 母の睡眠中に生まれるという意味 逆子という意味もあり、難産に苦しんだため武姜は寤生を嫌たといわれる。

鄭庄公 君主の名は、鄭庄公というように同名が多く非常に紛らわしい。そこで原文ではわかつている場合でも誤解を避けるため鄭〇〇 宋〇〇と国名を付ける場合が多い。なお、庄公の「庄」の字は史記 左氏伝は「莊が使われている

「じゃあ、京城でもいいわ」

庄公は何とも答えなかった。姜氏は怒って、

「それも駄目だと言うのなら国外へ追放すればいいのよ。どうせ何処かに仕官すれば食い扶持くらいあるわよ」

庄公は、恐縮しながら退出した。

翌日昇殿して、共叔段に京城に封じる事を言い渡した。

「それはなりません。天に二つの太陽が無いように民に二人の君主が有つてはなりません。京城の城壁は百雉ある雄大なもので土地は広く人口も多くて榮陽に匹敵します。まして共叔段は夫人が可愛がつておられる子ですので、もし共叔段に大邑を封じればこれは二君になってしまう。夫人の寵愛を恃み将来に災いを残す恐れがあります」

大夫祭足はそう言つて諫めたが、

「母上のご命令だ、いやだとは言えないじゃないか」

と言つてとうとう段を京城に封じてしまった。共叔は恩を謝した後、姜氏に別れの挨拶に行った。姜氏は人払いをして、そつと段に言つた。

「廋生は弟思いではなくてそなたに冷たい。今日の封地の件も母がしつこく言つたから仕方なくそうしたけれどまだ安心はできないよ。京城へ行つたら兵士や戦車を密かに集めておきなさい。チャンスが訪れたら連絡するから。そなたは外から鄭討伐の兵を率けて母が内応すれば国を取れます。廋生に代わつてそなたが君位に就いてくれれば死んでも心残りはないわ」

共叔は拝命して京城に移つた。これより人々は段のことを京城太叔と呼んだ。

京城開府の日、西鄙、北鄙の責任者が祝賀にやつてきた。

「そなたたちの土地は今我が封地に属することになった。これから税は全てわたしに納めること。軍も全てわたしの徴用の指示に従うこと。決して違背なきよう」

太叔段はそう二人に言い渡した。二人は太叔が国母の愛子で彼女は彼に君主を継がせたいと思つてゐることをすでに知つていたし、彼の風采が堂々として人品ただならぬものがあるので、違背する気は全くなく進んで承知した。太叔は巻き狩りの名目で毎日城外で士卒の訓練をし、同時に両鄙の兵も軍籍台帳に統合した。更に、巻き狩りを口実にタイミングを見て鄆と廩延を攻め取つた。両邑の責任者は鄭に逃げて来て、太叔に両邑を攻め取られたことを事細かく庄公に報告した。庄公は微笑して何も言わなかつた。すると居並ぶ列の中から大きな声で発言があつた。

「段は誅すべきであります」

誰かと見れば上卿の公子呂である。

「子封、卿には何か考えがあるのか」 (子封は公子呂の字)

「臣下は武力を持たず、持たば則ちこれを討つべし」と言います。太叔は内には母後の愛に守られ、外には京城の堅固を恃んで日夜兵の訓練を行つていますが、それは篡奪の志以外の何物でもありません。もし臣に兵をお貸しただけましたら直ちに京城に駆け付け、段を縛つて帰り後顧の患い絶ちましよう」

「段が悪いとまではつきりしたわけではない。討伐する理由がないではないか」

百雉 雉は築地や城壁の大きさを表す単位。高さ一丈、長さでは三丈を一雉といふ。百雉とは長さ三百丈の城壁である。(北京金盾出版社校注)

「両鄙が取られました。廩延りんえんや先君の土地が次第に削り取られるのを許せましようか」

「段は母上が可愛がつている息子だし、わしの可愛い弟でもある。たとえ土地を失つても兄弟の情の方を大切にしたいし、母上の気持ちを振払うことはわたしはとてもできない」

と主公が笑いながらいうと、公子呂は更に続けた。

「臣は土地を失うのを心配するのではなく実は国を失うのを心配しているのです。人々はびくびくして太叔の勢力が強くなってきているのを見ていますから遠からず都の民衆も二心を持つようになります。殿が今太叔をお赦しになれば、将来太叔は力を持つて殿を赦さなくなるでしょう。その時になって後悔しても間に合いません」

「馬鹿なことを言うのではない。もういい、わしは自分で考える」

公子呂は外に出て正卿祭足せいせいそくに言った。

「殿は私情で国家の大事をおろそかにしています。それがとても心配です」

「殿は才智兼備の方ですからきつとこれを坐して等閑に付す事はありません。ただ朝廷は多くの耳目がある所なので話が漏洩するのを心配されたのでしょうか。あなたは親族ですから非公式にお話なされば、ちやんとしたご意見がおりになるはずですよ」

公子呂は祭足の意見に従い、もう一度意見を聞くために主公に会いに行った。

「何をしに来たのだ」

「殿がみ位をお継ぎになられたのを国母さまは心良くはお思いになつておられません。万一内外示し合わされると殿は鄭国を保てなくなり

ます。臣は寝ても起きても不安で、もう一度ご意見をお伺いに参りました」

「この事は国母が関わっていることなんだ」

「殿は周公が管、蔡さいを誅殺した話はお聞きになつておられるでしょう。断つべきものは断たなければ逆に乱が起ります。早々に決断をお願いいたします」

「計画は煮詰まつている。段は問題あるが、まだはつきりと謀反を起したわけではない。今、彼を討とうとすると必ず母上が内部から邪魔をするに決まつているし、いたずらに外部の者にわしが兄弟の情がないとか親不孝だと言わせることになつてしまふ。だからしばらく泳がせておいて、母上の寵を恃み謀反を起せば、その時こそはつきり罪に問えることになり、人々も彼の側にはつかなくなるだろうし、母上も仕方ないということになろう」

「殿のお考えは遠大過ぎて臣は随いて参れませんが、でも、日一日と勢力が大きくなり、つる草のように繁つて取り切れなくなつたらどうなしますか。もしあちらから先に動き出すのを待つておられるのでしたら、むしろ挑発すべきです」

「いい案はあるか」

「殿がしばらく周へ入朝されておられないのは太叔の件があるからでしょう。周へ行くとおっしゃれば太叔は必ず国内が空になると判断し

管、蔡、管叔、蔡叔何れも周武王の弟、武王が崩れて成王がまだ時、天下は平定して聞かなくまた年少でもあったので周公が摂政となつた。管叔、蔡叔や多くの弟たちが周公を疑い、反乱を起し周室に背いた。周公はこれを征伐し管叔を誅殺、蔡叔を追放した（管蔡の乱→東山の征）

て鄭に攻め込んで来ます。臣があらかじめ兵を率いて京城^{けいせい}近辺に伏せておいて彼が城を出たら直ちに京城を占拠^{けいせい}しましょう。殿が虞延^{りえん}（現河南省延津）から攻め込んで来てくだされば太叔は背腹に敵を受け、羽があつても飛んで逃げることはできないでしょう」

「卿の計はなかなかいい、決して他言無用ぞ」

公子呂は宮門を出ると

「祭足の予想は神業だな」と感心して独りごちた。

翌日早朝、庄公は、大夫祭足を摂政として自分は周朝へ出かけ天子の補佐をするという偽の命令を出した。姜氏はこれを信じ内心大喜びして段が君主になるチャンス到来と思いい、ただちに太叔に五月初旬に挙兵して鄭に攻め込むようにと、腹心に京城^{けいせい}へ密書を届けさせた。四月下旬の事である。

公子呂はあらかじめ要路に人を伏せておいて、その配達人を捕えその場で殺し、その密書を密かに庄公に届けた。庄公は書状を読んだ後再びしつかりと封をして、別な者を姜氏の遣いと偽って太叔に届けさせた。そして、五月五日に挙兵、城に白旗を立てて内応を知らせるようにという内容の段の返書を手に入れた。

「段がここに白状している以上、母上ももう庇えまい」

庄公は返書を手に入れて喜んでそう言った。直ちに宮室へ行き姜氏に別れの挨拶をして、周へ行くと言つてゆつくりと虞延^{りえん}へ向つた。公子呂が二百乗の戦車を率いて京城^{けいせい}付近で待伏せしていたの言うまでもない。

一方、太叔は母親姜氏の密書を受取り息子の公孫滑と相談し、彼に多額の成功報酬の話を持たせて衛国へ借兵に行かせ、自らは鄭伯（庄公）

から摂政せよとの命令があつたと偽つて、両鄙の兵も合せて悠々と城を出た。公子呂はあらかじめ戦車十乗を商人に扮装させて京城^{けいせい}に潜入させ、太叔の兵が発したらずに城に火をつけるよう指示しておいた。火が見えるとすぐ突撃に入り、城内から門が開いたので勞せず京城^{けいせい}を手に入れる事ができた。人々を安心させるため直ちに、『庄公は弟思いであり太叔は忘恩不義である』と説明した掲示板を立てたので、城中の人はみな太叔の非を認めた。

さて、太叔は出兵して二日もしないうちに京城^{けいせい}を失つたことを知つて慌てて昼夜兼行で兵を返し城外に陣を張り城攻めを行った。しかし士卒の中に次第にひそひそ話しが広がっていた。軍中に城中の家族からの手紙を受取つたものがいて、庄公は非常に思いやりがあり、太叔は不義で仁徳がないという。それが一人から十人、十人から百人へと伝わり、

「わしらは間違つた方に付いて来たようだぞ。これじゃお天道さんに逆らう事になる」

と言つて一斉に騒ぎ出し、その大半が逃亡してしまつた。太叔は人心が離れて行つたことを知り、再起のために急遽鄆邑^{えんゆう}へ急いだ。なんとそこにはすでに庄公の兵がいるではないか。仕方なく昔の封地共城へ逃げ込み門を閉じ籠城した。だが庄公が攻めて来ると共城はちっぽけな町だから、庄公、公子呂の大軍を防げるわけがない。泰山が卵を押す潰すようなもので一瞬のうちにすぐ破られてしまふだろう。太叔は庄公近づいていると聞くと、

「ああ、母上はわしを誤らせた。何の面目あつて兄上にお会いできよう」

と嘆いて、遂に自刎して果てた。胡曾先生詩にいわく。

寵弟才多く大封を占め 更には宮中に内応あるも

公論は謀叛を許すわけがない 京城に生れ 共城に死す

又、別の詩で、庄公が段に悪心を育て、姜氏の口を封じたとして、千古の奸雄なりという。

子弟の善悪は全て教育にあり 悪心を醸成し不幸に陥れたり
京城に封ぜし時より 太叔すでに兄の掌中のもの

「馬鹿なやつ、どうしてこんな事になったのだ」

庄公は段の遺体を抱いて泣きくずれた。段の荷物の中に姜氏の手紙があった。それを太叔の返信と一緒にして姜氏に届けるよう祭足に指示し、「死んで黄泉でま見えるまでは決して母上にはお会いしない」

という誓文をつけて、すぐに姜氏を国境の穎に移すよう命じた。姜氏は二通の手紙を見て、恥じ入り自分も庄公に会わせる顔がないとすぐに宮門を出て穎地へ赴いた。

庄公は国都に帰つても母親に会えず、良心の呵責で、

「仕方がないといえ弟を殺した上に、母上と離れることになったとは、わしは本当に人倫にもとる男だ」

と嘆いたものである。

穎谷の封人（国境の町の管理責任者）で穎考叔という人がいた。人柄は正直無私で日頃親孝行、兄弟思いの誉れがある。庄公が姜氏を穎に移してきたのを見て、

『母が母らしくなくても子は子である』、殿の今回の件は非常に心痛む話だ』

と言つて数羽のフクロウを捜し求め、狩の獲物を献上するという名目で庄公に会いに来た。

「これは何という鳥かね」

「これはフクロウと申しまして、昼間は目が不自由で泰山も見えず、夜はほんの小さな物でも見る能力があります。細かいことに明るければ大きな事には暗い鳥なのです。幼いときは母親に大切に育てられ、長ずると母親を食つてしまうという親不孝な鳥ですからつかまえて食うのです」

庄公は何も言わなかった。ちょうどその時、蒸した羊の肉が運ばれてきた。庄公は料理人に肩の肉を切らせて考叔に与えた。考叔はいい肉を選んで包んで袖に仕舞つた。庄公は変に思つて考叔にその理由を聞いた。

「臣の家には老母がいますが、貧しいため毎日狩をして口を楽しめています。いまだかつてこんなに美味しい物は味わつたことがありません。殿からいただいたので母にも一口味合わせてやろうと思つたのです。母のことを思うと喉を通りません。ですから持つて帰つて、羹（肉や野菜が入った濃いおつゆ）にでもしてやりたいと思つています」

「卿は親孝行だのう」

庄公はそう言つて思わず寂しく大きなため息をついた。

「殿、どうしてため息などつかれるのです」

「そなたには孝養を尽くす母親がいるから子として気持ち进行を尽くして差し上げられる。わしは諸侯だからそなたのように行かないのだ」

考叔は分らない風に装つて、

「姜夫人がお元気でいらつしやるではありませんか。どうして母親がいらないとおつしやるのですか」

と訊ねた。庄公は姜氏が太叔と共に謀して鄭を襲おうとした事件があったため姜氏を潁邑へ移したことを細かく説明した。

「黄泉の誓いをしてしまった以上後悔しても後の祭りなんだ」

「太叔さまは亡くなってしまったわけで、姜夫人にとってお子さまは殿お一人です。ご孝養をお尽くしにならなければフクロウと変わるところがございませぬ。もし黄泉の誓いが問題でしたら臣に解決のために一計がございます」

「どんな方法かね」

「土を水が出るところまで掘ってそこに一室を作り、先ず姜夫人にお入りいただき、殿のお気持ちをお話いたします。夫人がお子をお思ひ殿持ちは殿が母上をお思ひになつておられる以上だと拝察いたします。殿が地下でお会いになれば、黄泉の誓いを破った事にはなりません」

（黄泉の誓：黄泉へ行くまでは合わないという誓）

庄公は大喜びですぐに考叔に命じて壮士五百人を使つて曲洧牛脾山の麓を掘らせた。深さ十余丈掘ったあたりで泉水が湧き出たので、泉のそばに棧を掛けて部屋を作り、部屋ができると長い梯子を掛けた。考叔は武姜に会つて、庄公が反省して元にお迎えして孝養したいという気持ちになつてゐる事を説明し、悲喜こもごもの武姜を牛脾山の地下室に案内した。庄公も興でそこへ行き梯子を降りて母親の前に跪いた。

「厝生は不孝者でした。長らくお仕えしなかつた事どうかお赦しくださう」

「そなたと親しくしようとしなかつたわたしの方が悪かつたのよ」

庄公の手をとつて助け起し母子は抱合つて泣いた。梯子を上つて穴から出ると庄公は武姜を助けて車に乗せ自ら手綱をとつて宮殿に帰つた。

人々は庄公母子が連れ立って帰つてきたのでみな喜び庄公の孝行を讃えた。これみな潁考叔の仲裁の結果である。胡曾先生は詠う。

母と絶縁の黄泉の誓 世間に躊躇し地下道を掘る

考叔の奇計なかりせば 庄公如何ぞ母と相見えん

庄公は、考叔が母武姜の愛を取戻す橋渡しをした功を嘉し、大夫の爵位を与えて公孫閔と共に兵権を掌握させた。

ところで、共叔の子公孫滑は、衛軍を借りに行つたが途中で共叔が殺

された事を聞き、衛に亡命して伯父が弟を殺し母親を監禁したと訴えた。

衛桓公は、

「鄭伯は無道である、公孫のために鄭を討つべきだ」

と言つて鄭に出兵した。

この勝負如何なりますか、それは次回のお楽しみ。

第五回

周王 虢公を龍信し 周鄭人質を交換

魯・宋 君位奪奪の衛を援け 鄭を攻める

鄭庄公は、公孫滑が挙兵して攻めて来ていると聞き、家臣たちを集め対策を諮問した。

「草を刈つても根を残せば春に芽を出します。滑など死んでおればよかったのに。祖母を助けるなどとでたらめな口実を言つて衛の軍を動かしてしまいました。衛侯は其叔が内乱を起して鄭を襲撃したという事を知らないから滑を援助しようと思兵したのです。衛侯に手紙を書いてそこを説明すれば必ず撤兵するはず。滑が孤軍になれば戦わずして捕えられます」

公孫呂がそう提言すると庄公はそれに同意して早速衛侯に手紙を書いて使者を立てた。手紙の内容は次の通り。

こせい 寤生 衛侯殿下に書を奉ります。当家は不孝にも骨肉相争い、隣国に誠に恥しい次第であります。兄弟の情により叔段を京城に封じたのですが、母姜氏の寵愛を恃み反乱を起し恭順の気持ちがありませんでしたので、わたくしは先祖より守られてきたものを大切に考へ、彼を除かざるを得ませんでした。姜氏は叔段を溺愛し不安を内包しておりましたので潁城へ移動願つておりましたが、現在は帰つていただき孝養を尽くしております。逆臣滑は父親の非を隠し貴国へ亡命し、貴侯は彼の不義を存じなく軍を差遣になりましたが、以上の通り我々には咎はございませんので、貴侯と共に乱賊を誅し、これまどおり緊密な誼が続けられることを強く希望いたします。

かんこう 衛桓公は読み終わつて非常に驚いた。

「叔段は不義による自滅だったのか。滑のために兵を出してやったが、これは逆に悪に加担してしまつたようだな」

桓公はさつそく使者を出して撤兵を命じた。

使者が届く前に滑は手薄を突いて廩延を攻め落としていた。鄭庄公は怒つて、大夫高渠弥に命じて二百乗の戦車をつけて廩延を攻めた。その時はすでに衛兵は撤兵していたので、滑の兵だけではとてもかなわず廩延を捨てて衛へ逃げて行つた。公子呂は勝手に乗つて衛の郊外まで追撃した。

衛の桓公は家臣を集め、戦うべきか守るべきかを問うた。

「水が出れば士をもち、兵が来れば迎え撃つ、何を考えることがありましようか」

と公子州吁がいうと、大夫石碚は反対した。

「それはなりません。鄭軍がやつてきたのは我々が逆賊滑を助けたからです。鄭伯が文書で申し出てきたのに文書で返答しなかったのですからこれは謝罪すべきです。そうすれば徒に兵を動かすことなく鄭軍を撤兵させることができます」

「卿の言うとおりだ」

桓公は同意し、石碚はすぐ鄭伯に手紙を書いた。

完、周王の卿士鄭侯に申し上げます。わたくしは公孫滑の不実の申し分を真に受けて誤つて理解いたしておりました。貴国が弟君を討ち母君を監禁し、滑殿を追放したという話でしたので兵を出し

完 衛桓公の名 手紙では自分を名で呼ぶ。上記鄭伯手紙でも寤生を使用

たのでありますが、貴簡を拝読致しまして京城の太叔殿の謀反であつた事がはつきりいたしました。後悔で言葉もなく、即日麋延から撤兵いたしました。もしご承知いただけましたら滑殿を捕えてお届けし、以前の友好関係を修復いたしたいと考えております。何とぞご賢察のほどよろしくお願い申し上げます。

庄公は書簡を読んで

「衛が誤りを認めたのであればこれ以上何も言うことはない」と了解した。国母姜氏は庄公が衛討伐軍を出すという事を聞いて、公孫滑が殺され太叔の子孫が絶えることを心配し、庄公に頼んだ。

「先君武公の孫ということに免じて、滑の命を助けてやっておくれ」庄公はすでに頼に放逐したため姜氏の面目をつぶしてしまつた事でもあり、滑は孤立無援で何もできない状態だったので、次のように衛侯に返書を書き、高渠弥の軍を撤兵させた。

お申し出に随ひ撤兵いたし、円満に友好関係を修復いたしたく存じます。公孫滑はその罪赦し難きものがありますが、わが弟のただ一人の子でありますので、願わくは貴国にお留めいただき、我が弟段の子孫が存続できるようご高配のほどお願い申し上げます。

公孫滑が永く衛国で過ごし一生を終えた事は後日譚である。

さて、周平王は鄭庄公が自国の事で忙しく、長く参内しないので、常々不満に感じていた。折りもおり、気の合う虢公忌父がたずねて来たので、

「鄭伯父子は長年朝政を司つて来たのにこのところ長らく参内していない。朕は貴殿に政務の代理をやつて貰いたい思つていたんだ、是非引き受けて欲しい」

といった。虢公はそれを聞くと叩頭して、

「鄭伯が参内しないのはきつと国元で何かが有つたのでしょうか。わたしが彼に代つて朝政を行ないましたら鄭伯はわたしを恨むだけでなく王に対しても恐らく不満を抱くでしょう。この件はどうしても承諾致しかねます」

と平王が再三頼んだが、虢公はその度に拒んで結局承諾しないで本国へ帰つてしまつた。

鄭庄公は自分は国元においても都に腹心を置いていたので、朝廷内の事はすぐに鄭庄公に報告されるようになっていた。だから今日平王が虢公に政務を分掌させようとしたことはすぐに庄公の耳に入っている。庄公はその日の内に馬車に乗つて洛陽へ行き平王に謁見した。

「臣は聖恩を蒙り父子相次いで朝政を司つて参りました。しかし浅学非才で、この要職を全うする能力がございません。卿士の爵位を返上申し上げ、分に応じて封地を守つていきたいと存じますのでどうかお許し願います」

「卿が長く政務を執つてくれなかつたから、朕はずっと気になつていたので。卿が帰つて来てくれたら魚が水を得たようにうれしく思う。どうしてそのようなことを言われるのか」

「国元で弟の謀反事件がありまして、大変長期間執務に來られませんでした。国元の事は概ね片付きましたので、急いで上京して参りました。途中で、王が朝政を虢公にお任せなさろうとのお考えでおられるという事をお聞きしました。能力が虢公の万分の一にも及ばないのに位に執着いたしましたは王に申し訳ないことでございます」

鄭庄公に虢公の件を持ち出されると平王はばつが悪く顔を赤くして弁解した。

「長い間卿の参内がなかったのは、国元で問題が有ったからだという事はわかつていた。だから一時的に卿の代りをさせて卿の参内を待つつもりで虢公に出馬を要請したのだが、虢公はどうしても承知せず既に国へ帰ってしまったらしい。どうか気を悪くしないで欲しい」

庄公は執拗に、

「そもそも周朝の政は王の権限ですから、誰を使うか全く王の専権事項です。虢公の王佐の才は非常に優れていますから彼に卿士の位を譲るべきです。そうでなければ臣は権勢を貪って進退の時を知らない小人と見られてしまいます。どうかお察し願います」

「卿の父上ならびにあなた自身も国家に大功があるので相繼いで大政を担当していただき、四十年以上君臣納得してきたではないですか。どうも、あなたはこの平王を信じてくれないようですね。じゃ、こうしたらどうでしょう、太子狐を鄭国へ人質に出そう。それならいいでしょう」

「政を担当するか否かは臣下が自分で決める事です、何処に天子が臣下に質を出すという法がありますよ。それでは世の人は臣が天子を脅迫していると思うでしょう、その罪は万死にあたります」

「そうではない、卿の国はよく治まっているので、太子に鄭国の雰囲気を見学させたいのです。同時に目下の疑念を晴らしたい。固辞するということはまだ朕を責めているという事です」

平王がどう言おうと、庄公はどうしても承知しない。大臣たちは両者が膠着状態になっているのを見て、調停に入った。

「臣たちが話合った結果、大王が質を出しにしなければ鄭伯の疑いを解けないという事でございましたら、王だけが質を出すのでは鄭伯は臣下の義に悖る事になりますので、質を交換なされば双方円く収まるのではないでしようか」

「それはいい考えだ」

と平王が承知したので、庄公は先に世子忽を呼び寄せ周の質とし平王の恩に感謝した。周の太子狐も鄭の質となった。史家はこの周鄭の質交換を君臣の綱紀が廢れてしまったあらわれと見ている。詩に曰く。

君臣は本来無私なるべし 互いに疑うは笑止千万

質交換は商に外ならず 王の綱紀は衰微せり

人質交換した後は鄭公は洛陽に留まって平王を補佐しその後は無事平安が続き、平王は在位五十一年で崩じられた。

その後、鄭伯と周公黒肩が共同で朝政を担当した。鄭公は忽を鄭国へ歸し、また太子狐は洛陽に迎えられ王位を継いだ。しかし父王の死を悼み、病気の枕元に伺候できず納棺にも立ち会えなかったことを悔み悲嘆に暮れて一年後に亡くなった。太子狐が亡くなったのでその子姫林が繼位して周桓王となった。諸侯は揃ってお悔やみと新天子の就任のお祝いにやってきた。なかでも虢公忌父が一番に駆けつけ、しかもその場の振舞いがいちいち礼に当たっていたので、人々は彼に好意を感じていた。

桓王は父親は鄭国へ人質で行ったために死んだと思ひ込んでおり、しかも鄭伯が長く朝政を独断していると考え、鄭伯を疑うと共に危険に感じてそつと周公黒肩に相談をもちかけた。

「鄭伯は以前周の太子を質に取っていたから朕を軽視してるに違いない。このままじゃまずい。恭順な虢公に政權を移したいが卿はどう思うかね」

「鄭伯は苛刻で慈しみが少なく忠実な臣とは申せませんが、洛陽への遷都には晋、鄭の功労甚大なものがありました。改元の日に合わせて鄭の政權を奪い、他の者に交代するのは鄭伯を怒らせ大変なことになる恐れがありますので慎重に取り扱われますよう」

「朕は坐して彼の言いなりになる事はできない。もう決めたぞ」

翌日、桓王は早く朝廷に出て鄭伯に言った。

「朕は大臣たちの庄迫には屈しない事にした。卿は先王の臣ですからどうぞ帰国して休んで下さい」

「臣も以前より辞任を考えておりました。直ちにお暇を頂きます」

庄公はかんかんになって退出した。

「あの小僧、全く良心のかけらもなく、補佐のし甲斐のないやつだ」
そう言つて即日帰国してしまつた。世子忽は家臣たちを連れて城を出て迎えた。どうして急に帰国したのかと聞くので、桓王から罷免された話をするとなみな不満を漏らした。高渠弥は、

「我が君主は二代にわたつて周を輔佐しその功労は甚大だし、しかも前太子がわが国にいた時に礼を欠いたというわけでもないのに、我が君を罷免して虢公を用いるとはとんでもない不義ではないですか。出兵して周城を攻め落し今の王を廃して別の賢王を立てるべきです。そうすれば天下の諸侯はみな鄭に一目置いていますから覇業をなす事ができます」といきまいた。しかし頤考叔がこれに反論を称えた。

「それはなりません。君臣の倫理は母子と同じです。殿はご母堂さえお赦しなれなかったほどですからこの恨みは我慢し難いかも知れませんが、一年ほど我慢をして周天子にお会いになれば周王もきつと後悔されるでしょう。一時の怒りで先公（伯父）の大義に殉じられた功績に傷をつけられる事になりませんよう」

祭足が二人の考えを合わせて、

「わたしはお二人の意見の中を取つたらどうかと思います。兵を率いて周の国境あたりへ行つて凶作を理由に温、洛あたりで軍隊に収獲物を略奪させるのです。周王が使者をよこして文句を言つたら引き上げますし、何も言わなければそのあと殿が入朝なさることにしても遅くはありません」

庄公は祭足の提案を認め彼に軍馬一隊を預け様子をみた。

祭足は小隊を率い周に隣接する小国温へやつてきた。

「我が国は今年災害にあつて、民は食べるものが無く餓えています。特別に穀物千鍾（一鍾は50斗）ほどお譲り願いたい」と申し入れた。温国の大夫は桓王の指示を受けていないといつて断つた。

「ちようどこの大麦小麦は実つており全部食料になる。許可なんか要らん、さあみんなで刈り取れ」

そう言つて兵士たちに鎌を持たせて麦畑を手分けして刈り取らせ軍に満載して帰った。祭足が自ら精兵を率いて彼らの後詰めをしているのを見て、温の大夫は鄭兵が強いことを知っていたので我慢するしかなくなつた。

さいとく

祭足は兵馬を率いて温の境界で三ヶ月あまりいて、今度は成周洛陽に移った。秋七月中旬で田の早稲はもう実っていた。兵を商人に扮装させて各村に車を隠し三更時分夜中の十二時前後に一斉に稲を刈り始め、

五番太鼓(五更に鳴らした太鼓が鳴るころにはきれいさつぱり刈取ってしまった。成周郊外には稲は全く無くなった。その頃になって成周の守将が気付き軍隊を出したが、鄭兵はもう引上げていなかった。

せいしゅう

温、成周と一緒に文書で都の桓王に鄭兵が麦や米を勝手に刈り取って盗んで行ったことを報告した。桓王は怒ってすぐにも問罪の兵を挙げようとしたが、周公黒肩は王を諫止して言った。

せいしゅう

「鄭の祭足が米や麦を盗んで刈取りはしましたが、それは辺境の小事で鄭伯の知らない事かもしれません。小事を荒立てて友好関係を壊すことはまずいことです。もし鄭伯が不安に思えば必ず自ら謝罪に来て修好を図ろうとするはずです」

周公の言う事も道理なので境界あたりの防備を固め他国兵の侵入に備えた。その後米麦刈取りの件は問題にされなかった。

かんおう

鄭公は、桓王が全く鄭を責めようとしていないので、内心忸怩たるものがあり、結局入朝し関係改善することにした。ちやうど出発しようとしていた所へ突然、斉国の使者が来たとの連絡が入った。使者は鄭伯と石門(現山東阜陽)で会いたいと言う齊僖公の命を伝えて来たのである。

せいしゅう

庄公も斉国と同盟を結びたいと思っていたので直ちに石門へ行く約束をした。二人は血をすすり兄弟の契りを交わし有事には助け合うという盟約を交わした(この齊鄭安全保障条約を石門の盟約という)。

せいしゅう

「ところで世子忽殿は結婚しているのですか」

と僖公が聞いた。庄公が未だだと答えると、

「わたしに娘がいます。年は未だ幼いのですが非常にしつかりしているのです。もしお嫌でなければ年頃になるまでお待ちいただけたらと思います」

と言う。庄公は快諾して礼を言つて帰国し世子にこの話をした。

「結婚は同等のものが結ばれるべきです。鄭は小国斉は大国でとても釣り合いません。身分違いの結婚話は辞退いたします」

「これは斉侯から言い出した話なんだ、斉と縁組しておけば有事の際には頼りになる。どうして断るのだ」

「男子志を立てれば姻戚などあてにしません」

庄公はその意気喜びそれ以上は強要しなかった。その後、斉の使者が来て鄭の世子は結婚を望んでいないということを聞きそれを僖公に報告すると、

「世子は遠慮しているのだろう。娘は幼いから大きくなってからもう一度話をしよう」

僖公は嘆息してそう言った。女房の実家に頼ろうとしないで結婚話を断つた忽を褒め称えた後人の詩がある。

婚姻は両家相釣り合うべし 家格の大小当然酌量すべし

笑止なり低俗なる高望み 金をはたいて名を買うは

ある日鄭庄公が大臣たちと周の件で話合っていた時、突然衛桓公の計報が届いた。使者に詰問して公子州吁が君主を殺したことがわかり、庄公は彼らに注意した。

かんおう

ある日鄭庄公が大臣たちと周の件で話合っていた時、突然衛桓公の計報が届いた。使者に詰問して公子州吁が君主を殺したことがわかり、庄公は彼らに注意した。

かんおう

ある日鄭庄公が大臣たちと周の件で話合っていた時、突然衛桓公の計報が届いた。使者に詰問して公子州吁が君主を殺したことがわかり、庄公は彼らに注意した。

かんおう

ある日鄭庄公が大臣たちと周の件で話合っていた時、突然衛桓公の計報が届いた。使者に詰問して公子州吁が君主を殺したことがわかり、庄公は彼らに注意した。

かんおう

ある日鄭庄公が大臣たちと周の件で話合っていた時、突然衛桓公の計報が届いた。使者に詰問して公子州吁が君主を殺したことがわかり、庄公は彼らに注意した。

かんおう

ある日鄭庄公が大臣たちと周の件で話合っていた時、突然衛桓公の計報が届いた。使者に詰問して公子州吁が君主を殺したことがわかり、庄公は彼らに注意した。

かんおう

ある日鄭庄公が大臣たちと周の件で話合っていた時、突然衛桓公の計報が届いた。使者に詰問して公子州吁が君主を殺したことがわかり、庄公は彼らに注意した。

かんおう

ある日鄭庄公が大臣たちと周の件で話合っていた時、突然衛桓公の計報が届いた。使者に詰問して公子州吁が君主を殺したことがわかり、庄公は彼らに注意した。

かんおう

「わが国にもうすぐ兵が向けられるかもしれないぞ」

「どうしてそう思われるのですか」

「州吁は兵を動かすのが好きな男だ。篡奪をやったとすれば軍事力で威を示す必要がある。鄭と衛は元々問題があつたからきつとその矛先を鄭に向けてくるにちがいない。十分に準備しておくように」

州吁が主君を殺した経緯はこうである。

元々衛庄公の夫人は齊の東宮得臣の妹で、名を庄姜といい美人だつたが子がなかつた。次の妃は陳国の女性で厲嬀（れいぎ）といい彼女にも子供がいなかつたが、戴嬀（たいぎ）という妹がいて一緒に衛に嫁いできて男の子を二人生んでいる。一人は完、もう一人は晋。庄姜は嫉妬心のない人で、完を自分の子として育て、また宮女を庄公に薦めた。庄公はその女を大愛氣（たいき）に入り州吁を生んだ。州吁は性格が粗暴で武術を好み兵談（へいたん）が好きであつた。庄公は州吁を溺愛（にやくあい）し我がままを許してきた。

大夫石碏（せきやく）はしばしば庄公を諫めて、

「愛する子には規則の遵守を教えて邪惡に走らないようにしなければなりません。寵愛が過ぎると必ず傲慢な性格になり傲慢が過ぎれば必ず乱（らん）が起ります。殿が州吁殿に継位なさるおつもりでしたら世子（せいし）に立てるべきです。そうなさらないのですしたら心配が現実にならないよう少し押えられるべきでございましょう」

と言つたが庄公は聞かなかつた。

石碏の子石厚（せきこう）は州吁と気が合つてしばしば車を並べて狩に出かけ民家で騒ぎを起している。石碏は厚を叱つて、鞭打ち五十回を課し空き部屋に拘禁して出入りを許さなかつたが、厚は塀を越えて逃げ出し州吁の屋敷に逃げ込んだ。州吁と一緒に食事をするようになり、そのまま州吁の

邸に住み着いてしまった。家にも帰らず石碏も手の打ちようが無くなつてしまった。

庄公が亡くなつた後、完が位を継ぎ衛桓公（かんこう）となつた。しかし桓公は性格が懦弱（けんろう）だつたので、石碏は落胆して年を理由に辞職し朝政から身を引いてしまった。州吁は益々遣りたい放題で憚ることなく、いつも石厚と君位の篡奪を話し合っていた。ちやうどその頃平王が崩御され、桓王（かんおう）が即位したという知らせが届いたので、衛桓公は平王のお悔やみと桓王の即位の祝いのため周に行くことにした。

「大事決行の時が参りました。明日主君は周へ出かけます。公子は西門で壮行の宴を張つて武装兵五百人ほどを門外に隠しておき、酒が二三度回つたところで懷の剣で一突きにして下さい。従わない者はその場で斬つてしまえば諸侯の位は濡れ手に粟です」

と石厚が提言すると州吁は喜んで、石厚に壮士五百人を連れて西門外に隠れて待機するよう指示した。州吁は自ら桓公を行在所に迎え宴が始まつた。州吁は腰をかがめて酒を注いだ。

「兄上、遠路（えんろ）苦勞さまでです。簡単ですが壮行会を準備いたしました」
「そなたに氣を使わせたな。今回は一月余りで帰つてくるがその間しばらくそなたに摂政を頼む。十分注意しておくれ」

「兄上、心配御無用です」

酒が半ば回つたところで州吁は立つて金杯に酒を満たし桓公に勧めた。桓公は一氣に飲み干し、満杯にして州吁に返杯した。州吁は両手を差し伸べわざと受け損なつて、杯を床に落とした。州吁は慌てて杯を拾上げ自分で洗つた。桓公はそれがわざとであるとは知らず改めて杯を満たして州吁に差出そうとした。州吁はこの隙にさつと桓公の背後に回り

短剣を抜き背後から刺した。刃は胸を突き抜け即死した。時に周桓王元年（紀元前七〇年）三月戊申であつた。

主君に随行してきた家臣たちは日ごろから州吁の武勇のすばさを知っているし、石厚が五百名の武装兵で公館を包圍しているのを見て抵抗することができず投降するしかなかった。桓公は急死という事にして納棺埋葬を終え、州吁が君主に立ち、石厚は上大夫になった。桓公の弟晋は邢国へ逃げて行つた。史家は衛庄公が州吁を溺愛して乱を招いたことを嘆じて次のような詩にしている

子弟の教育須らく義によるべし 驕慢許せば大過は必然
手を束ね弑逆を許せし衛公は 段を討ちし情薄き鄭公に如かず

（弑逆：君主を殺害する事）

州吁が即位して三日もすると兄殺しは四方に伝わり、外部が騒がしくなつてきた。そこで、近隣国を攻めて武威を示し目を外に向けさせ国内を鎮めようと考え、石厚を呼出しどこを攻めるかを相談した。

「隣国は何処も憎み合っている国はありません。ただ鄭は、昔公孫滑の乱の時、わが国に攻めて来て先君庄公が罪を認めて許してもらつたいきさつがありますが、これはわが国としては恥辱と言えます。殿が出兵なさるのでしたら鄭以外にはないでしょう」

「斉と鄭は石門の軍事同盟がある。鄭を攻めれば必ず斉が救援するはずだ。衛一国だけで二国を相手にするのは難しいのではないか」

「現在異姓の国としては公爵の宋が有力です。同姓の国としては魯が叔父と呼ばれ尊敬を受けています。鄭を討つなら宋、魯に使者を送つて援軍を頼み、陳、蔡の軍も合わせて五国が連合すれば心配ありません」

「陳、蔡の小国は以前から周王についている。鄭と周に最近隙間が生じているのを両国は敏感に感じ取っているから、鄭討伐を呼びかければ必ず応じてくるだろう。しかし宋、魯のような大国をどうすれば引張り込むことができるだろうか」

「殿は物事を部分的にしかご覧になっておられません。宋の場合、宋の先公穆公はその兄の宣公から位を譲り受けたので、亡くなる時、兄の恩に報いるために、自分の子の馮にはなく兄の子与夷に位を継承させました（殤公。馮は父を怨み与夷に嫉妬を抱いて鄭に出奔しました。鄭伯はこれを受け入れ、常に馮のために宋に出兵して与夷の位を奪取してやろうと考えていますから、連合軍で鄭を討つということになれば宋もその気になります。魯の場合、魯の国事は公子翬が握っています。兵権は彼の手中にあつて魯君は無きが如しですから、十分な賄賂を渡せば魯軍も動かします」

州吁は大変喜び、魯、陳、蔡二国には即日使者を出したが、宋だけは使者を慎重に選んだ。検討の結果石厚が推薦した甯翊という能弁な者を宋への援兵依頼の使者とした。

甯翊の来意を聞いて宋の殤公は平然と問うた。

「どうして鄭を討たなければならないのですか」

「鄭伯は無道で弟を殺し母親を監禁し、公孫滑はわが国へ亡命してまいりました。鄭はそれを赦さず弊国に攻めて来たので、先君は鄭の力を恐れ謝つて屈服いたしました。わが君は先君の恥を雪ぐようと思い、同じ

ように鄭に恨みを持つておられる貴国の援助をお願いしたいと考えている次第であります」

「鄭国とは昔から恨みも仇ありません。どうして我われと鄭の間に遺恨があるのですか」

「どうかお人払いをお願いいたします」

殤公は側近たちを下がらせた。

「どういふことですか」

「君侯はみ位をどなたからお受けになれましたか」

「叔父の穆公からだ」

「父君が亡くなればその子が継ぐというのが昔からの常理です。穆公は堯舜の心がございましたが、その公子馮は位を継げなかつた恨みを持つて隣国に駆け込みました。いつときも宋の事を忘れたことは無いでしょう。鄭は公子馮を受け入れ非常に親密になっています。ひとたび馮を擁して軍を出せば、貴国の人々は穆公の恩義を感じその子を使い、その結果あなたは内外に敵を持たれる事になって君侯のみ位も危うくなりましょう。今回の挙兵は鄭の非を討つという名目ですが実は君侯の心中の心配を除くことにもなります。君侯がそのお考えになれば弊国は魯、陳、蔡三国ともども連合して一斉に力を合わせ鄭を亡ぼすこともできます」

殤公も元来公子馮のことが心配ではあったので、この話はまさにその琴線に触れることになり、結局出兵を承諾させることになった。

堯舜 心伝説 玉堯舜は王位継承に際し世襲はなく王として最も適当な有徳者に禪譲した

大司馬孔父嘉は殷湯王の後裔で正直無私の人である。彼は殤公が衛の話を乗って挙兵することを強く諫めた。

「衛の使者の話を聞いてはなりません。鄭伯が弟を殺し母親を監禁したのを罪とするのでしたら、衛州吁が兄を殺し君位を篡奪したというのはどういふ事になるのでしょうか」

殤公はすでに齊甥に承諾してしまっていたので、結局孔父嘉(名は嘉)は「孔父は子」の諫めを聞かず期日を決めて出兵した。

魯の公子翬は衛の手厚い賄賂を受取って、隠公の決裁も得ず大軍を動かしてやって来た。陳、蔡が期日までにやってきたのは言うまでもない。宋公が爵位が上なので盟主に推された。衛は石厚が先鋒となり、州吁が後に続き、食料飼料を十分に用意して四国の兵をねぎらった。

五国は合わせて千三百乗の戦車で、鄭の東門を水も漏漏らさぬ状態に包囲した。

鄭庄公は大臣たちに考えを聞いた。あるものは主戦、あるものは講和、議論は紛々として定まらない。

庄公は笑いながら、

「諸君には妙案はないようだ。州吁は兄を殺し位を篡奪したばかりなので民心は離れている。だから昔の恨みを口実に四国から兵を借りて我われを攻め、威勢を見せつけて国民の耳をふさぐというわけだ。魯は公子翬が衛の賄賂に目くらんで乗ってきた事で、君主の考えではないし、陳、蔡も我われには何の恨みも無く、どこも必ずしも戦意があるとはいえない。宋だけは公子馮が我が方にいるからきつと本気で衛を助

湯王 夏の桀王を倒し商殷王朝を建国した初代の王

けようとしていると思われる。だから公子馮には長葛へ行つて貰おう。そうすれば宋の軍は引き上げるだろう。そのあと子封（公子呂）に歩兵五百をつけて東門を出て衛と一戦させて負けたふりをして逃げればいい。州吁は勝利と言う名目をして面目を保ちたいだけなんだから彼に勝たせてやれば彼の目的は達する。国元が未だ不安定なのだからいつまでも軍隊を留めておくわけにはいかず、さつさと撤兵するだろう。衛の大夫石碯は忠義の人のようだから、近いうちにきつと衛に何かが起こると思う。州吁は自分の事で手一杯でこっちに手を掛けている暇など無いと思うよ」

と言つて、大夫瑕叔盈に一軍を預け公子馮を護つて長葛へ移らせて宋へ使者を送つた。

「公子馮はわが国へ逃げてきましたので誅殺するに忍びず今日に至つています。今は長葛で罪に伏しておりますので君侯の考えにお任せいたします」

と言う鄭の使者の話を聞き、宋殤公は、思つた通り長葛を包囲するため兵を移動した。蔡、陳、魯三国の君主は宋兵の移動を見て撤兵と思ひ、自分たちも引き揚げる気持ちになつた。その時公子呂が東門を出て衛兵に挑みかかつたと報告があつたが、三国はとりでに登つて袖に手を入れ傍観していた。

一方、石厚は公子呂と戦つたが、数合も打ち合わない内に呂は敗勢を装つて矛を引きずつて逃げ出した。石厚は東門まで追撃し、呂が城門に逃げ込んだので石厚は東門外の稲を全て刈り尽し兵をねぎらつて撤兵を伝えた（東門の役 〇七一九年）。

「まだ大勝したわけではないのにどうしてもう帰るのかね」

州吁は変に思つてたずねた。石厚は人払いをして今回の出師のわけを説明すると州吁は納得して大変喜んだ。

さて石厚はどんな説明をしたのであろうか、それは次回のお楽しみ。

第六回

衛石碣 大義によりわが子を誅殺

鄭庄公 王命と偽り宋を討つ

石厚は鄭兵との一戦に勝つとすぐに撤兵を命じた。將軍たちはその意図がつかめず、

「我が軍は勝勢に乗って攻め込もうと思っていましたのに、どうして退却するのですか」
と一斉に州吁に訊ねた。州吁も変に思つて石厚を呼んで聞いた。

「お話がごさいます、お人払いをお願いいたします」
州吁は左右の者を下がらせた。

「鄭兵は元々強くしかも鄭君は周朝の卿士です。今とりあえず一戦に勝ちを収めましたのでこれで威厳を保つのに十分です。殿は即位されたばかりで国情は未だ固まっています。長く国を空けると内変が心配です」

「よく考えているな、わしはそこまでは考えつかなかったよ」

まもなく魯陳蔡三国が揃つて戦勝祝いに來て帰国を申し出、包圍を解いて帰つて行つた。包圍して解くまでたった五日であつた。石厚は勝を誇り三軍に一斉に凱歌を歌わせ、州吁を擁して意氣揚々と帰国した。それを聞いた人々は次のように歌っている。

一雄倒れ一雄興る 歌舞は刀兵に代わり
太平はいつの世ぞ 遺憾なり洛陽に力なし

三軍 周代の兵制で周天子は六軍を有し諸侯は規模により三軍から一軍を有した
という 当時の一軍は1500の軍隊

「国はまた落ち着かないな。いい方策はないか」

「臣の父碣は官を辞する前は上卿で人々の信頼を得ていました。父に入朝してもらつて一緒に国政に当たれば、殿の君位も安定するのではないかと存じます」

州吁は白璧一對と白米五百鍾（1鍾は80斗）を持たせて石碣を訪ね入朝の件を相談させたが、石碣は病氣を理由に固辞した。

「そなたの父上は入朝を承諾しないようだね。わしが行つて相談してみようと思うがどうかね」

「殿がいらつしやつても、お会いしないかもしれません。臣が君命を奉じてやつてみましょう」

石厚は家に帰つて父親に会い、新君の敬慕の気持ちを伝えた。

「民心がまだ治まっていなため政局が安定しないんです。父上にお出ましたいただいてご意見をお聞かせいただきたいのです。どうかお願いいたします」

「諸侯の即位は周王の許可を得て初めて正式になるものなのだ。新君が周王に拝謁して桓王から車馬と衣服を賜わり、君主として認められれば、国民は何も不満を言わなくなるはずだ」

「なるほど、父上のおっしゃる通りですね。でも、いきなり入朝すれば周王はきつと疑念を持たれるでしょう。事前に誰かに頼んで周王に話を通してお願いする必要がありますね」

「陳侯は忠順で朝見を欠かさないから周王は彼を大変信頼している。それに陳国とわが国は最近借兵したほどの親しい仲だ。新君が自ら陳侯を訪ねて桓王に取次ぎを頼み、その後拝謁を願い出れば問題はなかつた」

石厚が父石碯の話を州吁に報告すると、州吁は大喜びですぐに玉や絹布などの贈物を用意して上大夫石厚に護衛を命じ陳へ出発した。

石碯と陳の大夫子鍼は古くからの親友である。石碯は指を切つて子鍼宛に血で密書をしたため、腹心に届けさせ陳桓公への取次を頼んだ。

外臣石碯百拜し陳侯殿下に書を呈します。衛国は小国ながら重大な災難が降りかかり、不幸にも弑逆事件が発生いたしました。これは君主の弟州吁の所業であります。実は臣の子厚がこの悪事を幫助したものであります。この二人を誅殺しなければ乱臣賊子が天下にはびこることになります。臣は毫碌してこれを抑える力なく、このままでは先公に申し訳が立ちません。間もなく二人の逆臣が車を連ねて貴国に入朝致すことになっておりますが、これは臣の謀計であります。願わくは、貴国で逮捕処罰願ひ、以つて君臣の綱紀を正していただければ幸いに存じます。これは一人弊国のためのみならず広く天下のためでもあります。

「この件どうするかね」

陳桓公は密書を見て子鍼に聞いた。

「衛の不幸は陳の不幸でもあります。今彼らがこちらに向かつているとすれば、自ら死地に赴いているのです、やつてしまふべきです」

「よし」

直ちに州吁逮捕の準備にかかった。

一方、州吁と石厚は陳に着いたが、まだ石碯の謀計を知らず、君臣は胸を張つて入国した。

陳侯は公子佗に彼らを城外に迎えて賓館に休ませ、翌日太廟で会見すると伝えた。州吁は陳侯の殷懃な扱いに喜びを隠せなかった。

翌日、大廟に松明を焚き陳桓公が中央に立ち、左に接待役、右に宰相と整然と並んでいた。石厚が一足早く太廟に着き、ふと入口に白い看板が立っているのが目に付いた。

『為臣不忠、為子不幸者、不許入廟』（不忠、不孝なる者廟堂に入るべからずと書かれている）。

石厚には後ろめたいことがあるので、これを見て驚いた。

「これはどういうことですか」

と聞くと子鍼は、

「これはわが陳国の先君の遺訓です。我が主君はこれを決して忘れないようにしています」

と言つたので石厚は気にしなかった。

間もなく州吁の車も着いた。石厚が案内して車を降り客の位置に立つた。接待役が廟堂へ案内した。州吁が身をかがめて挨拶をしようとした時、子鍼が陳侯の側で大声で叫んだ。

「周の天子のご命令だ、主殺しの大罪人州吁と石厚両人を取り押えよ、その他の者は赦す」

子鍼の大声が終わるが早い、もう州吁は縛り上げられていた。石厚は急いで佩剣を抜こうとしたが慌てていて鞘が抜けない。素手で格闘して二人を倒したが廟堂の左右に伏せていた武装兵が一斉に飛び出してきて石厚を縛り上げた。

州吁に随つて来た兵たちは廟堂の外でこれを見ていたが、子鍼が石碯の手紙を読み上げると、厚が捕えられたのは、人徳のある石碯の考えで、陳の手を借りた天理なればしかたなしとして帰つて行つた。史官は詩の中で嘆じている。

州吁昔日桓公餞の宴 今日陳国で同難に遭う

君位在位は幾日ぞ 正に天理は蒼天に質されたり

陳侯は州吁と石厚を死刑にすべしと思つたが、大臣たちが

「石厚は石碯殿の実子です。石碯殿の気持ちがよく分かりませんから、やはり衛国の人に来てもらつて処置を決めてもらつた方がいいのではないでしょうか」

と言うのでその意見に従い、州吁は濮邑（現安徽省亳縣）に石厚はこの地に二人が話し合えないように別々に監禁し、大至急衛に使者を出して石碯に報告した。

石碯は引退後外出したことがなかったが、陳侯の使者が来たというのですぐに参内し、同時に大臣たちに朝廷に集まるよう指示した。彼らは何事かと驚いた。石碯が到着すると百官を集めさつそく陳侯の書簡を發表した。人々はそこで州吁、石厚兩人がすでに陳侯の手で捕えられ、その処置を協議するために衛の大夫が来るのを待っているという事情がわかった。

「これは国家の大事ですから全て国老にお任せいたします」と全員声を揃えて言つた。

「二人の謀反の罪は赦すべきでなく法に照らして処断し先祖の靈にお詫びをしなければなりません。この件でどなたか陳国へ行つて下さる方はいませんか」

「乱臣賊子は捕えて誅すべし！丑不才といえども一片の公憤があります、わたしが参りましょう」
右宰丑が石碯に答えた。

「右宰殿なら適任だ。しかし、首魁の州吁は死刑に決まっていますが、石厚は随従してただけですから減刑すべきではないでしょうか」と大臣たちが言うのと石碯は怒つた。

「州吁の悪行は皆わが息子の計画です。諸君、法を歪めてわたしに配慮するのはやめていただきたい。それなら私が自分で行つて逆臣の息子を斬り捨てて来ます。そうでなければ先祖に会わせる顔がありません」
石碯の家臣獬羊肩がなだめて、

「国老、お怒りになる事はごさいません。わたしが代わつてまいりましょう」

と言うので、石碯は右宰丑を濮邑に遣わし州吁を誅し、獬羊肩を陳へ遣わして石厚を殺すよう指示した。そして同時に邢にいる公子晋を迎える車を用意した。

左丘明は、石碯が大義によつて私情を挟まず子を斬つた崇高な行為を真の臣なりと称え、史書に記し今に伝えている。⁸²

公私両全は難し 涙呑み吾子を誅し君恨を晴したり

世人子を偏愛し道に暗し 名声も寿命も仮初めのものと知るべし

隴西の居士は石碯が前もつて石厚を誅殺しなかつたので、今になって州吁と一緒に殺すことになつてしまつたことを次のように詩にしている。

謀反は吾子も共犯なるが明らかならば 何ゆえ先に除かざる

老臣の深謀配慮が足りずして遂には州吁を誤まらせり

⁸² 左丘明 魯の盲目史官『春秋左氏伝』および『国語』の著者と伝えられる。左氏伝で本件を「石碯は純臣なり。州吁を憎みて子の厚を巻添えにす。『大義親を滅』とはこの事ならん」と評価している。

さて、右宰丑と獬羊肩は陳都へ行き先ず陳桓公に謁見し、乱の元凶排除の札を言つてそれぞれ分かれて担当に就いた。

右宰丑は濮邑へ行き州吁を刑場へ連行した。

「そなたはわしの臣下ではないか、何故わしにこんな事をするのだ」

「衛には先に君主を殺す臣下がいました。わたくしはこれにならつてゐるのです」

州吁はうなだれて刑を受けた。

獬羊肩は陳都で石厚の処刑を行つた。

「死は自業自得だが、死ぬ前に檻車からでも一目父上にお会いしたい」

「わたしはお父上の命であなただを逆臣として誅殺するために参つたのです。お父上のお気持ちをお察しになつて首になつてお会いになつてください」

獬羊肩はそう言つて剣を抜き厚を斬つた。

公子晋は邢から帰つて武公の宮に吁を誅殺した事を報告して、桓公の葬儀をやり直し、即位して宣公となつた。そして石碣に敬意を示し国老とし世襲の卿とした。これより陳、衛は一層親しくなつた。

さて、鄭庄公の方では、五国の軍が解散したので、長葛の様子を見にやろうと思つていたところへ、突然公子馮が長葛から逃げ帰つて来て、宮門外で待つてゐるというのですぐ呼んで事情を聞いてやつた。

「長葛は宋軍に打ち破られ城は占拠され、やつとこちらへ逃げてまいりました。どうかお助けください」

と言つて泣いて訴えた。庄公は慰めて以前の住まいに住ませ十分な食禄を給付してやつた。やがて州吁が右宰丑に濮で殺され、すでに新君が立つたことを聞き庄公は、

「州吁の事は新君には関係ない事で鄭討伐に來た首謀者は宋だ。だからまず宋を討とうと思う」

と言つて大臣たちを集め宋討伐策を求めた。祭足が進言した。

「前回五国連合だつたので、今回宋を討とうとすれば当然四国は連合して来るでしょう。そうなると勝算はありません。むしろ今やるべき策は、先ず陳と講和し次に利を以つて魯と結ぶ事です。魯、陳両国と修好できれば宋は孤立します」

庄公はこの意見に従い陳に使者を送り修好を申し出た。陳侯は承諾する氣はなかつたが公子佗が諫めて言つた。

「隣国との友好は国の宝です。鄭が友好を求めてきたのであれば突っぱねるべきではありません」

「鄭伯は狡くて信用ならないじゃないか。宋、衛などの大国が講和したとは聞いていない。どうしてわが国が先に講和するんだ。これは離間の計（デマ等で仲間割れを謀る。反間の計）だよ。それに以前宋に随いて鄭を攻めたのに今度鄭についたら宋がきつと怒るぞ。鄭を得て宋を失う事で何かいいことが有るかね」

結局鄭の使者には会わなかつた。庄公は陳が講和に応じないと聞いて、陳が頼みにしているのは宋と衛だ。衛は内乱が鎮まつたところで自分の事で手一杯で人のことなど構つていられるはずがない。魯と修好を図り齊、魯軍の連合軍で宋に報復したら次は陳だ」

といきり立つた。祭足さいそくはなだめて、

「わが国は陳より強国なのにこちらから修好を求めたので陳は離間の計だと疑って承諾しなかったのだと思います。国境近くの軍隊に陳の不備を突いて侵攻させて大量の略奪をさせるのです。その後話の上手な使者をやつてその略奪物を返し誠意を見せればおそらく随いてくると思います。陳との間が落着すればおもむろに宋討伐が謀れるでしょう」

と進言すると庄公は納得して、両鄙の責任者に歩兵五千人で巻き狩りを装つて陳の領界に潜入して男女や食料資材等車百台以上の上のものを略奪させた。

陳の国境の役人がこの件を陳桓公かんこうに報告すると、桓公は驚いて群臣を集め対策を協議していたところへ突然門衛から報告があつた。鄭の使者しやうしやうしやく穎考叔えいこうしやくという者が国書を持つて略奪物を返還したいと朝門外で接見を求めているという。

「鄭の使者が来たというがどうしたらいいだろう」

桓公は公子佗たにたずねた。

「使節を出すというのは好意の表れです。今回は断らない方がいいです」

と佗が言うので桓公は穎考叔えいこうしやくを召して接見した。考叔は挨拶を済ませ国書を提出した。

概略は以下の通りである。

廪生りんせい頓首して陳侯殿下に書を呈します。殿下には周王の熱い信頼しんらいがおりになり、小生も王臣を忝かたじけなくくいたしております。兩國は共に周朝の臣であり、当然友好な関係でなければなりません。それは辺境においても同じであります。先回の修好交渉不成立について、

辺境の者が兩國関係を誤解し、勝手に貴国に入り略奪を行なつてしまいました。これを耳にしましてからは寢食の間も落ち着かず、謝罪のために穎考叔えいこうしやくを遣わし略奪した男女と物品をお返し申し上げますので、弊国の罪に対し寛恕くださいますよう伏してお願ひ申し上げます。なおこれを機に、貴兄と兄弟の契りを交わし友好を深めたく、この件も承認下さいますよう心よりお願い申し上げます。

陳侯は読み終わつて、鄭侯の誠意ある修好の意思と見て、穎考叔えいこうしやくを下寧にもてなし、その上公子佗たを兩國の友好を結ぶため鄭国へ遣わした。これによつて、鄭、陳友好関係ができあがつた。

そこで庄公が祭足さいそくにたずねた。

「陳国の問題は解決した、次は宋だがどうするか」

「宋は爵位は高いし国土も広く、王朝も一目置いている国ですから簡単には討伐できません。以前周王に朝見しようと思ひながらも斉侯との石門の会合やら州吁しゅうくの攻撃を受ける事件等があつて延びのびになっておりました。これから周へいかれて周王に朝見なさつて、その後、王命と偽つて斉、魯軍を召集し宋に当たれば、軍に名分が立ちますのでまず負けることはございませぬ」

「卿の案は万全だな」

周桓王は即位してすでに三年になる。庄公は世子忽せしに摂政を命じ、祭足と周へ行き周王に朝見した。ちょうど十一月一日で正月せうげであつた。

正月 古代の王朝の暦は一歩最初月が異なつた。夏の暦は寅の月1月を正月とし、商殷の暦は丑の月12月、周の暦は子の月11月を正月とした。現在の旧暦は夏暦が使われている。

周公黒肩は桓王に鄭に礼を示すように説得しておいたが、桓王は元々鄭を快く思っていないところへ米麦侵奪の件を思い出して怒りがこみ上げていた。

「卿の国の今年の作柄はどうですか」

と、桓王は庄公に聞いた。

「おかげさまで水害も旱魃もなく順調でした」

と庄公が答えると、桓王は皮肉を言った。

「幸いにも豊年だとすれば今年は温邑の麦も成周の米も朕の食い扶持を取っておく事ができますな」

鄭庄公は桓王の言葉に棘を感じ、物も言わずすぐに退出した。桓王も宴会を開かず、贈物もせず、

「少しだが不作の時の足しにせよ」

と人づてに十車分の黍米を庄公に与えた。

庄公は周へ来たことを後悔し祭足に言った。

「卿がわしに入朝を勧めたけれど、周王はあんな態度で恨み言を言つて、黍米でわしを皮肉りおつた。そんなもの受取る気はないがどう言つて断わろうか」

「諸侯が鄭を重視するのは代々卿士として王の側近だからです。王から賜つたものは大小にかかわらず天子の寵愛を表します。殿が受取らなければ周との間がうまくいっていない事を公表することになります。鄭が周と分かれてしまったとなればどうして諸侯が鄭に重きを置きましようか」

二人が話合っていた時、突然周公黒肩が訪ねて来てそつと庄公に綾絹二年分を贈つて、しばらく気軽に話し合つて帰つて行つた。

「周公は何しに来たんだ？」

「周王には二人の子供がいます。長男は沘、次男は克といいます。周王は次男を可愛がつていて周公に補佐させ将来王を継がせようと考えているのです。だから周公は事前にわが国と交流を深めておいて外からの援助を得ようと考えているのです。でもこの織物は役に立ちますよ」

「何に使うのだ」

「鄭が朝見した事を隣国には知らない者はいません。周公が置いていった色絹を十車の上に分けて載せ、外から錦で覆い被せ、都を出る時『天子より賜る』と発表し、そのうえに赤い弓矢を載せて、宋公が長く朝見しないので王命を受けて宋を討伐するというにします。この列国への召集命令に従わないものは王命に背いたことになり、大変なことになるから諸侯は必ず従います。そうなれば宋がいくら大国と言つても王命を奉じた軍に反抗はできないでしょう」

「卿は本当に名策士だ。わかつたそなたの策に従おう」

隴西の居士は詩にうたっている。

綾絹黍米は不満だが、証拠無くして何ぞ王命を騙れよう
畢竟虚名であれ衆は動くもの 睢陽將に戦場ならんとす

(睢陽 睢水の北すなわち宋都商丘)

庄公は周を出ると、道々王命であることを訴えながら宋公の不忠の罪を宣伝し、聞く者はみなそれを信じた。この話は宋にも聞こえてきた。宋殤公は驚き大変心配して、衛宣公に密使を送つた。宣公は齊僖公と一緒に、宋、鄭両国を和解させようと目取りを決め、瓦屋(現河南省温県)で盟約を交わして過去の恨みの解消に尽力した。宋殤公は衛に金を使つ

て事前に犬丘^{けんきゅう}で鄭について話合い一緒に瓦屋へ行つた。齊僖公も期日にやつてきたが結局鄭庄公は来なかった。

「鄭伯が来ないので和議は失敗だな」

と言つて齊侯が帰ろうとしたので、宋公は強引に引きとめ同盟を結ぼうとした。齊侯は外向きには承知しながら本根は傍観であつた。ただ宋と衛は長い付き合いなので互いに協力を誓つて分かれた（これを瓦屋の会盟^{かいめい}という）。

この頃、周桓王は鄭伯の行政権を取上げ虢公忌父に代えようと考えていた。周公黑肩^{こくけん}は強く諫めて、忌父を右卿士にして国政を任せることにし、鄭伯は名目だけの左卿士にした。庄公はこれを聞いて、「周王はわしの爵位を取上げることができないようだな」と笑つて言つた。その後齊、宋が同盟を結んだと聞いて祭足に相談した。

「齊、宋は元来親交があるわけではなく、衛侯が間に立つてやつた事で同盟とはいっても本心ではありません。齊、魯に王命を流し、魯侯に齊侯と一緒に宋討伐に協力するように言えば、魯と齊は隣組みだし何代も婚姻関係もあるので魯の話に齊はいやとは言いません。蔡、衛、邾、許の諸国も檄が飛んで呼び出しがあれば、応じなければ討たれる恐れがあるから必ず協力いたします」

瓦屋の会盟^{かいめい} 春秋左氏伝では齊侯とりなしにより会盟が成功したとある。東門の役以降いざこざを水に流し、礼になつてゐるという。この会盟は春秋時代の特徵である諸侯会盟の濫觴^{らんさう}（しやう）とされいる。即ち周の權力が衰へ諸侯間の問題を、実力主義^{じつりきしぎ}はあるが相互の話し合ひで協定する新たな道が開かれたとする。

（竹内照夫訳 春秋左氏伝 隠公八年 稲田孝常石茂「春秋を読む」）

と祭足は答えた。庄公は祭足の意見に従ひ魯、許に使者を出して出兵の日取りを連絡し、侵略した宋の地は全て魯に与えろとした。

公子翬は貪欲な男だから喜んで受諾し、魯侯に奏上した後齊にも約束を取つて鄭と中丘（現山東省臨沂）に集合した。齊侯は弟の夷仲年^{いちぢゅうねん}を大将に戦車三百乗を出し、魯侯は公子翬を大将に戦車二百乗を出して鄭の援軍に駆けつけた。

鄭庄公は自ら公子呂、高渠弥、顓考叔、公孫閱等の將士を率いて中軍を指揮した。『豳弧』という大司令旗に『奉天討罪』の四字を大書して専用の車に立て、車には赤い弓矢を懸け王の卿士として討伐の号令を発して、夷仲年と公子翬に左右両軍を指揮させ威風堂々宋国へ向かった。公子翬が先に老桃に到着した。守將が迎撃してきたが勇猛な公子翬の一撃で宋兵は逃げ出し二百五十人以上を捕虜にし、捷報を鄭伯に急報し老桃に迎えた。捕虜を献上すると庄公は大変喜び絶賛して第一功とした。牛を殺して兵をねぎらい三日間休息した後、軍を分けてそれぞれ攻撃に入つた。顓考叔と公子翬には郕城を攻撃させ公子呂を後詰とし、公孫閱と夷仲年は防城を攻撃させ高渠弥を後詰とした。そして老桃を本営にし、そこには次々と捷報が入つて来た。

一方宋殤公は三国連合軍が侵攻してきたという報告を聞くと驚いて顔色が変わつた。急遽司馬の孔父嘉を召して対策を下問した。

「臣は使いの者を王城へをやつて探らせました。宋を討つてという命令は出てないようです。鄭は王命を口にしていただけで本当の王命はなく、齊、魯はその術中にはまっていますだけです。とは言つても三国はすでに連合しておりその勢いには対抗できません。鄭に戦わずに退却させる方法はただ一つです」

「鄭はすでに有利に立っているのに撤兵させる事ができるのか」

「鄭は王命だといって列国に招集をかけているはずですが、ついて来ているのはただ斉と魯だけです。東門の役では宋、蔡、陳、魯の協力がありませんが、魯は物欲につられ、陳は鄭の手に乗ってどちらも鄭に付いてしまいました。しかし蔡と衛は残っています。鄭は君主も将たちもみなここに来ており非常に勢いがありますが国元は空っぽです。使者に十分な礼を持たせて衛に遣わし、緊急事態だと言って蔡と協力して軽兵で鄭を攻めさせます。鄭君は自国が攻められていると知れば必ず救援のため軍を返します。鄭軍が帰ってしまえば斉、魯が残って戦うはずがありません」

「卿の策はすばらしいが、卿が行かなければ衛を動かすことはできません」

「臣が一隊をお預かりして参りましょう。蔡に道案内をさせます」

殤公は直ちに二百乗の戦車を出して孔父嘉を大将として、黄金、白璧、絹織物などを持たせて衛に急がせ、衛君に鄭を襲わせるよう説得させた。衛宣公は贈物を受取り右宰丑に命じ孔父嘉と一緒に間道を通って不意を突き蔡陽を攻撃させた。世子忽は急いで城固めを命じたが、すでに宋、衛軍に城外で人畜食料等が大規模に略奪されていた。右宰丑が城攻めをしようとしたが、孔父嘉は引止めて、

「攻める方は、敵の準備が整う前に攻めたからうまくいっただけです。堅い城に軍を留めていて鄭伯が軍を帰してきたら我が軍は背腹に敵を受けて大変なことになりますよ。戴国に道を借りて全軍撤兵するに限りません。わが軍が鄭を離れた時は鄭君も宋を離れていますよ」

右宰丑は彼の案に従って使者を出して戴に道の借用を頼んだ。戴は

自分が攻められると勘違いをして城門を閉じ兵を城壁に配置した。孔父嘉は激怒して戴城から十里ほどのところに右宰丑と前後に分かれて陣を張り城攻めの準備をした。戴も固守し何度か城を出て交戦しお互い損害が出た。孔父嘉は蔡に使者を出して救援を求めた。

この頃、穎考叔等はすでに郕城を攻め落とし、公孫闕等も防城を破っていて、それぞれ戦勝報告の使者を鄭伯の本営に送っていた。ちょうどそのとき世子忽からの急報が届いたのである。

この後鄭伯はどう対処をしたのであろうか、それは次回のお楽しみ。

第七回

公孫闕 私怨で顯考叔を射殺し

公子翬 諂いが容れられず父隰公を弑す

鄭庄公は世子忽からの急報を受取り即刻撤兵を伝えた。夷仲年、公子翬等は自ら本宮へやってきて鄭伯に言った。

「我々は、勝利に乗って進撃するつもりでしたのに、突然撤兵の命令を受けましたがこれはどういうことでしょうか」

庄公は智謀豊かな奸雄だから宋、衛が鄭を攻めて来ていることを隠し、「わたしは王命を奉じて宋を討ちに来て、貴国の軍威を仰ぎ二邑を抜き取りました。王室や爵位の序列は尊重する必要があり、土地を削って罰するのはこれくらいで十分でしょう。必要以上に求めるつもりはなく取った郕、防兩邑は齊国、魯国で一つずつ分けてください。わたしは決して自分のものにするつもりはありません」

「貴国が王命によって討伐軍を出されたわけで、我われは後について走っただけで何の功績もなくいただくわけには参りません」

夷仲年はそう何度も遠慮した。

「公子がどうしてもお受け下さらないのでしたら二邑とも魯侯に差し上げ公子の老桃での第一功勞に報いたいと思います」

公子翬は拱手して感謝しこれを受取り、それぞれ將軍を差し向けて二邑を守らせた。

庄公は三軍を大いにねぎらい、別れ際に夷仲年、公子翬との三者で、三国は同じ心配事があれば助け合い、有事の際は兵を出し合つて相互に援助しあう事を神明に誓うという盟約を交わした。

さて、夷仲年は帰国して齊僖公に会い、防を取ったことを話した。

「石門の誓いに『有事は共に』とあるが、城邑を落としても結局は鄭がとつたのだらう」

「いいえ、鄭伯は一切取らず魯侯に与えました」

僖公は鄭伯に私心がないのをしきりに感心した。

一方、鄭伯は兵を返す途中、また国元からの手紙を受取った。それには宋、衛軍は鄭を引揚げ、戴を攻めていると書いてあった。庄公は笑つて、

「兩國とも無能だとは思っていたが案の定、孔父嘉は兵の扱いを知らないとみえる。逃げながら八つ当たりする馬鹿がどこにいる。よし計略で載を取つてやろう」

と言ひ、四將に四隊を分担させそれぞれに計を授け、馬に枚はを含ませ肅々と戴に向かった。

宋、衛の合同軍は戴を攻め、蔡にも援軍を要請しているので戴攻略の成功を疑つてなかつた。ところが突然鄭の上將公子呂が戴救援に来て、城から五十里のところに陣を張つていると言う知らせが入った。

「あいつは石厚に敗れた敗將だ、戦闘意欲のない軍だから何も怖れることはない」

と右宰丑が孔父嘉に大見得を切つていると、また、戴君が城門を開いて鄭軍を受け入れたという報告が入った。

「濡れ手に粟だと思つていたのに、思いもかけず鄭が救援に入つたとなれば余計な日数がかかりそうだな、どうする？」

「ば」をふくむ 兵馬の口ぐわえせ声が出ひようにした筆草の物 夜襲など敵に察知されぬように進軍する時に使われた

「戴に助勢が入ったとなれば当然兵をあわせて思い切つてやつてくるぞ。とにかく一緒に高所に登つて城中の動静を見てから対応を考えよう」

そう言つて二人は高所からあれこれ指差しながら話合っている所へ、突然砲声が続く、城の上には鄭国の旗が立ち並び、甲冑で身を固めた公子呂が城の欄干に寄り添つて大声で叫んだ。

「みなさんのお陰を持ちまして戴城を頂戴することができました、本当にありがとうございます」

もともとこれは鄭庄公の謀略である。公子呂に戴を救援するふりをさせ、実は庄公も自ら戦車で城に攻込み、戴君を追いつ出して戴軍を併呑したのである。城中では連日の戦いで疲れ果てていたのか、かねてから聞いている鄭伯の威名を聞くと誰も抵抗できず、何百年も続いた城は勞せずして鄭のものになったのである。戴君は眷属を引連れ西の秦を頼つて逃げて行つた。

孔父嘉は鄭が濡れ手で戴城を占領したのでかんかんになって怒つて、

「今日から鄭伯は不倶戴天の敵だ」

と兎を地に叩きつけて叫んだ。

「やつは用兵がうまいからきつと次のことを考えている、城の内外から挟撃されたら大変だぞ」

「右宰丑殿、あんた肝つ玉が小さいな」

と孔父嘉がいきり立っているところへ、突然城内から宣戦布告状が届いた。孔父嘉は翌日の決戦を承諾した。衛蔡と共に三軍を二十里まで下げて突撃に備え、孔父嘉は中央に、衛蔡を左右に、互いに三里以内に陣を張つた。陣立てが終わつたばかりの頃、突然陣の後方から砲声が聞

こえ、火の光が天を焦がし戦車の響きが轟き渡つた。斥候が鄭軍だと知らせてきた。

孔父嘉は方天画戟^{ほうてんがけき}を手にとって迎撃に出た。すると急に喊声も火の光も消えてしま

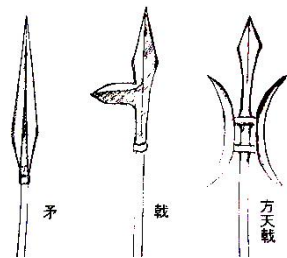
つた。引き揚げようとするのと又左の方で砲声が轟き火が光る。孔父嘉が出撃すると光は又消え、今度は右の方で砲声が続いて火の光が林の向こうに見え隠れする。

「これは陽動作戦だ、みだりに動くな、動く者は斬る」と、孔父嘉が伝令を出すや、またもや左の方に火光が立ち大きな喊声が上がつた。そして今度は突然左陣蔡軍が急襲されると報告があつた。

「わしが自分で救援に行く」

と言つて孔父嘉が陣門を出ると、又右のほうに火光が起こつた。いったい何処に敵軍が来ているのか分からない。

孔父嘉は御者に、かまわず左へ行けと命じたが、御者は慌てていて逆に右のほうへ向つた。ある部隊に出会い互いにしばらくあてずっぽう打ち合っている内に、やつと味方の衛兵だと気付き、両軍を併合して中軍



砲声 原文は「二声炮響 火光接天。この時代まだ火薬はなかなたといわれる（武器としての火薬の使用は宋代にわかれる。「砲は礮（いしゆみの意味があり、石を散弾ように弾き飛ばす武器）バラバラという轟音が生じたかもしれない。しかし、続けて火光接天」とあるので火薬かもしれない。時代考証上疑問が残る。

方天画戟 矛、刃先がト状または十字状、横向きにも刃があるものを戟という。左右または片方に月牙とよばれる三日月状の刃がいたものを方天戟といひ、画戟は彩色されたもの。三国志演義で呂布が愛用している（図参照）

に帰つてくると、その中軍はすでに高渠弥に占拠されていた。急いで車を返そうとする右から潁考叔、左から公孫闕と、左右から敵軍がやつてきた。公孫闕は右辛丑と、潁考叔は孔父嘉と打合つた。車の空が次第に明るくなつてくると孔父嘉は戦意をなくして逃げ出したが、高渠弥に出会い又戦いになり、とうとう車を捨てて走つて逃げ、随いて来た者はたつた二十名そこそであつた。右辛丑は戦死し三国の兵、戦車はことごとく鄭に捕獲され、鄭の郊外で略奪された鄭の人や家畜食料等は元のまま鄭に戻つた。まさに庄公の妙計の結果である。史官は詩に言う。

主客 雌雄未だ混沌たる時 絶妙なり庄公の智計
鵲蛙互いに譲らず 終に利を得たるは網張りし人

庄公は戴城を取り、三国の軍隊を併合して凱旋した。大宴会を開いて従軍の諸將をねぎらい、諸將も順次庄公に献酒した。庄公の表情には成功した満足の色が見え、

「わしは天地、先祖の靈、諸卿の力によって連戦連勝し、威勢は諸侯を凌いでいる。昔の方伯（諸侯の領袖）に比べてもひけはとるまい」

滴る杯を挙げそう言つと、群臣はみな万歳を唱えた。だが潁考叔だけは何も言わなかつた。庄公のとがめるような目を感じたのでしかたなく口を開いた。

「殿は間違つておられます。そもそも方伯とは王命を受けて諸侯の長となつていて、討伐の専権が与えられ、その命令は絶対で、召集に

鵲蛙の争ひ、漁夫の利しきと云ふ貝が争っている内に、漁夫に両方が捕えられることになつた戦国策、燕昭王、競り合っている内に第三者に利を奪われる事の喩え。

は必ず応じなければならぬことになっております。今回、殿は王命という事にして宋の罪状を述べておられますが周天子はご存知ありません。その上、召集の檄を飛ばしても蔡、衛は逆に宋に付いて鄭を攻めて来ましたし、鄭、許の小国も公然と出て来ませんでした。方伯の威厳は決してこんなものではなかつたはずです」

庄公は笑つて言つた。

「卿の言つとおりだ。蔡、衛は全軍壊滅し、いちおう懲らしめたから今度は鄭、許を問題にしなきゃならん。二国の内どちらを先にするか」

「鄭は斉の隣で、許はわが国の隣です。命令違反を追及なさるのでしたら、討伐理由を明確にして先ず鄭を討ちます。誰か將軍を斉に加勢にやつて斉に鄭を討たせ、そのあと斉の來援を得て共に許を討ちます。鄭は斉に与え許はわが国がいたたく。これで両国有事協定の友誼を保つことができます。全てが終つたら、周王に戦勝報告をし、戦利品を献上すれば周囲の耳目をごまかすことができます」

庄公は彼の提案にしたがい、先ず斉に使者を派遣して斉侯に鄭の罪状を伝えた。

斉侯は喜んで承諾し、夷仲年を征鄭軍の大將とし、庄公は公子呂を大將として斉を援助し共に鄭都に攻め込んだ。鄭は怖れて講和を求めて来たので斉侯はこれを受け入れた。その後公子呂の帰国に合わせ使者を鄭へ派遣し許討伐の期日を訊ねた。庄公は斉侯に時来で会う約束をし、その時魯侯にも協力してもらふ約束を取り付けるよう頼んだ。

周桓王八年（紀元前七二二年）の事である。公子呂は帰途病氣に罹り帰国後間もなく亡くなつた。

「そなたの功に何も報いてやれなかった。そなたを失つて右手がもがれたようだ」

と庄公は大声で泣き、彼の一族には十分な配慮をし、その弟公子元を大夫に任じた。正卿が欠位になつたので高渠弥を任用しようと考えたが、

「渠弥は貪欲で性格が残忍です。とても公正な人間とは言えず重要な任務を任せる事はできません。」

と世子忽が言うので、結局祭足を上卿に任じて公子呂の後任とし、高渠弥は亜卿とした。

さて、その年の夏、齊、魯二侯が時来へやってきて鄭伯と会つた。そこで出兵の予定日を秋七月一日と決め、その日に許に集合することにした。庄公は帰国して大規模な閲兵を行なつた。そして吉日を選んで太廟に報告し諸將を練兵場に集め、指令旗『螭弧』^{ぼうこ}を作り直し大型車に立てた。旗は錦でその大きさは一丈二尺^{じふにせふ}四方で金の鈴を二十四個縫い付けた。旗には『奉天討罪』の四文字が刺繡されていて、竿の長さは三丈三尺もある。

「この指令旗を持つて普段の様に歩ける者がいたら、その者を先鋒を任じ、その車を賞として与えよう」

庄公の声が終わるが早い、隊伍の中から一人の大将が出てきた。頭に銀の兜をがぶり身には紫の衣に金の鎧をつけ、天性の威厳の有る黒い顔にちぢれた髯、濃い眉と大きな目、鄭の猛將、瑕叔盈である。

「臣がやりましょう」

と言つて片手で旗竿を抜きしっかりと握り三歩前進、三歩後退して、息も切らさず平然と元のとおり車に立てた。兵士たちはこれを見て声をそろえて喝采した。

「御者は何処だ、いたいたした車を引け」

と瑕叔盈が叫び、庄公にお礼を言おうとしたら隊伍の中から又一人大将が出てきた。

雉の羽根を指した兜をかぶり、額には緑の錦の鉢巻を締め、身には赤い衣に犀の皮の鎧をつけている。

「旗を持つて歩くくらい、別に珍しい事でも何でもない。臣は旗を持つて舞を舞いましょう」

誰かを見ると大夫穎考叔である。

瑕叔盈の御者は考叔の直言を聞いて車を取りに出られなくなつて立つたまま見えていた。考叔は左手で衣をからげ右手で旗を後ろ手にもち跳び上がつて旗を抜き左手で支え、体に合わせて旋回させて左右の手で持ち替えながら槍の舞いのように旗を上下に躍らせひゅうひゅうと風を切つた。旗はそのたびに巻いてはひろがり、ひろがつては巻いた。観衆はもう皆びつくり。庄公は大喜びで

「これぞ真に勇猛な臣ぞ。先鋒と車はそなたのものだ」

庄公がそう言うと、またまた隊伍の中から少年將軍が出てきた。眉目秀麗で頭は髪を束ね金の冠をかぶり、身には金の刺繡の緑の衣を着ていて、傲慢な顔つきで、

「車を持つて行くのは待て、自分だけがこの大旗を振り舞わせると思つてゐるのか」

螭弧、螭は異名、星を描いた旗、庄公の軍旗、常石茂、稲田孝共著『春秋を読む』。

と言つて大股で寄つてきた。考叔は彼の鼻息が荒いので旗竿を握り、車を引いて走つて逃げた。その少年將軍はしつこく、兵器掛けから一本の方天画戟を取出し、^{えいこうしやく} 穎考叔を練兵場の外まで追つた。庄公はこの様子を見て急いで大夫公孫獲に止めさせた。若い將軍は考叔の逃げ足が速いのでしかたなく引返して、

「あいつめ、わが姫姓に人なしと馬鹿にしているな。何時か必ず殺してやる」

と恨めしうに言つた。この少年將軍はほかでもない、公族の大夫で名は公孫闕、^{あつ} 字は子都^{しと}といい、一番男前で庄公に大変可愛がられている。孟子が『子都の美が分かれぬ者は盲目なり』と言つたのは正にこの人の事である。日頃庄公の寵があり、また自身勇猛でもあるので考叔とはうまが合わなかつた。いま練兵場を追い回したが怒りは収まらない。庄公はその勇猛さを褒めて、

「二虎^{ニコ}（優秀なもの同士）は争つてはいけない。わしが面倒を見よう」

といつて、別な馬車を用意して公孫闕と瑕叔盈にも与えた。兩人はそれぞれ感謝して下がった。髯翁詩にいう。

軍法は古来斉一を重んず 愚かなり戦を取つての同士討ち

鄭に猛者は多けれど ただ礼無き者は必ず命危うし

七月一日庄公は祭足と世子忽に国の守備を任せ、自ら大軍を率いて許城へ向け進發した。齊、魯二侯はすでに許城から二十里あたりに陣營を張つて待つていた。三君が揃つて互いに挨拶を済ませ、席は齊侯を中央

に、魯侯を右、鄭伯が左^ミとした。その日は庄公が主人となり酒宴を設け歓迎会を開いた。齊侯は袖の中から檄文を取り出した。

檄文には、許国の天子への庸役義務の怠慢を数え上げ、それを糾弾するため王命を奉じて討伐するという内容のものである。

魯、鄭二君はこれを見て拱手^{きょうしゅ}して、

「これであれば出師の大義名分が立ちます」

といつて翌日辰の刻 午前八時前後 に一斉に城攻めを行う事を取り決め、あらかじめ討伐の檄文を矢文にして城に放つた。

翌朝三軍はそれぞれ砲声を轟かせ攻撃を開始した。許は元々男爵で、ほんの小国のため城は低く堀も浅いので、三国軍にびつたりと水も通さないほど包囲されると城内は恐怖のどん底に落ち込んだ。ただ、許の庄公は人格者で日頃から民衆の深い信頼と支持を受けており一丸となつて籠城したので簡単には落ちなかつた。齊、魯は元来この戦いに主体的ではなかつたのでさほど闘志がわかない。結局鄭將が懸命に手柄を求めて奮戦しているだけである。中でも穎考叔は、公孫闕との賞の馬車の取り合ひの件があつたのでますます何か力を誇示しなければならぬと思つてゐた。三日目の午の刻（正午前後）に穎考叔は車上に立つて司令旗『螳^{ばう}弧^こ』を手に持ち反動をつけて許城に飛び上がった。公孫闕は目聡く動作の素早い男で、考叔が先に城に登つて一番功を取るのを嫌つて人ごみの中から考叔に狙ひを定め闘討した。考叔は死ぬ運命にあつたのだらう、矢は公叔の背中に命中し城の上から旗もろとも落下した。瑕叔盈は考叔が敵にやられたと思ひ、憤怒の怒髪は天を突き、指令旗を拾上げて

② 右と左 日本は左大臣が右大臣より上位であるが、中国春秋戦国時代は右を尊び左を卑しんだ。左遷：低地位に移す事。但し楚では逆であつた。

頼考叔えいこうしゆくと同じやり方で反動をつけて城壁に跳び上がって大声で呼ばわった。

「鄭君はもう城に登られたぞ」

兵士たちは指令旗がへんぽんと翻っているのを見て鄭伯が本当に城に上がっていると思つて、勇氣百倍、一斉に城に上がり城門を叩き壊して斉、魯軍を入れた。続いて三君が入城し、許庄公は兵の服装に着替えて兵卒にまぎれて衛國へ逃げて行つた。

斉侯は告示を出して民衆を安らげ許の土地を魯侯に譲ろうとしたが、魯侯は固辞した。

「今回の計画は鄭公から出たものですから魯侯が受けないのであればどうぞ鄭公がお受け取りください」

と斉僖公きこうはそう言い、庄公も欲しいのは山々だが、斉、魯二君とも譲り合ひをしているので仕方なく遠慮していた。

ちようどそんな話し合ひをしていた時、許の大夫百里ひゃりが一人の子供を連れて目どおりを願つてゐるとの連絡が入つたので、通すよう命じた。

許の大夫百里は入つてくるなりドツと跪いて、許の祭祀を続けられるよう配慮願ひたいと泣いて訴えた。

「このお子はどいう方ですか」

と斉侯が聞くと、

「我われの主君には子供がありません。この方は主君の弟君で、新臣しんしんと申します」

と言う。斉、魯二君は大変憐憫の情にかられた。鄭庄公は二人の様子を見てこれを逆手に取つて行つた。

「わたしは王命により譴責に來たものです。土地を取ろうというのが目的であれば義拳とは申せません。許君は逃走してしまつたので先祖の祭りはできませんが、許君の弟君が国内にいて補佐する大夫もおられるのでしたら、許國はあなたがたにお返ししたほうがいいと思います」

「私は主君の血脈を絶やさないうようご配慮をお願い申し上げただけでございます。土地はもう皆様方のものでそれを返して頂くなどという事は決して考えてはおりません」

「いやいや、私が言つたことは本心です。しかし、新臣殿はまだ幼いので一國の政務を司るのは難しいでしょうから人を派遣して手助けをさせましょう」

庄公は許國を二分し東側を百里が補佐して新臣が管理し、西側は鄭の大夫公孫獲かくにゆだねる事にした。

表面上は許を援助すると言うことだが実質は全般を監督下に置くという謀計である。斉、魯一侯はそこまでは気がつかず、口々に庄公の情況に合わせた適切な処置をほめ称えた。百里は許叔しよしゆく（新臣）と共に三君に感謝し、三君も各自帰國した。髯翁は庄公の謀計を詩にしている

母の恩さえ忘れる残忍 何ぞ小國に憐憫の情あらんや

國を二分し保護と見せかけ 虚妄で外聞ごまかせり

許の庄公は老齡のため衛で亡くなつた。許叔は東側で鄭の監督下にあつたが、鄭庄公が亡くなつて数年、鄭は公子忽こつとと突の争いが続き、二人が追放したりされたりで國が乱れ、その間に西側の責任者公孫獲も病死した。許叔はこの隙に百里と策を用いて許の都へ潜入し宗廟を整備し復活したが、これは後の話である。

話を戻して、鄭庄公は帰国して瑕叔盈に厚く報賞した。一方では
穎考叔の死が忘れられない。彼を射殺した犯人を非常に恨んだがそれが
誰か全くわからないので、今度の戦いに参加した兵士に、百人を卒とし
卒毎に豚を一頭、二十五人を行とし行毎に大鶏一匹ずつ提出させ、祈
禱師を呼んで作法に従いこれらを犠牲に使って穎考叔を殺した者を呪
い出すよう命じた。公孫闕は密かに笑っていた。祈禱が続いて三目三晩
が過ぎ、庄公が大臣たちを連れ、様子を見に来た。祈禱師が書いた呪文
に火をつけた時、髪がばさばさで垢面の男がやってきて庄公の前に跪き
泣いて訴えた。

「臣穎考叔は、率先して国のために命を顧みず許城に登りましたが、
縣賞の馬車争奪の恨みで奸臣子都（こうじんあつ）に矢で闇討ちされました。
天帝の許可をいただいて、今彼の命をいただきに参りました。私は黄泉
の国にいましても決して殿のご恩を忘れないしませぬ」

話し終わるや、彼は自分の喉に手を伸ばし喉から鮮血を吐き出してそ
の場に倒れ息絶えた。庄公はこれが公孫闕だと分かつて急いで助けよう
としたがすでに呼んでも戻らなかった。公孫闕は穎考叔にとりつかれて
鄭伯の前で自白するはめになったのである。これによつて考叔を射殺し
たのが關だったことが明らかになった。庄公は嘆き悲しみ、考叔の霊を
思つて穎谷に廟を立てて祀つた。現在の河南府登封県が穎谷の故地で、
穎大夫の廟があり別名純孝廟ともいう。また、洧川（河南寧滄川県）に
も同様の廟がある。隴西居士は庄公を詩で風刺している。

車争いの後更に刃傷沙汰 国を乱して主君を憚らず
法の威厳を知らしめば 犠牲で神を汚す事もなかりしを

庄公は贈物を持たせ斉と魯にそれぞれ謝礼の使者を送った。斉は問題
なかったが、魯へ行った使者は帰ってきて贈物は渡して来たが手紙は渡
さなかったという。

「何があつたのだ」

「臣が魯の国境に入るとすぐ、魯侯（いんろう）が公子翬に殺されてすで
に新君が立っているという事を耳にしましたので、国書の内容が合わな
いと思ひまして出しませんでした」

「魯侯は謙虚で寛大な賢君だったのにどうして殺されたのだろう」

「臣が探つてまいりましたところによりますとその理由は……」
と使者は次のように説明した――

魯の先君恵公の最初の夫人は早く亡くなり、寵妃仲子（き）が後を継い
で一子軌を生み、恵公はこの子に位を継がしたいと思つていました。
魯侯は別な妃の子でしたが、恵公が亡くなった時家臣たちは年長の
隱公を君主に立てましたが、隱公は父君の気持ち汲んで、

「この国は軌の国だ、未だ幼いからしばらくわたしが摂政をして
いるのだ」

と常々言っていました。隱公の子公子翬は太宰の官を望んでいま
したが、隱公は、

「軌が君主になってから自分で頼めばいいではないか」

というので、子翬は隱公が軌に氣を使つていと思つて、そつと
『利器が手に入れば人に貸すな』と申します。殿はすでに君主に
なつて国人も喜んで服していますから、それを千歳の後までも子

② 国人 国都及びその近郊 すなわち郷と呼ばれる地域に住む人々、諸侯の公室
大夫 士などによつて構成されていた（中公文庫 中国文明の歴史②春秋戦国 時代

孫に位を伝えるべきではないでしょうか。どうして摂政などと非望を抱かせるようなことをおっしゃるのですか。軌も成長してきましたので、将来殿に不利な事になる恐れがあります。後顧の憂いを除くため彼を亡き者にしたほうがいいと思います」

と隠公に言いましたが、隠公は聞かないで、

「馬鹿なことを言うのではない、そんな暴言が何処から出てくるのだ。わしは老後のために菟裘に宮室を建てさせている。近いうちに軌に位を譲るつもりなのだ」

とまで言うので、翬は黙って引下がりましたが、失言を後悔したようです。隠公がこれを軌に話して、即位後に軌に罰せられるのを心配したのです。その夜軌を訪ね、

「殿はあなたが成長するにつれ位を奪われるのではないかと心配しています。今日わたしをお呼びになって密かにあなたを害するようにならうに命じられました」

と逆の話をしたのです。軌は怖れてどうしたらいいか翬にたずねました。

「殿には仁がなく、わたしには義がありません。公子が災いを免れたいとお思いなら大事を執行するしかありませんよ」

「殿は君主になられてすでに十一年になり、臣民は信服しています。大事が成功しなければ逆に大変なことになりますね」

「公子のためにいい案があります。殿は即位する前に狐壤で鄭君と戦って捕えられ、鄭の大夫尹氏の家に拘禁された事があります。

尹氏はずっと鐘巫という神を祀っていましたので、殿はそつと祈願して魯に逃げ帰る事を考え占つてみたのです。占いは吉とでたので実情を尹氏に話すと、当時尹氏は鄭では志を得られていなかったの殿と一緒に魯へ逃げてきました。そしてすぐに城外に鐘巫の廟を立て毎年冬季に必ず自ら出掛けて行つて祭を行っています。今ちようどその祭の時です。祭は爲大夫の家で行われています。わたしは勇士を集めて紛れ込ませておきます。殿が熟睡した所をブスつとやります。簡単です。」

「計画は良さそうだが汚名をどうやって解けばいいだろうか」

「勇士たちはさつさと退散させておいて罪は全て爲大夫に押し付けておけば問題ありません」

「これが成功すればあなたに太宰をお願いしましょう」

子翬は計画通りに実行し魯侯を殺し、軌が即位して翬は太宰になりました。爲大夫は隠公暗殺に関わったとして処刑されましたが、国人でこの事実を知らない者はいませんが翬の権勢を恐れて誰も何も言わないということでした。

使者の報告は概略以上の通りであった。

庄公はこれ聞いて家臣たちに問いかけた。

「魯を討伐すべきか友好を保つべきか」

「魯とは代々仲良くやってきているのですから当然友好を図るべきです。臣はきつと近いうちに魯から使者が来ると思っています」

祭仲がそう話している時、魯の使者が宿舎に着いたと報告があった。庄公は事前に使者の来意を聞かせた。

「新君が即位しましたので、先君時代の友好関係を改めてお願いし、両国君主で盟約を結ばせて頂きたいとお願ひに参上いたしました」

と使者はいう。庄公はその使者を優遇し、四月に越で会って従来通りの友好を誓い合いたいと約した。これより魯、鄭間の手紙や使者がしばしば交わされた。

周桓王九年（紀元前七二年）の事である。

髡翁は歴史をここまで読んで感想を次のように述べている。

公子翬が兵権を手にし鄭、宋を討ち、独断専行したときに謀反はすで見えていた。軌を殺すようそのかしたが、隱公は乱言と一蹴した。もしこの時翬を公開処刑をしておれば、軌は隱公に感謝することになったであろう。讓位の事を翬に漏らしたため弑逆への憎悪を激発させる事になってしまったのである。隱公は優柔不断のため自ら災いを招いたようなものであると。

跋扈將軍は元來粗暴 履霜の戒めを思わざる

菟裘 宮築きし人は今はなし 哀れ爲氏も冤罪なり

又鐘巫の祭りに対する詩がある。

狐壤より逃げ来て鐘巫の廟を建て 年年之を祭りたる

鐘巫の靈驗あるならば 天何ぞ子翬を撃たざるや

（跋扈將軍：専横暴虐の翬）

さて、宋の穆公の子馮は周平王の末年に鄭に亡命し今なお鄭に在る。ある日突然、

「公子馮に」即位いただくために宋の使者がお迎えに参っております」

という知らせが入った。

庄公は疑った。

「宋の君臣は馮を騙して連れて帰って始末しようと思っているんじゃないか」

「しかし、使者は国書を持って接見を待っております」と祭足が言う。

さてその国書は如何なる内容か、それは次回のお楽しみ。

履霜 戒め 履霜堅氷の戒め 霜を踏んだ時はやがて厚氷が張る事を考え注意を要す。事前に災害に備えよという事（『易経』坤）

第八回

宋華督 新君を立て 諸侯に賄賂を贈り

鄭太子忽 斉を救援し 莒軍を破るも 斉侯の求婚を断る

宋^{しょう} 殤^{しょう}公は即位以来しばしば出兵し鄭^{てい}へはすでに三度になるが、それは公子馮^{ひょうほう}が鄭にいるからである。太宰の華督^{かとく}は以前から公子馮とは親交があり、殤公が鄭に出兵するのは引止めはしないが内心不満であり、孔父嘉^{こうふか}が軍管掌大臣なのも気に入らない。常々始末する機会を探っていたが彼が殤公に重用されておりしかも兵権を握っているので手が出せない。孔父嘉が戴国を攻めて全滅に遭い身一つで逃げ帰って来てからは人々は、

「宋君は民への思いやりが無い。好戦的で国中にやもめや孤児を増やし人の数も随分減ってしまった」

としきりに恨みごとを言うようになった。華督はその上「何度も出兵したのは皆孔司馬の発案だ」と腹心に巷^{ちまた}でデマを流させた。人々はそれを信じて孔司馬を恨み、華督の策は図に当った。

孔父嘉^{こうふか}の後妻の魏氏は絶世の美人だという噂がある。残念ながら華督はまだ会ったことがない。ある日魏氏は里帰りのついでに郊外の墓参に立寄った。時は春、柳の色は煙の如く花は錦のように輝き、正に淑女が郊外を散歩に出かけるのに絶好の日よりだった。魏氏は不用意にも車のカーテンを上げて外の景色を盗み見していた。華督も丁度郊外に遊びに出ているところで、偶然出会いそれが孔司馬の家族だとわかって驚いた。

「世間にこんな美人がいるものなのか、うわさは嘘じゃないな」
日夜彼女を思い、魂が消え入ってしまいうそであった。

「もし家にこんな美人がいてくれたらわしの残りの人生はきつと楽しいことだろう。ようし、亭主を殺してあの女を取ってやる」

この事があつて、孔父嘉^{こうふか}を殺す計画を進める決心を固めた。

周桓王十年^{かんこう}（紀元前七一〇年）の春、孔父嘉は軍を覬覬した。号令はかなり厳しかった。華督はまた腹心を使つて軍中にデマを飛ばした。

「司馬はまた鄭に兵を出そうとしている。昨日太宰（華督）と話合つてすでに決定したらしい。だから今日閲兵しているんだ」

兵たちは皆恐れて三々五々集まつて太宰の屋敷の門の前へやつて来て、君主に戦争を止めるよう言つて欲しいと訴えてきた。華督は故意に門を厳重にしめさせた。だが門番には門の隙間から優しい言葉で慰めるように言つておいた。兵たちはますます太宰に会いたがつて、人ほとんど増え、多くが武器を携えている。夜になつても太宰が現われないので騒ぎ出した。昔から『衆人は易く散人は難し』という。華督は皆の気持ち^{かどく}が盛り上がつてきたので、ころあひを見て甲冑を着、剣を差して出て行き開門を命じ彼らを整列させて騒ぎを止めた。自分も門前に立つて先ず、皆の気持ちはよくわかる、というような事を優しく言うつて兵士たちの心に入取り、

「孔司馬は出兵を主張して諸君たちを苦しめているが、主君も彼を寵信してわたしの諫めなど聞こうとしない。三日以内にまた鄭を攻める予定だ。諸君がこんな苦しみを受けなければならない理由は何かもない」

こう扇動すると兵士たちは齒ぎしりして声が殺気立ってきた。

「君たちは騒ぎを起してはいけない、もし司馬が知つたら主君に報告するだろうからわれわれの命は保障されない」

と、華督かとくが説得するふりをして皆に言うと、兵士たちは口々不平を鳴らした。

「われわれの親子親戚は毎年のように戦争に駆り出され半分以上死んでしまった。また大軍を出しても鄭の軍は強いから勝てるわけがない。どっちにしても死ぬのならあいつを殺して元凶を除いた方がましだ、自分は死んでも悔いはいない」

『投鼠忌器』⁸²と言うじゃないか。司馬は問題あるが主君の寵臣だから手が出せないんだ」

「太宰が後ろ盾になつて下さるならあんな暗君など怖くなんかない」
そう言いながら華督かとくの袖を引張つて放さず、

「太宰に随いてわれわれの敵を始末しよう」

と、一斉に大声で言い合つた。

すぐに兵士たちは車を出して来て皆で華督かとくを担ぎ上げ、車中では腹心がびつたりと随っていた。彼らは口笛をヒューヒュー鳴らしながら孔司馬の私宅へやつて来て屋敷をぐるぐる巻きに包囲した。

「わしが案内を請うて中で段取りをつけるからそれまで声を出すな」
華督かとくは兵士たちにそう命じた。すでに夕暮れ時は過ぎており孔父こうははくつろいで酒を飲んでゐた。外で門を叩く音がするので人をやると、

「華太宰が自らお見えになつておられます。何やら機密のご相談がありますとの事です」

⁸² 投鼠忌器 鼠に物を投げつけたがその器物が壊れるので投げられない。即ち悪人に打撃を加えたいが周りの影響を考えて強く出られない意。「漢書 賈誼伝」

様子を見に行つて戻つて来た者がそう報告した。孔父嘉こうはかは急いで衣冠を整え客殿に迎えた。その時大門が開いて外で喊声こゑが上がり兵士がどどと押し寄せてきた。孔父嘉が裏へ逃げようとするど華督は大声で、

「民を害する賊はここにゐる、やれ！」

孔父嘉は何も言う間もなく首が地に落ちた。華督かとくは腹心を連れて奥に入り、魏氏を捉えて車に乗せて去つた。魏氏は抵抗のしようもないので車の中で帯を解いて自ら首を絞め華督の門に着いた時にはこと切れていた。華督かとくは非常に嘆いて郊外で墓で火葬にふし、随行のものには厳重に口止めをした。ああ、何という事、楽しみにしていた夕べの喜びの一時は消え去り徒に多くの恨みを買うことになり悔いは尽きない。兵士たちはいい機会とばかりに孔氏の家の略奪を尽した。孔父嘉には名が木金父もくきんはという子が一人だけいたが年は幼く、家臣がその子を抱いて魯へ逃げ、字を氏にし孔氏しやうしといつた。孔聖仲尼ちやうじ（孔子）は六代後の子孫である。

ところで、宋殤公しやうこうは司馬が殺されたと聞いても手の出しようがない。華督かとくが一緒だったと聞き激怒し呼び出して処罰しようと思つたが、彼は病氣と称して参内しなかつた。殤公は自ら孔父の葬儀に行こうとしたのを華督が聞きつけ急遽軍正（軍中の執法官）を呼んだ。

「主君が司馬を寵信していたのはそなたも知つての通りだ。そなたたちは勝手に司馬を殺したという理由で殿から罰を受ける事になるかもしれないが、でも先君穆公もくこうがご自分の子ではなく殿を君主に立てられたという恩があるので、今司馬は殺され天理が明らかに示されたのだ。むしろこれを機会に大事を決行して先君の子を君主にお迎えすれば災いを福に転じることができるが、どうだ」

「皆の気持ちも太宰のお言葉の通りであります」

軍正はそう言つて兵士に号令をかけ、孔氏の門に伏せ宋公を待った。宋公が出て来ると突然太鼓と喊声が上がリ、侍衛は驚いてちりぢりになつて殤公は乱軍の中で殺されてしまつた。華督は知らせを受けて、力なく参内し殤公に哀悼を示し、群臣を扇動して軍を乱した若干の將軍に罪を着せて誅殺し衆目をごまかした。

「先君のお子さま馮殿が鄭におられます。人々は先君の徳を忘れていないので馮殿をお迎えするのが至当と考えます」

と言つとしかたなく皆それに従つた。華督は鄭に使者を出し、殤公の葬儀の知らせと公子馮を迎えたい旨を申し出るとともに、各国に国庫の宝物を賄賂として贈り馮を君主にした理由を説明した。

鄭庄公は宋使に会い国書を見て使者の来意を知り、すぐに車を用意し公子馮を宋に送り出した。公子馮は出発に際し、地に拝し庄公に涙ながらに言つた。

「馮がここまで生き伸びて来られたのは、ご主君が鄭国に置いてくださったお陰でございます。幸いにも帰国して先祖の祀りができるようにになりました。ご主君の臣として決してお心に背くことは致しません」

庄公も涙が出た。

公子馮が帰つてくると華督は彼を君主に奉戴した。即ち宋庄公である。

華督はそのまま太宰になり、各国はみな賄賂を受取つた。齊侯、魯侯、鄭伯は稷に会合し宋公並びに華督の宰相を認めた（稷の会盟）。

史官は詩にしている。（暗に賄賂を受取り弑逆を認めた事への批判である）

篡奪弑逆は春秋の常 宋魯の変事も隔年毎

列国賄賂を受けざれば 乱臣賊子どうして安眠できようか

また、宋殤公が義に背き馮を嫌つたためこの弑逆事件が起つたが、これは天誅であるとも詠われている。

穆公の国譲りしは公心なり 憎むべし殤の馮への逆恨み
今殤死して馮が立つ 九泉で父兄に合わす顔もなし

さて、齊の僖公は、稷からの帰国途中、国元からの早馬の知らせを受取つた。

『北戎主が、元帥大良、小良に命じ、一万の戎兵を率いてわが国境を侵略し、既に祝阿は落ち、厲城下も引き続き攻められており、とても支えられそうにない、という急報が届いています。至急ご帰国下さるようお願いいたします』

「北戎はしばしば国境を侵犯してきているが、今までは鼠の被害程度だったが、今回は大軍だから放つておいてはこれから先、北の国境が不安である」

僖公は魯、衛、鄭にそれぞれ使者を出して救援を頼み、同時に公子元と公子戴、仲等と共に厲城の支えに向かった。

一方、鄭庄公は齊が戎に攻められていると聞き世子忽に、

「齊は以前から我国とは同盟国だ。我国の有事には齊はその都度協力をしてきている。今、齊から援軍の依頼があつた。是非ともすぐに救援に行つて欲しい」

と言つて、直ちに三百乗の戦車を用意し世子忽を大將に、高渠弥を副将、祝聃を先鋒として、昼夜兼行で齊国に向わせた。齊侯は厲下にいると聞いていたから直接そちらへ向かったので着いた時はまた魯、衛軍

は来ていなかった。僖公は感激して自ら城を出て鄭の將士をねぎらい、忽と戎軍対策を話し合った。世子忽は僖公に進言した。

「戎の主力は歩兵ですから動きはいいですが破られやすく、我が方は戦車が主力ですから容易には破られる事はありませんが動きはよくありません。戎軍は軽率で組織も規律もいい加減です。しかも貪欲で互いに親しみの情がありません。勝つても譲る気持ちがなく負けても助け合うことをしません。今まで勝つて来ているので攻めが粗雑になっていると思います。ですから伏兵作戦が有効でしょう。敵に当って偽って敗走すると必ず追撃してきます。あらかじめ伏兵を用意しておいて追撃してくる敵兵に当れば敵は慌てて逃げ出すでしょう。これを追撃すれば完勝間違いなしです」

「それは妙計だ。それでは斉軍は東に伏兵を置いてその行く手を阻止しますから鄭軍は北に伏せていて追撃していただきたい。前後から攻撃すればまず失敗はないでしょう」

世子忽は命を受けて北へ行き伏兵を二ヶ所に分けた。僖公は公子元を呼んで、

「そなたは東門に伏せていて、戎軍が追撃してきたら突然とび出すのだ」

と計を与え、公孫戴仲に一隊を預け敵を誘い込む役を指示した。

「勝つてはいけない、負けるんだぞ。負けて敵を東門の伏兵がいるところまで誘い出せたらそなたの立派な功績だ」

役割が決まると公孫戴仲は城門を開いて戦いを挑んだ。戎軍の大將小良が三千の兵を率いて陣を出て迎撃してきた。両者打ち合つて約二十合、戴仲は氣力負けて車を返し逃出した。しかし北門へは行かず城

を回つて東の方へ逃げた。小良は逃がすまいと猛追撃してきた。大良は小良が勝つたと思つて大軍で後を追つた。東門に近づくと突然砲声、鐘、太鼓が鳴響いた。草むらから大軍の伏兵が蜂か蠅のように飛び出してきた。小良は、

「しまった、謀られたか」

と叫んで馬を返そうとしたが、逆に大良の後続部隊とぶつかつてガチャガチャになり総崩れとなつた。公孫戴仲と公子元は兵を合わせて追撃した。大良は小良の前に出て退路を開けと命じ、自分は殿となつて戦つては逃げ逃げては戦い、大軍の撤兵の援護を行なつたが、落ちこぼれたものは大半が斉兵に捕えられたり斬られてしまった。戎兵が鵲山辺りまで逃げて振り返ると追撃軍は次第に遠ざかりやつと人心地ついて食事の用意をしようとしていたところへ突然山のくぼみから大きな喊声が起こり一隊の軍が、

「鄭国上將軍高渠弥これに在り」

と叫びながら飛び出してきた。大良、小良は戦意を全く失い慌てて馬に乗り逃げ出した。高渠弥は追撃した。数里行くとまたまた喊声が起こつた。世子忽の突撃である。後ろからは公子元の斉兵がやつてきたから堪らない。戎兵はばらばらになつて逃げ惑つた。小良は祝聃の放つた一矢が脳天に命中し、落馬して死んだ。大良は包囲をやつと抜け出したところであつた。世子忽軍に出くわして彼もまた忽に斬られてしまった。生け捕つた甲武者三百人、死者は数え切れない。

世子忽は大良、小良の首級と共に捕虜を齊侯の前へ連行し戦勝報告を行った。僖公は非常に喜び、

「世子殿せいしのような英雄がいなければこんなに易々と戎兵を平らげることはできませんでしたよ。みんな世子殿のお陰です」

「大したことはいたしておりません、偶然うまく行つたのです。お褒めに預かるほどの事ではございません」

僖公きこうは魯、衛両国の軍に使者を送り終戦を伝え来援中止を申し入れた。そして宴席の支配を命じて世子忽を歓待した。席上僖公は世子に言った。

「娘があなたの妻女になりたいと申しているのですが」

忽は再三遠慮した。宴が終つた後僖公は夷仲年いちしゅんねんを呼んで、そつと高渠弥に次のように言わせた。

「わが主君は世子殿が英雄だと敬愛しているので、愛娘を世子殿に嫁がせたいと強く望んでいます。以前話を致しましたが断られまして、今日も直接この気持ちを話し致しましたがやはりいい返事は得られませんでした。一体どうしてなのか分かりません。もしあなたがこの話を纏めて下さつたら白璧はくひつを二対と黄金百鎰ひゃくいづつをお礼に差上げると申しております」

高渠弥は承知して世子に会い、斉侯が非常に世子を慕っていることをつづさに話し、更に言つた。

「もしこの話がうまく行けば、何かあつたときはこの大国の援助が受けられるという事でありなかなかいい話ではありませんか」

「昔何もなかった時でさえ、斉侯からこの話があつた時家格の問題で断つている。今回主命で救援に来て運よくうまくいったというだけで、

すぐ斉の公主を嫁にして帰つたら、人は功を恃んで嫁を取つたと嘲るだろう。それには釈明のしようがないではないか」

高渠弥があれこれと説得するがどうしても「うん」といわない。翌日僖公は夷仲年を遣わして直接世子と相談させた。

「まだ父に報告いたしておりませんのでご返事は致しかねます、勝手に結婚を承諾することはできませんので」

世子は僖公の面子をつぶしてはいけないと思いそう口実をつけてその日帰国した。

「こないだいい娘だ、いい縁談はふるほどあるわ」

僖公は怒つてそうつぶやいた。

さて、世子忽は帰国後、結婚話を断つた事を父庄公に報告した。庄公は

「そなたは自分で功績を挙げる力が十分ある。良縁については心配することとは無かるう」

と言つたが、祭足はそつと高渠弥に言つた。

「殿には寵妃がたくさんいてその公子突しんとつ、公子儀ぎ、公子亶たんはそれぞれみな非望ひぼう（見分不相応の望み）を持つている。世子が大国と婚姻関係を持てばその援助を当てる事ができるので、先方から話が無くてもお願いしたい程の話なのにどうして自分の羽根を切るようなことをするのだろう。殿も殿だ、どうして注意しないのだろう」

「わたしも世子にそう言つたのですが、何故か聞かないのです」
と高渠弥がいうと、祭足は嘆息して帰つていった。

男の判断には柔剛あり この縁談断るは失策か

《載駁》《敵筈》を詠んでみよ 魯桓公は正しかりしや⁸¹

高渠弥はもととも公子^{こうきよ}亶と親しかつたが祭足^{さいそく}の話を聞きますます彼に近づいた。世子^{せいし}忽は庄公に、

「渠弥は子亶と私通していてちよつちゆう行き来しています。何か不穩です」

と言うと庄公は渠弥の面前でその事を注意した。渠弥は否定できず後で子亶にその事を話した。子亶が渠弥に

「父上がそなたを正卿にしようとしたけれど世子^{せいし}が反対し取りやめになり、今又我々の付き合いを邪魔しようとしている。父上のご存命中でもそうだから、父上が亡くなられたら世子^{せいし}がどう出るかわからないぞ」と言うと、渠弥は世子^{せいし}を見抜いたように言った。

「世子^{せいし}は優柔不断で人を殺すことはできませんから公子はご心配なさることはありません」

子亶^{しび}と高渠弥^{こうきよび}は、世子^{せいし}忽との間にこの頃から隙間が生じた。後に高渠弥が忽を殺し亶を立てた原因はおそらくここに遡るのであろう。

さて、祭足^{さいそく}は世子^{せいし}忽に陳国と婚姻を結び衛国と修好を図ることによって、陳、衛両国と仲良くなれば鄭と合わせて三本の鼎の足のように足元が固まると、説得すると世子^{せいし}も承知した。祭足^{さいそく}が庄公に話し、使者を派遣して陳に求婚し、陳もこれを了承した。世子^{せいし}忽は自ら陳へ嬀氏^{ぎし}を迎えに行つて連れて帰った。

魯桓公も使者を出して齊国に求婚した。ただ、齊侯が娘文姜と魯侯の結婚を赦したことによって新たに次々と問題が起きることになるのである。

さて次々起る問題とは如何なることか、それは次回のお楽しみ。

⁸¹ 載駁 敵筈はともに詩経齊風の齊襄公と文姜兄妹嬴公の争の乱倫を歌った詩（第14回）。魯桓公は後に文姜を娶り不幸な事件が起る。

第九回

齊侯 文姜を魯に嫁がせ
鄭祝聃 周王の肩を射る

齊僖公には二人の娘がいてどちらも絶世の美女である。長女は衛に嫁ぎ衛宣姜といい、彼女については後にふれる。

次女の文姜であるが、彼女の目は秋水のように清く透きとおり、容貌は芙蓉の花のようにあでやかである。花でいえば解語の花、玉でいえば清く澄んだ芳しき玉といえる絶世の佳人である。しかも古今の諸事に通じ口を開けば文を成す。このため文姜という。

一方齊の世子諸児は元来荒淫無恥な男で文姜とは兄妹ではあるが母親が異なる。諸児は文姜一歳しか違わず、幼い頃から宮中で一緒に育ち、ともにいたずらをして育った。文姜が長じてこのように花か玉かという美人になると、諸児も思春期になり恋に目覚め、年頃になった文姜のこのような才と美貌を見るにつけ、もともと軽薄な男だから彼女についていちゃよっかいをかけたくなった。文姜も妖淫で礼節というものに全く無関心で、戯言をいい、時には街なかでも猥褻なことを平気でする。諸児も成長すると背は高く天性の美男子になり文姜とちよど釣合っているが、惜しいかな同じ家に生まれた兄妹だから結婚はできない。しかし男女の礼をわきまえず一緒に肩を並べ手をつないで平気で何処へでも出かけるという有様である。ただ側に宮女たちがいるから肌を合わせて寝るということではできない。だが二人とも齊侯夫妻が溺愛する子たちだからそれを防止することはできず、ついには禽獣の行為におよび、結局これが将来諸児の身を滅ぼし国を危うくする原因ともなるのである。

鄭の世子忽が戎軍に大勝した後、僖公が文姜に彼をべた褒めして彼女のために結婚の話を進めているという文姜は大喜びだった。ところが世子忽がどうしても承諾しないと聞いて胸がふさぎ寝込んでしまった。微熱が出て、ぼんやりと寝食もままならなかった。詩に次の様に詠まれている。

十六歳深閨の羞恥を知らず 縁談破れ眉を曇らす
鳳は愛の網に入り来ず 野鴨は日夜悲しみの中

世子諸児は見舞いを言い草に、しばしば寝間に入ってきて来て、枕元にすわり体中をさすりながら優しい言葉をかけてやる。もちろん回りの目があるから変なことではできないが。

ある日、僖公がたまたま文姜を見舞いに来たら寝室に諸児がいた。

「たとえ兄妹といえども避けなければならぬ礼法というものがあろう、今後は宮女に見舞いに来させ自分で来ることは相ならん」と叱りつけた。諸児は言われるままに出て行き、その後は滅多に会う

なくなつた。僖公は諸児に宋公の娘と結婚させ、魯の女性も彼の妾とした。諸児は新妻を愛し、兄妹はあまり会わなくなつた。文姜は寂しい闇で諸児の事を思い病状は次第に悪化した、胸の中で苦しむだけでは口がない。唾者が黄柏を口いっぱいに入れた様なものである。苦さは自分しかわからない。

春草は春霞に酔うも 深閨の人寂しき独り寝
恨みは募り色衰え 愛の炎は抑え得ず

⑧「解語花 玄宗皇帝が楊貴妃と太液池の花を鑑賞していた時左右に「蓮花の美しさもわが解語花には適うまい」と言たという故事『開元天寶遺事』

月の明るき夢路をば 恋しき人の胸に飛んで入りしは幾度か

話変わつて、その年は魯桓公が即位した年である。年はとっているがまだ夫人がいない。

「昔から国君は十五才になると子がいます。殿にはまだ内室もおられません。将来いかがなさいですか。宗廟をお守りになる重要な責務がございます」

と大夫臧孫達が進言すると、公子翬が提案した。

「齊侯に文姜という愛娘がいて鄭の世子に嫁にやろうと思つたけれどもうまく行かなかつたようです。殿が求婚されたら如何です」

庄公は承知して公子翬を求婚の使者として齊国へ遣わした。齊僖公は文姜が療養中だからその時期を延ばしてくれるよう頼んだ。宮女が魯侯が求婚してきたという朗報を文姜に知らせると、彼女はもとと恋の病だったのでこの話を聞くと安心して病氣も次第によくなった。齊魯が宋の件で稷で会合した時、魯侯は齊侯に直接結婚の事を願ひ出た。齊侯は翌年にしようと思つていたが、魯桓公は積極的に自ら又嬴へ出掛けて齊侯に会つた。僖公はその殷勤な態度に感じて結婚を許した。魯侯は嬴へ結納を持つて行つた。それは通常に倍する手厚いものであつた。僖公は大変喜び九月に自ら文姜を魯へ届けることにした。魯侯は公子翬に花嫁を迎えにやつた。齊の世子諸兒は文姜が他国へ嫁に行くのと聞くと、思わずまたあの狂おしい思いが芽を出し、宮女を遣わして花束を贈りそこに詩をつけた。

桃に華有り 燦燦として霞のごとし

われ手折らずば ひらひら散りて人の手に ああ ああ

文姜は詩を受取りその氣持ちを解して詩を返した。

桃に 英 あり 燐燐たるその心

今手折らずば 春は再び来るかしら さて来るかしら

諸兒は彼女の返事の歌を読んで文姜が未だ自分に氣持ちがあるのを知り、一層その思いは切実になつた。

やがて魯から上卿公子翬が使者として齊国に文姜を迎えに來た。齊僖公は愛娘なので自ら送つて行くことにした。諸兒はこれを知りて父僖公に願ひ出た。

「妹が魯侯に嫁ぎ、齊魯の友好が図られることは大変素晴らしいことです。しかし、魯侯が自ら迎えに來るわけではないのですから父上がご自分で送つていかれる必要はないでしょう。父上は國事がありますから遠く離れるのはよくありません。力不足ではありますがわたしが父上に代つて参りましょう」

「わしは自分で送つていくと約束している、約束は守らなければならん」

と言つてるところへ、連絡があつた。

「魯侯がご自分でお迎えに見えて謹邑でお待ちになつておられます」
「魯は礼儀のきちんとした國だから氣を使つて途中で自分で迎えに來て、わしをねぎらおうとしているんだ。ここはわしが行かないわけにはいかない」

諸兒は黙つて引下つた。文姜も内心がっかりした。時は九月初旬、吉日は迫つている。文姜は六宮の人々に別れを告げ、東宮へ兄諸兒に挨拶に行つた。諸兒は酒を用意して迎え、お互いに別れ難い氣持ちで見つめ

合つたが、たくさんさんの諸兄の妃たちがいるし僖公から遣わされた宮人も見ている中なので言葉を交わすことはできず、そつとため息をついた。

「文姜よ、送ってくれたあの詩を忘れるなよ」

「兄上お体を大切に、いつかまたお会いできますよう」

僖公は諸兄に国の守りを命じ、文姜を送つて謹邑へ行き魯侯と会つた。

魯侯は舅に対する丁寧な挨拶を行い宴席を設けて歓待し、従者もそれぞれ十分な贈物をうけ、僖公は別れを告げて帰国した。魯侯は文姜を連れて帰国し結婚した。斉国が大国であること、また文姜が想像以上に美人だったので魯侯は非常に喜び愛した。宗廟に参つた後、大臣や親族が揃つて君主夫人に挨拶した。僖公は弟の夷仲年を魯にやつて姜氏の様子を見させた。これ以来、斉と魯は非常に親密になつたのは言うまでもない。読み人知らずの詩がある。

古来男女は慎むべし 兄妹何ぞ離れざる

別れの詩を忘れえず 他日内宮を汚したり

話変わつて、周桓王は鄭伯が王命をかたつて宋を討つたということを聞き非常に怒つて、朝政を虢公林父一人に任せ鄭伯をはずしてしまつた。鄭庄公はこの知らせを聞き桓王を恨み五年間参内しなかつた。

「鄭の寤生(ごせい)は無礼極まりない、これを放置すれば諸侯に波及する恐れがある。朕は六軍を率いてやつての罪を問おうと思つ」

桓王がいきり立つて言う、と、虢公林父は諫めて言つた。

「鄭は代々卿士として功労がありましたが、政権を取上げたために参内しなくなつたのです。親征なさつて天威を落してはなりません、征討の命令を下せばいいと考えます」

「寤生は朕を馬鹿にしている。今回はきちんと始末をつける。朕は寤生とは不倶戴天を誓つたのだ」

桓王はそう言つて蔡、衛、陳三国に鄭討伐を呼びかけた。

この時期、陳では陳侯鮑が亡くなつて、弟の公子佗字伍父が太子免を殺して自立し、鮑に桓公と諡した。国人はこれに服さず次々と逃散していた。周の出兵命令の使者が来た時は即位したばかりだったので王命に違背することはできず仕方なく大夫伯愛諸を大将として鄭へ出兵させた。蔡、衛も出兵命令に応じた。桓王は虢公林父を右軍の将として蔡、衛をこれにつけ、周公黑肩を左軍の将として陳軍をつけ、王自身は中軍を率い、左右の軍がこれと連携を保つという体制をとつた。

鄭庄公は王の軍隊が攻めて来ていると聞き、大臣たちを集め対策を諮問したが誰も先に意見を言おうとはしない。

「天子が自ら軍を率いて来ているのはこちらが参内しなかつたためで筋が通つています。ここは使者を立てて謝罪し、禍を転じて福と成すべきではないでしょうか」

と、正卿の祭足が進言すると庄公は怒つて言つた。

「王は我が政権を奪つた上に我が国を攻め、三代にわたつた勤王の功績を流し去ろうとしているのだ。ここはバシツと出鼻をくじかないと国を保つことはできないぞ」

「陳はもともと親しい仲です、仕方なく出兵したのでしようが、蔡と衛は昔から不仲ですから当然頑張ると思います。天子が怒つて親征するとなれば容易ではありません。堅く守つて先方の戦意が緩むのを待つて戦うか講和するかを決めるべきでしょう」

と高渠弥が言つと、公子元が進言した。

「我われは周の臣国ですから王と戦うのは大義名分が立ちません。もし戦うなら速戦即決が大切です。不才では有りますがわたくしに二計がございます」

「計とは？」

「王軍は三軍に分けていますから我軍も三分しそれぞれにあたります。左右の軍は方陣ですから、わが左軍は敵の右軍に、我が右軍は敵の左軍にあたり、殿には中軍を指揮されて周王に当たっていただきます」

「特に変わった策とも思えないが。そんなやり方で桓王に勝てるかね」
「殿、よくお考えになって下さい、陳侯の佗は主君を殺して勝手に君主になったばかりで、国民は彼には心服していません。無理に徴兵されたもので軍心は一つではないと考えます。先ずわが右軍が陳を不意打ちすれば陳軍は必ず壊乱しますから、続けて左軍が蔡と衛軍を攻めます。陳軍が崩れた事を聞けば必ず鬪志がひるみそちらも壊滅するに違いありません。その後こちらは三軍を合流して周王に当たれば、必勝疑いなしです」

「卿には敵の動きが手のひらの上にあるように見えるようだ。公子呂が生きているようだ」

庄公は大変喜んだ。話し合っている時、

「王軍は繻葛（現河南省長葛）に到着し、三軍は密接に連絡を取り合っているようです」

という国境の警備官の報告があつた。庄公は、
「三軍のうち一つを破ればあとは簡単だ」

と言つて、大夫曼伯に右軍を、正卿祭足には左軍を任せ、自らは上将高渠弥、原繁、瑕叔盈、祝聃等を率いて中軍に司令旗『螳弧』をたてた。祭足が、

「螳弧は宋、許討伐の時のものですし、『奉天討罪』は諸侯に対してはいいですが、王に対しては不適当ではないですか」

と言うと、庄公は

「そりやそうだ、そこ迄考えが及ばなかったな」

と言つて、直ぐに旗を換え瑕叔盈に持たせて、螳弧は武器庫にしまつてその後は使うことはなかった。

「周王は非常に兵法に詳しいようです。今回の合戦はいつもとは違いますから、魚麗の陣を取りたいと思います」

高渠弥が進言した。

「魚麗の陣とは」

「戦車二十五乗を『偏』といい、甲士五人を『伍』といいます。一偏が前進すると別に五組の伍の甲士二十五人が後につき、欠けた場合の穴埋めをします。ある車で誰かが傷ついても伍がそれを補つて退却する必要がないという、とても堅固で緻密な、必勝の陣形です」

「分かった」

三軍は繻葛の近くで陣を敷いた。鄭伯が自ら王軍に敵対して来たと聞くと桓王は怒りで言葉にならず、自ら打つて出ようとしたのを虢公林父が引き止めた。

翌日庄公はそれぞれ陣形を整えて、

「左右の二軍は軽々に動いてはならない、指令旗動きに従つて一斉に攻撃を開始せよ」

と命じた。

一方、桓王は鄭君が出てきたら陣前で彼の罪科を数え上げて敵軍の闘志をくじこうと考えていた。しかし鄭君は整然と布陣はしているが陣門を固めて全く出てくる様子がない。桓王は兵たちに大声で挑発させたが鄭軍は一向に応じない。正午過ぎになって、庄公は王兵の氣勢が緩んだのを見て、瑕叔盈に大旗を振らせた。左右の両軍は一斉に雷鳴のような太鼓を鳴らし勇猛に突進した。

曼伯が敵の左軍に突入すると、陳軍はもとともあまり闘志がなかったので直ぐに逃げ出し、逆に周兵にまで影響して周公黑肩も支えきれず大敗して逃げだした。

また、祭足は右軍に攻め込み蔡、衛の旗に向って突撃した。この二国も支えられず逃げ出した。右軍の將號公林父は剣を立て車前に立って兵達に、

「勝手な行動を取る者は斬る」

と厳しく指令した。祭足もあえてそれ以上迫らなかったので、林父はゆつくりと退却し一兵も損じなかった。

さて桓王は中軍にあって天を突く敵の太鼓の響きを聞き、鄭が打って出たものと思ひ心積もりをして待っていた。そのうち士卒がしきりにひそひそ話をはじめ隊伍が乱れてきたのでよく見ると、軍は壊乱状態で、左右の軍はすでに打ち破られ、中軍さえ今にも崩れそうで、鄭軍が壁のように迫っていた。前後にいた祝聃と原繁の軍が、曼伯と祭足がひきいる勝利軍と合体して攻めて来たので、戦車も馬も將兵たちにもたくさん犠牲がでた。桓王は退却を急がせ、王自身しんがりとなり戦っては逃げ、逃げては戦った。祝聃は刺繡の傘の下に周王が見えたので狙いを

定めて一矢を放つと見事周王の左肩に当った。幸いにも甲冑が堅く厚かったので傷は浅かった。祝聃が車を急がせて正に危機一髪というところへ號公林父が飛び込んできて、王を助けて祝聃に挑んだ。そこへさらに原繁、曼伯たちも揃って駆けつけて来て英雄同士が打合いになったところ突然鄭軍から忙しく引揚げの鉦が鳴ったので、それぞれ軍を引き上げた。

桓王は兵と共に二十里引下って陣營を立て直した。周公黑肩もやってきて陳軍が全く使い物にならず今日の敗戦の元凶だと訴えた。

「これは朕に人を見る目がなかったためだ」

と桓王は顔を赤らめた。

祝聃等は帰陣して庄公に言った

「王の肩を射て王が肝をつぶして逃げるところを追ってもうすぐ生け捕りにできると言う時に引揚げの鉦がなりましたがどうして鉦を打たれたのですか」

「本来、王が不明の天子で理不尽に我々のこれまでの功績を無視して攻めて来たから仕方なく応戦したのだ。諸卿の活躍で何とか国を守ることができた。これ以上何を望むのだ。そなたが言うように天子を捕えたりしていたらどう始末をつけるのだ。王を射たのもまずかった。万一傷が重くて亡くなられていたらわしは主殺しの汚名を着る事になっていたんだぞ」

「殿のおっしゃるとおりです。これでわが国の威厳も保たれました。桓王も我々の実力を知ったと思います。だからすぐに桓王へのお見舞いの使者を出して、王に傷つけるつもりは無かったと丁寧にお詫びを申し入れる事が大切だと思います」

と祭足が言った。

「この使いはそなたでないのだめだ」

庄公はそう言つて、直ちに牛十二頭、羊百頭それに粟や飼料などの品々を百台以上の車に積んで桓王の陣中へ見舞に行かせた。

祭足は桓王に会つて慇懃に挨拶を申し上げます。

「死罪にあたります臣竊生は、鄭の社稷が災禍に卷込まれるのを放置できず止むを得ず自衛の軍を出させていただきました。王のご尊体を誤つて傷つける事など考えてもおりませず誠に恐懼に耐えません。謹んで足を遣わし王にお見舞を申し上げますと共に深くお詫びを申し上げます。粗品ではございますがお納めいただき、何とぞご有恕賜りますようお願い申し上げます」

桓王は面子丸つぶれで恥ずかしそうに黙っていた。號公林父が代つて答えた。

「竊生が自分が悪かつたと認めているのであれば今回は許そう。ご苦労であつた」

祭足は何度も叩首の礼をして退出し、各陣営に見舞いを言つて回つた。史官は詩の中で嘆じている。

神箭を誇り王を射る 君臣の間天地の如きを承知せず

公然と王に向つて譴るなく 虚礼を以て王前に媚びんとは

髡翁は桓王が軽率に鄭を討とうとして自ら恥辱を受けた事を詩つた。

「明珠彈雀」の戒めあり 何ぞ天子親征の必要やあらん

檄を飛ばして爵位を落せど 鄭人どうして王威を惧れよう

明珠彈雀 雀を弾つに明珠は不用 同義の成句割鶏牛刀

桓王は帰国したが敗戦の怒りは抑えられず、直に各方面へ檄を飛ばし、竊生の王無きが如き行為を皆に知らせようとした。號公はこれを諷め、

「輕率はおやめください、四方に檄を飛ばせば敗戦のことを自ら皆知らせることになります。陳、衛、蔡の三国以外はみな鄭の同盟国です。諸侯に出兵を命じても誰も来ないでしょうし、徒に鄭の嘲笑を買うだけです。しかも鄭は祭足を遣わして謝罪し、各陣営をねぎらっていますのでこの度は許して放つておいた方がいいでしょう」

と言うので、桓王はその後ば鄭のことは口にしなくなつた。

(この戦いを繡葛の戦いという)

一方、蔡侯は、周の鄭討伐に加わつて軍中で、陳が君位篡奪事件のため人心が公子佗(新君)に服していないことを探り当てたので、兵を出して陳を攻撃することにした。

さてこの勝負如何になりますか、次回のお楽しみ。

繡葛の戦い この戦は天子の実力の弱さを諸侯に露呈し 周室にとつて徹底的な打撃となつた。

第十回

楚熊通 王を僭称

鄭蔡定 魯坦され庶子突を擁立

陳桓公の庶子躍は蔡姬氏の血筋の人で蔡侯の甥である。陳、蔡は一緒に鄭討伐に参加し、陳は大夫伯爰諸を、蔡は蔡侯の弟蔡季を大将として派遣した。蔡季が伯爰諸にそつと陳の様子を尋ねると次の様な話があった。

「新君佗は太子から君位を篡奪しましたが国民は彼に服してはいません。しかも、狩りが好きで毎日平服で郊外に出かけ、国政を顧みようとはしないのです。近いうちに何か事件が起こるのではないかと心配しているんです」

「どうして篡奪行為を追及しないんですか」

「やりたいのはやまやまですが、残念ながら力不足なんです」

周王が負けて三國軍はそれぞれ本国へ帰った。蔡季は伯爰諸から聞いたことを蔡侯に話した。

「太子免が死んだのなら次はわしの甥が即位するのが筋だ。佗は君位篡奪の大罪人だから許しておくわけにはいかん」

「それでしたら、佗は狩りが好きなようですから、狩に出た時に襲えばいいと思います」

蔡侯は承知して、密かに蔡季に戦車百乗をつけて国境近辺で待伏せさせ、逆賊佗が巻き狩に出てきたところを襲撃させることにした。

蔡季は人を遣つて佗の行動を探らせていたがその間諜から報告があった。

「陳君は三日前に狩に出て国境あたりで駐屯しているようです。」

「よし、それじゃ我が計は成功したようなものだな」

そこで戦車を十隊に分け、狩姿に変装し包囲しようと近づいた。ちょうど陳君が一頭の鹿を倒した所に出会ったので、蔡季はそれを奪った。陳君は怒つて身近な者だけで気軽に蔡季を捕えに来た。季は車を返して逃げた。陳君は車を呼んで後を追った。するとたちまち銅鑼が鳴り響き十隊の狩人が一斉に集まってきて陳君を捕えた。

「わしは他でもない、蔡侯の弟蔡季だ。そなたは君位を篡奪した逆賊、兄の命を受けて賊の退治に來たのだ。佗だけを誅すれば他の者は罪には問わない」

皆地に拝伏したので蔡季は一人ひとりに声をかけ慰撫して、

「亡くなった陳君のお子の躍殿は蔡侯の甥です。躍殿を君主に擁立するのはどうです」

というと皆声を揃えて言った。

「我われも同じ考えです。わたしたちが先導致しましょう」

蔡季はその場で逆賊佗の首を打ち、梟首にして車の上に懸けてそのまま陳に入った。陳君の巻き狩りの従者達が先頭に立つて道を開き、蔡が逆賊を討つて新君を立ようと考えている事を説明したので市井の人々も驚かず、むしろ歓呼の声が道にあふれた。蔡季は陳に着くと、逆賊佗の首を陳桓公の廟に祭り、公子躍を君主に擁立するよう命じた。これが陳厲公である。

周桓王十四年（紀元前七〇六年）のことであった。公子佗は位を篡奪し、たった一年六ヶ月の僅かな間の富貴のために悪名を千載に残すことになった。

陳に公子躍が即位してからは陳・蔡さいは非常に睦まじく数年は何事も無かった。

さて話変わって、南方に楚という国がある。姓は芈、子爵である。出自は上古の帝顓頊の孫重黎である。重黎は帝嚳高辛氏の火正官（火を司る）を担当し彼の恩徳が天下に行渡ったということで高辛氏は彼に祝融という称号を与えた。重黎の死後弟の呉回が祝融の称号を継いだ。呉回の子陸終は鬼方国の君主の娘を妻とし結婚後懐妊したが生まれるまでに十一年かかった。出産時左の脇を切って三人生み、右の脇を切って三人生んだ。長男は樊（はん）といい己姓で衡廬に封じられ夏伯となったが湯王（殷建國者）が桀（夏最後の王）を討伐した際に亡ぼされた。次男は參胡（殷建國者）が桀（夏最後の王）を討伐した際に亡ぼされた。三男は彭祖（ほうそ）といい彭姓で大彭に封じられ商伯となり商の末期に滅んだ。四男は会人（かいじん）といい雲姓で鄭廬に封じられ、五男は安（あん）といい曹姓で邾廬に封じられた。六男が季連（きれん）とい半姓で、季連の後裔に鬻熊（ゆうく）という博学で周文王、武王の師となった立派な人が出た。後に熊を氏とし、周成王は文武の功勞によつて、鬻熊のひ孫熊繹（ゆうよく）を子爵の爵位を与へ相當する広さの荊蛮の地に封じた。彼は丹陽（たんよう）（現湖北省秭歸）を都とした。五代後の熊渠は適切な国家経営で江漢（湖北）地区の民衆の支持を得て王を僭称したが、時の周厲王が凶暴な性格だとわかり、熊渠はその討伐を受けるのを恐れ王を称するのはとり止めた。八代後の熊儀が若敖、

熊通は強暴且つ好戦的な人で王を称したいという気持ちはあつたが諸侯を見渡すとみな周朝を支持していたので輕挙妄動を控えていた。だが周桓王かんおうが鄭に破れたと聞き、熊通は憚るところがなくなり王を名乗る事を決心した。令尹れいゐん（楚の官職、相国しやうこく）の鬬伯比とうはくひは次のように進言した。

「なにかいい考えがあるか」

熊通はその意見に従つて自ら大軍を率いて瑕に陣を敷き、大夫蓬章ほうしょうを使者として隋に和平交渉を申込んだ。隋には季梁きりやうという賢臣と、少師しょうしという佞臣ねいしんがいた。隋侯は諂へんう臣を好み賢臣けむたがる人だったので少師の方を寵信ちゆうしんしていた。楚の使者が来た時、隋侯は二人を召して意見を聞いた。まず季梁きりやうが発言した。

「わたくしが和平交渉に参りましょう。そのついでに楚国の状況も探つてきましょう」

と少師しょうしが言うので、隋侯は彼を瑕へ派遣し楚との和平交渉に当らせた。闕伯比くわくはくひは少師が来ると聞いて、喜んで熊通ゆうつうに進言した。

「少師は考えが浅く近視眼的で、随侯のご機嫌とつて寵を得ていると聞いております。彼が此処へ来るといふのはおそらく我われの内情を探りに来るのだと思います。精銳は隠しておいて、老病兵やかたわの弱兵を外に配置し彼に見せれば我々の力を軽視して傲慢になり、眼中になくなりましょう。そうなればこちらの思う壺です」

隋には季梁きりやうがいるからそんな事しても仕方ないという意見もあったが、熊通はその意見に従った。

少師が楚の陣に入つて来て左右を見ると武器は錆び兵士は年寄りや弱々しいものばかりで精彩がなく、とても戦えそうにない。こんな状態を見ると少師の顔に驕りの色が見え、熊通に言つた。

「楚、随両国はお互いそれぞれ自国を守り何事も無かつたのに、わざわざ和平を求めて来られたのはどういうことでしょうか」

「わが国はこの数年天災が続き、民衆は疲弊しています。小国が協力し合つて強化されるのが心配で貴国と同盟を結んで相互に援け合えたらと思つているんです」

と熊通がごまかして言うと、

「漢東地方の小国はとも弊国の号令に従いますのでご心配は無用です」

と少師は得意そうに言つて同盟を結んだ。少師が帰ると熊通は撤兵を命じた。

少師は帰国し、楚軍の瘦せこけている状態を随侯に報告した。

「幸い和平交渉が終るとわが国を大変怖れてすぐに撤兵いたしました。一軍をお預かりしてこれを追撃すれば全滅はできなくても半分は捉えられると思います。そうすれば今後楚はわが国に一目おくようになるでしょう」

隋侯はこれ聞いて軍を出動させようとした。季梁きりやうがこれ聞きつけて慌てて、

「それはなりません。楚は若敖じやくごう、蚡冒ふんぼう以来代々国政に勤勉で江漢地方に版図を広げており、熊通は甥を殺し自ら君主に立つたほどの非常に凶暴な人であります。わが国に講和を求めるのには何か陰謀があります。我々に理由もなく弱みを見せたのは恐らく誘いの罠です。追撃すればきつとその罠にはまると思ひます」

隋侯は占つてみた結果が「不吉」と出たのでしかたなく楚軍追撃の決定は撤回した。

熊通は季梁が追撃を諫めて止めたという話を聞いて闕伯比を呼んで対策を諮問した。

「諸侯を沈鹿ちんろく（現湖北省鍾祥）に集めてみましょう。隋がやつてくれれば服従していることがはっきりします。もし来なければ盟約違反ということで討伐すればいいでしょう」

闕伯比の提案に従い熊通は全ての漢東諸国に四月一日に沈鹿で会盟（沈鹿の会盟）するという通知を出した。

期日に、巴、庸、濮、鄭、鄆、絞、郢、弋、軫、申、江の諸国は集まつたが、黄と隋だけが来なかつた。遽章を使者に立て黄を問責すると黄は罪を認めた。隋にも屈瑕をやつて問責させたが隋は承服しな

かった。熊通は隋討伐軍を率いて漢水、淮水の間に出てきた。隋侯は群臣を集め楚軍を食い止める方策をたずねた。

季梁が先ず進言した。

「楚は諸侯軍を集めて我われに鋭い切っ先を向けてきてますので事態は容易ではありません。ここは辞を低くして和を求め、楚が了解すれば、その方が修好が図られて最もいいのですが、和解が不成立の場合、楚には大義名分がありません。楚は、我われの卑屈な姿を馬鹿にして士気が緩みます。我方は和解不成立によって兵士たちは憤慨し闘志が高揚します。戦えば思いのほかの成果を得られるでしょう」

「貴殿は何を怯えているのですか。楚は遠来の兵で自殺行為です。速く攻めないと又以前のように逃げられてしまいますぞ」

少師がいきり立つて言うのと、隋侯はその意見に惑わされ少師を車右に季梁を御者に任命し、自ら出陣し青林山の麓に陣を敷いた。季梁は車から楚軍を遠望して、

「楚は軍を左右に分けています。楚の習慣では左が上位ですから君主は必ず左に居てそちらに精兵が集まっているはずですよ。ですから右軍を集中的に攻撃なさいますよう。もし右軍が敗れたら左軍も士気がくじけます」

と進言すると、少師は、

「楚君を避けたのでは楚人の笑いものになるではないですか」

と言い、隋君も同調し先ず楚の左軍を攻めた。楚軍は左軍の陣門を開き随軍が入るにまかせた。隋侯が陣中へ突入して行くと、楚は予定の行

動で四面から伏兵が飛び出して来た。それぞれ非常に勇猛で精強である。少師は楚將闕丹と矛を交え十合も打ち合わないうちに車から斬りおとされた。季梁は隋侯を守って懸命に戦ったが楚兵は引かない。この情勢を見て君主の車を捨て随侯に兵士の服に着替えてもらって小型車で小軍の中へ紛れ込み血路を開いてやつと重囲を脱した。戦車と兵隊を点検してみると三四割にも満たなかった。

「そなたの意見を聞かずにこんな事になってしまった」と隋侯は季梁に言って少師の消息をたずねた。ある兵士が少師の殺されるのを見たところと報告すると隋侯は非常に悲しんだ。

「国を誤らせたあんな男に何の惜しいことがありませんか。今はとにかく楚と講和を急がなければなりません」

「これからはそなたの意見に従おう」

季梁は楚軍の陣営へ行つて講和を願い出た。熊通は怒つて、

「お前ところは盟約を破つて会盟に参加せず、逆に戦争を仕掛けてきたんじゃないか。負けてからへこへこ講和したいなんて、いったいどうしたんだ」

と、罵倒したが、季梁は顔色を変えず落ち着いて言った。

「これまでは君主の寵をいいことに功に貪婪な奸臣の少師が君主に戦争を強要してきたもので、決してわが君の本心ではありませんでした。少師はすでに死に、わが君もその罪を十分反省し、お詫びを申し上げます。べく小職を遣わしました。もしお赦しただけでしたら漢東諸国の首長に号令をかけ共に永く貴国に北面しお仕え申し上げますので、なにとぞ講和の件よろしく、承諾下さいますようお願い申し上げます」

⑧ 車右 古代 戦車 戦う場合武器を持って車の右に乗る兵士 左には弓の射手 中央に御者が乗る 君主の乗る戦車の車右は当然信頼おける者が指名される

「佞臣が死んだということは、天に隋を亡ぼす意思がないということです。許してやつて漢東の諸侯に号令させ、皆で周の天子に楚の提灯^{ちていとう}たちをさせて、周天子の王号を借りて南方の各民族を服従させれる事ができれば我が国にとって大きな利益になります」

と鬬伯比^{とうはくひ}が進言すると、熊通^{ゆうとう}は了解し還章^{いしやう}にそつと使者の季梁^{きりやう}に耳打ちさせた。

「わが主君は江漢地方は全て掌中にありますが王の名で南方の部族を征服したいので、貴国が漢東諸国の支持を取り付けて周王に楚の王号借用許可を陳情していただければありがたく恩に着ます。兵を引揚げて天子の答えを待っていますのでよろしくお願いいたします。」

季梁^{きりやう}は帰って隋侯にこれを報告した。隋侯もこれに従わざるを得ない。そこで隋侯は諸侯と連絡をとり、楚の功績を称え彼らの総意^{そうい}として、南方の未開民族の王化を図るため楚に王号を貸してやつて欲しいという上申書^{じやうしんしょ}を周桓王^{かんわう}に提出した。だが桓王は許さなかった。

熊通^{ゆうとう}はこれを聞いて激怒し、

「わが先祖の鬻熊^{いくゆう}様には周の二王の師^し鬻熊^{ゆうゆう}は周文王 武王^{ぶわう}の師^しという大功があつたにもかかわらず遠く荊山^{けいざん}にある小国に封じられたに過ぎない。今は僻地ではあるが民は多く蛮夷はみな臣服している。それでも王から加封があつたわけではなく賞が行われたこともない。周王は肩を射られてもその報復もできず罰する事もできないではないか。賞する事も罰することもできないで、どうして王といえるのだ。しかも王号は先君熊渠^{ゆうきょ}様がすでに自称されたこともある。わしはその古い呼び名を復活するに過ぎん。周の許可など必要ないわ」

と言つて、遂に軍中で自ら王に即位し楚武王と称し、隋と同盟を結んで帰国した。漢東諸国も皆祝賀の使者を送った。桓王は憤懣^{かんわう}やるかたないがどうしようもない。この後、周はますます弱体化し、楚はますます我がままの度を増していった。熊通が没して熊賁^{ゆうへい}が継ぎ野^{えい}現湖北省江陵に遷都した。蛮族を徵用し中原^{ちゅうげん}を侵犯する程の勢いになってきた。この後召陵^{しやうりやう}の戦い(斉楚の戦い)、城濮^{じやうはく}の戦い(晋楚の戦い)までは誰もその勢いをとめられなかった。

話し変わって話題を鄭に戻す。

鄭庄公は王軍に対する勝利に関して公子元の功を高く評価し、大城^{れきやう}である櫟^{れき}邑^{えい}を任せ封地に準じた。大夫たちにもそれぞれ加封褒賞があつたが祝聃^{しゆたん}の功には何も与えられなかった。祝聃は庄公に文句を言つたが、「王に矢を射た者を賞するわけにはいかない、人が何と言うかわからない」

と庄公が答えると祝聃は鬱憤^{しやくふん}がこうし背中に腫れ物ができて死んでしまった。庄公はそつとその家族の面倒を見てやり、厚く葬つてやつた。

周桓王十九年(紀元前七〇一年)の夏、鄭庄公は病に倒れ祭足を枕元に呼んだ。

「わしには十一人の子がある。世子^{せいし}の忽^{こつ}以外に子突^{しとつ}、子聃^{しび}、子儀^{しぎ}もみなそれなりの男だ。中でも子突が特にいいと思う。三人は争つてどれも天寿を全うしそうにないのが心配だが、私は子突に位を譲りたいと思つている。どうだろうか」

② 中原 黄河流域地域を中原といひ南方を蛮夷として差別視していた。

「鄭曼様は夫人ではありません。子忽殿はずつと世子でしたし、功績も顕著で人民の支持もあります。廃嫡して庶子を立てることに賛成できかねます」

「しかし、子突は氣位が高いから決して臣下に甘んずる事はなからう。もし忽を立てるなら突を母親の里の宋に送るしかない」

子を知ることに親に如かず、紛糾を避けるために公子突を宋へ出した。その五月庄公は亡くなった。世子忽が即位し昭公となった。各国へ諸大夫を報告使節として送り出した。祭足には子突の様子を見させるために宋へ派遣した。

子突の母親は宋の雍氏の娘で雍姑といった。雍氏の一族は多数宋に仕えており宋庄公の絶大な寵信を得ている。公子突は宋に出されてからは母の雍姑をしのび、鄭国へ戻る策を雍氏と相談した。雍氏は宋公に報告してその策略実施の承諾を得た。祭足が昭公即位の報告の使節で宋へ来ると聞き宋公は喜んで、

「子突が帰国できるか否かは祭仲殿の胸三寸にある」

と言って南宮長万に命じて武装兵を朝議殿に伏せておいた。祭足が入って来て挨拶が終わると武装兵がどつと繰り出し祭足を捕えた。祭足が、

「わたしが何をしたいのです」

となじると、宋公は、

「軍の役所でお話ししましょう」

と言って、祭足を軍部の役所に監禁した。水の漏れる隙もないほどに武装兵に囲まれていた。祭足はどのようなことなのか分からず不安で席に落ち着けなかった。夜になって、太宰の華督が酒を持って慰問にやってきた。

「わが鄭君は友好を図るために小職をこちらへ派遣したのであり、まだわたくしは何もお気にさわる事はしていませんが、どういう事でしようか。わが主君の札に何か問題があったのでしょうか、それとも使者のわたくしにまずいところが有ったのでしょうか」

「いずれでもありません。子突殿と雍氏の考えであることは誰も知りません。子突殿が宋に在るのをわが君は憐憫に思っているのです。しかも子忽殿は優柔不断で君主には向いていません。あなたがこの廢立に手を貸していただければわが君はあなたと代々婚姻を通して親しくしたいと申しております。あなたのお気持ち次第です」

「わが君の即位は先君の命令でございます。臣が君主を廢せば諸侯がわたしを許しません」

「雍姑様は鄭の先君のご寵愛を受けておられました。『母寵を受ければ即ち子貴し』と申します。問題は有りませんよ。しかも弑逆事件のない国はありませんよ。実力があれば誰も文句は言えません」

と言ってそつと祭足の耳元で、

「実はわが君の即位についても廢立事件の結果なんです。あなたが協力してくればわが君はあなたの罪にならないようにしますよ」

祭足は眉を寄せて答えなかった。

「あなたがいやだといえ、わが君は南宮長万を大将にして戦車八百乗を出して子突殿を鄭に送り込むつもりです。出陣の日にあなただを血祭りにしますので、わたしがあなたにお会いできるのは今日が最後ということになります」

祭足は驚いて仕方なく承諾した。華督は更に祭足に誓約を要求したので祭足は、

「公子突殿を君主に立てなければ、神よ我に死を賜れ」

と誓いを述べた。史官は祭足を風刺した詩を作っている。

男子たるもの榮辱に動ぜず 宰相なげに脅迫に屈せしや
一死を恐れぬ忠臣なれば 宋人どうして輕視できようや

華督はその夜のうちに宋公に祭足が承諾したことを報告した。

翌日宋公は公子突を密室に呼んで言った。

「わしは雍氏と話合つてそなたを鄭へ返してやろうと思つている。鄭は新君が即位した挨拶にきて密書でそなたを殺せば三城を割譲しようと言つてきた。わしはそれを容認できないのでそなたに内々に知らせておく」

「不幸にも突はこちらへ流れてきましたが、私の生死はすべて君侯の御意のままです。君侯のお蔭で先祖の祀りをさせていただけののですからお話の三城に限つたものではございません」

「わしは祭仲を軍の役所に監禁しておる。そなたのためだ。この大事は仲立ちが居なければうまく行かないからな。わしが盟約を結ぶ仲をとろう」と言つて祭足を召して子突と引き合せ、雍氏も呼んで忽を廢し突を即位させる計画を説明した。三人は血をすすつて盟約を結び、宋公はその立会人となり太宰華督も一緒に立会つた。宋公は突に、謝礼として三城の他に白璧百対、黄金一万鎰、金3.8匁、毎年穀物三万鍾(300kl)の誓約をさせ祭足に保証の署名をさせた。突は国を手に入れることに気が急いでいたのでこれに了承せざるを得なかつた。さらに宋公は突に国政は全て祭足に任せるように言い、突はこれを承知した。さらに祭足に

娘があることを聞き、雍氏の子雍糾をつれて帰つて結婚させ、鄭の大夫に登用させた。祭足もそれに従わざるをえなかつた。

公子突と雍糾は平民の服装に代へ商人に扮装し、祭足について九月一日に鄭に着き祭足の家に匿まわれた。祭足は仮病を使つて参内できないと報告したので、大夫たちは揃つて祭足の屋敷に見舞いに行つた。祭足は百人ばかりの決死隊を壁の後ろに隠し、奥の部屋で大夫たちに会つた。彼らは祭足が顔色もよく衣冠もきちんと調べていてどう見ても病人には見えないので変に思つた。

「相国殿はお元氣のようにお見受け致しますがどうして参内なさらないのですか」

「病氣なのは実はわたしではなく国のほうなのです。先君は子突殿を愛されておられて宋公にお預けになりましたが、今宋は突殿を擁して南宮長万を大将にし戦車六百乗を率いてわが国に攻めて来ています。我が国は君主が変わつたばかりでまだ不安定です。どのようにこれに対処すべきでしょう」

大夫たちは顔を見合わせるが対処の方法は出てこない。

「いま宋軍を返そうと思えば現君を廢し子突殿を立てるしかありません。公子突殿はここにおられます。どちらを取るか、諸君のご意見によつて決めたいと思います」

と祭足が言ふと、高渠弥は世子忽に上卿の位を反対されたこともあり、以前から忽とはうまく行つてなかつたので、劍を抜いて、

「相国の話は国家のためだ。我等新君にお会いしようではないか」

と言った。大夫たちはこれを聞いて予め祭足と話し合いができているものと思い、しかも壁の向こうにちらちらと人の気配が見えるので、みな恐れて声を揃えて賛成した。

祭足は公子突を呼び上座を与えた。祭足と高渠弥が先ず挨拶をすると、大夫たちも仕方なく地に拝伏した。

祭足は予め書いておいた、

「宋国が大軍で公子突殿を鄭君に擁立しようとしており、我われはもう殿にお仕えする事はできなくなりました」

という大夫連名の奏上文に署名させて昭公に届けさせた。同時に昭公に次の密書を書いて送った。

殿のご即位は実は先君のご意向ではなく、臣足の考えでございました。臣は宋に捉えられ公子突殿を鄭に帰す約束を結ばされ、臣は殺されてしまつては殿の御為に働く事ができませんので仕方なく了解いたしました。宋軍は郊外まで来ていまして、家臣達は宋軍を怖がつて迎えにいっております。殿には臨機の措置といたしまして、臣が機会を見てお迎えに上がるまでしばらくみ位を退かれ避難されますようお願い申し上げます。

そしてこの手紙の最後に「この言葉に違背あれば、天もこれをご覧あれ」と誓いの言葉を加えた。

鄭昭公は上奏文と密書を見て、すでに孤立無援であることを知り、嬖妃と涙ながらに別れ、衛国に出奔した。

九月己亥の日に祭足は公子突を即位させた。これが厲公である。大小の政事はみな祭足が取り仕切った。娘を雍糾の妻にし、厲公に言つて雍糾を大夫の職に就けた。雍氏は厲公の母の里であり、厲公が宋にいた

時は雍氏とは密接な行き来が有つたので雍糾を寵信し、祭足並みに扱つた。厲公が即位してからは民衆は安心して彼を支持していた。しかし公子翬、公子儀は不満を抱いていたので厲公の迫害を怖れてその月のうちに公子翬は蔡に、公子儀は陳に亡命した。宋公は突の君位が落ち着いたので手紙を持たせて祝賀の使者を遣わした。

この使者の使命が両国に干戈を交えさせることになるのである。それは次回のお楽しみ。

第十一回

宋公 貪欲に謝礼を要求し戦いとなる

鄭祭足 婿を殺し主君を追放

宋庄公は書状を持たせて使者を鄭に遣わし祝賀の意を表し、直ちに鄭国三城の割譲、百対の白璧と一万鎰の黄金の送付、毎年の穀物の貢納という当時の約束の実行を要求した。

厲公は祭足を召して相談した。

「あの時は帰国を急いでいたのでこんな無茶な要求も聞かないわけにはいかなかったのだが、即位したばかりですぐ実行を要求するなんて、まともに聞いていたら国庫が空になってしまうし、即位してすぐに三城も失なつたとなると隣国に馬鹿にされるよ」

「即位したばかりで未だ人心は定まっていけないので、今国土を割譲すると国を乱す恐れがあるといつて代わりに当面三城から取れた税を宋国へ送り、白璧と黄金はとりあえず三分の一、毎年の貢納は来年からにして欲しいと、丁寧にお詫びをしなからお願ひしたほうがいいと考えます」厲公はその意見に従ひ文書を作つて先ず白璧三十対、黄金三千鎰を送り届け、三城の税はこの冬から納めることを申し出た。しかし使者が復命すると宋公は非常に怒り、

「死んでいた突を生かしてやったのも、貧乏の中から富貴にしてやったのもみなこのわしだ。大したことない謝礼も元はと言えば忽のものじやないか何をけち臭いことを言っているんだ」

と言つて、再び使者をだして即日約束の物は耳を揃え、三城は税ではなく直ちに土地の割譲をしろと要求してきた。

厲公と祭足は相談して穀物二万鍾（1000 kl）を追加納入した。宋使はまたやつてきて、

「約束の事が不満であれば祭足が自分で来て話をつけるべきである」と宋公の伝言を伝えた。

「宋はわが先君から大変な恩をうけていながら、殆ど何も恩返しをしていないのに、いま立君の功を恃み無理難題を押し付け、言い方も非常に無礼です。もうこれ以上聞くことは、ざいません。齊、魯に仲裁をお願いする使者を立てましょう」

「齊、魯はやつてくれるかな」

「以前先君が宋、許に出兵した時齊、魯は協力しました。しかも魯侯が即位した時わが先君も手を貸しています。たとえ齊がだめでも魯はいやとは言わないでしょう」

「仲裁を頼むと言つてもどうするのだ」

「華督が主君を殺し子馮を立てた時わが先君と齊、魯は賄略を受取つてそれを成就させてやりました。魯は郕の大鼎を、わが国は商彝という酒器を受け取ったのです。齊、魯にその商彝を宋に返したいということです。宋公はその時のことを思い出してきつと恥じて無理難題をやめるでしょう」

「卿の話を聞いて夢から醒めたようだ」

宋穆公は兄宣公から位を譲られた事に恩を感じ、死に臨みわが子馮を鄭に出し、另の子与夷、殤公に位を譲た。公子馮は恨みを抱き鄭に出、鄭庄公の庇護を受けた。後に宋相華督が殤公を弑逆し馮を迎え、鄭庄公は馮、宋庄公即位に協力した。

厲公はそう言うて直ちに使者にみやげを持たせ、齊、魯二手に分かれて、新君の即位の報告をするともに、宋君が忘恩背徳で即位協力の謝礼の取立てがひどいことを訴えた。使者が魯へ行って話をすると、

「あの時は、宋君は賄賂として弊国には鼎一個しか出さなかったのに、今回はすでに鄭から随分もらっていてまだ不満なのかなあ。それじゃ今日にでもわたしが自分で出かけて行ってご主君のために話をしてみよう」

魯侯は笑ってそう答えた。一方、齊僖公は忽が世子の時、救援に来て戎に大勝した功績を今も感激していて、娘と結婚を断られた今も齊侯の心中には子忽を思う気持ちが残っていて、今回忽を廃し突を立てたことに關しては不満であつた。

「鄭はどうしてそんなに国君が代るのですか今度の新君は大丈夫ですか。一度わたしが自分で諸侯と一緒に城下を見せてもらいに行きましようかな」

齊侯はそう言うてみやげは一切受取らなかつた。使者の復命を聞き厲公は非常に驚き祭足にたずねた。

「齊侯は怒っているようだな、戦争になったらどうしよう」

「事前に軍備を整えておけば恐れることはありません」

さて、魯桓公は宋公との会合の期日を決めるために公子柔を宋へ遣つた。

「魯侯が話があるといわれるのでしたらわたしの方から国境まで出向きましよう。魯侯に遠方まで来ていただくのは恐縮です」

魯侯は再度使者を出して中間の地を考慮して扶鐘で会う約束をした。周桓王の二十年秋九月の事である。

宋庄公と魯侯は扶鐘で会つた。魯公は先ず鄭公の代わりに宋公に感謝の意を表し、続いて宋庄公に鄭国に対し寛大な処置を求めた。

「鄭君はわたしに多大な恩を受けているんですよ。鶏にたとえたらわたしは自分の羽で卵を抱いてやったんです。だから謝礼の件は彼の本心から言つた事なんです。帰つて君位をとつたら約束したことを反古にしようとしているんです。これが我慢できませんか」

「貴国が鄭に施した恩を鄭が忘れるわけがありません。しかしまだ国主になつたばかりで国庫に蓄えがありません。一挙に約束を履行するのは無理です。少し時間を与えてやっていただきたいのです。決して約束を反故にするわけではありません。わたしが保証しますよ」

「金銀珠玉というようなのは、国庫が空というならそうかもしれないが、割譲する城は現にある物で一言で決まる事じゃないですか」

「鄭君は先祖の遺業を失う事を心配しているのです。列国の失笑を買う事にもなりますから、そこら上がる賦税でこれに代えたいと言っているわけで、すでに穀物数万鍾をお納めしているようですね」

「穀物の二万鍾は毎年収めることになっているものの一部で、三城に代わるものではありません。しかも約束の物品は未だ半分もいたっていないですよ。今でさえこれですから将来はどうなるか分かりません。むしろ約束を履行させるようあなたに協力をお願いしたいくらいですよ」

魯侯は宋公があまりにかたくななので気分を害して頭にきて帰つてしまつた。

魯侯は帰国してすぐ公子柔を鄭にやつて宋公が全く話を聞く気がなかったことを報告した。鄭伯はもう一度大夫雍糾に商彝を持たせて魯侯に懇請するために遣わした。

「これはもとも宋のものです。これを宋に返還して三城の代わりと致したく、白璧二十対と黄金千鎰を合わせてどうかもう一度宋公の譲歩を引出していただけないでしょうか」

魯侯は譲歩させるのは非常に難しいと分かっていたが、仕方なく再び自ら宋国の谷丘（現河南省商丘東）で宋公に合うことにした。挨拶の後、魯侯は鄭伯の気持ちを伝え、白璧と黄金を宋公に渡した。

「あなたが、鄭が約束の半分も履行していないとおっしゃったので、鄭にそのことを強く言いました。これで鄭ができるだけの事をしたと思つてやつてください」

しかし宋公は魯公に一言のねぎらいも謝意の言葉もなく、口を開くたびに、何時三城市を渡してくれるんだとしか言わない。

「鄭君は先祖が代々守つてきた土地を私恩に報いるために軽々に放棄することはできないと考えているのです。今一つ、それに代わるものを持つて参りました」

と言つて部下に指示して黄色の絹の風呂敷包みを捧げ、跪いて宋庄公に渡した。

「私恩？」

宋公は眉をひそめて不快の気持ちを見せた。袱紗を開いてそれがむかし鄭に賄賂として贈つた商彝であることが分かり宋公は一瞬顔色を変えたがすぐに、

「これは何ですか」

ととぼけた。

「これは以前貴国にあった宝で、鄭の先君庄公が貴国に尽力した時にいただいた大切な器物なので家の宝として大切に保管しておりましたが

貴国にお返しすることに致しました。どうか昔日の事を思い起こされ三城の件を免除いただけませんか。鄭の先君はいただいたものを全てお受けいたしました。新君のこれもどうかお受け取り願います」

宋公は昔のことを持ち出されて思はず顔が赤くなったが、

「昔のことは記憶にありません、歸つて倉庫役人に聞いてみましょう」と答えた。

そんな話をしている時突然、燕伯が宋公に会いにこちらに（谷丘）見えていると報告が入った。宋公は魯侯と一緒に燕伯に会った。

「わが国は土地が斉と隣接してしまつて斉の侵攻を受けています。宋公殿のお力添えで講和いたしたいのですが」

宋公は承知した。魯侯も横から口を開いた。

「斉はわが友国の紀をも代々仇に思つております。燕国の講和に尽力されるのでしたら紀のためにお願いします、それぞれが和睦できれば戦争を抑えることができます」

そこで三君は谷丘で盟約を結んだ（谷丘の盟約）。魯侯が帰国して秋が過ぎ冬になつても鄭の件については宋からは何の音沙汰もなかった。

鄭は宋の督促を受け、なんとも方法がなく、三度魯侯に頼んできたので仕方なく魯侯はまた虚と亀の境で宋公と会うことにして鄭の件に決着をつけようと思つたが、宋公は来ないで使いの者が、

① 燕南燕とも言う。姁姓河南。小国。玉伯歸河北の姫姓。大国。燕とは異なる。（北京金盾出版社校注）

② 紀姜姓の小国。魯と代々婚姻による友好関係にあるが、斉とは仇敵。現在の山東省寿光。

「鄭とは文書による約束があるのだから貴君は口出ししないようお願いしたい」

と伝言してきた。魯侯は怒って、

「匹夫め、全く強欲で信頼できない奴だな、それでも国主か」

と怒鳴って、鄭へ行って武父で鄭伯と会い連合して宋を攻めることを約した（武父の盟約）。髡仙の詩がある。

忽追放の鄭 隠公弑逆の魯 同惡なるも思ひは一つ
宋公の強欲に業を煮やし 終に魯鄭兵を合わせて宋を討つ

宋公は魯侯が怒っていると聞いたが、友好関係にひびが入るまでとは考えてなかった。また、斉侯が突の援助に反対していると聞いたので、公子遊を修好のために斉へ派遣し、

「わが主君は今では突の即位に協力した事を後悔しており、貴国と協力して突を攻め君位を忽に戻したいと考えております」

と子突の忘恩を訴え、ついでに燕伯がよく斉との和平を望んでいるので配慮願いたいと頼んだ。

その斉への使者が未だ帰り着かないうちに宋の国境警備から、

「魯と鄭が共同で大挙攻めてきています、すごい勢いで間もなく睢陽に近づこうとしています」

と報告があった。宋庄公は驚いて急遽大臣たちを呼び迎撃対策を協議した。公子御説は宋公を諫めて、

「軍の勢いは正義か不義かで決まります。われわれは鄭に欲張りすぎで、魯との友好関係まで壊してしまいました。ここは敵の方に言い分があります。罪を認めて講和を求め戦争を回避するのが上策です」

という、南宮長万は、

「敵軍は城下に来ています。自衛の一矢も報いなければ弱みを見せることになり国のためになりません」

と言ひ、太宰の華督も長万の意見に賛成した。

宋公は遂に公子御説の忠告を聞かず南宮長万を大将に命じた。長万は猛獲を先鋒に、戦車三百乗を出動させ、両軍はそれぞれの陣形で対峙した。魯侯と鄭伯は戦車を並べて陣前に出て宋君に挑戦の声をかけたが宋君は内心慙愧にたえず仮病を使って出てこなかった。南宮長万は遠方に二個の刺繡の日覆いが風に靡くのを見つけ、その傘の下に両国の国主がいると判断し猛獲の背をさすりながら、

「あれが敵の君主だ、今日は手柄を立てる絶好の日だぞ」

と言つと猛獲はそれを受け長矛を手に執り車をせきたて突進していった。魯、鄭両君主はすごい勢いでやってくるのを見て車を少し下げると、代わりに左右から二人の上将が飛び出した。魯の公子溺と鄭の原繁である。先ず相手の名を聞いた。

「我こそは先鋒の猛獲なり」

聞いたこと無いな、お前なんかでこの刀をよこすわけにはいかん。

大将に代れ、大将となら一騎打ちをしてもいい」

と原繁が言つと猛獲は怒つて矛を挙げて原繁に突つ掛つてきた。原繁は剣で打ち合い子溺は魯軍を指揮し蝶番で挟み込むように猛獲を包囲した。猛獲は一人に二人の敵でも畏れる様子はなかったが、魯将秦子、梁子、鄭将檀伯が一斉にかかると力には限界があり、梁子の放つた一矢が右腕にあたり矛を落して捕えられた。戦車も兵士も捕獲され逃げることできたのは歩兵五十人余だけだった。

南宮長万は敗戦を聞き齒嚙みして、

「猛獲を取り返さなくて、何の面目あつて城に帰れよう」

と言って、長男南宮牛に命じて戦車三十乗を率いて相手を挑発させた。

「負けたように見せて敵を西門に誘い出すのだ、あとはわしに計がある」

南宮牛はそれに答えて出陣し、戟を横に構え大声で、

「鄭の突は背徳の賊だ。いづれ自滅するんだから早々に降参しろ」

と怒鳴っている所へたまたま鄭將が弓を持った兵士を引き連れて巡回して通りがかり、未だ若い牛を見くびって掛かつていった。

三合も打ち合わないうちに牛は車を返して逃出した。鄭將は逃がすまいと後を追つて西門まで来ると突然砲声が響き、南宮長万が後方を断ち南宮牛は車を返し挟み撃ちにした。鄭將は矢を数発放ったが南宮牛には届かず、ついに長万の手に捕えられた。鄭將原繁は自分の部隊の將が小隊で敵陣に近づいたと言うのを聞き、心配して檀伯と一緒に救出に行つた。しかし宋の城門が開き太宰華督が自ら大軍を率いて応戦してきた。そこへ魯將公子溺が秦子、梁子を引きつれ助成にやつてきて、両軍松明をかかげ混戦が続き明け方になってやつと戦いは終つたが、宋軍の損失は甚大であった。南宮長万は捕えた鄭將を宋公に報告しこれと捕虜交換で猛獲を連れ戻す許可をもらつた。鄭伯もこれを認めそれぞれの大将の檻車を陣前に出して交換し、その日は休戦とした。

一方斉への使者公子遊の方はというと、齊僖公に宋公の命を伝えると、

「鄭の突は兄を追放して君位に立った者だからわたしとしては不満です。しかし当方は今、紀とのことがあつてそちらの事にかまつている

暇はありません。もし貴国の方で紀討伐の援軍を出してくれるのなら、こちらにも援軍を出さないわけでは有りません」

と答えた。公子遊は齊侯に挨拶をして直ちに帰国し宋公に報告した。さて、魯侯と鄭伯が陣中で宋攻撃策を協議していたところへ突然紀国から火急の通報があつた。魯侯がその国書を開いてみると、

齊国に攻められて危急の状態にあります。代々婚姻関係を通じ友好関係にある貴国に是非救援をお願いしたい。

という内容である。魯桓公は驚いて鄭伯に、
「紀君が危ないのです。救援に行かざるを得ません。宋城も急に落とすことはできませんから、とりあえず引揚げましょう。宋公が再び請求して来るようなことも無いでしょうかから」

と言うと鄭の厲公も、

「貴国が紀国救援に行かれるのでしたら、わたしも全軍を率いて一緒に結しましょう」

と言ひ、直ちに陣を引き上げ一緒に紀国へ軍の移動を開始した。魯侯が三十里先行し鄭伯はしんがりをつとめた。宋は先に公子遊から斉が来ないという返書を受け取つた後で敵が陣を移動したのを知つたので、誘いの手ではないかと心配して追撃は止め斥候を出して遠くまで様子を探らせに遣つた。その結果

「敵は全て国境を越え、やはり紀国へ向かいました」
と言う報告があつたのでやつと安心した。

「斉が鄭攻撃を援助してくれると言ふのなら、わが国も斉が紀を攻めるのを援助しなければなりませんね」

と太宰華督が進言すると、南宮長万が自分に行かせてくれと言つ。宋公は許可し戦車二百乗を出して今回も猛獲を先鋒に命じて昼夜兼行で斉救援に遣つた。

一方、斉僖公は衛侯と会い燕にも徵発の声をかけた。衛が出兵しようとした時宣公が病気で亡くなり、世子朔が即位して衛惠公となった。惠公は喪中ではあつたが約束を守り戦車二百乗の援兵を出した。燕伯は斉に併呑されるのを心配してこれを機会に修好を図ろうと自ら兵を率いて会盟に参加した。紀侯は、三国の兵数が多いので、深い溝を掘り高い塁を築いて堅く籠城して救援を待つていた。ある日突然魯と鄭の二君が救援に來たという知らせが入つた。紀侯は城に登り遠望して大変喜び、直ちに呼応体制の手配をとつた。

魯侯が先に到着し軍前で斉侯と会つた。

「紀は代々弊国とは姻戚關係にあります。紀が犯しました貴国への失礼に對し深くお詫び申し上げお赦し頂きたくおわびに参上いたしました」
「わが先祖の哀公が紀の讒言により周王に釜ゆでにされ、すでに八代になりますがいまだに報復できていません。そちらが親戚を援け、当方は仇を討つとなれば問答無用、戦争あるのみです」

魯侯は怒つて直ちに公子溺に出撃させた。斉は公子彭生をこれに當てた。彭生は万夫不当の勇者で公子溺では齒が立たない。秦子、梁子二将と一緒に加つたがそれでも勝てず、中に入つて両者を離すのが精一杯であつた。衛、燕両君も斉魯が戦いになつたと聞いて攻撃に参加した。しかし後から鄭伯の大軍が到着し、原繁が檀伯ほか諸将を率いて斉侯の本營に突撃した。紀侯も弟嬴季に城兵を率いて加勢させ、喊声は天を震

わせた。公子彭生もこれを見てあわてて車を返した。六国の戦車は混戦となつた。魯侯は偶々燕伯に会つたので、

「谷丘の盟約では宋、魯、燕は有事には協力することになつていたじゃないですか。にもかかわらず、すすった血が乾かないうちに宋が盟約を破つたのでわたしは宋を討つたのですが、あなたも宋と同じですね。目前の斉に媚びるだけでは国家長計のためにはならないのではないですか」

と言うと、燕伯は信義にもとつた事を恥じ顔を伏せて戦いに敗れたと見せかけ逃げ歸つた。衛の大将もことごとく壊乱し、斉軍も破れ死体は野辺にあふれ血の河となつた。彭生も矢に当たり危うく死ぬところであつた。正に危急という時に宋軍が到着したが、そのときは魯、鄭軍は戦いを終えていた。胡曾先生は詩の中で言う。

紀を小国と輕視して 一蹴せんと豪語するも

敵は滅びずして斉惨敗 嘲笑買つて恥を千載に残せり

宋軍がやつと到着したばかりでまだ荒い息が収まつていないうちに、魯鄭は突如着いたばかりの宋軍を叩いた。宋軍はまだ陣立てができていなかったたのでこれも大敗を喫して逃げ、結局、各国は残兵を集めてそれぞれ帰国することになった。斉侯は紀城を振り返り誓つて叫んだ。

「我在れば紀無く、紀在れば我なし。彼と我は不俱戴天なり」

紀侯は魯、鄭両国主を迎えて歓待し兵士たちには十分にねぎらいの授賞を行った。

「斉軍は損害を受け益々紀に対する恨みを深くすると思われます。今後の安全確保の策について、ご両所のご意見をお聞かせいただけませんか」

と麴季が心配して言ったが、

「直ぐには斉も動かないでしょう。徐々に対応策を進める事です」

と魯侯もそう答えるしかなかった。翌日紀侯は城外三十里までも送って涙ながらに別れた。

その後鄭厲公は魯に修好の使者を派遣し、引き続き武父の盟約を確認した。これより魯と鄭、宋と衛がそれぞれ同盟国となった。この頃、鄭の楝邑を守っていた大夫子元が亡くなったので祭足は厲公に檀伯を後任に推挙した。周桓王二十二年（紀元前六九八年）の事である。

齊僖公は紀に敗れ、憶慚がたまり病に臥つてしまった。この冬病状は重くなり、世子の諸児を枕元に呼んだ。

「紀はわが代々の仇敵であり、やつを倒してこそ親孝行だ。お前が位を継いだら一番にやることだぞ。紀を倒せないやつはわしの廟には入ってくれない」

諸児は跪いて父親の遺命を受けた。僖公はまた夷仲年の子無知を呼び

「無知はわしの同腹弟のたった一人の子だからわしが今までやってきたように十分面倒を見てやってほしい」

と言いつけ、言い終わると両眼を閉じそのまま亡くなった。諸大夫は世子諸児を奉じて葬儀を行ったあと君主に擁立した。これが齊襄公である。

宋庄公は鄭に恨み骨髓で、鄭が宋に渡した黄金や玉璧を斉、蔡、衛、陳四国に分け与え、鄭討伐に協力してくれるように依頼した。斉は旧主の葬儀があつたばかりなので大夫の雍廩に百五十乗の戦車をつけて援兵するのに留めた。蔡、衛もそれぞれ將軍を派遣した。これに対し鄭厲公は受けて立つとしたが上卿の祭足が反対した。

「それはいけません。宋は大国です。国を挙げての挙兵でその勢いは大変なものです。もし負けでもしたら国の維持は難しくなります。たとえ勝つたとしても代々恨みを買っただけで、何時までも平和はおとずれません。静を以て動を制す。堅く守って出ないのに限ります」

厲公は決めかねていたが、祭足は民衆には籠城を命じ、『何人も戦斗を主張するべからず違反者は斬る』と伝令を発した。宋庄公は鄭が堅守不戦に徹しているのを見て、鄭国首都の東郊をほしほしに略奪し鄭国の祖廟を打毀し辱めて帰って行った。鄭厲公は悶々として心中祭足を恨み、

「俺は国主だが、やる事全て祭足の言うがままで、国主になっても何の意味もない」

と鬱憤を漏らし、心中密かに祭足を除こうと考えるようになった。翌年の三月周王が病に倒れ危篤状態になった。周公黑肩を枕元に呼んで、

「礼法に従つて嫡子を立てるが、わしは次男の克を可愛いと思つてゐる。卿にお願いしたいのだが、将来兄が死んだら弟が君位を継げるよう取り計らつてやつて欲しい」

と言つて崩御した。周公は遺命に従つて世子伋を王にした。これが庄王である。

鄭厲公は周桓王の葬儀にお悔やみの使者を出そうと思った。しかしこの時も、

「周王朝は先君に恨みを持っています。最近では祝聃が桓王を弓で射ていますので、いま殿がお悔やみの使者を出すと恐らく侮辱を受けることになるでしょう」

と祭足に強く諫められそれに従ったが、心中は穏やかではなかった。ある日、厲公は宮殿のうらの庭園を大夫雍糾だけを供に連れて散歩していた。厲公は鳥が飛び交い鳴き合っているのを見てふと寂しそうにため息をついた。

「今はまさに春うらら、鳥という鳥はみな思う存分楽しんでいます。殿は諸侯として貴いご身分なのに、何か憂鬱そうなご様子ですが、どうなさったのですか」

「見てみろ、園林の鳥たちは楽しそうに自由に鳴いて飛び回っている。それなのにわしは鳥のように自由を享受することさえできないんだ」

「殿が悩んでおられるのは、君主らしく自分で決定できない事が原因ではございませんか」

厲公が黙っているので、重ねて言った。

「君は父の如く、臣は子の如し」と申します。父親の愁いを分かち持てない子は不孝であり、主君の難儀を解決できない臣は不忠です。もし臣を使える者とお考えでしたら、お心の中に何かお有りの場合はぜひお願いします。たとえ火の中の水の中、命を掛けて解決致します」

厲公は人払いをして雍糾に言った。

「卿は仲（蔡足）の愛婿だろ」

「婿は婿ですがまだ愛される所まではいつていません。臣たちの結婚は実は宋君に無理に押し付けられたもので、父祭足の本心ではないのです。父はいつも旧君のことを言っていて、彼の心にはまだ旧君のことがあるようですが、宋を恐れて旧君に戻すことができないのでしょうか」

「卿が仲を始末すれば、仲の地位はそなたに継いでもらう積りだ。何かいい案はあるか」

「今、東郊は宋兵に毀されて民家は未だ復旧していません。司徒に庶民の住まいの修復をお命じになって、祭足に食物や絹布などのみやげを持たせて住民の慰撫に当らせませう。臣は現地で祭足のために食事の用意をして、鴆毒（第22回注二）の入った毒酒を飲ませるといふ案はいかがでしょう」

「卿に任せるから、細かい点はよろしくたのむ」

雍糾は帰宅して妻の蔡氏に会うと、思わずうろたえた様子を見せてしまった。

蔡氏は変に思っただけだ。

「今日御殿で何か有ったのですか」

「いや、何も」

「そうおっしゃってもどうも可笑しいわね。先ほどの顔色からするときつと今日御殿で何か有ったんだわ。夫婦は一つでしょ、大小にかかわらず隠さないで話して欲しいわ」

「殿が戦災に遭った東郊の住民の慰撫のためにそなたの父上に東郊へ行ってもらおうとおっしゃるから、その時わたしは父上の長寿祝いをしようと思うんだ。ただそれだけだよ」

「あなたがわたしの父を祝うのにどうして郊外へ行く必要があるの」

「これは君命なのだ、そなたには関係ない」

蔡氏はますます疑いを深めた。そこで糾を酒で泥酔にさせ、

「殿が汝に祭仲を殺せと命じたのを忘れたのか」

と聞いてみた。糾は夢の中でぼんやりと答えた。

「そのような大事をどうして忘れられましょう」

翌朝蔡氏は糾に詰問した。

「あなたはわたしの父上を殺そうとしているのね、全て分かったわ」

「そんなこと絶対にない」

「夜中にあなたが酔っ払って自分で言ったのよ、隠してもだめ」

「仮にそうだとしたらそなたとはどうなるのだ」

「あなたに嫁いだ以上、あなたに従うしかないでしょう」

それを聞いて蔡氏に計画を全て話してしまった。

「父上はおそらく行くかどうか決めてないと思うわ。だからその日ま

でに一日里帰りして必ず行くように強く勧めてみましょう」

「うまくいけばわしが父上の地位に就くことになる。そうした

らそなたと富貴を楽しめるぞ」

蔡氏は予定通り事前に実家へ帰り母親に訊ねた。

「私にとつて父上と夫とどちらがより親密かしら」

「そりやどちらも同じだよ」

「じゃあ、大切さから言うとうちかしら」

「そうねえ、それは父親でしょうね」

「どうして？」

「未婚の娘には夫はいないけれど父親は居るわ。既婚の女性も再婚はできるけれど、生まれ変わる事はできないのよ。夫は人が決めるけれど、

父親は天が決めるものでしょ。夫の方が父親より得やすいと言えるんじゃないかしら」

母親は無心に話をしているが、蔡氏はそれを聞いて目が醒め、

「今日は夫のことを考えないで父上のために来たのよ」

と、涙ながらに母親に言つて、雍糾の謀計を母親に密告した。母親は驚いて蔡足に伝えた。

「他言無用ぞ、その時にわしがきちんとやるから」

その日が来た。蔡足は腹心の強鉏に勇士十数人を選ばせ利刀をしのば

せ同行させた。公子闕にも私兵百余人を率いて変事に備え待機させた。

祭足が東郊に入ると雍糾が途中まで迎えに出て非常に豪華な接待の席を

用意していた。

「国のために走り回るのは当然の事だ、婿殿、どうしてこんな事をす

るのかね」

「郊外は春の盛りですので一献差し上げたく存じまして」

と言つて大杯になみなみ注いで祭足の前に跪いて差出し、満面笑顔で

口では長寿を祝つた。祭足は手を貸すようなふりをして、左手で糾の腕

を掴み、右手で杯を取つて地にまくと火が飛び散つた。

「匹夫め！わしをどうしようというのだ」

と大声で言い、左右のものに、

「やれ！」

と叫ぶと強鉏と勇士たちが一斉に飛び掛り、雍糾は斬られてその死体

は池に投げ込まれてしまった。厲公が雍糾を援助するために郊外に伏せ

ておいた武装兵士は早々に公子闕に見つけられてやられてしまった。厲

公はこれを聞いて驚き、

公はこれを聞いて驚き、

第十二回

衛宣公 新宮殿を築き太子の妻を娶り

鄭高渠弥 蔡足不在中に昭公を弑し子晳を擁立

「祭仲はわしを許さないだろう」と蔡国へ出奔した。後に、雍糾が計画を妻にしやべつたから祭足が事前に準備していたのだという事を聞き、「国家の大事を女房にしやべるようでは殺されても仕方ないな」と厲公はため息をついて言った。

厲公が出奔してしまったのを知って、祭足は公父定叔を衛国に派遣し昭公忽を迎えて再び国主に推戴し、

「やっと、旧君との約束を履行することができた」とほっとした。

さてこの後は如何なりますか、次回のお楽しみ。

衛の宣公は名を晋といい、淫乱で慎みのない人である。公子の時、父庄公の姜夷姜と私通して一子を生み名前を急子とつけ民間で育てさせていた。宣公が即位した時は当初の邢妃には愛をなくして夷姜だけを可愛がり夫婦同様であった。だから急子を世子として右公子職に託していた。急子が十六才になった時、齊僖公の長女を息子の嫁にすることに決めたが、彼女が絶世の美女だと聞くと又悪い虫が出て彼女を自分のものにしてしまったのである。そして淇河の河岸に宮殿と同様の華麗な高台を造らせ新台と名付けて、先ず急子を宋へ遣つて彼を離しておき、左公子泄を齊国に遣つて姜氏を直接新台に迎えた。これが宣姜（魯文姜の姉）である。

時の人は『新台』という詩を作つてその淫乱をそしつた。

派手な新台満々たる河水 燕婉の求めしは老醜の簾條か

魚網が敷かれ白鳥去る 燕婉の求めしはあの戚施か

簾條、戚施はともに醜い容貌であり、宣公に喩えている（燕婉は温順な容貌を意味し宣姜に喩える）。詩の意味は、姜氏は本来素敵な新郎を求めていたのに思いがけずこの醜惡な男に嫁することになったといっている。

後の読者は、齊僖公の姉の宣姜、妹の文姜という二人の娘は、姉は舅に、文姜は兄に穢され人倫天理ここに滅び去つた、と嘆くことだろう。詩がある。

春秋一の美女は二妾なるも 美貌は斉衛の綱常を乱せり

天性の美貌国を損なう 霸王を佐けし無塩に如かず

急子は宋から帰って新台へ復命に行った。宣公は母の礼をとるよう
言つて姜氏に会わせたが、急子は全く恨みのかけらも見せなかった。宣公
は齊女を自分のものにしてからは新台で朝から晩まで遊び耽り、夷姜を
顧みなくなつてしまつた。一緒に住んで三年、齊姜は二子を生んだ。長
男を寿、次男を朔といった。昔から、『母を愛せば子も抱かむ』とい
うが、宣公は齊姜を偏愛し、昔急子を愛した気持ちは全て寿と朔の方へ移
つてしまつて、急子のときに思つた以上に寿、朔兄弟に位を継がせたい
と考えるようになった。ただ、公子寿は天性の兄弟思いで急子とは同腹
の兄弟のように仲がよく、いつも父母の前で兄を取りもつた。その急子も
優しくて慎み深く非のうち所がなく、宣公もその気持を言い出せない
でいた。そつと左公子泄に託し、将来公子寿が君主になるのを助けてや
つて欲しいと頼んだ。公子朔の方は寿と母は同じだが、性格や賢愚の度
合いははるかに異なり、幼いけれどずるくて、母親が父の寵愛を受けて
いるのに甘えて密かに無頼の徒を集めて、非望を抱き、急子を嫌うだけ
ではなく兄の寿さえも邪魔者のように思つていた。ただ、今は急子を除
くことが急がれる。そこでしばしば母親をそそのかして、

「父上は今母上や我々兄弟を可愛がつてくれますが、急子は長
兄ですから長幼の序からいつて将来はやはり彼が君位を継ぐ事になりま
しょう。まして夷姜は母上に父上の寵愛をさらわれ恨みが重なつてい

はずです。急子が君主になれば夷姜が国母になつて大権を握ることにな
りますから、そうなれば我々親子には安心して身を置く所がなくなつて
しまいます」

と焚きつけていた。齊姜はもともと急子のところへ嫁してきたのだが
今は宣公のものになつており子供もいるので急子はむしろ邪魔者である。
そこで公子朔と示し合せてしばしば父親に急子の讒言を耳に入れてい
た。

ある日急子の誕生日に公子寿は祝いに呼ばれ朔も同席した。席上、
急子と寿の二人が談笑していて朔が口を挟む場が無かつた。嫉妬に燃え
体の具合が悪いと言つて途中で退席し、母親の齊姜のところへ戻つて涙
を流しながら、

「ぼくは喜んで寿兄さんと一緒に急子兄さんの誕生日を祝に行つ
たのに、急子兄さんは酒宴の半ばほろ酔い状態でぼくを『息子よ』なん
て呼ぶんだ。腹が立つたから一言一言不満を言つたらあいつは、『お前の
母親は本当は俺の女房だったんだ。だからお前はわしを父上と呼ぶのが
当然なんだ』と言うんだよ。何か言おうかと思つたら思い切りぼくをぶ
とうとしたんだ。寿兄さんが止めてくれたんで急いで逃げて来たんだけ
れどこんなに馬鹿にされて頭にきたよ。母上、父上に言つてお仕置きを
お願いして下さい」

など大嘘をついた。齊姜はそれを信じて、宣公が来るとむせび泣き
ながらあれやこれや有ること無いことを訴えた。

「急子はわたしを辱めて朔に『わしの母親夷姜はもともと父上の庶母
(祖父の妾)でそのまま父上の妻になつた人だ。しかもお前の母親はもと
もとわしの女房だったんだ。おやじにちよつと貸してあるようなもので、

綱常 儒教の根本三綱五常をいふ。三綱は君臣父子夫婦。五常は信義礼智仁
無塩 戦国期齊宣公の后。無塩出身。容貌は醜が才徳あつて王后となる。

衛国の山川と一緒にいづれ皆俺に返してもらうことになる』などと言うらしいのよ」

宣公は公子寿を呼んでこのことを確かめた。

「兄上はそんな事は言っておりません」

彼はそう言うが宣公は半信半疑で、内侍を通じて夷姜に子供の教育が悪いと責めた。夷姜は憤怒で胸が詰まり、何処にもはけ口がなく首を吊って自殺してしまった。

髯翁は詩の中で嘆いている。

父妾と私通 乱倫は恥かしき衛風

夷姜の自縊は 宣公節を乱せし結果なり

母の死で急子は悲しみに暮れたが、父親に咎められるのを怖れて密かに泣いた。朔は齊姜に、

「急子は生母が死んだのでいつか我々親子の命をもらうと口にしてる」

と言つてさらに急子を誹謗した。宣公は元々そんな話は信じてなかったが、昼に夜に将来が不安だと急子抹殺をそのかされ宣公も将来を案じてとうとうその気になってしまった。しかし誅殺の理由がなく随分迷ったあげく、道で他人にやられたことにして人目をまかすことにした。

この頃、丁度齊僖公から紀国討伐のための出兵要請があつた。宣公と公子朔は相談して、出陣の期日を決めるといふ名目で急子に白い旗を持たせて齊国に使者に立たせることにした。途中莘野（現山東省莘県）という者へ行くには船で行っても必ずそこで上陸する要所がある。急子は何も準備をしていないはずだからやるにはそこが絶好の場所である。朔

が以前から集めていたならず者を利用する日が来たのである。彼らに盗賊を装わせ莘野で待ち伏せさせ、白旗を持った者が来たら一斉に飛び掛かり殺してその旗を持つて復命すれば重賞を与えると命じた。段取りを全て終え、齊姜に報告すると彼女は非常に喜んだ。

さて、公子寿は父親が人払いをして公子朔と二人だけで話しているのを不審に思つて後宮の母親宣姜に探りをいれた。彼女は寿がわが子だから安心して隠さず話してやつた。

「これは父上のお考えなのよ。みんなわたしたち親子の将来のためにやつてくれているのだから、決して他言しないよう気を付けておくれ」寿はその計画はもう変えられないし引き止めても無益とわかつていたので、そつと急子に会つて父親の計画を話した。

「莘野は必ず通らなければならない所ですから、逃れることはとうてい難しいでしょう。他国へ逃げてから、後の事を検討なさった方がいいと思います」

「子としては命令に従うのが孝というものだし父親の命に従わなければ叛逆児だ。世の中に父親のいない国はないから、出奔しても何処にも安住できる場所はないよ」

そう言つて旅装束を調え毅然として旅立つた。公子寿は泣いて引き止めたが聞かなかつた。

「兄上は本当に仁義の人だ。兄上が盗賊の手にかかつて死ねば、父上はわたしを世子にするに違いない。子には親が必要だし弟には兄が必要なのだ。兄上より先に行つて代わりに死んだら兄上は助かるにちがいない。父上がわたしに死んだことで悟つてくれたら父上と兄上の両方のためになり末代まで名を残すことができる」

と思つて小舟に酒を積込み大急ぎ河を下り急子に送別会を申し出た。

「君命を帯びているので留まることはできない」

急子はそう言つて断わるので、寿は小船から酒樽を移してきた。満杯に注いで急子に進め、何か言おうとしたが思わず涙が杯に落ちてしまった。急子は急いでそれを飲んだ。

「すみません酒を汚してしまいました」

「そなたの情けを飲みたかつたのだ」

寿は涙をぬぐつて言つた。

「この酒は私たち兄弟の別れの酒です。兄上が私の気持ちをとお受けくださるのでしたら、どうかたくさん飲んでください」

「よしやろう」

二人は涙ながらに向かい合い、差しつ差されつ。寿は酒量をおさえたが、急子は差されるまま飲み泥酔して人事不省に陥り、横になつてグーと眠り込んでしまった。そこで寿は、

「国主の命令だから、遅らせる事ができない、今から私が替わつて齊へ行くことにした」

と言つて急子の手から白旗を取りわざと船首に立てた。急子の随行者にはきちんとお守りするよう申しつけ、袖から手紙を取り出し世子が目覚めたら渡すよう指示したあと、自分の部下を連れてすぐに舟を出させた。

荦野に近づき車を準備して岸に上がろうとすると、例の待ち伏せていた無頼漢が、ひらめいている白い旗を見て、てつきり急子が来たものだと思ひ込んで口笛で合図すると蜂が群がるように集まつてきた。寿は毅然として大声で呼ばわつた。

「吾れは当国衛侯の長子で斉国へ使者として行くものである。そなたたちは何者か、どうして邪魔をするのか」

「我々は衛侯の蜜命を受け汝の首をいただきに来たんだ」

寿の従者は相手がものすごい勢いなので事情が分からず驚いて逃げ散つてしまい、可愛そうな公子寿は乱刀を浴びて即死した。賊は首を木の箱に収め一斉に船に乗り込み旗を倒して帰つて行つた。

一方急子の方は、もともと酒量が少ないので、酔うのも醒めるのも早い。彼は随分早く醒めて、寿がいらないのに気が付き変だと思つていると、従者から寿の手紙を渡された。封を切るとそこには八つの字が書かれている。

『弟已代行、兄宜速避』(寿が代りに参りますから兄上は速く逃げて下さい)

急子は思わず涙を落とした。

「寿はわたしの身代わりになつたのだ、速く行つてやらねば。でない」と弟が間違つて殺されるかもしれない

舟を電光のごとく急がせた。その夜は月が水のごとく冴えていた。急子は弟を思い瞬きもせず船首前方を見ていると、寿の船が見えた。喜んで、

「天の助け、弟は未だ大丈夫だった」

と言つと従者が、

「あの船はこちらに向かっていますよ」

と言つ。急子は変に思つて船を近づけた。近づいてみると船のやぐらは明るく、船には見知らぬ連中が乗つていて寿の影は見えない。急子はどうもおかしいと思つてごまかし、

「殿のご命令は完了したか」

と聞くと賊の連中はそれが極秘の内容だったので公子朔が差し向けたものだと思ひ

「終りました」

と言つて箱を差し出した。急子は箱を受取り開いてみると確かに寿の首である。驚いて大声を出して泣いた。

「何という事だ、何の罪も無いのに」

賊が驚いてどうしたのかと聞くと、

「わしが本当の急子だ、父上が殺せと言われたのはこのわしだ。これは弟の寿だ。何の罪があつて弟を殺したのだ。早くわしの首を落として父上に持つて行け」

賊の中に二人の公子の見分けがつくものがないで月明かりに照らしてよく見て、

「本当に間違ひだ！」

そこで賊はすぐ急子を首にして一緒に箱につめた。急子の従者たちは驚いて逃げてしまった。詩経の《衛風》の中に《乗舟》^{きやうし}という二人に関する詩がある。

二人が船で流される はろばろとその影が遠ざかる

いつも思ひ続けつつ胸騒ぎして落ち着かず

³¹この詩は『詩経』《邶風》二子乗舟と題する詩（詩序に「二子乗舟は急寿を思ふなり。衛宣公の二子、相急に死す。国人悼みて之を思ふ」の詩を作るなり）とある。『詩経』國風平凡社東洋文庫で白川静氏は「舟で流れ去て行く二人のことを思ひ煩う歌、具体的にはどういふ状況なのか知れないが、泛々として流されいくというのは舟の類ではなからかと思ふ。『寿と急子のように、非命に死んだものが罪人を水に投ずる』ように舟葬でもする風俗が有たとすればの死の状況に合うがこれを証する資料はな」と注記している。詩の訳は白川静氏の訳を採用した。

二人が船で流される はろばろとその影が去つて行く
いつも思ひ続けつつどういふことが起こるやら

詩の作者は明言はしていないがこの詩で二人の悲しい思いを追想しているのであらう。

さて、賊たちはその夜のうちに衛城に走りかえり、先ず公子朔に会い白旗を提出して公子二人を殺した経緯を細かく説明し、誤殺による処罰を怖れていた。ところが、なんと一本の矢が二羽の鷺を射て朔の密かな思ひに命中し、罰するどころか、むしろ賊たちに思ひがけない厚い褒賞が与えられた。朔はすぐに母親の所へ行つて、

「寿兄上は旗をもつて先に行つて自ら命を落しましたが、幸いにも急子が後から行つて、神様は彼に自分で名乗らせ兄上の死を償なわせてくれたようです」

と報告すると、齊姜は寿が死んだ痛みはあつたけれどとにかく急子を除く事ができ、心配の種が除かれ悲喜こもごもであつた。母子は相談して宣公への報告をしばらく待った。

ところで、右公子職は急子を託され、左公子泄は寿を託されていた³²ので、二人はそれぞれ自分が託された公子の事が気になり探らせたところかくかくしかじかという報告であつた。はじめはそれぞれ自分の主人のためだけを考えていたが、こうなると同病相哀れむ立場に変わり一緒に相談するようになった。宣公が朝、朝廷に出ると二人はすぐ朝堂に入り

³²この部分原書は「左公子泄原受急子之託、右公子職原受公子寿之託。本回当初に記述があつた急子、寿の担当公子が逆である。本訳は本回当初記述「史記 衛康叔世父の記述と同じ」に従つた。原文の誤りか。

地にひれ伏して大声で泣いた。宣公は驚いて事情をたずねた。二人は急子と公子寿が殺された状況を細かく説明し、

「お預けいだいた者の気持ちとしてどうか遺体を揃え埋葬させていたがたく存じます」

と言ひ、更に声を上げて泣いた。宣公は急子は別としても可愛がつていた寿まで同時に殺されたと突然聞かされ、驚いて真つ青になりしばらくは声も出なかつた。驚きが治まると悲しみに代り涙ながらに。

「齊姜がわしを誤らせたのだ。齊姜のために大変な事をしてしまった。何度ため息をつきながら言つた。直ぐに朔を呼び出しこの件を聞いたが知らないふりをする。宣公は怒つて朔に殺した賊を逮捕して来るように言い付けた。朔は口では承知したが賊を宣公に渡そうとはしなかつた。

宣公は驚きのショックと公子寿を思い嘆き病に臥せるようになった。目を閉じると夷姜、急子、寿が現れ彼らの面影の中で泣き続けた。祈禱の効果もなく半月ほどで亡くなつてしまつた。公子朔が喪を發し君位を継いで恵公となつた。この時、朔は十五歳。左右の公子は罷免された。庶兄の公子碩（史記等では「碩」字、昭伯は恵公に服さずその夜のうちに斉へ出奔した。公子泄と公子職は恵公を恨み、急子と寿の仇討を考え続けるのである。

話は変わる。衛恵公朔は即位した年に、斉と紀の戦いに援軍を出して鄭に敗れたので鄭厲公に恨みを持つていた。その後突然鄭の使者が来て、鄭厲公が出奔し家臣たちが前君主昭公を迎えることになつた事を知つた。朔はほくそんで早速昭公の帰国の護衛の兵を出した。

祭足は何度も頭を下げ、当時追放を防止できなかった事をわびた。昭公は罰しはしなかつたが内心不満がのこつていて、以前のように祭足を重視することはなかつた。祭足はびくびくして心休まらず、病氣と称して参内しなくなつた。

高渠弥は元々昭公とは合わなかつたので、昭公が復位すると誅殺されるのを心配して、そつと決死隊を集め昭公を殺し臺を立てようと考えた。その頃、鄭厲公は蔡に居て蔡の人たちと非常に親しくなつていた。彼は鄭の椽邑を根城にしたくて檀伯（椽邑の責任者）に使者を出して椽の借用を頼んだが檀伯は断つた。そこで蔡の人を商人に扮装させて椽に商売に行かせ、椽の人と結託して機会を見て檀伯を殺してしまつた。厲公は椽邑に住み着き城も堀も広げ軍拡充し鄭を襲撃しようと謀り遂に鄭に敵対する事になつた。祭足はそれを聞いて大変驚き急いで昭公に報告し、大夫傅瑕に命じて大陵に兵を駐屯させ厲公の進路を抑えさせた。厲公は鄭に用意があると知つて魯侯に、復国後は必ず以前未納のものを支払うといつて宋に謝罪を依頼した。魯使が宋へ行くと、宋公はこりずにまた欲の芽を出して、宋蔡衛の連合軍を厲公に出してやつた。衛侯朔（恵公）は昭公が復国の時護衛の勞をとつたが、昭公はそれに対し札を失して謝札に行かなかつたので彼に不満を持つていた。そこに宋から会盟の話があつたので、即位以来諸侯と会つていないこともありすぐに要請に応え自ら出陣した。

急子、寿の報復を考える公子泄は職に言つた。

「君主は遠方へ出かけた。今こそ事を挙げる時です」

「事を挙げるには先ず君主を擁立しなければならぬ。それによつて民心を安定させる事が不可欠です」

密議の最中に大夫甯跪が訪ねて来てた。

「公子お二人はあの船の恨みをお忘れではないでしょうね。今日のこの機会は逃すことはできませんよ」

「ちようど今推戴する方について相談しているところですがまだ適当な方が見つからないのです」

「公子のみなさんを見渡して見ますと黔牟殿が人柄もよく補佐するに値する方です。しかも周王の嬖殿ですから国民を抑えることができます」

三人は盟約してこの事を決めた。そこで密かに急子、寿の元の家来に「衛侯は鄭討伐に行ったが敗死した」という偽情報流させて公子黔牟を君主に擁立した。百官の朝見が終った後、朔が二人の兄を殺し父君を憤死させた罪を公表した。そして急子、寿両公子の喪を発して改葬し、使者を周へ派遣し即位を告げた。甯跪は郊外に陣を張り恵公の帰路を押えた。公子泄は宣姜を殺そうとしたが職が制止し、

「斉姜は死が相当だが、斉侯の妹だから彼女を殺して斉侯を怒らせる事になるのはまずかろう。生かしておいて斉と修好を図るべきです」と言うので別宮へ移し、月の食禄だけは欠かさないよう支給した。

さて、宋、魯、蔡、衛四国は軍を合わせて鄭を攻めた。祭足は自ら兵を率いて大陵へ行き傳瑕と一緒に敵に当たり臨機応変な対応で応戦したので、四国はどうしても破る事ができず、やむを得ず引き上げた。

衛侯朔は鄭討伐に出兵し何の功も無く引き返す途中、二公子が反乱を起こしすでに黔牟を立てたことを聞き斉に逃れた。斉襄公は甥だということで宿舎、食禄の面で厚遇し、挙兵して復国することを承諾した。朔

は襄公に、帰国すれば国倉の財宝は全てお札に差し上げましよう」と約したので襄公は大変喜んだ。

そこへ突然魯の使者が来て、懸案の斉侯に王姫を降嫁させる件について周王の許可が下りたという報告があった。王に結婚の司掌を命じられたので魯侯はその相談のために自ら斉国に来たいという。襄公は妹の文姜のことを思い出し、永く会っていないから夫人も一緒にいらつしやうとたらいかがですかと使者を遣わして提案した。

「鄭への出兵は何時になりますか」

と大夫たちが訊ねると、

「黔牟も周天子の嬖だ。わしは今周と婚姻を結ぼうとしているのだから、その件は暫らく遅らしたい」

と言った。だが、衛が宣姜を殺す恐れがあるので公孫無知を使者に命じ公子碩(朔の恵公即位の時斉に出奔を衛に返し、そつと宣姜を公子碩の妻にさせるよう指示した。これは朔の復国の下地作りでもある。無知は命令を受けて公子碩を連れて衛へ行き、新君黔牟と会った。この時、公子碩の妻はすでに亡くなっていたので、無知は斉侯の考えを衛国の君臣ならびに宣姜に話した。宣姜は承知した。衛国の家臣たちも、もともと宣姜が中宮(諸侯の正妻を偕称しているのは不満で、これが中宮の名を取上の口実になるので文句を言う人はいない。ただ、本人である公子碩は父子の倫理(宣姜は父の妾である)から頑なに拒んだ。無知はそつと公子職に、

「この事がうまく行かなければ斉侯に報告のしようがありません」

と言つと職は斉侯の機嫌を損ねるのを心配して一計を案じた。すなわち碩を酒宴に招待して女樂人に酒を注がせて泥酔にさせ、そつと別宮

へ連れて行つて宣姜と同衾させ、酔つてゐるうちに事が終わり、醒めて後悔しても後の祭りという筋書きである。結局筋書き通りになって宣姜と碩は夫婦になり、男女五人が生まれた。長男斉子は早くになくなり、次男は戴公申、三男は文公毀、娘二人はそれぞれ宋桓公夫人、許穆公夫人となった。史臣は詩に嘆じている

息子の嫁を妻に取る　子が庶母を犯せしはその報い（庶母は父の妾
夷姜の子が宣姜を娶るも源をたどれば奇異にはあらず

この詩は昔宣公が夷姜を娶り急子を生み、今もう一人の子碩が宣姜を娶り五人の子を生む。家法は相伝するものだと言っているのである。

話変わって、鄭祭足が大陵から帰つてきたが、旧君突（厲公）が棟にいるのは目の上の瘤であり対策を考えた。斉と厲公は紀と戦つた時の恨みがある（鄭厲公は魯と共に紀を救援して斉を打ち破つたので斉が厲公に与する心配はない。しかも斉の新君（襄公）は立つたばかりなので修好を図るには好都合であり、魯侯は斉侯の結婚を司掌するくらいだから斉魯はうまくいっている。斉、魯と友好条約を結びこの二国の援助が得られれば宋は怖くなくなるので祭足は自分が土産を持つて両国へ行つてくると昭公に願ひ出た。しかし昔から『智者も千慮に一失あり』というが、祭足は厲公に対する防備は考えたが、高渠弥が以前から昭公に恨みを持ち謀略を計つていたとは気づかなかつた。彼は祭足がいるために昭公に手が出せないでいたのである。いま祭足が遠出するのを知つて心配がなくなつた。高渠弥は密かに公子亶を家に迎え、烝祭（冬の祭り）の折、途中に決死隊を伏せておいて、突如昭公を襲わせ盗賊の仕業にして、子亶を

君主に推戴するという計画を相談し実行した。亶は祭足を帰国させ高渠弥と共同で国政に当るよう命じた。哀れ昭公は復国後三年足らずで遂に逆臣のために横死してしまつた。昭公は世子であつた頃から高渠弥に問題あること事はわかつていながら、二度の国君在位の間に危険人物を除く事ができず災いの元凶を残してしまつたのは、優柔不断の結果であるといえよう。

惡草の根絶は自明の理　蛇虎何ぞ同居できよう
やらざればやられるの理　高渠を危険と知りつつ機会を逸す

さて鄭子亶は如何なりますか、それは次回のお楽しみ。

第十二回

魯桓公 夫婦で齊へ行き

鄭子臺 高渠弥 齊侯に誅殺さる

齊襄公は祭足が来たと聞いて喜んで迎えた。祭足から突然高渠弥が昭公を殺して子臺を立てたと聞き非常に怒ってすぐにも拳兵してこれを討とうと思つたが、魯侯夫婦が到着したので鄭の件はひとまずおいて、自ら灤水へ迎えに行つた。

ところで魯夫人文姜の方では、齊使が迎えに来ると内心兄のことを想ひ、里帰りを口実に桓公に同行をたのんだ。桓公も妻を溺愛していたのであえて反対はしなかつたが、大夫申繻は諫めて言つた、

『女に部屋あり、男に家あり』これが古来からの決まりです。礼法は守るべきです。礼を冒せば乱が生じます。女子が嫁すれば、父母が在世中は年に一度は里帰りをすることになっていますが、すでに夫人の両親はいずれも亡くなられ、妹が兄の家に里帰りという礼法はございせん。魯は礼の国でございます、こんな礼に反することをなさつてもよろしいのでございましょうか』

しかし桓公はすでに文姜に許可していたので申繻の諫言を聞かなかつた。夫婦が同行して灤水に到着すると齊襄公は先に来ていた。慇懃に出迎えそれぞれ挨拶を交わし一緒に齊都臨淄に入った。魯侯は周王の命を伝え婚儀の段取りを決めた。齊侯は非常に感激して大宴会を開き魯侯夫婦を歓待した。そのあと文姜を昔の宮妃宮女たちに会わせると言つて宮中へ連れて行つた。何と襄公は予め秘密の部屋を用意していて、そこで改めて文姜と私宴を開いて語らう準備ができていたのである。酒も半

ばになると二人は目と目が合つてむらむらとして天倫も顧みず遂に一線を越えてしまった。二人は離れがたくとうとう宮中で泊まり、日が上がつても抱合つて起きず、魯侯は置き去りにされてさびしく一夜を過ごした。

魯侯は疑念を抱き部下を内宮の入り口付近へ遣つて探らせた。その報告によると、

齊侯には今は正妻がなく大夫連称の従妹である連氏という側女がいるのだが、今では彼女には見向きもしない状況であり、姜夫人文姜は昨夜は宮中に入つても宮妃宮女たちには会つておらず、兄妹だけで話し合つていた。

ということであつた。魯侯はどうも様子がおかしいと思い、宮中へ乗り込んで確かめようと思つていたところへ、文姜が内宮から出て来たという報告があつたので、魯侯は出て来るのを待つて勢い込んで姜氏に問いただした。

「夜の夜中に宮中でいったい誰と飲んでいたので」

「連妃さんとよ」

「何時終つたんだ」

「永い間会つてないので話が長くなつたわ。月が白壁の上にあつたから真夜中だったのね」

「兄上も一緒に飲んでいたのでか」

「兄はいませんでしたわ」

「兄妹なのになぜ一緒にやなかつたのだ」

「途中で一杯注ぎに来てくれてすぐに出て行きましたわ」

「連妃さんとの席が終つても宮中から出て来なかつたのは何故だ」

「夜遅くなりすぎたので都合がつかなかったの」

「何処にいたんだ」

「ひどいわ、どうしてそこまで詰問するの。宮中にはベッドのある空き部屋はいくつもあるわ。わたしは自分で西宮へ行つて寝ましたわ。以前わたしの部屋だった所よ」

「今朝はどうしてこんなに起きるのが遅かったのだ」

「遅くまで飲んで疲れてしまったの。朝のお化粧をしてこんな時間になつていたとは気が付きませんでしたわ」

「泊まつた部屋には誰か一緒にいたのか」

「宮女がいましたわ」

「兄上は何処で寝ていたのだ」

「文姜は思わず顔を赤らめて言つた。

「妹のわたしが兄の寝室など知るわけがありませんわ、言えたら可笑しなことじゃないですか」

「しかし兄上の方は妹の寝室を知つてたのじゃないか」

「どういふこと？」

「昔から男女は離れるべきなのだ。そなたが宮中に泊まつて兄妹同部屋だったことは、わたしはもう全部分つてゐる、ごまかすのはよしなさい」

姜氏は口では言い逃れをしながら泣いているが、内心は慙愧に耐えなかった。魯桓公はいま斉にゐるので何ともしようがない。まさに『腹は立てども物言えず』である。人を遣つて斉侯に挨拶させ、帰国してから対応を考えるつもりであつた。

一方齊襄公は自分がやつた事が良からぬ事と分かつていたので姜氏は宮中から出て行く時心配で、密かに腹心の力士（力の強い男）石之紛如（せきしふんじよ）

に後をつけさせて、魯侯夫婦が会つた時どんな話をするかを探らせた。その報告を聞き襄公は魯侯の早耳に驚いた。間もなく魯侯の使者が辞去の挨拶にやつてきたので、これは事実が露見したため怒つて帰るのだと思ひ、牛山で送別会をやりたいと強く引きとめた。魯侯は何度も言つてくるので仕方なく参加した。文姜は宿舎の屋敷で悶悶としていた。

襄公は文姜を帰してしまふのが惜しいし一方では魯侯の報復を恐れていた。こうなれば毒食わば皿まで、公子彭生に宴が終つたあと魯侯を宿舎へ送り届ける時、車の中で殺してしまふよう指示した。彭生は紀との戦いの時矢を受け瀕死の重傷を負つた恨みがあるので喜んで承知した。牛山での送別会では歌舞が賑やかに演じられ襄公も大変懇懃であつた。魯侯はただ悶悶として何も言わなかつた。襄公は大夫たちや女官内侍たちに魯侯に酒を勧めさせ、魯公も内心は鬱々としていたが酒で憂さを晴らすと、思わず別れる時挨拶もできないほどべろべろに酔払つてしまつた。

襄公は、彭生に指示し酩酊した魯侯を抱いて車に乗せた。城門から二里ほどの所で彭生は魯侯が熟睡しているのを見て、ものすごい力と鉄のような腕で魯侯の肋骨をつかんでへし折つた。魯侯は一声絶叫して車中を血だらけにして即死した。

「魯侯は急性アルコール中毒で急死された。早く帰つて殿に報告してくれ」

と彭生は周りの者に指示した。誰もがうさん臭いと思つたが何も言わなかつた。史臣は詩にいう。

男女間には礼法あり 夫妻で愚かな国外旅行
申緇の忠告聞きしなほ 車中の骸になるべくもなし

齊襄公は魯侯が急死したと聞くと慟哭して悲しんで見せて、直ちに手厚く納棺し魯國に魯侯の急死報告の使者を立てて、棺の引取りを依頼した。魯の従者は帰国して車の中で殺された事をつぶさに報告した。大夫申繻は、

「国に一日たりとも君主なき日があつてはなりません。世子同殿に葬儀の次第を決定頂き先君のお柩が帰り次第即位の礼を行いましよう」
桓公の庶子で長男の公子慶父字孟がいきり立つて言つた。

「齊侯は人倫を乱し礼を失する事はなほだしくわが父君まで巻き添えにしたのです。戦車を三百乗お預りして齊に報復いたしたいと存じます」

大夫申繻は返事に迷い、そつと謀士施伯に齊討伐の可否を相談すると、「齊の責任かどうかはつきりしないことだし、戦力から言えば齊のほうが上ですから、逆に敗れると彼の無道を認める結果になってしまう恐れがあります、ここは我慢すべきでしょう。とりあえず車中での事故を究明して齊侯に公子彭生を誅殺させる事ができれば列国に対する説明もつくし、齊もそれには応ずると思います」

と言う。申繻は慶父を説得し施伯に国書の手稿を書かせた。世子は服喪中なので大夫の名で国書の提出と柩の引取りのために齊国へ使者を派遣した。齊襄公は国書を開いて目を通した。内容は次の通り。

外臣申繻 齊侯殿下にご挨拶申し上げます。わが主君は天子の命を奉じて、ご結婚の打合せのために自ら貴國まで出かけて参りましたが、そのまま帰って参りませんでした。しきりに車中の事件が取沙汰されております。我われと致しましては諸侯に広がっているこ

の恥辱のもつて行き処がありません。何とぞ彭生殿のご処断をよろしくお願い申し上げます。

襄公は読み終わつてすぐに彭生を呼び出した。彭生は自分では功があつたと思つているから胸を張つて入つて来た。襄公は使者の前で彼を罵倒して、

「わしは魯侯が酒をお過ぎしになつたので、お助けして車でお送りするようそなたに命じておいたのに、注意を怠り急死なさるようなことをしてしまつた。も早言い逃れは許さん」

と言つて衛士に刑場で斬刑に処するよう命じた。彭生は、

「この淫乱君主めが！妹といちやついて妹婿を殺しておいて俺に罪を被せようとしやがる。死んだら鬼になつて必ずお前の命を取つてやる」

襄公は耳を覆つたがみな襄公を軽蔑して密かに嗤つた。

襄公は周へ婚姻の許可を感謝する使者を派遣し、同時に魯侯の靈柩車を魯へ送り届けさせた。しかし文姜はそのまま齊に留めた。

魯大夫申繻は世子と共に柩を郊外まで迎えた。同は直ちに葬儀を行なつて即位した。すなわち魯庄公である。申繻、顯孫生、公子溺、公子偃、曹沫等の文武の大臣は朝廷の綱紀を正し、庶兄の公子慶父、庶弟公子牙、嫡弟季友もそれぞれ国政に参画した。申繻は施伯の才能を推挙して上士に登用した。

魯庄公は群臣を集め齊侯結婚の司掌に関して相談した。施伯が口を開いた。

「いま、わが国には三つの恥がございます」

上士 中堅の役人層 周代の諸侯の支配層は大夫と士の一層で士は上士 中士 下士に分かれていた。

「三つの恥とは？」

「先君は生前からとかく好ましくない噂（繼位の経緯について）がございました。これが恥の第一です。先君夫人が斉に残つたままで未だ帰つておられず兎角噂が立つこと。これが第二の恥です。斉は先君の仇の国であり、しかも今殿は喪中にもかかわらず婚礼手続きを進めなければなりません。断れば王命に背くことになり、断らなければ世間のもの笑ひになります。これが第三の恥です」

「なればその三つの恥をどのようにして解消すればいいのだ」

「世間の悪評を封じるためためには自ら行動を正すことです。疑いを持たせないためには先ず自信を持つことです。先君の即位は周王の承認を得ておりませんが、周王が結婚の司掌をお命じになるのです。したらこの機会に王に先君の継位の追認をお願いできれば第一の恥は解消します。

先君夫人が斉に残っている件は礼をもつてお迎えし殿が孝をお尽くしになればこの恥も解消します。最後の喪中に婚礼を司掌する件はなかなか難しい問題ですが、策がなくはありません」

「その策とは？」

「郊外に王妃のために公館を建て、殿は服喪中を理由に上大夫に王妃をお迎えに行かせご案内します。これで王命に背くことなく、大国の気持ち逆なですることもなく、我々としては服喪の礼を失することもありません。これらによつて三つの恥はすべて解消できると考えます」

「申纏がそなたの智謀を褒めていたが、全くその通りだ」

「と言つて全面的に彼の案に従つた。」

魯使大夫顓孫生が周へ王妃を迎えに行き、同時に先君の黄泉（冥土）における榮譽のために、即位追認のための正式な礼装を調えた天子の使

者を願い出た。周庄王はこれを認め桓公の名を下賜する魯への使者を物色した。周公黑肩が使者を申し出たが庄王は許さず、大夫栄叔を遣ることにした。

もともと先王は庄王の弟王子克を可愛がついて、臨終の時黒肩に克を頼むと託していた。だから庄王は黒肩を疑つて彼が勝手に外国と交流し王子克与党が増えるのを心配して彼を重用しようとしなかった。黒肩は庄王が自分を疑っているのがわかり、その夜王子克の屋敷へ行つて王姫の結婚の日に反乱を起こし、庄王を殺して王子克をたてようと相談した。大夫辛伯がその謀計を聞き庄王に密告したので黒肩は殺され王子克は追放され燕に亡命することになった。

さて、魯使顓孫生は王妃を斉に送り届け、魯侯の命を奉じて夫人姜氏（文姜）を魯へ連れ帰る話をした。斉襄公は離したがらなかったが正論には勝てず止むを得ず帰すことにした。姜氏は斉侯を愛していて別れたくなかつたし、また人倫に悖つた行為をしてきた事が恥ずかしくもあり、気は進まなかつたが仕方なく涙ながらに再会を期し帰ることになった。途中の様の宿舎がきれいに整理されていたので、

「ここは魯でもなく斉でもない、わたしの家にちよいといいわ」といつて付き人に魯侯に報告させた。

「未亡人には静かな所がいいわ、魯には帰りたいくないの。帰るのは死んだ後よ」

魯侯は母親が恥ずかしくて帰れないのだとわかつて、祝丘に別宮を立て姜氏を迎えた。魯侯はしばしば土産を持つて母を訪ねた。魯庄公にとって文姜は人情から言えば生みの母であり、義としては父の仇である。もし文姜が魯に帰つていたら逆に難しい事になつていたかもしれない。

文姜が糕と祝丘を行ったり来たりしていたので魯侯は孝を全うすることができたともいえるであらう。

夫君殺され面目なく糕に留まり斉魯の間を徘徊す
愧を忍んで魯に帰らば 庄公は親と仇を如何せん

話し変わって、斉襄公が魯桓公を殺した人倫に反した（妹文姜との）荒淫無知の行動に国中が騒ぎ出した。襄公は内心慙愧の気持ちもあり、急いで使者を出し王姫を迎えて結婚したがそんな事では収拾がつかない。そこで名譽挽回のために何か人心を回復できる事をやろうと考えた。

鄭国は弑逆事件を起こしているし衛国は君主を追放している。どちらも問題行為であるが、衛の公子黔牟は周王の嬖であり王姫を嫁にしたばかりだからまだ黔牟と事を起こすのは好ましくない。先ず鄭の罪を問おう、そうすれば諸侯はきつとわしに畏敬の気持ちをもつはずだ。

だが、鄭を討つといっても絶対に勝てるとはいえない。そこで一計を案じ、使者を出して子亶に書簡を送り、首止での会盟を呼びかけた。斉侯と交流を持つておけば国家は泰山の如く安泰だと考え子亶は大変喜んで、高渠弥、祭足と一緒に出かけようとした。祭足は仮病を使って同行しなかった。原繁がそつと祭足に聞いた。

「新君が斉侯と友好を結ぼうとしているのにどうして一緒にいらっしやうって補佐なさらないのですか」

「斉侯は強くて残忍です。大国を受け継いで覇を称える気概を持つています。しかも鄭の先君昭公様は斉国に功績があった（太子のとき斉僖公を救援して戎を撃退した）ので斉侯はなにか思うところがあるのでしよう。大国というものは何を考えているか分かりません。大国が小国と結ぼう

という場合は何か考えあつてのことです。行けばあるいは殺されるかもしれせん」

「もしそういう事になると、次の君主はどなたでしよう」

「きつと子儀殿でしよう。あの方は君主の相があり、前君庄公様もそんなことをおつしやうておられましたよ」

「あなたの智謀には皆感心しています。わたしもしばらく様子を見てみましょう」

その日が来た。斉襄公は王子成父と管至父の両將に兵をそれぞれ百人ばかりつけて、側近と力士の石之紛如でびつたりと周りを固めていた。高渠弥は子亶と一緒に会盟の壇に登り、斉侯との挨拶を終えた。寵臣孟陽が跪いて血の皿を襄公に捧げ、襄公の目くばせを受けると孟陽はさつと立ち上がった。

襄公は突然子亶の手をとって、

「貴国の先君昭公は何故死んだのか」

と叫んだ。子亶は顔色が変わり、恐怖に震えて言葉が出ない。高渠弥が代わりに答えた。

「先君は病気で亡くなりましたが、どうしてそれをお聞きになるのですか」

「悉、祭の時、賊にやられたのであつて、病氣じやなかつたと聞いているぞ」

高渠弥は隠し切れないと判って仕方なく、

「先君はもともと風邪氣味でしたので、確かに賊に脅かされてそれが元で急逝されたのです」

「君主が出かける時は警備があるはず、賊は何処にいたのだ」

「以前から嫡子と庶子の兄弟争いがございまして、それぞれ私党を抱え機会を狙っていましたので、防備は大変難しかったといえます」

「その賊は捕えたのか」

「これまで手配をして捜索いたしておりますが、未だに行方を掴めておりません」

斉侯は怒って、

「賊は目の前にいるわ、何も捜索に手はかららん。おまえは国家から爵位を受けながら私怨で君主を殺し、わしの前で未だ言い逃れをするのか。わしは本日おまえの先君のために仇討ちをいたす」

と言つて、力士を呼んで「やれ！」と命じた。

高渠弥はもう弁解しなかった。石之紛如は先ず彼を縛り上げた。子璽は叩頭して

「今回のことはわたしのあずかり知らないことで、全て高渠弥がやった事です。どうか命だけはお助けください」と哀訴した。

「高渠弥がやった事だとわかったからには彼には死んでもらう。そんなのその弁解はあの世でやってくれ」

斉侯が手を一振りすると、王子成父と管至父がそれぞれ百余人の決死隊を率いて一斉に現れ、乱戦の中で子璽は非業の死を遂げた。随行して来た者も斉の兵力が多く誰も手を出せずさつと逃げてしまった。

「そなたの主君は逝ってしまったが、それでも生きたいか？」

「自分の罪の深さは承知しておりますので、死を賜りたく存じます」

高渠弥は生き延びる事はできないとわかりこう答えると、襄公は、

「お前を一太刀で斬り殺すほど甘くはない」

と言つて高渠弥を國中引き回しの上、南門外で車裂の刑に処した。車裂の刑とは、受刑者の頭と手足を五輻の車の轆に縛りつけそれぞれ別方向へ向けて牛に鞭を当てて体を五つにばらばらにする刑である。俗に『五牛分屍』(第89回注)といわれ、刑罰の中で最も重い極刑である。襄公はこの義拳を諸侯の耳に届くようにと、わざとこの極刑を採用し宣伝に使つたものである。襄公は高渠弥の首を南門に掛け、「逆臣かくの如し」という立て看板を掲げた。そして子璽の死体を片づけ東郭外で藁で葬り、鄭へ使者を立てた。

「周には逆賊に対し当然の刑罰があります。貴国の高渠弥は主君殺しの張本人で勝手に庶子を立てたので鄭先君の弔いの意味で鄭国のためにこれを誅殺致しました。改めて新君を立てられ、今後も両国の平和友好を希望致します」

原繁はこれを聞いてため息をついた。

「祭仲の知恵はわたしの及ぶ所ではない」

諸大夫は新君主に誰を推戴するかを協議した。叔詹は、

「前君主が櫟邑におられるのでこの方をお迎えしたら如何です」と言う叔詹の意見に祭足は反対した。

「出奔した君主は二度宗廟を辱めることになります。むしろ公子儀殿を推戴すべきだと思います」

原繁もこれに賛成し、陳から子儀を迎えられ君位を継承し、祭足は上大夫に、叔詹は中大夫に、原繁は下大夫にそれぞれ任命された。

国政は祭足に委ねられた。民を思いやり災害に備え、斉、陳には修好の使者を派遣した。また、楚とも同盟を結び毎年貢納し属国になる事に

した。厲公れいこうにも乗する隙を見出せず、これよりしばらく鄭では平和が続いた。

さてこの後如何になりますか、それは次回のお楽しみ。

第十四回

衛侯朔 王軍を破り復国

齊襄公 巻き狩りで幽鬼に遇う

王姫は齊へ来て襄公と結婚した。この王姫は生来貞淑かつ静かで言動も誠実な方であつた。一方襄公は正反對だからお互いに合うわけがない。王姫は宮殿に来て数ヶ月で襄公の妹との關係を聞かされ、

「人倫に悖り、禽獸にも劣る行為ですわ。わたしは不幸にも人非人に嫁いでしまったのね。これも運命なのかしら」

と悶々と塞ぎがちで、ついに病氣になつて一年たらずで亡くなつてしまつた。

襄公は王姫が亡くなつて益々憚る事なく、狩りにかこつけてしばしば糕しゃくへ通い、祝丘しゆくに使いを出して密かに文姜ぶんきやうを糕に呼び寄せ昼夜淫樂に耽けた。魯庄公に文句を言わせないように武力で威嚇しようと、自ら大軍を率いて紀を襲いその三ヶ所の邑を取り、軍を紀の都城に移して使者を送り、

「速く降伏状を出せば、国は生かしてやろう」と紀侯に突きつけた。

「齊はわが父祖からの仇敵である。仇の庭に跪いて一時の生を乞うなどできるものではないわ」

紀侯はそう言つて、夫人の伯姫はくきに手紙を書かせ魯に救援を頼んだ。齊襄公は、

「紀を援助しようとするものがあればまずこれを討つ」

と公言した。魯庄公は鄭に紀の救援を頼んだが、厲公が櫟にいて鄭を襲う機会を窺っているので兵は出せないと断ってきた。魯侯も一人では何もできず、滑まで軍を進めたが斉の兵力を恐れ三日で引き返してしまつた。

紀侯は魯軍が撤退したと聞き、守り切ることとは不可能とみて、城と妻子を弟の嬴季に委ねて宗廟に涙の別れをして真夜中に出奔し行方をくらました。

翌朝、嬴季は大臣たちに諮つた。

「国のために死ぬか、先祖を祀るか、いずれが大切と考えるか」

「先祖の祀りが大切でございましょう」

大夫たちは全員そう答えた。

「いやしくも宗廟を祀る事ができるのなら、膝を屈しても惜くはない」

嬴季は早速降伏文書を書き、斉の外臣となつて宗廟を守ることを願ひ出て、斉侯はこれを許した。嬴季は紀国の土地戸籍簿を全て斉国に渡し叩頭の礼をとつて情けを乞うた。襄公は戸籍簿を受取り宗廟のそばの三十戸を蔡祀料として割き嬴季を廟主とした。紀の伯姫は驚いて心臓麻痺で亡くなつた。襄公は夫人の礼をもつて葬儀を行い魯の機嫌をとつた。

伯姫の妹叔姫は昔、姉の嫁入り時に紀と一緒に嫁いで来た女性で襄公は彼女を魯に帰してやろうと思つたが、

「女性にも義というものがございいます。夫人と共に嫁して参つた限り、生きては嬴氏の女性であり死すれば嬴氏の霊となります。捨てられましたら帰る所がございせん」

と、そのまま残つて節を守りたいというので襄公はこれを許可した。彼女は節を守つて数年後になくなつた。史家はこれを称えている。

世は衰え 淫風は代を重ねたり

斉侯は妹と淫乱 衛侯は息子の嫁を横取りし
禽獣のさま 倫理も綱紀も廢れたり

小国に一人の妾あり 主なき後も節操を誓ひ

故廟を守り故国へ帰らぬ貞女叔姫

『柏舟』の誓いの共 姜を思ふ

斉が紀を亡ぼしたのは周庄王の七年(紀元前六九三年)である。

この年、楚武王熊通は隋が朝見しないのを理由に再び討伐の兵を出したが雄図半ばにして亡くなつた。令尹闔圻は自重してこれを隠し喪を發せずに間道から奇兵を出して隋城に迫つた。隋は恐れて講和を申出て来たので王命と偽つて隋侯と盟約を結んだ。大軍が漢水を渡つたところで死去を發表し、子熊賁が即位し文王となつた。

斉襄公が紀を亡ぼして凱旋して来ると、文姜は兄を迎えに出て祝丘へ案内し宴席を設け、君主の会見の礼法にならつて杯を交わし斉軍をねぎらつた。その後また襄公と一緒に糕へ行き何泊も楽しんだ。襄公は文姜に魯侯を糕へ会いに来させるように手紙を書かせた。庄公が母の命令にいやとは言えず糕へ会いに行くと、襄公に対して伯父甥の礼をとらせ、紀の伯姫の葬儀の礼を言わせた。庄公はこれも拒むことができず仕方なくこれに従つた。襄公は大変喜び牛豚羊を煮て庄公を歓待した。

② 柏舟『詩經』邶風の中の一詩 詩の背景：衛の世子共伯早く死し、その妻共姜は義を守り 父母が彼女を連れ戻し再婚させようとするとそれを拒み、誓て「柏舟の詩を作る」

襄公に生まれたばかりの女の子がいた。庄公に未だ夫人がいないので文姜はその子と婚約するように言った。

「彼女は生まれたばかりでわたしの嫁には向かないでしょう」と庄公が言うと怒り出し、

「そなたはこの母の一族が嫌なのかい」

と言う。襄公も余りにも年が離れすぎているので好ましいとは思わなかったが、

「二十年待てばいいじゃないの、遅くはないわ」

という文姜の気持ちをしる、庄公も母の意見には反対できず、両公とも承諾した。伯父甥の上に婿舅の関係が重なり益々親密度が増すことになった。

齊魯両君主は糕の野で巻き狩りを行った。庄公は無駄矢がなく百発百中で襄公はしきりに褒め称えた。齊人の中に戯れに、あれは齊侯の養子じゃないのか、と言う者がいたのを聞つけ庄公は怒って側近に後をつけさせ殺してしまった。襄公もそれを咎めはしなかった。

史臣は庄公の母有つて父無きが如き、父の仇を忘れた態度を詩で詰問している。

車中の恨みは既に遠く 甘んじて仇敵と俱に天を戴く

養子と言われるも無理もなし 仇の娘と婚約す

文姜は魯齊合同の巻き狩り以来、益々憚りなく襄公と会い、或いは防で或いは谷で、或いは直接齊都まで行つて公然と宮中に泊り込み、全く夫婦気取りであつた。

國人は『載駟』の詩の中で次のように文姜を風刺している。

馬車の音はパカパカ 竹の網代に朱い皮

魯の道は広々として 齊の姫君は夜に旅立つ

汝水の流れ豊にて 旅人も多く行き交う

魯の道は広々として 齊の姫君はのびのびと (齊姫君は文姜を指す)

また、庄公を非難する『敝笱』という詩が有る。

穴あき笱が梁にある 河の魚がうろうろと

齊の姫様お嫁入り お供の数は雲のよう

穴あき笱が梁にある 河の魚がうろうろと

齊の姫様お嫁入り お供の数は水のよう

齊侯が糕から帰ると、衛侯朔(恵公)が紀を亡ぼした祝いに来て、衛討伐の具体的な日程を尋ねた。

「王姫が死んだから障害はなくなつたけれど、諸侯の協力がなければ出兵の名分が立たない。ちよつと待つてくれないか」

齊侯はそう言つて、数日後、使者を宋、魯、陳、蔡に遣わし、共同で衛を討ち恵公を擁立するための会盟を行うこととした。

その檄文は次の通りである。

天、衛國に禍をもたらす。逆臣泄と職、恣意的に君主の廢立を行い、衛君は追放され弊國で七年、その間心休まる時なし。外事多端により討伐が遅れしも、幸い小康を得し現在、主力を挙げ諸侯の協

『詩經 齊風』載駟。訳は平凡社『詩經 國風 白川静訳引用 原文は『敝笱』を庄公非難とするが、詩經の詩序には文姜を刺すとある。石川忠久 明治書院新漢文大系

力を得て衛君を補佐し、衛国の不当な即位に天誅を加えるものである。

周庄王八年（紀元前六八九年）の冬の事である。

齊襄公は戦車五百乗を出し衛侯朔と衛の国境に先行し、四国の軍も漸次集合した。その四国の諸侯とは、宋閔公捷、魯庄公同、陳宣公杵臼、蔡哀侯献舞である。

衛侯は五国の軍が攻めてきたと聞き公子泄、職と相談し、大夫甯跪を周に遣わし急を告げ救援を依頼した。周庄王は群臣に、

「誰か衛を救える者はいないか」

と聞いたが、周公忌父、西虢公伯は口をそろえて、

「王室は鄭に敗れ權威を失ってこの方号令は諸侯に行き届きません。

一方齊侯は王姫が亡くなり全く親戚という意識がなく、しかも齊は四国を糾合し兵力は強大で君主復国の名目もあり、とても勝ち目はございません」

と言う。その時左の列の最も下位の一人が発言した。

「二公のご意見は正しいと申せましょうか。五国連合は強いとはいえず大義名分があるとは言えません」

誰かを見ると下士の子突である。

「ある国が減び、ある国がそれを継承する。何処が問題かね」

と周公がたずねた。

「黔牟殿は衛君として周王の恩許を得ています。黔牟がいる限り子朔は立てられません。二公は王命より諸侯が決めるほうが正しいとおっしゃるのですか。ちよつと臣には理解しかねます」

「軍を動かすという大事は力があつてこそできるものだ。王室にはもうかつてのような力はない。鄭討伐の時を見よ、先王が軍中におられても祝聃の矢が当たると言うありさまだ。最近ではもう諸侯を問責する力はない。しかも五国の力は鄭の十倍はある。救援に行つても卵が石にぶつかるようなものだ。いたずらに相手の力を軽んじてどんな益があるというのだね」

と今度は虢公がたしなめた。子突はこれに対しても凛として答えた。

「天下のことは道理が武力に優つていれば正常であり、武力が道理を押えた時は事変が起こります。王命あるところには道理がなければなりません。正当な道理は一時的に力に負けても、長期的には必ず勝ちます。

もし道理を無視する者の思い通りになり、誰もこれを追及しなければ善悪の基準がなくなり王の存在の意義がなくなつてしまいます。それでは王朝の卿士でいらつしやる皆様方に何の面目がございましょうか」

虢公は言葉に詰まつた。周公が言葉を継いだ。

「衛救援軍を出すとすれば、そなた王軍の指揮を引き受けられるかね」

「軍の差配に関しては司馬の掌中にある事で突は微才でその任ではありませんが、人がいなければ臣は死を恐れるものではありません。司馬の代理として行かせていただきます」

周公は重ねて尋ねた。

「そなた衛を救援して勝利を保証できるか」

「臣が兵を出すと申しますのは道理に基づくものです。もし文王、武王、宣王、平王の気持ちで義を以つて助けると言つて四国が罪を悔いて撤兵してくれば王室として幸せですが、臣といたしましては何とも申せません」

「突の言うことは力強い、彼が行けば王室を思うものが現われるかも知れません」

と大夫富辰が言うと周王も承知した。衛使甯跪は帰国し、間もなく王軍が進發した。

さて、周、號岡公は子突の成功を嫌って戦車を二百乗しか与えなかった。子突は文句を言わずに宗廟に別れを告げれ出發した。この頃五国軍はすでに衛城下に集合し包囲体制を急いでいた。公子泄、公子職は昼夜兼行で巡守し、王朝の大軍が包囲を解いてくれるのを待ち望んでいた。五国軍が虎のようなのに対し子突の王軍は小規模でとても太刀打ちできるわけがない。子突が陣を張る前に五国の大襲撃を受けて二百乗の戦車は雪の上に湯をまいたようにあつと言う間に粉碎されてしまった。子突は、

「王命を奉じて戦死するも忠義の魂は失わず」と言つて数十人を斬つて自刎して果てた。

例え王師は破れても 王命耳目に赫々たり

義勇これぞ真の丈夫なり

勝敗の結果で英雄を語るなかれ

籠城していた衛の兵士たちは王軍が破れたことを聞き先を争つて逃げた。斉兵が最初に城に入り四国がこれに続き、城門を壊して衛侯朔を入城させた。公子泄、職は甯跪とばらばらになった兵を集め黔牟を擁して城を出たが、そこで魯軍と出くわし一戦の結果、甯跪は逃げたが三公子はついに捕えられた。甯跪には彼らを助ける知も力もなくなため息をついて秦国へ逃げて行つた。

魯侯は三公子を衛に渡したが衛も処分を決しかね、斉国に回した。襄公は泄と職を斬り、黔牟は斉国と関係があるので許し、周に帰した。衛侯朔は鐘太鼓を鳴らし再び侯位に就き、襄公に国庫所蔵の宝玉で十分な礼をした。襄公は、魯が三公子を捕えた功を評価し衛から贈られた物の半分を魯侯に分与した。又衛公に、別に宋、陳、蔡にも礼品を贈らせた。

時に周庄王九年（紀元前六八八年）の事である。

ところで齊襄公は子突を負かし黔牟を放逐した後、周王が討伐に来ることを恐れ、大夫連称と管至父を正副將軍にして辺境警備として葵丘（斉桓公の葵丘会盟の葵丘とは別、現山東省淄博市）に駐屯させ東南方面からの攻撃に備えた。彼らは任地へ出發前に襄公にたずねた。

「辺境の守備は大変な任務ですが行つて参ります。ところで任期は何時まででしょうか」

襄公はその時ちょうど瓜を食っていたので、

「そうだな、今瓜が熟す頃だから、来年瓜が熟す頃にはそなたたちの後任を送り届ける事にしよう」

二將は葵丘に駐留し、いつの間にか一年が過ぎた。ある日警備兵が初物の瓜を持ってきた。二將はこれを見て瓜が熟す時期の約束を思い出した。

「そういえば交代の時期になるがどうして交代要員をよこさないのだろう」

腹心を都へ送り込んで様子を探らせたと、斉侯は谷城で文姜とお楽しみで一月も帰らない事があるという。

連称はかんかに怒った。

「王姫がなくなつたので従妹を入れてやったのに、あの馬鹿殿め、我われを辺境へ追いやっておきながら、道はずし禽獣のような淫乱の日だ。くそつ、ゆるせん、殺してやる。そなたも手伝ってくれ」

「瓜が熟す頃には交代させると」自分でおつしやつたのですから、忘れておられるのかもしれない。交代をお願いしてみたら如何です。もしお願いしても聞き入れてくれなければ、兵たちも怒り出すでしょうからそれを利用することができます」

と管至父がなだめると、連称は納得して、使者を送り襄公に瓜を献上して交代をお願い出た。

襄公は怒つて、

「代りを出すかどうかはわしが決めることだ。請求して来るとは何事だ、来年瓜が熟すまでもう一年待てと言つておけ」

使者が帰つて報告すると連称は怒つて管至父に言った。

「頭に来た、やるしかない。そなたにいい策はないか」

「すべからく事を挙げるには先ず奉戴するものがなければなりません。公孫無知殿は公子夷仲年殿のお子です。先君（舊公）は同母兄弟の

仲年殿を大変可愛がられ、その子無知殿も可愛がっておられました。幼い頃から宮中で養育し衣服も礼儀も世子と同じにしていた程です。主上の即位後も無知殿が宮中において何かと張り合うので主上は面白くなく、無知殿が大夫雍廩と道を争つた時、態度が不遜だといつて無知殿の官職等級を大幅に引き下げられました。無知殿はきつとこれを根に持つて謀反を胸に抱いているはずですよ。ただ仲間がいなかったので実行には至っていませんが。無知殿に密かに通じて内外から呼応すれば必ず成功いたします」

「やるなら何時がいいか」

「主上は兵を動かしたり狩をするのが好きで、その時は穴から出た猛虎のようなものですから押えるのは難しくありません。外出する予定を事前に掴みこの機会を捉えればいいのです」

「殿の寵を失つて恨んでいる従妹が宮中にいる。無知殿に彼女と内々打ち合わせていただいて、主上の隙を窺い、予定が決つたらその夜の内に連絡をもらう事にすれば先ず間違ひはない」

そこで再び腹心を遣つて公孫無知に手紙を届けさせた。

公孫殿は先君から世子と同じ寵愛を受けておられましたのに、官職を剥奪され世間の人は皆不満です。いわんや君主は日々淫蕩に耽り、政令は朝令暮改のごとくでございます。我われの葵丘の警備も久しくなり、約束の瓜の時期になつても交代を出さないのです、三軍の士に不満がつり反乱の兆しが見えます。ご討伐の考えがございまして大馬の労をとり、君位にご推戴申し上げたいと考えております。従妹が殿の寵を失ひ不満を抱えて宮中に居ります。天の助けで公孫殿が内応される時何かのお役に立つと存じます。どうか好機を逸することがございせんよう。

無知は手紙を受取り大喜びで返信を書いた。

天は淫乱を嫌います。將軍の真心こもる書簡を拝見し内容に敬服し、遅かれ速かれ報復しなければならぬと考えております。

無知は密かに女侍に連妃と連絡を取らせ、連称の手紙も添えて、

「成功したら夫人になつてもらおう」

というと彼女も承知した。

周庄王の十一年（紀元前六八六年）冬十月、襄公は、姑蘇郊外の貝丘山が禽獸が集まる巻き狩りの適地だとの情報を得て、翌月そこへ行くことに決め、徒人費たち腹心に準備させた。連妃は早速このことを公孫無知に知らせ、無知はその夜のうちに葵丘の連、管、將に伝え、十一月初一斉に旗揚げすることにした。

「主上が狩に出て国が空になった所を、直接都門を襲撃して公孫殿を擁立しようと思うがどうだ」

と連称が管至父に意見を聞いた。

「主上は隣国と親しいので、もし隣国に軍の出動を依頼したらどう防ぎますか。むしろ姑蘇に伏兵を置いておいて先に暗君を処分しておいてそれから公孫殿に即位していただく事にした方が万全でしょう」

この頃になると、葵丘の守備兵は辺境の仕事が長くなって皆家族のことを思うようになってきていた。連称が密かに各自干飯を持って貝丘へ進発せよと命ずると兵士たちは喜んで従った。

襄公は予定通り十一月一日出発した。力士の石之紛如と寵臣孟陽たちと鷹と犬だけを同行させ大臣は誰も連れなかった。姑蘇に着いて以前に建ててあつた離宮で丸一日遊んだ。住民が酒肉を献上して来たので襄公は夜になるまで飲みそこで泊まって、翌日貝丘へ向った。道は樹の葉がかぶさり藤がうつそうと茂っていた。襄公は丘に車を止め、回りを柵で囲って林に火をつけさせ、鷹、犬を放った。火は風にのり、風は火の勢いを助長し、狐鬼の類が東西に逃げまどう。そのとき突然大猪が火の中から飛び出してきた。牛のようだが角がなく、虎のようだが模様がない。驚いたことに丘へ上がってきて襄公の車の前で跪いた。皆狩りに出かけて襄公の側には孟陽しかいなかった。

「そなたこの猪を射よ」

孟陽はこれを見て驚いて、

「これは猪ではありません、公子彭生様です」

「馬鹿を言うのではない、彭生がどうしてこんなところに現れるのだ」と襄公は怒って孟陽の弓を取上げて自分で続けて三本射たが皆はずれた。この大猪は両足で立上がり拱手の礼をとつて人のように数歩歩いて大声で吠えた。その声は異様な叫びで、襄公はこの様子を見てぞつとして車から転がり落ち、左足をくじいて片方の胷が脱げ落ちた。大猪はこれをくわえて逃げ去った。

魯公昔車中に死し 今日諸兇車中で亡霊に遭う

彭生悪鬼となりて現われ 諸兇美弓を引くも空を射る

徒人費ら従者が助け起こして車に寝かせ、狩の中止を命じて姑蘇の離宮に帰った。

襄公はぼんやりとして気分はすつきりしない。襄公は左足が痛くて寝られず何度も寝返りを打ち、二更の太鼓が鳴った頃（夜九時頃、

「わしに肩を貸してちよつとゆつくり歩かせてくれないか」

と孟陽に頼んだ。先ほど車から落ちた時慌てていたので胷を無くしたのを今まで気が付かず、徒人費に持つてくるように言った。

「胷は大猪がくわえて行きました」

「そなたはわしに随いて来ているのだから胷が有るか無いかくらいよく見ておけ、くわえて行つたのならその時何故言わなかったのだ」

襄公は怒って自ら鞭をとり徒人費の背中を打った。血がしたたり落ちしばらく止まらなかった。徒人費は鞭を打たれてべそをかきながら宮

門を出ると、ちようど連称が数人を引連れて様子を探りに来たところに出遇い、捕えられて縛り上げられた。

「馬鹿殿はどこにいるのだ」

「寢室です」

「もう寝ているか」

「まだです」

連称が徒人費を叩き斬ろうとすると、

「お助けください、わたしが宮中に戻ってあなた方の諜報役をいたしましう」

と徒人費が言い出した。連称がそんな事を信じるわけがない。

「わたしは今、殿に鞭を打たれてきたばかりで、馬鹿殿を殺してやりたいと思つていたところです」

そう言つて着物を脱いで見せた。連称は血肉が滴っているのをみて彼の話信じ、縄を解いて内応するように言いつけ、同時にすぐに管至父に軍を率いて離宮に突入するよう連絡した。

徒人費が離宮に戻つてくるとぼつたり石之紛如に出会つた。彼に連称が反乱を起こした事を話し、寢室へ行つて裏公にも知らせた。裏公はたまげてしまつてどうしたらいいか分からない。

「事は急を要します。誰か殿の影武者をベッドに寝かせ、殿は扉の後ろにお隠れいただき、慌ただしきに紛れて見つからずに済めば脱出できるかもしれません」

「過分なご恩をお受けいたしましたので臣が身を賭して影武者になりましう」

孟陽がそう言つてすぐにベッドに入り奥の方に顔を向け横たわつた。裏公は自分の錦のガウンを脱いで彼に掛けてやった。そして扉の後ろに身を伏せて、

「そなたはどうするのだ」

と徒人費に聞いた。

「臣は紛如と協力して賊を防ぎます」

「背中への傷は苦しくないか」

「臣は死を覚悟しています。傷などなんと言ふことはありません」

「忠臣なり」

裏公は嘆じた。

徒人費は石之紛如に中門を守らせ、自分は単身利刀を身に帯び賊を歓迎するふりをして連称を刺そうと考えていた。その時はすでに連称の大軍が大門に攻め込んで来ていた。連称は剣を取つて先頭に立つて進入し、管至父は門外で不時に備えて待機していた。徒人費は連称の猛烈な勢いを見て、細かいことをいう暇が無く、彼の前に出ていきなり刺した。しかしながら連称は厚い鎧を着ていたので刃が中まで入らず、逆に彼の剣の一振りですぐ二本指が落ち、返す一振りですぐ面を両断されあえなく死んだ。石之紛如も矛を構えて連称に挑んだが十数回打ち合う内に連称が攻勢になり、紛如は次第に後退し誤つて石段につまずいた所を連称の一刃に斬り倒された。

連称は遂に寢室へやつてきた。侍衛たちは怖がつてみな逃げ散つてしまった。丸い花模様帳の帳の中では錦の上着を掛けて人が寝ている。連称は刀を振り下ろし首を切り離して明かりでよく見ると、年は若くひげがないではないか。

「これは主君ではないわ」

と言つて部屋中をくまなく搜索させたが見つかからない。連称は自分で部屋中明かりを照らしていると、ふと扉の下敷居に刺繍の入つた片方の沓が見え、扉の向こうに誰かが隠れているのがわかつた。襄公でないわけがない。扉を開けてその後を見ると、あの暗君が足を痛めてしゃがんでいたのである。その片側の沓は襄公が履いている。連称が見た沓は先に大猪がくわえて行つた片方であり、どうして扉の手すりの下にあつたのかわからない。冤罪を受けた亡霊のしわざであろうか。いやはやなんとも恐ろしい話ではないか。

連称は諸児（襄公）であることを確認し、鶏の雛をつまむように戸外へ放り出した。

「無道な暗君！ あなたは毎年のように兵を動かして戦争を好み民に禍をもたらししてきました、これは不仁であります。父君のご命令に背き公孫無知殿を疎遠にしました、これは不孝であります。兄妹で公然と相姦して憚らなかつた、これは礼に悖ります。辺境の守備隊に対し配慮がなく約束の瓜の時期になつても交代をさせなかつた、これは不信であります。仁孝礼信の四徳をなくした者はもはや人とは申せません。わたしは今ここで魯桓公の仇討ちをさせていただきます」

連称はそう言つて襄公をいくつかに分断して、布団で包み、影武者となつて死んだ孟陽と一緒に扉の下に埋めた。

襄公の在位はたつた五年であつた。

史官は今回の事を次のように評論している。

「襄公が大臣たちを疎外し、石之紛如、孟陽、徒人費等の小人達を寵信した事を賢臣に親しみ小人を遠ざけるという君主の施政原則にもとる

と断じ、また、彼ら小人たちは日ごろ襄公から私恩を受け襄公の紛乱の片棒を担いできたのだから、最後に決然と死を恐れず襄公を守つたけれどこれは残念ながら忠臣の大節とは言えない」と。

襄公が約束を守らず辺境警備の交代を出さなかつた事で、連称、管至父が遂に凶行に及んだが、これも二人の手を借りて襄公の悪行が清算されたにすぎない。彭生が処刑の直前に、死んで鬼になり必ずお前の命を取つてやると叫んだが、大猪を見たのも決して偶然ではなかつた。髯翁は費、石たちが殉難したことを詩にしている。

主に殉じしは忠なるも 費石の名は世に残ること無し
暗君に殉ずるも節ならば 飛廉や崇虎もまた賞さるべし

また襄公を嘆じて、

惡焰広げし君侯は死し まさに惡鬼の凶威去る

惡業の末は死で清算 勸善懲惡に議論は不要

連称、管至父は軍容を整え帰国した。公孫無知は予め武器をそろえて待つていたが、襄公が殺された知らせを聞くとすぐに兵を率いて城門を開き二将を迎え入れた。

「先君僖公のご遺命がありましたので公孫無知さまに即位願ひます」

二将は僖公の気持ちをお口にしておつた。そして連妃が夫人となり、連称は正卿となり国舅と号し、管至父は亜卿となつた。諸大夫は仕方なく従っているが本心からは心服してはいない。ただ雍廩だけは再

飛廉崇虎 飛廉は殷紂の佞臣 走るのが速、その惡業と共に紂王に仕えた。崇虎 封神演義に見る惡謀の女も殷紂王に仕へ西伯に討たれる

三叩頭さんこうとうの礼をして非常にへりくだり、何時かの道を争った罪を陳謝した。無知はこれを許しそのまま彼を大夫に封じた。宿老の高氏、国氏は病と称し参内しなかつたが無知は彼らをも罷免はしなかつた。

至父は無知に賢人募集の告示をして人材を集めるよう勧め、自分も一族の管夷吾かんいご（管仲かんちゆう）を推薦した。無知は早速彼を呼び出した。

夷吾はこの呼び出しに応じたるや否や、それは次回のお楽しみ。

第十五回

齊雍大夫 無知を諷殺

魯庄公 乾時で齊桓公と大戦

管夷吾、字は仲、生まれつき容貌は堂々としていて、^{かんいご} 理知的かつ聡明で古典や古今の事情に通じ縦横無尽の才覚で濟世匡時^{さいせいきやうじ}（世を救い目下の急事を治める）の策略を秘めていた。

鮑叔牙と商売をしたことがあるが利益分配の時は管仲が倍もの分け前をとった。鮑叔の仲間は不満だったが、

「仲は僅かな金に賤しいのではなく家が貧しいからで、決して欲張りというわけではない。だからわしは彼に多目に分けてやるつもりだったんだ」^{ほんしやく}

鮑叔はそう言ってなだめた。

又あるとき一緒に戦争に行った。何時も敵に出会ふと管仲は後方に避け、終わって帰る時は何時も前の方を駆ける。それを見て、管仲は卑怯だと人々が嘲笑すると、

「仲には家に扶養しなければならぬ年老いた母親がいるんだ、どうして仲が卑怯だと言えるかね」^{はしやくが}

と鮑叔牙はその人たちに仲を弁護したものである。

二人は事あるたびに互いに助け合った。

「人はそれぞれいろんな事態に出合うが、仲はその対応に百に一つも誤まることはないだろう」^{はうしやく}

と鮑叔は言い、それを聞いた夷吾は感激して、

「われを生みしは父母なるも、われを知るは鮑叔なり」^{はうしやく}

と言ったという。それから二人は生涯の友となる事を誓った^{ちか}。

話は戻るが、齊襄公には二人の子がいた。一人は糾^{きう}で母は魯国の女一人は莒^{きよ}国の女が母の小白^{しょうはく}、どちらも庶子であつた。襄公即位の時には二人ともすでに成人していて襄公は各々に補佐役をつけようと思つた。夷吾は鮑叔に、

「ご主君にはお子が二人おられる。将来位を継ぐとなれば糾殿か小白殿だ。おれとおまえがそれぞれを補佐し、即位の時はお互いを推挙する事にしようじゃないか」^{かんいご}

と言ひ叔牙もそれに賛成した。管夷吾は召忽と共に公子糾を補佐し、叔牙は小白を補佐することになった。

襄公が文姜を嬖^ひに呼んで会おうとするので叔牙は小白に、

「君主のふしだらには人々の嘲笑いものになります。今ならまだ隠しておせます。度々になると河が決壊するように噂が広まってしまうので、子としてお諫めするべきでしょう」^{しやくが}

と言うと小白はそれに従つて、

「魯侯の死についてしきりに非難の聲が挙がつています。男女間の疑われるような行為は避けるべきではないでしょうか」

と襄公に諫言すると、

「うるさいッ」

② 後日鮑叔牙が自分の位を譲り管仲の能力を齊桓公に推薦したことなど二人の深い友情を「管鮑の交わり」という「史記」管晏列伝

③ 東周列国志では糾・小白は齊襄公の子となっているが、史記では襄公の弟となっている。『史記』齊太公世家

と怒つて小白を足蹴りにした。

これを聞いた叔牙は小白に進言した。

『奇淫をなす者は思いもよらぬ禍に遭う』と申します。一緒に他国へ避難し、後事を図りましょう

「何処がいいか」

「大国はすぐ機嫌が変わるからよした方がいいと思います。莒国がいいのではなでしょうか。莒は小さくて齊にも近いですから。小さければ不遜な事は無いし、近ければすぐに帰れます」

「わかった」

そういうことで莒へ行くことにした。襄公はこれを聞いても追つて連れ戻そうとはしなかった。

公孫無知は君位篡奪後、管夷吾を招聘した。

「刀を首根っこにあて、おれを巻き添えにしようというのか」

と思ひながらも仕方なく仕官に応じたが、夷吾も召忽と相談して糾を母親の実家の魯へ避難させることにし、結局糾に従つて魯へ行った。魯公は生寶に住まわせ月々の手当を出してやった。

魯庄公の十二年春二月、齊公孫無知の元年、百官が祝賀のために大殿に集まった。連、管両人は人々を威圧していたが、百官は憶戀の氣持で満ちみちていた。雍廩は群臣が二人に心服していないことを知り、

「魯から来た客人が、公子の糾殿が魯軍を動かして齊に攻めてくると噂していましたかご存知ですか」

「聞いていませんな」

と大臣たちが声を揃えて答えたが、雍廩はそれ以上何も言わなかった。退朝後大臣たちは誘い合つて雍廩の家を訪ね、糾が攻めてくるといふのは本当かとたずねた。

「諸君はどう思いますか」

「先君は道を外れた人だったがその子には咎は無い。わたしはむしろ糾殿が来られるのを期待していますよ」

と東郭牙がいうと大臣の中には泣く者もいた。そこで雍廩が、

「わたしが無知殿に膝を屈したのは人の心が無いからではありません。悔しさを梃子に事を起こしたいと考えていたのです。もし諸君の協力が得られるのであれば、弑逆の賊徒を協力して除き先君の子を擁立したいと思います。これこそ義挙ではないでしょうか」

と言うと東郭牙が具体案をたずねた。

「高敬仲殿は代々の家臣で賢才高潔、人望もあります。連、管の二人も高殿に声をかけられることを非常に期待しており、それが無いのを残念に思っているほどの方です。敬仲殿が酒を用意して二人を招待すれば必ず喜んで行きますよ。わたしは公孫無知殿を訪ねて、偽の子糾殿の軍事文書を見せます。あの方は愚昧で勇氣も無い方ですから驚いて混乱するでしょうからそこをブスツとやります。助けるものは誰もいません。うまく行けば烽火を上げますからそれを合図に連称、管至父の一族を誅殺します。事は掌を返すごく簡単です」

「敬仲殿は悪をひどく憎む方ですが、本件は国の評価を下げるのでそれを惜しまれるかもしれません。でも大丈夫です」

襄公の愛なかりしに 無知にあらうか永久の愛

夫人一月で三尺の布 何故に静かに孤閨を守らざる

(三尺の布 自給用のひも)

雍廩は直ちに烽火を挙げさせた。烽火は天空に立ち昇った。高敬仲は連、管二人の客を歓待しているところであったが「烽火が見えます」という合図が入るとすぐに席を立てて奥へ入った。二人はそれが唐突だったのでどうしたのか聞こうと思っていると、予め廊下に伏せていた壮士たちが突然斬り込み二人をずたずたに切り殺した。従者は居ても身に寸鉄も帯びておらず、あつと言つ間のことであつた。雍廩と大夫たちは次々と高敬仲の屋敷に集まつてきた。協議して二人の心臓と肝臓を切り取り、姑禁の離宮から襄公の遺体を引取り、襄公の祭壇に祭つて葬りなおした。同時に公子糾を君主に迎えるために魯へ使者を出した。

魯侯は非常に喜び、直ちに糾のために兵を出そうとしたが、施伯はこれを聞いて、

「斉と魯は強弱を競つていますから、斉に君主がいけないことは魯にとつては好ましいことです。ここは動かないで様子を見るべきです」と忠告した。庄公は躊躇して決めかねていた。このとき文姜は襄公が

殺された事を聞き祝丘から帰つて来て、わが子庄公に斉を攻めて無知を討取り兄襄公の報復をするよう説得を続けていた。無知が殺され、斉の使者が糾を君主にするために迎えに来たというのを聞き非常に喜んで、糾をすぐにも立たせるよう庄公に催促した。庄公は母親の命令に抗しきれず施伯の忠告を無視して、戦車三百乗を率い曹沫を大将に、秦子、梁子を左右の将として糾を斉に送り届けることにした。

管夷吾は魯侯に進言した。

東郭牙はそう言つて、雍廩の計画を高敬仲に話し了解を取った。東郭牙は早速、連、管両家へ行つて、高敬仲の招待の案内をした。二人は予定通りやつてきた。高敬仲は杯を取つて、

「先君は徳に欠ける面が多くございましてので、わたしは国が減じる事を心配しております。幸いにもお二方が新君を擁立してくださったのでわたしも先祖の祀りができます。このところ老いの病で参内できていませんが幸い少し具合が良くなりましたので、一献差し上げ個人的なご恩に報いると共に子孫の事もお願ひいたしたくわざわざお越しいたさしました」

と挨拶した。連称も管至父也非常に謙遜な態度であつた。

「今日は徹底的に酒を楽しむことになっているから、外からの連絡は通さないようにしてくれ。ただ、城中に烽火が上がったらすぐに知らせるように」

敬仲はそう守衛に言つて、二の門を厳重に閉めさせた。

一方、雍廩は匕首を隠し持つて宮門に入り無知に会つた。

「公子糾が魯軍を率いて間もなく到着の模様です。幸い迎撃の用意はできておりますが」

「国舅はどこにいるのだ」

「国舅と管大夫殿は郊外での酒宴に出られて未だお帰りになつてはおられません。百官は皆参内して主上との会議をお待ちしております」

無知はこれを信じて朝堂に出た。未だ席に落ち着かないうちに諸大夫が一斉に前に出て、雍廩が後から刺すと君主の席は血に染まり無知は即死した。無知の君主の在位期間は可哀そうにたった一ヶ月余であつた。連夫人は変を聞き宮中で縊死して果てた。史官は詩に言う。

「公子小白が莒に居ます。莒は魯より近いので、あちらが先に斉入りすると主客転倒してしまいます。兵と良馬をお預かりし、先回りしてこれを遮りたいと存じます」

「どの位の兵力が必要か」

「戦車三十乗あれば十分でしょう」

一方、公子小白は斉が内乱で君主の居ない状態であると聞き、鮑叔牙と相談し、莒君に戦車百乗を借用して斉に送り返してもらおうと頼んだ。一方、管夷吾は兵を引連れ昼夜兼行で即墨まで来たが、莒兵はすでにそこを通り過ぎていた。追跡し更に三十余里行ったところで莒兵が車を停め食事の用意をしているところに追いついた。管夷吾は小白が車に端坐しているのを見て前に出て腰をかめ、

「公子殿には一別以来お変わりはいかがいせんか。ところでこれからどちらへお出掛けでございますか」

「父の葬儀に行こうと思っている」

「糾殿がご長男ですので、葬儀を取り仕切られることになっていきます。ごゆっくりなさったら如何です」

「仲殿、お下がり下さい。進言は自分の主人にすればいい。余計な口出しはお控えなされ」

鮑叔牙が言った。夷吾は莒兵の怒りの目を見て殺気だっているし、人馬の数も比較にならない。戦つても衆寡敵せず。管仲は仕方なく引下がる振りをして、突然弓を取り出し恐ろしい早業で小白に向けて放った。小白は大きく叫び、口から鮮血を吐き車上に倒れた。鮑叔牙は急いで助け起した。従者は「まずいことになった」と口々に叫び泣き出した。管夷吾は三十乗を率いて急いで立ち去った。夷吾は、

「糾殿は運がいい、君主に向いているぞ」

と感心しながら帰り、魯侯にその報告をし、子糾と祝いの酒を交わした。この時安心しきつて、道々の町の長が食料、飼料を献納してくるので、それを受けながらゆつくりと斉国に向った。

ところが夷吾の放った一箭は何と幸運にも小白の帯の鉤に当たったに過ぎなかった。小白は夷吾が矢の名手だとわかり二の矢を射られるのを怖れて、急場の知恵で舌を噛み切つて鮮血を吹出し倒れた振りをして、鮑叔牙をも騙していたのである。鮑叔牙は小白が生きていたのを知つて大喜びで、

「夷吾は去つたが又やつて来る恐れがある、急がなきゃ」

小白の服を着替へさせ温車おんしやに載せて小路を選んで急いだ。臨淄に近づくと鮑叔牙は自分の車だけで先に入城し諸大夫に会つて盛んに小白が賢人であることを吹聴した。

「そのうち子糾殿が来るでしょうがこれにはどう対処なさいますか」と大夫たちが心配した。

「斉は二度の弑逆事件が続いていますので賢者でなければ乱を平定することができません。しかも子糾殿を迎えていながら小白殿が先に帰国されたということは天意です。魯君は糾殿を援助していますが、要求される報酬はかなりのものでしょう。昔、宋が鄭の子突を即位させた時、宋の飽くなき要求に数年戦争が続きました。わが国も国難が続いており、魯からの要求に耐える力がありましようか」

「しかしどうやって魯侯を断るのでしょうか」

※ 温車 輜車 蛄きの車 体を横たえる事ができ窓におおががあり温度の調節ができようになつた車 寝台車 霊枢車に利用

「こちらにはもう君主がいるのですから、当然引揚げるでしょう」

大夫隰朋、東郭牙は声を揃えて、

「鮑叔殿の言われる通りだ」

と言ったので小白は城内へ迎えられ、即位して桓公となった。髡仙は小白が帯鉤で助かった事を詩しにしている。

魯侯喜び莒人は憂う　だが何と矢が当たりしは帯鉤なり
瞬時の機転を窺えば　智謀の人まさに諸侯の霸主たらん

「魯兵は未だ来ていないので事前に止めなければなりません」

鮑叔牙はそう言って仲孫湫を使者として、斉に向って来ている魯庄公に会って新君主が即位したことを報告させた。

庄公は小白が生きていた事を知ると、

「長男が継ぐものだ、がきのくせに何が君主だ。何もしないで三軍を引揚げるわけにはいかん」

と怒った。仲孫湫が帰ってそう報告すると桓公は鮑叔牙に、

「魯軍が引かないとなればどうする」

「戦うしかありませんね」

そこで王子成父を右将、寧越を右副将、東郭牙を左将、仲孫湫を左副将とし、鮑叔牙は桓公を奉じて中軍を率い、雍廩を先鋒とした。戦車は全部で五百乗、それぞれ分担が決ると東郭牙が提案した。

※「史記齊太公世家 記載の桓公即位の経緯は次通りである。「小白は昔頃から大夫高、国高氏と親密だった。無知の後、哀は誰を立るか討議した。高、国高氏は先ず密に小白を宮から召還した。高氏の内応があったので先に入国して位をくることができた（平凡社野口定男他訳）」

「我われに迎撃準備がある事は魯君は承知しているはずですからきつと用心しています。乾時（現山東省濰博）は水草が多くて兵を待伏せするには便利な所です。ここへ引張り込んで不意をつけば必ず勝てます」

「それはいい案だ」

鮑叔牙は同意して、寧越、仲孫湫を乾時に待伏せさせ、王子成父と東郭牙には近道をして魯軍の退路に回らせ、雍廩には正面から挑戦し敵を誘導するように命じた。

魯庄公が糾と乾時までやって来た時、

「小白は即位したばかりで人心は未だ安定していませんから急いでこの隙に乗ずればきつと内紛を起す事ができると思います」

と管夷吾が進言すると庄公は、

「そなたの話からすれば小白はとつくに死んでいるはずだ」

と皮肉って乾時で軍を止め陣營の設置命令を出し、魯侯は前方に、子糾は後方に二十里ほど離れて設営した。この戦いを乾時の戦いという

習朝、斉兵が到着し先鋒の雍廩が挑戦してきているという知らせがあった。

「緒戦で斉軍を破れば城中のものは肝を冷やすだろう」

魯庄公はそう言って、秦子、梁子に戎車（君主専用車）を前面に出させて雍廩に呼ばわった。

「お前たちは、賊を始末したから君主を帰してくれと言ってきたではないか。それをこつと態度を変え、一体信義と言うものがあるのか」

と言って弓を引いて雍廩を射ようとした。雍廩は恥ずかしそうに頭を抱える様子をして逃げだした。庄公は曹沫に追わせた。雍廩は車を返して数合打合い又逃げた。曹沫は逃がすまいと持ち前の勇猛心をふるって

戟を振り上げ追いかけたが、鮑叔牙の大軍に囲まれてしまった。何とか

左に斬り込み右に押し、体に二本の矢を受けながらやつと脱出した。魯

将秦子、梁子、曹沫が曹沫がやられるのを心配して助けに入った時、突然左右

から砲声が響き、寧越、仲孫湫の伏兵が一斉に突撃を開始し、鮑叔牙

は中軍を率いてあたかも壁が押し寄せるように進んで来た。三面に敵を

受け魯兵は支えきれず次第にはらばらになって退却した。鮑叔牙は、

「魯侯を捕えた者には賞として万戸の邑を与えよう」

と伝令を発し軍中に大声で言い広めさせた。秦子は急いで刺繍の字で

書いた黄色い魯侯旗を地面に倒すと、梁子はこれを拾上げて自分の車に

建てた。

「どうしてそんなことするんだ」

「者を騙すためです」

庄公は危急の事態と見て人目につかない服装に着替え、戎車（君主の

車）から軽馬車に乗り換えて、秦子がしつかりと魯侯に随い重囲を切り

抜けた。一方、梁子は寧越が魯侯旗を見て魯君と思い込み包囲してきた

ので、兜を脱ぎ顔を見せて叫んだ。

「わたしは魯將だ。わが君はすでに遠くへ落ちていかれたぞ」

鮑叔牙は斉軍の大勝が明らかになったので鐘を鳴らし軍を収めた。

仲孫湫は魯侯の車を、寧越が梁子を献上した。斉侯は梁子を軍前で斬

るよう命じた。

斉侯は、王子成父、東郭牙の両軍の兵の行方が分からないので、寧越、

仲孫湫を乾時に残し、大軍は先に凱旋した。

管夷吾らは輜重（食料、衣料、武器等）の軍需品を管理して後方の陣営に

いたが、前の陣営が敗れたのを聞き、召忽と公子糾に陣営を守らせ、救

援に出向いた。ちょうど魯侯に出くわし、曹沫も敗軍と共に帰ってきて

一緒になった。残兵を数えてみると三割しか残っていなかった。

「軍はもう戦意を失っていますから、ここに留まっても無理です」

夷吾はそう言つてその夜のうちに陣を引き上げた。二日も行かないう

ちに、突然戦車が現われて道を阻まれた。これは王子成父と東郭牙の軍

で、近道を取つて魯兵の退路に回つていた部隊である。曹沫は戟を振り

上げ大声で呼ばわった。

「」

と言つて秦子には

「そなたはおれを助けてくれ」

と頼んだ。秦子は王子成父に当り、曹沫は東郭牙に対した。管夷吾は

魯庄公を守り、召忽は公子糾を守つて逃げた。紅い上着を着た若い勇士

が魯侯に近づいてきた。魯侯が一箭を放つと額に命中した。するとまた

一人白い上着を着た男が追つてきたのでこれも射殺し、斉軍を少し引き

離す事ができた。管仲は兵たちに輜重、鎧兜、馬等を追に捨てさせ、

斉兵がそれを拾っている間にやつと逃げおさせた。曹沫は左腕に又一刀

を浴びたがそれでも無数の斉兵を刺殺し包囲を破つてやつと脱出した。

秦子は戦死した。

史官は魯侯の乾時での敗戦は自業自得だといつて詩のなかで嘆じて

いる。

糾は本来仇人の子 何故に兵を起して援けしや

不俱戴天の仇人なら 無知を援けるが道理ならん

隰朋が出かける前に鮑叔牙は彼に言いつけておいた。

「管夷吾は天下の奇才だから殿に申し上げて彼を使うようにお願いするつもりだ」

「もし魯侯がどうしても殺すといったらどう致しましょうか」

「殿の帯の鉤を射た事をほのめかせば魯侯はきつと信じる」

隰朋は承知して出発した。

魯侯は晝闇を読んで施伯を呼んだ。

さて如何なる計略が仕組まれておりますか、それは次回のお楽しみ。

魯侯たちは虎口を脱し網を抜け出した魚のように大急ぎで逃げた。

隰朋、東郭牙は追撃し汶水まで追つてきて、魯の汶陽を徹底的に略奪し守備の固めを行つて引揚げ、魯にはそれを阻止する力はなかった。斉兵は大勝利で帰国した（この戦いを乾時の役という）。

斉侯小白は早朝百官の祝賀を受けた。しかし鮑叔牙は、

「子糾は魯にいて管夷吾、召忽が補佐をしており、魯侯もきつと又援兵を出すでしょう、まだまだ安心はできず祝つていられる状況ではありません」

と忠告した。

「それにはどう対処すべきか」

「乾時の一戦で魯の君臣は肝を冷やしているはずです。臣が三軍を率いて魯の国境に立つて子糾の始末を要請すれば、魯はきつと怖れて承諾します」

「そなたに任せよう」

鮑叔牙は軍を檢閲し大軍を率いて汶陽へ行き境界をきれいに整理し、公孫隰朋を使者として魯侯へ書簡を届けさせた。

外臣鮑叔牙、魯侯殿下にご挨拶申し上げます。家に二主なく、国に二君なしと申します。わが主君はすでに祖廟を奉じて君主となつております。然るに公子糾はいまだに争つて位の篡奪を図ろうとしており、実にこれは許し難い事であります。しかし、我主君は兄弟の情を思い彼を殺すには忍びないと申しており、願わくは貴国において処置をお願いしたく存じます。また、管仲、召忽はわが主君の仇人であります。是非とも両人を請い受け、当方の太廟にて斬首いたしたくよろしくお願い申し上げます。

第十六回

鮑叔 檻囚の管仲を桓公に推薦し
曹劇 長勺の戦いで斉軍を破る

魯庄公は鮑叔牙の手紙を受取るとすぐ施伯を呼び出して相談した。

「先般はそなたの言うことを聞かずに大敗を喫してしまつた。ところでいま、糾を殺すのと生かすのはどちらが有利と思うかね」

「小白は即位したばかりですが人を上手に使い、我われを乾時で破りました。これだけでも子糾との能力の差は歴然としています。しかも斉軍に国境を制圧されています。こゝは糾を殺して講和をすべきでしょう」
この時、公子糾と管夷吾、召忽は生竇にいた。魯侯は公子偃にこれを襲撃させて糾を殺し召忽と管仲を捕えて魯に連行させた。

檻車に乗せられる時、召忽は天を仰ぎ慟哭して、

「子として死は孝、臣として死は忠なり。忽は黄泉までも子糾殿に随つて参りましょう。桎梏の恥にはとても耐えられない」

と言つて屈辱を受ける事を潔よしとせず柱に頭をぶつけて死んだ。

管夷吾は、

「昔から君主には死を以て仕える家臣があれば生を以て仕える家臣もある。われは生きて斉に入り糾殿の冤罪を晴らさん」

と言つて、桎梏を付けられ悠揚として檻車に乗つた。施伯はそつと庄公に言つた。

「管子の顔つきからすると誰か助ける者がいるような気がします。彼は天下の奇才です。もし彼が死ななければきっと斉で重用され、重用されれば斉は必ず天下に覇を称えるでしょう。そうなれば魯は斉の傘下に

入らざるを得なくなります。管子を助けたいと斉侯に頼んだらどうでしょう。管子は助けられたら我われに恩を感じてそれに報いようと、斉の事は考えなくなるはずです。」

「しかし、彼は斉君の仇でありそれが我が方にいれば、糾が死んでも斉君の怒りは解けないだろう」

「もし殿が彼をお使いにならないのでしたら殺して、遺体を斉国に届けるべきです」

「それはそうだ」

隰朋は魯侯が夷吾を殺そうとしていると聞きつけ急いで魯侯に会い、「夷吾はわが君の帯鉤を射当てた男で、恨み骨髓でどうしても自分で誅殺して恨みを晴らしたいと申しております。どうか生かしてお返し下さい」

と言つと庄公はそれを信じて、夷吾を檻車に乗せ、糾と召忽の首を箱につめて隰朋に手渡した。

管夷吾は檻車の中でこれが鮑叔牙の策だと分かっていたが

「施伯は智謀ある男だから一旦釈放しても考え直して追つてきて連れ戻されることになるかもしれない、そうになったら万事休すだ」

と考え、一計を案じて《黄鵠》（黄色を帯びた白鳥）という詩を作つて役人に歌わせた。

黄鵠よ黄鵠よ

翼も足も自由無く 鳴かず飛ばずの籠の中

天高くとも身屈め 地厚くとも忍び歩き

難に遭えば首を伸ばして 哭き叫ぶ

黄鵠よ黄鵠よ

汝には飛べる翼と駆ける足あり

この網にかかりしは何の咎とが

ひと度籠を破りいで 何時の間にやら枝から丘へ

ああ獵人よ そなたが躊躇ちゅうちうをしてる間に

役人はこの詩をもらつて歌いながら行進した。歌つていると楽しく疲れを忘れ道がはかどり一日で二分の行程を消化し遂に魯の国境を出た。魯庄公はやはり後悔し公子偃こうしんに後を追わせたが間に合わなかった。夷吾は「われ今日生き返つたり」とほつとため息をついた。

堂阜どうふ（齊魯国境近辺現山東自蒙陰 につくと鮑叔牙が先に来ていて、夷吾を見て至宝を手に入れたように公館に迎え入れ、

「仲君、無事で何よりだ」

と言つて、すぐ檻車かんしやから出すよう命じた。

「君命がないのに勝手に檻車かんしやから出るわけにはいかんよ」

「大丈夫だよ、おれがもうすぐ君を推薦するから」

「召忽しやうこと一緒に子糾様を守つてきたのにとつと君位にお立てする

ことができず、死ぬこともできなかった。臣として失格だ。逆に仇の人

に仕えることになり、召忽しやうこが知つたらあの世でおれを嗤うだろうよ」

『大事を為す者小恥に構わず、大功を立てる者小事にこだわらず』

と言うじゃないか。君には天下を治める才があるが未だその時に至っていないだけなんだ。殿は志は大きく高い識見を持つておられる。もし君の補佐を得て齊国を治めたら覇業を成す事も十分可能で、その功は天下に知られ名声は諸侯に響き渡るのだ。匹夫の節操を守つた処で何のいいこともないぞ」

夷吾いごは何も言わなかった。束縛を解かれ堂阜どうふに留まつた。

鮑叔牙は直ちに臨淄に帰つて桓公かんこうに会い、先ずお悔やみを言い、それからお祝いを言つた。

「何で悔やみを言うのだ」

「子糾殿は殿の兄上です。国のために兄弟を失なわれたことは誠に致し方のない事とはいえ臣としてお悔やみを申さざるをえません」

「それはそうとして、めでたいというのはどういう事だ」

「管子は天下の奇才で召忽しやうことは比較になりません。臣は彼を生かして連れて来ております。君主が賢相を手に入れられる事はおめでたいことで、どうしてもお祝いを申し上げないわけには参りません」

「夷吾いごはわしの帶鉤を射た男だ。あの時の矢は今も持つている。絶対に忘れることはできん。やつ肉を食つてやつとまで思つているのだ、生かして使うなんてとんでもない」

「臣下には皆それぞれ主人があります。殿を射た時は、彼の主人は糾殿であつて殿の事は彼の頭にありませんでした。殿が彼をお用いになれば彼は殿のために天下を射るでしょう」

「よしわかつた、しばらくそなたに従つて彼を赦すことにしよう」

鮑叔牙は管夷吾を自宅へ迎えて朝夕話し合つた。

桓公かんこうは国君登位に功労あつたものに論功行賞を行ない、高こう 国の両卿

には食邑の加増があり、鮑叔牙には上卿を委嘱し国政を任せようとした。『配屬賜り誠にありがとうございます。お陰さまで何不自由なく過ごさせて頂いております。しかしながら、国家を治める件につきましてはわたしにはその能力がございません』

「わしは卿の事をよくわかつている積りだ。是非引き受けて欲しい」

「臣のできる事と言えば慎重かつ礼に随いルールを遵守することです。

この程度の事でしたら臣にも可能ですが、それは国家経営の才能ではございません。国家を治めるという事は、内には民衆の安寧をはかり、外に対しては近隣諸国との外交、周王室への配慮、諸侯には恵みを与え、これらによつて国を泰山のように安定させ、ご主君には無窮の幸せを享受願ひ、ご主君の美名功績を永遠に残す必要があります。これが王佐を行う者の任務でありますが、臣にはとても荷が重うございます」

桓公かんこうの顔に思わず喜びの色がひろがった。

「卿がそう言うのは、誰か適任者がいるということか」

「いますとも管仲かんちゆうがそれです。臣は次の五つの点で管仲かんちゆうにかないません。第一に寛容。第二に治国の根幹掌握。第三に民衆の教導。第四に外交。第五に用兵です」

「そうか、それでは彼を連れてきてくれ、彼の力を試してみよう」

『賤者は貴者に近寄れず、貧者は富者を使えず、疎遠なる者親しき者に勝てず』といひます。殿が心から彼を重用なさるお気持ちがお有りでしたら、是非とも、丞相にして十分な待遇を与え、お父上兄上に対する礼を以つて厳肅に迎えていただきたく存じます。相国は君主の下位ですから相国しやうこくと呼びつけるのでは彼が軽く見られます。相国が軽く見られてはご主君も軽くなります。特別な者には特別な礼をもつて対するべきであり、殿が吉日を占つて郊外まで彼を迎えに出れば、天下の賢才が、君主はたとえ私的な仇人であつても賢者であればこれを大切にするといいうことを聞きつけ集まってくるでしょう。それが必ず斉のためになります」

「わかつた、そなたの意見に従おう」

そこで太卜たいはくに吉日を選ばせ、郊外まで管子を迎えに出ることにした。

鮑叔牙は管夷吾を郊外の公館に送り届けた。その日になると夷吾は三度沐浴し香を塗り上大夫としての衣冠と笏しやくを整えて斉侯を待った。

桓公かんこうは自ら迎えに行き、管夷吾と同乗して朝廷に入った。桓公が仇と見える者を自ら出迎えたというので驚かない者はなく、これを見ようとする人で道が塞さがるほどであつた。史官の詩がある。

君侯が名相を得しと皆祝う　そが囚人なりしとは誰知ろう
私怨を棄てし結果なり　四海は欣然覇者と呼ぶ

管夷吾は朝廷にはいり、叩頭して桓公に謝罪した。桓公は自ら助け起し椅子を与えた。

「臣は本来死すべきところを、ご主君のご恩を蒙り死を免じられました。このこと自体すでに大きな幸せでございますのにその上どうして殿の前で席をいただく事ができましよう」

「どうぞ席に就いてください。話が有りますが、席に就いてもらわなければ教えを請う事もできません」

夷吾は再拝して席に着いた。

そこで桓公はいくつかの諮問を行った。

「斉は千乗の国（大国を意味する。第3回注）で先の僖公は威風をもつて諸侯を従え『小覇』と号していましたが、襄公の頃から朝令暮改が行われ遂に大乱になってしまいました。わたしは国主となつたばかりでまだ人心は定まらず国勢も振いませぬ。国政を建て直し綱紀を正すには先ず何をすべきでしょうか」

「礼義廉恥が国を保つ四本柱です。これがきちんと行われなければ国は滅びます。殿が国の綱紀を正そうとお思いでしたらこの四本柱を庶民に啓蒙する必要があります」

「どのように啓蒙するのですか」

「先ずは民を愛することです」

「具体的には」

「公人としては政権幹部の国民に対する責任、私人としては家長の家族に対する責任をそれぞれ明確にし、公私連携して国事に当たります。それが全体の幸せにつながり民は互いに親しむようになります。過去の罪の恩赦や古い道徳の見直し、跡継ぎを立てる場合の配慮、刑罰の簡略化、税金の軽減などによって民は豊かになり人口も増加します。更に、大臣の中から才徳の人を選び民間に礼法を教化します。そうすれば国民に礼節や信義が浸透します。そして朝令暮改をなくし命令を慎重に出せば民は正しくなります。これが民を愛する道であります」

「愛民の諸施策がとられたら、具体的に民衆にどう対処しますか」

「臣民は、士、農、工、商の四種類に分けて、代々世襲させれば、技術の継承及び慣れにより安心して仕事に従事できるようになります」

「民の安定の次は武器不足の対策ですがこれに対してはどう考えますか」

「武器の充足には罰金制度を利用すればいいでしょう。重罪の場合、犀^{さい}の皮の鎧兜と矛の一揃を、軽罪の場合、革の盾と矛一揃えを、小犯罪の場合は、罪によって銅鉄等の金属を課し、罪の有無が疑わしい場合は罰せず赦します。訴訟を起こした場合、案件によって原告被告双方から裁判費用として矢束（二束十二本）を課します。このようにすれば広く民

間から大量の金属を集める事ができます。その中からいい物を選んで劍矛等武器を製造し、品質の悪いものは農具にすればいいでしょう」

「武器は揃った。次に財政不足に対してはどう考えますか」

「その主要な手段は鉍石から貨幣の鑄造と、海水を煮沸して塩を作る事ことです。それにより広く天下から利益を得る事ができます。それから、国中に物品の定期的な交易市场を設け、そこに遊郭も作って人を集めれば多品種の大量な商品が取引され、そうならば商売人も売り先が安定して安心して商売が行えます。そこから物品税を徴集すれば強兵策の財政支援にもなるでしょう。これらによって財政問題は解決できます」

「財政問題も片付いた。次に、軍隊不足と士気高揚対策はどうです」

「軍隊は数ではなく精銳かどうかが重要で、力ではなく精神的な強さが大切です。わが軍隊や武器が揃っても諸侯が皆同じように数を揃えたら必勝法にはなりません。軍の強化はむしろ内政上の制度改革に基づく、軍令による実質的な強化を図るべきだと思います」

「内政をどうするのですか」

「内政管理は、国を二十一郷に分け、工商の郷を六、士の郷を十五とし、工商の郷は資金を、士の郷は兵数を充足させるのです」

「兵の充足の具体策は？」

「五家を一軌^きとし この五人を伍^ごといい 軌長がこれを管掌
十軌を一里^りとし この五十人を小戎^{しょうじやう}といい 司^しがこれを管掌
四里を二連^{れん}とし この二百人を卒^{そつ}といい 連長^{れんぢやう}がこれを管掌
十連を一郷^{けう}とし この二千人を旅^{りょ}といい 良人^{りやうじん}がこれを管掌
五郷を一師^しとし この一万人を一軍^{いぐん}という

十五郷あれば三万人で三軍ができ、ご主君が中軍を、高、国のお
 二方に左右軍を管掌願います。

春夏秋冬年四回、時間を作つて巻き狩りを行い、民間人にも軍事訓練
 を行います。伍はそれぞれの里で訓練し、軍隊の教練は郊外で行います。

居住地の移動は認めません。伍では祭祀冠婚葬祭は共同で行わせ、人と
 人、家と家は親しく代々一緒に住み、幼時より共に遊び互によく知合つ
 ているので夜間の戦いでは声を聞くだけで敵味方を識別でき、昼間の戦
 いでも見ただけですぐわかるので逃亡はなく、死ぬ時も不安が少なくな
 り、常には一緒に愉しく生活をするこのような協力集団は、守に固く、
 戦うに強い軍隊です。このような三万人の軍隊があれば天下ににらみを
 利かせることができます」

「軍隊も強化されたとすればこれで天下に覇を称える事ができます
 か」

「未だです。周室と隣国との関係が残っています。天下の諸侯を従え
 ようとお思いでしたら周王室を尊び、隣国と親しくする必要があります」

「そのためには？」

「国境あたりをよく調べてみて、侵略された部分があればみやげを持
 つて表敬訪問を行ないます。この時掠奪品を返還するといつても受取
 らないのです。そうすれば隣国とは親しくなれます。それから雄弁な者
 八十人を選抜し、みやげを持たせて天下の各所に遊説させ天下の賢人を
 呼び集めます。また、各地に行商人を出して各国の君臣の行状を調べ上
 げ問題点を見つけて攻撃すれば効果がありますし、さらに淫乱事件や弑

逆事件、君位篡奪事件を探り当てこれに天誅を加えれば威厳を示すこと
 もできます。こうなれば天下の諸侯は連れ添つて齊に集まつて来るよう
 になります。これらの諸侯を従えて周朝に朝見すれば王室を尊ぶことに
 なり、そうすれば伯の名（伯 諸侯の統率者即ち覇者）は嫌でも殿のものに
 なり覇業を達成したという事になります」

桓公と管夷吾両人は意気投合して三日三晩話し合つたが少しも飽き
 る事が無く桓公は非常に喜んだ。そこで斎戒三日、太廟に報告して管夷
 吾に相国を委嘱した。だが夷吾は受諾しなかつた。

「わしはあなたの覇業の策を採用して志を得ようと思つて相国を委
 嘱したので、どうして受けてもらえないのだろうか」

『大殿堂も一本の木では建たず、大海も一条の河では成らず』と申
 します。殿が大業を成すためには五人の賢才が必要です」

「五人とは」

「立ち居振る舞いが控えめで弁が立つ隰朋を大司行に、農地開墾な
 らびに農業の生産管理能力がある寧越を大司田に、三軍の兵士に死を恐
 れさせず用兵能力に優れている王子成父を大司馬に、冤罪をつくらず裁
 判能力が高い賓須無を大司理に、言うべき時には主君の顔色を見ること
 なく死をも恐れず、富貴に惑わされる事無く諫言できる東郭牙が大司諫
 にそれぞれ適任で、いずれも臣より優れております。治国強兵を計るに
 はこの五人が必要であり、ご承りいただければ殿が諸侯に覇を称えられ
 るために、非才ですが微力を尽させていただきます」と存じます」

桓公は管夷吾に相国を委嘱し齊国の市租・物品税一年分を支給した。隰朋以下の五人も夷吾の推薦とおりそれぞれ拝官し業務に就いた。そして直ちに、国門（国都ここでは臨淄城の城門）に「国家富強策を募集する。採用の案は順次実施する」という賢人募集の立札を立てた。

ある日桓公は管夷吾に質問した。

「わしは狩と女が大好きなんだが覇業達成のために障害になるかね」

「問題ございません」

「ならば覇業達成の障害とはどういう事だろうか」

「先ず賢愚の見分けができない事、賢者とわかつていてもこれを用いない事、用いても任さない事、任していながらそこに小人を参画させる事、これらはみな大きな障害になります」

「なるほど、わかった」

桓公は納得して夷吾を信頼して任しきつた。そして彼を仲父と尊称して厚くもてなし、待遇を上卿の高（高侯、国懿仲）の上に置いた。

「国政に関することは先ず仲父に上げ、その後わしに回すこと。実施に就いては仲父に一任する」

とし、さらに国内では貴賤にかかわらず夷吾をいう名を使うことを禁止し、仲（管夷吾の字）と呼ばせた。そもそも、昔は字で呼ぶ時は敬意が含まれていたのである。

さて魯侯は斉が管仲を相国にした事を聞いて非常に怒り、

「施伯の言うことを聞かなかつたため小僧つ子に騙されたことが悔やまれる」

と言つて乾時の敗戦の仇を討つために兵を立直して斉に攻撃をしかけた。斉桓公はこれを聞き管仲に、

「わしは位を継いだばかりだから度々攻められるというのは気分が良くない。卿に先制攻撃を頼めないかね」

「軍政は未だ固まっていますので、未だ軍を動かす時期ではありません」

斉侯は管仲の阻止を聞かず鮑叔牙を大将に長勺（魯曲阜の北）に攻めさせた。魯庄公は施伯に訊ねた。

「斉がわしを馬鹿にするのも甚だしい。これをどう防げばいいだろうか」

「斉軍に勝てる者を推薦申し上げます」

「ほう、そなたが推薦するというのはどういう者だ」

「曹劌と申しまして東平の郷に隠棲している者です。今まで出仕した事がございませんが將軍宰相の才がございました」

庄公は施伯に彼を招致するよう指示した。

曹劌は施伯に笑つて言つた。

「肉食者には智恵がないから豆の葉を食つてる者に智恵を借りに来たか」

「豆の葉を食つて養つた智恵で肉を食うようになればいいじゃないですか」

曹劌は施伯と一緒に庄公に会つた。さつそく庄公が訊ねた。

「斉とはどう戦うつもりでしょうか」

魯侯がたずねた

「戦いは臨機応変ですから事前に申し上げることはできません。車に同乗させていただければ道々お話ししましょう」

庄公はそれを聞き喜んで同乗して長勺へ向つた。

鮑叔牙は魯侯がやって来たと聞き、嚴重な陣を敷いてこれに對し、庄公も布陣して對峙した。鮑叔牙は乾時かんじで大勝しているので魯を軽く見て、先に敵を落としたものには重賞ありと命じて攻撃を仕掛けた。庄公は敵の太鼓が地を震わすのを聞き、自軍も士気を上げるために對抗して太鼓を打たそうとすると、曹劌そうけいはこれを遮って、

「斉軍の闔志が鋭い時は静かにして待つべきです」

と言つて、騒ぐものは斬ると軍令を伝えた。

斉兵が魯陣に突撃を仕掛けたが、陣は鉄桶のようで一方向に動かない。仕方なく兵を下げ、しばらくしてまた陣太鼓を響かせ攻め込んだが、魯軍はあいかわらず聞こえてないように静まり返つていて、斉軍はまた引き返すしかなかった。

「魯は戦いを怖れているだけだ、もう一度太鼓を轟かせて攻め込めばきつと逃出すに違いない」

鮑叔牙はそう言つて太鼓を打ち攻撃をしかけた。

曹劌はまた鳴り始めた太鼓の音を聞いて庄公に、

「斉を破るのはこの時です、すぐ太鼓を打ってください！」

魯にすれば陣太鼓を打つのは今回が初めて、斉はすでに三回目である。斉軍は魯兵が二度とも動かないので今度も同じだろうと氣にかけていなかった。ところが何と、突然、陣太鼓がなり矢を雨のように降らせながら斬り込んで来た。その勢いは雷神も耳を覆うほどで、斉兵はばらばらに蹴散らかされ大敗を喫して逃げた。庄公が追撃しようとしたが曹劌は、

「待つてください、ちよつと調べてみます」

と言つて車を降りて斉軍の陣跡の周囲を見て歩き、車の高みに登りしぱらく遠望してから、

「追撃しても大丈夫です」

といった。庄公は三十里ほど追撃してから引き返した。奪った武器輜重しちようは数えきれないほどであつた（この斉の敗戦を長勺の戦いという。）。

さてこの後如何になりますか、それは次回のお楽しみ。

第十七回

宋公 賄賂を出し、紆逆の長万を誅し

楚王 酌ささせ息嬭を取る

魯侯は齊軍に大勝したことに、曹劌にいくつかの質問をした。

「我が方の一回の太鼓で敵の三回の太鼓に勝つたのには何か理由があるのですか」

「戦いというものは士氣が重要です。士氣が優れば勝ち、これが衰えると負けます。太鼓は士氣を高めるための道具です。一回目の太鼓は士氣を盛り上げます、二回目は衰え、三回目になると士氣が尽きてしまいます。わが方は太鼓を打たず三軍の士氣を醸成し、敵が三回打ち鳴らして士氣が尽き果てている時、わが方は最初の太鼓で士氣が盛り上がっています。満ち満ちた氣力のわが方が士氣の衰えてしまった相手に勝てないわけがありません」

「齊軍が敗退した時、すぐには追撃させないで、しばらくして追わせたのはどうしてですか」

「齊は策謀が多いので、退却と見せかけ途中で伏兵がある事を心配したのです。齊軍が去った後をよく見るとわだちの跡が左右に振れていましたので軍心が乱れていたと判断し、更に退却する齊軍を遠望しても旗が乱れていましたので慌てて逃げて行つたことが分りました。そこで追撃を命じたのです」

「あなたは本当に戦いというものがよくわかっておられる」

庄公はそう言つて曹劌を大夫に任じ、施伯にも賢者を推薦したということであつた。髡翁詩に言う。

齊軍魯境を震わすも 何と布衣に良策有り

怪むなけれ勝報の届かざるを 古来富貴に名謀少なし

(布衣…官位の無い庶民)

これは周庄王十三年(紀元前六八四年)春のことであつた。

齊軍が大敗を喫して帰つてくると桓公は鮑叔牙に怒つた。

「戦つて何の功も挙げられないようで、どうして諸侯を従えさせることができるのだ」

「齊も魯も共に千乗の国で實力はどちらが上とも申せません。以前乾時の戦いではわが国が主導権をとり魯に勝ちましたが、今回は逆に魯に主導権を奪われ敗れてしまいました。願わくは今一度宋の援軍を得て所期の目的を達成致したく存じます」

桓公は許可した。そこで使者を宋に遣わし宋軍の出兵を要請した。宋閔公捷は、齊襄公の頃からしばしば軍事協力を行つてきていたので、小白の即位を聞き友好を強めるため、出陣の日取りを六月初旬と決めて郎城で会うことにした。

期日が来た。宋は南宮長万を大将に、猛獲を副将とし、齊は鮑叔牙を大将、仲孫湫を副将としてそれぞれ大軍を率いて齊軍は郎城の東北に、宋軍は東南に集まつた。

「鮑叔牙が怒つて今度は宋と連合軍でやつてきたぞ。宋の南宮長万は鼎を抜くほどの馬鹿力でわが国にはこれに対抗できる者はいない。それに両軍は犄角の態勢をとっている。どう食い止めるべきか」

と、魯庄公は家臣たちに意見を聞いた。

大夫の公子偃は、自分で敵軍の様子を探つて来てその報告をした。

「鮑叔牙は慎重で軍容が整っておりですが、長万の方は自分の力を恃みこちらを見くびっていてその隊は雑然としています。密かに雪門（魯城城門の一つ）から出撃し不意を突けば宋軍を崩せましょう。宋が敗れたら齊だけでは支え切れなと思います」

「しかしそなたでは長万にはかなうまい」
「やらせてください」

「よし、じゃわたしもそなたの後詰めをしよう」

庄公は無理とは思ったがほかに方法もないので許可した。

公子偃は百枚余りの虎の皮を馬に着せ、夜になって朦朧とした月明かりの中を旗を倒して音を潜めそつと雪門を出た。宋陣に近づいても宋兵は全く気付いていない。公子偃は宋軍に火をつけ、突然鐘太鼓を鳴らせて突撃した。火の光の向うに虎の群れが見えた。宋軍はこれを見て腰をぬかし先を争い逃げ回った。南宮長万も勇猛とはいえ奈何せん御者が先に逃げてしまったので自分で御してとにかく退却するしかなかった。

公子偃軍は魯侯の後続隊と合流し夜中じゅう追撃した。乗丘（現山東省巨野）あたりに来た時南宮長万は猛獲に、

「今日はどうあっても勝負を決めるぞ」

と言うと、猛獲はそれに応えて出撃し、公子偃と出合い両者必死の戦いになった。南宮長万も長戟を構えて魯侯の大軍に突撃した。人を見れば刺し殺し、魯兵はその強さに恐れをなし近寄るものはなかった。

庄公は戎車（しやうせ）の車右顓孫生に、（戎車は君主の戦車 車右は10回注参参照）「普段そなたの力を聞いているが、長万と決戦できるかね」

と声をかけると顓孫生は大戟を構えて長万に挑戦した。庄公は車の上からこれを見ていたが、顓孫生の形勢が悪いと見てお付きの者に、

「金僕姑（きんぼこ）を持つて来い」

と命じた。金僕姑は魯の国庫保管の屈指の矢である。その矢を差し出すと魯侯はそれを手にし長万に狙いを定めた。シューツと放たれた矢は彼の右肩に命中し骨まで達した。長万は自ら矢を抜いたが、顓孫生はその隙に力を込めて一戟を長万の左股に刺すとたまたま長万は地に倒れこんだ。顓孫生が車から跳び下りて両手ですっかり押さえ込むと兵士たちが一斉に縛り上げて生け捕りにした。猛獲は大将が捕らえられたので車を捨てて逃げてしまった。魯侯は大勝し、鐘を鳴らして兵を引き上げた。顓孫生は長万を魯侯に献納した。長万は肩と股に重傷を負ってもなお直立して全く痛々しい態度を見せないの、庄公はその勇猛を愛して彼を厚遇した。鮑叔牙は宋軍が壊滅したのでしかたなく全軍に撤退を命じた（これを乗丘の戦いという）。

この年、齊桓公は大司行隰朋（しゆうほう）を使者として周室に即位の報告をし、同時に周室に結婚を申し入れた。翌年、周は魯庄公を婚姻の司掌に任命し王姬を齊に降嫁させることにした。徐、蔡、衛はそれぞれこの花嫁につけるお付の女性を出した。魯がこの結婚の司掌の労をとったので、齊魯の関係は修復され、二度の戦争（長勺、乗丘の戦い）のことは互いに忘れることとして兄弟の契りを交わした。その秋、宋が水害に見舞われた時、魯庄公は、

「齊とは兄弟の間だから宋ともいがみ合つてはいけない」

と言ってお見舞いの使者を出した。宋は魯の気持ちを感じてお礼の使者を出し同時に南宮長万の返還を願ひ出たので、魯侯は彼を釈放し帰国させた。これより三国は友好関係を保ち以前のぎくしやくした関係は解消した。

髯翁は詩にうたう。

乾時長勺に雌雄を競い 又乗丘に宋を倒す
勝負は常ならず 両国の友好何時までぞ

さて、南宮長万が宋に帰ると、宋閔公は、

「そなたを尊敬していたが、魯の捕虜になって、もうその気がなくなつたよ」

と長万をからかった。長万は真つ赤になって恥じ入って下がって行つた。

大夫仇牧が閔公に諫言した。

「君臣は互いに礼を以て接する必要があります。からかうのは良くありません。からかうのは相手に対する敬愛がなく見くびることになり、つまりは無礼につながります。将来謀反を生む温床にもなりますので絶対におやめください」

「わしは長万とはもう慣れっこなんだ、大事無い」と全く気にしなかった。

周庄王の十五年（紀元前六八二年）、王は病に倒れ崩御し、太子胡齊が即位した。これが僖王である。訃報は宋にも届いた。この時閔公は宮人たちと蒙沢で遊び、余興で長万に投戦をさせていた。これは長万の得意技で、戟を矢中に数丈も高く投げて手でこれを受け止め百に一つもしくじることがなかった。宮人たちがそれを見たがったので長万を一緒に連れて来たのである。長万は閔公の命を受けて一度やったが宮人たちのやんの喝采が止まない。閔公は少し嫉妬心を起こして内侍に博打道具を出させ、負けた者が罰に斗杯を干すという賭けを始めた。この博打は閔公の

ほうが得意で、長万は五連敗して罰に五斗の酒を飲まされ、すでに八分酔っ払っていたが、負けず嫌いでもう一局挑戦した。

「常敗の囚人がどうしてわしに勝てるというのだ」

閔公がまたからかうと長万は慚愧と怒りをこらえて黙った。その時突然周王の使者が来たという連絡があった。来意を聞くと庄王の訃報と新王の即位の知らせであった。

「周の新王が即位したのなら弔問と祝賀に誰かを遣らなきゃならんな」

「この長万、まだかつて王都の賑わいを目にしたことがございません。この使いわたくしに遣らせていただけませんか」

「宋に人がいないといっても囚人を遣わすわけにはいかんね」

宮人たちは皆大笑いした。長万は満面真つ赤になって恥かしさは怒りに変わり、酔いのせいもあるのか急に腹が立つて君臣の立場を忘れて怒鳴った。

「無道の馬鹿殿め、死にたいのか」

「囚人め、無礼だぞ」

閔公は長万の戟を取って刺そうとした。長万はそこにあるばくちの道具を使って閔公を押し倒しさらに拳固を食らわした。哀れ閔公は長万の一拳で即死した。宮人たちは驚いて逃げ散った。長万の怒りはそれでも収まらず、戟を持って朝門まで来た所で大夫仇牧に出遭った。

「殿は何処におられる？」

「馬鹿殿は無礼だからおれが殺してきた」

「將軍は酔っておられるのか」

と冗談だと思つて笑いながら言つた。

「酔ってなんかいるもんか、本当の話だ」

と言つて血で汚れた手のひらを見せた。仇牧は急に顔色を変えて、

「弑逆の大罪人め、天誅だ！」

と怒鳴つて長万を笏で打つたが、虎のような力持ちの長万になうわけがない。長万は戟を捨て、左手で笏を払落し右手の一撃で仇牧の頭はぐじやぐじやに砕け散り、齒は折れて飛び、門柱に三寸もめり込んだ。すごい馬鹿力である。仇牧を殺すと長万は戟を拾い上げ傍若無人にゆつくり歩いて行つて車に乗った。閔公は在位十年で臣下をからかつた事が原因で逆臣の毒手にかかつてしまったのである。春秋の世は、君主を弑する事さえ鶏を絞めるほどにししか見られないほど乱れてしまつてゐる。何とも嘆かわしい次第である。

ある史官に『仇牧を称える』という詩がある。

世は降り 道は廢れて綱紀は地に落つ

堂中御簾を隔てず 君臣互いにぶさけ合い

君は臣を言葉で愚弄 臣は君を戟で返す

壮なり仇牧笏で賊を打ち 逆襲怖れぬ忠烈の血

その死の重きこと泰山の如く その輝きは日月の如し

太宰華督は、事変を聞き乱賊討伐のため兵を率いて東宮の西まで来たところまで長万に出遭つた。長万は一言も交わすことなく一撃で華督を車から突き落とし一突きで華督を刺し殺した。長万は閔公の従弟の子游を位につけ、他の公子たちは全貢国外に追放した。戴、武、宣、穆、庄の公子達一族は蕭（現安徽蕭縣）へ、公子御説は亳（現河南省商丘）へ逃避した。長万は、

「御説は有能だし君主の嫡弟でもある。今亳にいろが将来危険な男だ。やつさえ始末しておけば他の公子は大したことない」

と言つて息子の南宮牛と猛獲に亳を包囲させた。

十月、蕭叔大心は戴、武、宣、穆、庄の五族を糾合し、曹国の援軍も合わせて亳へ救援に向かつた。そこで公子御説は亳の人々を決起させ内応して城門を開き打つて出た。南宮牛は内外から挟撃され大敗し戦死。宋兵は全て御説に投降した。猛獲は宋に帰らず衛國に逃げて行つた。戴叔皮は御説に一策を献じた。

「投降兵の旗を利用して、南宮牛らが亳邑を陥落して御説を生け捕つて凱旋したと騙して開門させるといふ案は如何でしょう」

御説は同意して、数人を先行させ道々デマを流させると長万はこれ信じて防御を怠つた。

公子たちの軍は、到着すると騙して開門させ、

「逆賊長万を捕えるだけいい、他の人々を驚かすではない」

と言つて一斉に城内に突入した。長万は慌ててなすすもなく、宮城に入り子游を奉じて出奔しようとした。しかし何処も皆武装兵でいっぱいである。内侍が出て来て

「子游さまは敵軍に殺されてしまいました」

と言う。長万は大きなため息をついた。列國の中で宋と国交がないのは陳国だけだと気がつき、陳に逃げようと思つたが、ふと家に八十数歳の老母がいるのを放つて行く事はできないと思ひ家に引返し、母を助けて車に乗せ左手に戟を持ち右手で車を御して疾風の如く走り抜け誰も遮ることはできなかった。宋と陳は二百六十余里もあるが一日で到着した。古今稀な神業である。

さて公子たちは子游を殺し、御説を奉戴して即位させた。これが宋桓公である。戴叔皮を大夫にし、五族の中から賢者を選び公族大夫とした。蕭叔大心は蕭に戻った。

桓公は使者を衛に送り猛獲逮捕を依頼し、更に陳にも使者を出し南宮長万の逮捕を依頼した。公子目夷はこのときたつた五歳で宋桓公の側に侍っていたが、これを聞いて笑って言った。

「長万は来ませんよ」

「坊主、どうして分かる」

「勇猛な人物は誰でも大切にします。宋が殺そうとすれば陳は必ず庇うでしょう。誰でも先ず自国の利益を考えるでしょうから、手ぶらで行ってもこちらの思い通りになる訳がありません」

宋公はハッと気がつき賄賂として十分なお札を持って行かせる事にした。

さて、宋使が衛に着いて用件を話すと、衛惠公は群臣を集め相談した。
「猛獲を助けるべきか否か」
「窮鳥懷に入る」です。困って我われを頼ってきたものを、どうして捨てられましょか」

殆どの者がそう答えたが、大夫の公孫耳はそれに反対して諫めて言った。
「天下の悪は何処へ行っても悪です。宋で悪なるものは衛でも悪です。悪人を留め置いて衛に何の益がありましょ。いわんや衛と宋は古くからの友好国です。猛獲を渡さなければ宋はきつと怒るでしょう、悪人を一人庇って友好国一国を失うのは愚かな話です」

衛侯はこの意見を採り猛獲を捕えて宋に引き渡した。

次に陳国の方はどうか。

宋使は先ず手厚い贈物を陳宣公に献上した。宣公は賄賂に弱く贈物を見て大変喜び長万を送り届けることを約束した。しかし長万の押さえ難い怪力無双力を考えると策を用いるしかない。そこで、公子結に命じて長万に、

「わが君はあなたが来てくれて十城を手に入れたに等しいと言って喜んでいます。たとえ宋から百回引き渡し要請があつても請けるつもりはありません。あなたに疑われるのを心配して私にちゃんと誠意を示すようにとの指示がありました。陳は小国ですからもつと大きな国へ行かれるにしましても、しばらくはゆっくりしていただきたく外出用の車も用意いたしました」

と伝えさせた。すると長万は泣いて言った。

「ご主君がわたしを受け入れて下さっただけで本当に十分です、これ以上何を求めましょ」

公子結は持参した酒を飲み兄弟の契りを交わした。翌日長万は自分から公子結の家へ行き感謝を述べた。公子結はまた引き止めて歓待した。酒が半ば進んだところで美女に酌をさせると長万は機嫌よくべろんべろんに酔払って席で横になってしまった。公子結は力士に犀の皮で包み牛の筋で縛らせ、老母と一緒にその夜を徹して宋へ運んだ。途中で長万は酔いから醒めて全身で蹴ったが皮は堅くがっちり縛られていてついに脱出はできなかった。宋城に着いた頃には犀の皮は破られ手足が外に出ていたが、押送兵が出た足を槌で殴り脛の骨が全て折れていた。宋桓公は猛獲と一緒に縛って刑場へ連れて行きずたずたに切り刻ませ塩からにして、

「臣下で君主に逆らう者はこの通りである」

と言つて群臣に配給した。八十の老母も一緒に殺された。髯翁は詩に
してこれを慨嘆している。

惜むべし勇猛絶倫 たゞ母子の情を知るも君臣の忠に暗し
後悔遅し終には母子誅されし 謀反の罪の見せしめとして

宋桓公

が蕭叔大心が毫を救つた功に報いて蕭邑を附庸ふように昇格

させ大心を蕭君と呼んだ。また華督の受難を思つてその子を司馬に任
じ、これより華氏は宋の大夫を世襲することになった。

一方、齊桓公は長勺でしくじつた後、用兵に関して深く反省し、国
政を全て管仲に任せ、美人と酒を飲んで楽しむことにした。国事に關し

て言つて来る者があれば、

「どうして仲父に言わないのだ」

と叱つて取り合なかつた。

豎刁じゆうてうという者がいた。桓公が寵愛する童子である。内宮に近づきた

いの自由に出入りできないので、自宮みみやう（自分で男性生殖器を切除する事）
を行った。桓公は可愛く思つてますます寵信し身辺から離さなくなつた。

また、齊の雍邑の人で名を巫、人呼んで雍巫、字を易牙という権謀術数
にたけ、物作りや弓術、車の操作（御者）等多能で料理にも造詣深い男

がいた。ある日、衛姫が病氣にかかつた時、易牙が出した料理で回復し
た事があり、それ以来彼女の寵信をえた。易牙は更に、料理の腕で豎刁

に取入り桓公に推薦してもらつた。

豎刁じゆうてう 東周列国志原文では豎貂と豎刁の二つの書き方が混用されている。訳者は史
記に使われている豎刁に統一した。

「そなた料理に心得があるそうだな」

「おおせの通り」

「わしは鳥獸や魚、虫等大抵の物は食つたがまだ人の肉の味だけは知
らない」

と、桓公は冗談を言つた。易牙は退出して昼の膳に蒸し肉を一皿出し
た。子羊のように柔らかく大変美味しかつたので食べ終わつて、

「うまかつた。この肉は何の肉かね」
と感心して聞いた。

「人の肉でございます」

桓公はびっくり仰天して訊ねた。

「どこで手に入れたのだ」

「わたくしの三歳になる長男でございます。『忠義のためには家庭は
二の次』と申します。ご主君が人の味をご存知ないとおつしやられまし
たので、子を料理してお出しいたしました」

「わかつた、下がりなさい」

桓公はそう言つたけれど、易牙の好意を思つて彼を寵信するようにな
つた。衛姫も中に立つて彼を褒めた。こういうことで豎刁と易牙は宮廷
の内外のことに権力を握るようになり、密かに管仲を嫌うようになった。
そこで二人は口を合わせて桓公に言つた。

『君主が命令を発し臣がこれに従う』というのが普通ですが、いま
殿は二にも二にも仲父、仲父、これでは齊国に君主がいないのではない
かと疑われます」

「わしにとつて仲父は、体とその股肱（ていしゅう）（手足）のようなものなんだ。股肱があつてこそ体は機能する。仲父がいてこそこの君主が機能しているんだ。お前ら小人には分かななくていい」

と言つて笑い流した。二人はそれ以上何もいえなかつた。管仲が国政を担つて三年、斉国は立派に治まつた。髡仙は詩に言う。

疑うなら用いる勿れ 用いるなら疑う勿れ

仲父の政權独裁は 桓公の厚き信頼ありてこそ
刁巫の百の讒言 また何せんや

この頃、楚は強盛になり、鄧を滅ぼし、樅、隋、郢、絞、息等を従へ、漢東の小国は全て楚に臣従し貢納していない国はなくなつた。ただ蔡だけが斉侯との姻戚關係と中原諸国との軍事同盟を待み、未だ楚に臣従していなかつた。文王熊賁は王を称して（周朝が現存するので周から言えば僭称といえる）二代目になる。鬬圻、屈重、鬬伯比、遽章、鬬廉、鬬拳らの補佐を得て、漢水の北を虎視眈々と狙ひ次第に中原侵犯の様相を見せていた。

ところで、蔡哀公獻舞は息侯と同じく陳の女性を夫人にしていた。蔡侯が先で、息侯が後から娶つた。息夫人嬀氏は絶世の美人である。ある時陳へ里帰りするのに蔡国の道を通つた。

「ここへ来られたのでしたら寄つて行かれたら如何ですか」

蔡の哀公はそう言つて宮中に呼んで歓待したが、言葉に揶揄が多く客に対する敬意が全く見られなかつたので息嬀は怒つて帰り、陳からの帰

途は蔡国を通らなかつた。息侯は蔡侯が妻を粗略に扱つたことを聞き報復を考えた。使者を楚に入貢させて密かに文王に策を持ちかけた。

「蔡は中原諸国を待み貴国に臣従していませんが、これに対して一案がございます。もし貴国がわが国に出兵すればわが国は蔡に援兵を頼みます。蔡君は勇猛な男ですが軽率な所があるので必ず自分で救援に来ます。そこを貴国と二緒に逆に彼を攻めれば獻舞を虜にできます。獻舞を虜にしてしまえば蔡を貴国へ朝貢させることができるでしょう」

文王は喜んで、さっそく息討伐軍を出した。息は蔡に救援を頼むと予想通り蔡哀公は大軍を出して自ら救援に来た。陣の設営が出来上がらないうちに、楚の伏兵が一斉に攻撃を仕掛けてきたので哀公は支えきれず、息城に逃げ込もうとしたが、息侯は門を開かず入城させなかつたので蔡は大敗して逃げた。楚兵は追撃し莘野で哀公を捕えた。息侯は楚軍をねぎらい、楚文王を国境まで送つた。蔡侯はここで初めて息侯の畏であつたことを知り、その恨みは骨髓に徹した。

楚文王は帰国して、蔡侯を煮殺して太廟に供えようとした。鬬拳は「王はこれから中原へ出ようとするところです。もしここで獻舞を殺したら諸侯は皆怖れてしまいます。ここは許してやつて講和された方がこれからのためになります」

と、再三再四諫言したがどうしても聞こうとしないので、左手で王の袖を掴み右手で剣を持ち、「臣は王が諸侯を失つていられるのを見るに絶えません。ここで王と一緒に死のうと思います」と強硬に迫つた。楚王は怖れて、

「わかつた、わかつた。そなたの言うとおりにしよう」と言つて蔡侯を赦免することにした。

「王は幸いにも臣の意見をお聞き届けいただき楚国のためには良かったと思います。しかし臣が王を脅迫いたしました罪は万死に当ります。どうかご処置下さいませう」

「卿の忠心は真心からのものだ。どうして罰することができよう」

「王のお赦しが頂けましても臣は自分を赦せません」

といって、佩刀で自分の足を切つて大声で言つた。

「臣下で主君に礼を失した者は、一覽の通りである」

楚王はその足を国庫に保管させて、

「朕は今後これを見て鬻拳の諫言を聞かざりし過ちを忘れぬようにしよう」

と言つて、医師に鬻拳を治療させたが結局歩けなくなつた。楚王は彼を大閹門の責任者にして、城門を管掌させ、尊敬して太伯と呼んだ。

直ちに蔡侯を釈放し大規模な送別会を開いた。席上女性の音楽隊が宴を盛り上げた。その中に琴を弾く容姿が秀麗な美女がいた。

「あの女、姿も技量もなかなかいいですな。一献注がせましよう」

その女に大杯で蔡侯に酌をさせた。蔡侯は一気に飲み干すと楚王の長寿を祝つて返杯した。

「あなたは絶世の美女とこのを見たことがありますか」

と、楚王が笑いながら聞いたので、蔡侯は息侯が楚を扇動して蔡を討たせた仇であることを思い出した。

「天下の美女といえは息嬀以上の美女はいますまい、正に天女のごす」

大閹門を守る者は足を失した者が多かつたようである（宮城台昌光「史記の風景」）

「どのように美しいのかね」

「目は秋水の如く顔は桃の花の如く、背は中庸、楚々とした立ち居振る舞いは他に見た事がありません」

「わしも是非一度息夫人に会つて見たいものだな」

「王の威をもつてすれば斉姫でも宋子でも連れてくるのは簡単です。まして配下の女性など、どうということはありません」

楚王は大喜びでその日は徹底して飲んで解散した。蔡侯は挨拶をしてすぐに帰国した。

楚王は蔡侯の話を思い出して息嬀を手に入れたくなり、巡視を名目に息国へやつて来た。息侯は道のかたわらで拝謁し非常に鄭重に自ら宿舎に案内し朝堂で歓迎の宴を開いた。息侯は爵（しゃく）の杯をとつて楚王の前に出て王の長寿を祝つた。楚王は爵を受取り微笑みながら、

「昔、朕はいささかあなたの方の面倒を見たことがあります、せつかくここへ来たのですからご夫人のお酌をいただきたいものですな」

息侯は楚の力を恐れて唯々諾々と承知し後宮に連絡した。間もなく玉環の音が聞こえ、夫人の嬀氏が盛装して現われ挨拶をした。楚王も丁寧に応答した。嬀氏は白玉の杯に酒を満たし楚王に進めた。彼女の素手と玉の色が美しく映えていた。楚王は驚いた。なるほど人間世界を窺きに來た天女を思わせる美人である。彼女の手の玉杯を手ずから受取ろうとしたが、嬀氏は落ちて着いて杯を宮女に渡して宮女から楚王に献上させた。楚王が一気に飲み干すと嬀氏は再び挨拶をして後宮へ帰つて行つた。楚王は息嬀のことが目の前にちがつき十分に楽しむことができなかった。宴が終つて宿舎に戻つても眠れなかつた。

翌日、楚王は答礼という名目で宿舍でまた宴を開き、そつと武装兵を伏せておいた。息侯が宴席につき、酒も半ばになった頃、楚王は酔ったふりをして言った。

「朕は、あなたの夫人に貸しがあるんだ。三軍がそこらにたむろしている。どうだね、婦人にわしをねぎらつてもらうわけにはいかんかね」

「わが国は非常に小さく、お世話をして差し上げる優秀な女官がいま

前たち、こ奴をひっ捕えろ」

楚王は机を叩いて怒鳴った。息侯が弁解する間もなく武装兵がにわか

に立ち上がり、蓬章、鬬丹の二将が息侯を捕えて縛り上げた。楚王は兵

を引連れ後宮へ入って行って息侯を探した。

息侯は変を聞きつけたため息をついて、

「虎を引き込んでしまったのね、自分の始末は自分でやるわ」

と言つて裏庭に逃げ込んで井戸に飛び込もうとした。鬬丹が後一步の

ところで衣の裾を捉えて、

「奥方様、息侯のお命はどうでもいいのですか、お二人一緒に死んで

どうなるのです」

と言つと、息侯は何も言わなかった。鬬丹が彼女を楚王の所へ連れて

行くと楚王は優しい言葉で慰め、息侯は殺さないで赦し子供たちも斬ら

なかった。すぐに軍中で息侯を夫人に立て、顔が桃の花に似ていたので

桃花夫人といった。今も漢陽府城外に桃園洞がありそこに桃花夫人の廟

があるが、この桃花夫人とはこの息侯のことである。

唐の詩人杜牧に次のような詩がある。

（杜牧『桃花夫人廟に題す』）

細腰宮中今年も新たな桃の花

無言で見つめ 過ぎにし春は幾度か

そも息国が滅びしは何故ならん

むしろ金谷の楼より身を投げし

緑珠の方こそ哀れなり[※]

楚王は息侯を汝水に移し十戸の邑を封じて息国の祀を守らせる事に

したが、息侯は怒りの中で憤死した。

正に楚王の無道ここに極まれり。

さてこの後如何になりますか、それは次回のお楽しみ。

※ 杜牧はの詩で、生き延びて楚王の子を一人もなした息夫人より、金谷の楼閣から投身した石崇の寵妃緑珠の方に同情し節において上だとしているのだらう。緑珠は八王の乱の時の乱により、勝者司馬倫の寵臣孫秀に、美人の寵妃緑珠を要求され、それを拒んだため司馬倫に讒言され殺される。緑珠は石崇の前で「御前に命を捧げます」と言て金谷の豪邸の楼閣から身を投げた。

◇細腰宮は楚靈王が建けた章華宮の事だが唐代には一般的に春秋時代の楚の宮殿を言たようである。

第十八回

魯曹沫 劍を手に斉桓公を脅迫

斉桓公 篝火を焚き軍威を大夫に任す

周釐王の元年（紀元前六八一年）春正月、斉桓公は群臣の祝賀の挨拶が終った後、管仲に諮問した。

「仲父のお蔭でずいぶん国政に力が漲ってきたようだ。兵は精銳となり食料も充足され、民衆も礼儀をわきまえるようになってきた。そろそろ諸侯と会盟して覇主になりたいと思うがどうだろう」

「斉が盛んになってきたとは言え諸侯の中には斉より強大な国はまだまだたくさんあります。南の楚、西の秦、晋はそれぞれ一方の雄ですが、周王に対する尊主の念がないため全土に覇を称える事ができていないのです。周は衰微したとはいえやはり天下の主です。東遷以来諸侯は朝貢しなくなり、鄭伯が桓王の肩を射たり、五国が庄王の命令を聞かないといったことがあり、列国でも家臣がその君主を無視する事態が起こっています。楚の熊通は王号を僭称するし、宋、鄭では弑逆事件を起こし、それが当たり前のようになっていて、これらを正すための征討ができていません。王室は庄王が崩御され新王が即位されたばかりですし、宋は南宮長万の乱があつたばかりで賊は死んだとはいえ宋君は未だ定まっています。殿は周へ使者を送って天子の名で諸侯を集めて宋君を認めさせ、その後天子を奉じて諸侯に対し尊王攘夷を命じます。列国の中の弱きはこれを助け、横暴を抑え、決め事を遵守しない者があれば諸侯の力を糾合してこれを討ちます。我われのやることが公正無私であればき

つと諸侯はこぞつて斉国に向き、戦車を出動しなくても覇業は成功いたします」

桓公は大変喜び、さつそく洛陽に釐王即位の祝賀の使者を派遣し、王命を奉じて諸侯と会盟する事と宋公の諸侯承認を願い出た。

「周室の事を心配慮いただき、朕は大変嬉しく思っています。泗水周辺の諸侯はあなたが支配して下さつて結構です」

釐王はそう言つて斉桓公に実質的に会合召集権限を与えた。桓公は使者の復命を聞き、すぐに王命をもつて、宋、魯、陳、蔡、衛、鄭、曹、邾の諸国に対し三月一日に北杏（山東省東阿県）に集合するよう連絡した。

「今回の会合にはどのくらいの戦車を用意すればいいだろうか」と桓公は管仲にたずねた。

「殿は王命を奉じて諸侯にお会いになるのです、どうして戦車が必要でしょう。衣裳の会（武器を持たない会合）に致しましょう」

「なるほど、わかつた」

そこで兵士に、北杏で上下二層高さ三丈（約7m）の壇を築かせた。壇の左には鐘、右には太鼓を置き、先ず上席に天子の仮の席をしつらえ、横の方には酒器や玉器、絹織物類と祭器を置く場所を設置した、整った立派な壇であつた。また宿舎も数ヶ所用意しすべて高くして広く見晴らしよくできている。

当日、宋桓公御説が一番に着き、桓公に会つて宋国君位承認の労に感謝の意を表した。翌日陳宣公杵臼、邾子克の二君が相繼いで到着した。蔡哀公獻舞も楚に捕えられた恨みがありこちらに参加した。四国の君主は斉の戦車がないのを見て、顔を見合わせ、

「斉侯は誠をもつて人に対するといふがこれを見れば分かるね」

と言つてそれぞれ戦車を二十里外に下げた。

二月の終わりが近づいた。

「諸侯は未だ集まらないが、期日を延期して待つた方がいだろうか」と桓公は管仲にたずねた。

「三人いれば衆をなす」といいます。今五国が集まっていますから少ないとは言えません。期日を変えれば信頼を失いますし、待っても来なければ王命を汚すことになります。初めて諸侯を集めて、そこで信頼を失ない王命を汚してはとても覇業を成す事はできません」

「これは会盟のか、会合なのか」

「諸侯はまだ一つにはなっていないませんが、会合して意見がまとまれば会盟になります」

「わかった」

三月一日未明、五国の諸侯は壇の下に集まり互いに挨拶を終ると、桓公は拱手の礼をとり諸侯に向かって言った。

「王政は久しく行われず反乱は各地で発生しています。わたくしは天子の命を奉じて王室を補佐するために諸侯にお集まり願いました。それに先立ち先ず一人、周王の命令を天下に伝達する権限を持つ担当者を選ぶ必要があります」

諸侯の意見は様々で、爵位では宋が公爵齊は侯爵に過ぎないから尊卑の順から言つて宋だと言ひ、宋公は即位したばかりだし齊のお陰で君位を公認された経緯もあり齊だとも言ふ。なかなか意見が纏らなかつた。

陳宣公杵臼が席次を超えて発言した。

「天子は齊侯に糾合の命を下されたのですから、誰も代わりはできないでしょう。わたくしとしては齊侯を盟主に推したいと存じます」

「陳侯の言われる通り齊侯が適任です」

諸侯は全員これに賛成した。桓公は再三遠慮したが結局登壇した。齊侯が主席、次に宋公、陳侯、蔡侯、邾子という席次が決まると、鐘と太鼓が鳴り響き、先ず天子の仮席の前で礼をしたあと互いに親しく挨拶を交わした。仲孫湫は盟約書をおしいただき、跪いて読み上げた。

「某年月日、齊小白、宋御説、陳杵臼、蔡獻舞、邾克は、天子の命を奉じ北杏に於いて会盟し、共に尊王、濟弱扶傾を誓ひ、これに違反する者あれば共同して征伐することを約した」

濟弱扶傾：弱きを救ひ窮する者を援けること

諸侯は拱手してこれを拝命した。「論語」に桓公は九回諸侯と会盟したと称えている。これはその第一回目であつた。(北杏の会盟とよばれる)

五君正装して威風堂々 臨淄の事業赫々として新たなり

牛耳る人は誰ならん 齊侯推尊されて覇者となる

諸侯の供え物の献上が終ると、管仲は次のステップに進み、

「魯、衛、鄭、曹の四方国は王命に従わず本会に欠席しました。これは討伐しなければなりません」

と提案し、齊桓公は手を挙げて四君に、

「弊国の戦車だけでは足りませんので皆様方との連合軍で事に当たりたい」

と要請した。陳、蔡、邾の三君は声を揃えて同意したが宋桓公だけは黙つて態度を明らかにしなかつた。

その夜、宋公は宿舎に帰り大夫戴叔皮に、

「齊侯はむやみに尊大ぶつて爵位の順を越えて会を仕切り各国の兵を徴発しようとしている。将来わが国も引張り回されて疲弊させられる恐れがある」

と言うと叔皮はそれに答えて、

「諸侯も半分は齊に服していませんが、魯、鄭を抑えたら齊は覇を称える事ができます。齊桓公が覇業を成せばわが国は齊の下風に立たなくてはならなくなります。四国の中では大国は宋だけです。宋が兵を出さなければ他の三国も解体してしまいうでしょう。本来北杏に來たのは周王の認証を受けるためだけで、一応会には出席したのですから、もう長居は無用です」

宋公は彼の意見に従つて五更（午前四時前後）に帰国してしまつた。

齊桓公は宋公が会を抜けて逃げ帰つたことを聞き怒つて仲孫湫に追撃させようとしたが、管仲はそれを制止した。

「いま追うのは正当な理由がありません。王師（王軍）を要請して討伐すべきで、それでこそ大義名分が立つというものです。それより急ぐことがあります」

「これより急ぐ事とは」

「宋は遠いけれど、魯は隣国です。しかも王室と同族ですから先ずこの魯を抑えなければ宋を服させることはできません」

「魯はどちらから攻めたらいいのだろう」

「済水^{さいすい}の東北に遂^{すい}があります。魯の属国で四姓しかない弱小国ですから大軍で攻めれば午前中で落せましょう。遂が落ちたら魯は怖れる

はずですから、その時使者を遣わし会盟に参加しなかつたことを問責し

ます。一方でそつと魯夫人と連絡を取り、彼女からも息子に他国とは友好關係を大切にするよう説得させるのです。このように内外から硬軟両策を進めれば魯侯はきつと同盟に加盟して來ます。魯を平定すれば軍を宋に移し、王室に誰か王臣の参加を要請すれば破竹の勢いです」

「よし、わかつた」

そこで自ら軍を率いて難なく遂城を落し、済水の河岸に陣營を敷いた。魯侯は案の定怖れて群臣を集めた。

「齊はわが国へ二度攻めて來ましたがいい所ありませんでした。わたしが迎撃して防ぎましょう」

と、公子慶父が言うのと、施伯が出てそれに反対した。

「それはなりません」

「そなたに良案があるのか」

「以前申し上げたことがあります。管仲は天下の奇才です。いま彼が齊の国政を担当し、軍は厳しく管理されて非常に強いという事が反対の第一の理由です。王命を奉じた北杏の会盟に対する王命違背を責めて來ており、道理からいへば我われに理が無いということこれが反対の第二の理由で、そして子糾を殺した功、王姫との結婚の労をとつたことなど、過去の功勞が仇怨になつてしまうことが反対の第三の理由です。今は講和して同盟に加盟すべきと考えます。そうすれば齊はきつと引き上げます」

曹劇も彼の意見に同意した。

議論の最中に齊侯からの手紙が届いた。内容の概略は以下の通り。

わたしは君侯を兄弟と思つていますし、姻戚關係もありますから

⑧ 済水 水は河を意味する。古代は黄河は河水、長江は江水だった。

協力して周室に仕えたいと思っています。北杏の会盟にあなたはお見えになりませんでした。その理由をお聞きいたしたく存じます。

もし二心がおありのようでしたら、ただ王命によるのみです。

斉侯は別に文姜にも手紙を書いた。彼女は魯侯を呼んで代々姻戚関係があるのだから友好を図るよう勧めた。魯侯はそれに従い施伯に次のような返書を書かせた。

わたしは大馬のように速く走る事はできませんが、いまだ王命に従って奔走したことはございません。君侯が大義によつて問責され、わたしは自分の過ちを承知いたしております。しかし城下で同盟を結ぶのは恥ずかし、国境までお下がりいただければ、おみやげを持って同盟参加のお願いに上がります。

斉侯は手紙を受取り大変喜び、柯まで兵を退けた。

魯侯は斉侯に会いに行くのに、

「誰かわしと一緒に行く者はいないか」

と言うと將軍曹沫が手を挙げた。

「そなたは斉国に三度負かされているが斉の者に嗤われても氣にしないか」

「三敗の恥など、お連れただいて機会さえあれば一気に雪辱いたします」

「どのようにして雪ぐのだ」

「臣は臣としての考えがあります」

「国境を越えてわざわざ同盟参加を願ひ出るなど負けを重ねるようなものだが、これを雪辱できるといふのならそなたの言うとおりにしよう」

ということで曹沫と一緒に柯へ出かけた。斉侯は予め壇を築いて待っていた。魯侯が先ず、罪をわび同盟参加を願ひ出たので斉侯は同盟の吉日を決めた。

約束の日が来た。斉侯は精兵を壇下に並べ、青白紅黒の旗を東西南北に立てそれぞれに將官が各隊を率い仲孫湫が統括した。土壇の階段上にも七重の兵が配備され、それぞれに壮士がいて黄色の旗を守り、壇上には『方伯』の二字が刺繍された大きな黄色の旗が立っていた。傍には太鼓が置かれ責任者は王子成父、壇の中央には香机、赤い大皿、玉の鉢等立誓器を置き、この責任者は大臣隰朋である。その両側には金の酒樽と玉の杯が置かれ寺貂がこれを管掌し、壇の西には石柱が二本立てられ鳥、牛、白馬がつながれ、司庖（厨房責任者）易牙の責任の下に屠殺の用意ができていた。東郭牙は階段下に立つて客を迎え、管仲は總合同会を担当し、雰囲気は厳かで整然としていた。

斉侯は、魯君が着いたら君主と部下一人だけに登壇を許し、他の者は壇下で待機させるよう指示した。

曹沫は下着に鎧をつけ手には利剣を持って魯庄公に随っていた。庄公は一步ごとに足が震えていたが曹沫は全く怖れる様子が無い。登壇しようとした時、東郭牙が曹沫に、

「今日は両国君主の友好のための会合ですので武器は携帯なさらないで下さい」

と言うと曹沫は目をむいて目じりを裂いて彼を睨み付けた。東郭牙は一瞬数歩退き、庄公君臣が登壇するのを見過ごさざるを得なかった。

両君は相まみえ、修好の言葉を交わした。太鼓が三度鳴り響き、両君が香台に挨拶したあと、隰朋が跪いて玉の碗に血を満たした。両君主

が飲もうとした時である、いきなり曹沫が怒氣を顔にあらわし、右手に劍を持ち、左手で桓公の袖を引いた。管仲は急いで桓公を庇い、

「大夫、何をするのだ」

「わが国は何度も貴国の攻撃を受けて国は滅びそうな状況です。斉君は濟弱扶傾の精神で公盟とされたと聞きますがわが国は念頭に無いのでしようか」

「大夫、あなたはいったい何を求めておられるのですか」

「斉国は力を持ち弱者をいじめ、わが国の汶陽の地を奪って行きましたが〔乾時の役の時〕、これをお返しいただけなければ同盟には承知いたしかねます」

「殿、ご承諾なさって下さい」

管仲は桓公を振り返って進言した。

「大夫、離しなさい。そなたの言うことは相分かった」

曹沫は劍を収め、隰朋の代わりに玉鉞を捧げ両君に血をすすつてもらった。

「仲殿は斉国の政治を見ておられるので、臣は仲殿と血をすすらせていただきます」

と曹沫がいうと、桓公は

「仲父にはその必要は無い。わしがそなたに誓いを立てよう」

そう言つて天を指して誓った。

「汶陽の田を魯に返さなければ、齊に明日は無い」

曹沫は血をすすり感謝を述べ快く供え物を献じた。

儀式が終つた後、王子成父らは不満を爆発させ桓公に、魯侯との話をご破算にして曹沫から受けた恥辱を晴らすよう進言した。

「わしはもう曹沫に承諾したのだ。匹夫でさえ約束は守る、いわんやわしは君主だ」

桓公がそう言うそれ以上誰も何も言えなかった。

翌日、桓公は公館で再び酒宴を開き庄公と楽しく飲んで別れた。桓公は直ちに元々侵略して取つた汶陽の土地である南の国境の町宰を全て割いて魯に返還した。昔から『盟約は破られるものだ』などというが桓公は約束を守った。曹沫は仇人であるといえるかもしれないが桓公は彼を怨まなかった。ここに桓公の天下の覇者たるゆえんがある。

（これを柯の公盟という）。次のような詩がある。

霸氣は東魯を呑む 尺劍で何ぞ桓公を脅し得ん

信義で群雄を服せしめ 汶陽の地も惜しむなし

また、曹沫の斉桓公脅迫事件は後世の俠客の元祖であり、次のような詩がある。

潮の如き殺氣満ち 劍佩き登壇 意氣天を突く

三敗の恥一日で雪ぐ 俠客の第一これ曹沫なり

諸侯は『柯の公盟』のことを聞き、皆桓公の信義に感服した。衛、曹もそれぞれ使者を送つて謝罪し同盟参加を願ひ出た。桓公は宋討伐を約し会合の日取りを取決めた。また、使者を周に送り、宋公が王命に従わず会盟を放棄したので王師（王軍）を差遣願ひ一緒に罪を問いたいと告訴した。周釐王は大夫單蔑に軍を率いて斉とともに宋を討つよう命じた。陳曹両国が先遣隊として宋征討に従軍したい意向だという情報があったので、桓公は管仲に一軍を率いて先行し向こうで先遣隊の陳、曹に会うよう命じ、自らは隰朋、王子成父、東郭牙等の大軍を率いて後に

続き商丘で集合することにした。周釐王二年（紀元前六八〇年）の春の事であった。

ところで、管仲に、鐘離の人で文に通じた頭のいい婧という愛妾がいた。桓公は好色で出かける度に必ず姫嬪（夫人以外の妾）を同伴するので管仲も婧を同伴していた。この日管仲軍は三十里ほど進軍して猗山まで行ったあたりで、一人の農夫に出遭った。単衣の粗末な服、破れ傘に素足という姿で山の麓で牛を放し、牛の角を叩いて歌を歌っていた。管仲は車から彼を見て非凡な人物だと思い、部下に酒食を与えて労らつてやるよう命じておいた。農夫は食べ終って口を開いた。

「相国仲父様にお会いしたい」

「相国様の車はもう行ってしまったよ」

『浩浩乎白水』という詞を相国様にお伝え願えれば有り難いのです

その部下は管仲の車に追いつきその詞を伝えた。管仲はその意味が判然としない。そこで婧にたずねると、

「わたし古い『白水』という詩を聞いた事があります。

浩浩白水 篠簜之魚 （浩浩たる白水、ハヤの大きな事）

君来召我、我将安居。 （君来たりて我を待つ 我いずくにか住まわん）

という詩です。この方はきつと仕官を希望されているのだと思いますわ」

篠簜之魚 「従容として篠を釣るを楽しむ 篠魚出遊従容」というのは隱夢の生活したところである（北京金盾出版社校注）

管仲は直ぐに車を止め彼を呼んだ。農夫は牛を村に預け、使いの者に随つて管仲に会いに来た。挨拶は簡単に拱手の礼だけである。名を聞くと、

「衛出身で姓は寧、名は戚と申します相国様の才略と礼節に憧れて苦勞をいとわずやつと此処までやって来ましたが、自分を売り込む方法が無く仕方なく此処で村民の手伝いをして牛を飼っていました」

と言う。管仲は寧戚の学識をチェックしてみたがその応答は立て板に水の如くであった。

「豪傑泥にうずもれ、推薦者もなく実力を示す機会が無かったのですね。主君の大軍があとから来ていますから間もなくここを通ります。わたしが推薦状を書いておきますから、これをもって主君に会ってください。きつと重用していただけるでしょう」

管仲は直ちに書簡をしたため寧戚に手渡し別れた。寧戚はそのまま猗山の麓で牛を飼っていた。

斉桓公の大軍が三日後にやってきた。寧戚は相変わらず単衣の粗末な服を着て、破れ傘に素足という姿で全く怖れる様子も無く道端に立っていた。桓公の輿が近づくと、牛の角を叩きながら歌を歌った。

南山の白石絢爛と輝き 中に鯉魚あり一尺半

生れて未だ堯舜の禪譲に逢えず

短かき単衣の粗末な上着

牛の世話して黄昏より夜半

漫漫たる長き夜 夜明けは何時のことならん

この寧戚の歌は『淮南子』の寧戚飯牛歌といわれる。

桓公かんこうはこれを聞いて変に思い、配下の者に言つて彼を車の前に呼び寄せ名前と住まいを聞いた。

「寧戚ねいせいと申します」

「そなた牧夫の分際ですら政治の風刺をするんだ」

「臣はつまらない者で風刺などどうしてできません」

「今は、上には天子をいただし、わしは諸侯を従え、庶民は本業を楽しみ、草木さえ春を謳歌している。堯舜の世と何変わろう。そなたが言う『堯舜に逢えず』とか『長き夜は明けず』が風刺でなくてなんだというのだ」

「臣は田舎者で先王の政治は存じませんが、聞き及びます所では、堯舜の時代には十日に一日風が吹き五日に一日雨が降り、民衆は田を耕して食ひ井を掘つて水を飲み、いわゆる『不識不知順帝之則』（知らず知らずの内に帝の恩に浴している）と言われています。今は綱紀振るわず教育が行き届かない世の中ですので『堯舜の世』とおっしゃいますが誠に臣には理解しづらい所です。また、堯舜の時代は百官諸侯皆服し、四凶しきゅう（古代の四悪人 左氏伝文公18年を追放し天下は平和であつたと聞いております。言わずとも信頼をうけ、怒らずとも威は示されていました。今お殿様は宋が会盟に背いたと言つては事を挙げようとし、魯には同盟を追つて兵を出し、兵は休む間も無く民は疲弊しております。ですから『庶民は本業を楽しみ、草木さえ春を謳歌している』とおっしゃるのも臣には理解しにくい所です。さらに、堯は天下をわが子丹朱たんしゅではなく舜に譲

る。丹朱 帝堯の子 名は朱 天子の位を継がず丹淵に封ぜられたので丹朱いふ。

ろうとしました。舜はこれを避け南河に逃げましたが民衆に推されて止む無く帝位に就かれました。お殿様は兄上を亡き者にされて国を得、天子の名を借りて諸侯に号令をかけておられますが、昔の唐虞とうぐの禪譲とどちらが立派と言えるのか臣にはこの点もよくわかりません」

「匹夫、言うこと不遜なるぞ」

桓公は大声で彼を斬れと命じた。

側近の者が寧戚を縛り上げ刑を執行しようとしたが戚は顔色を変えず全く惧れる様子も無く、

「夏の桀王は龍逢りゅうほうを殺し、殷の紂王は比干を殺しましたが、寧戚は三例目になってしまふのか」

と、天を仰いでため息をついた。

隰朋しゅうほうが桓公に言つた。

「この者は態度は変わらず、怖れる様子も見えませんが、ただの牛飼いは思えません。お赦しになられたら如何でしょう」

それを聞いて桓公は考えが一転し、怒りも収まりすぐに寧戚の縄を解くよう命じた。

「わしはそなたをちよつと試させてもらった。そなたは誠に立派な人だ」

唐虞 堯舜のこと。帝堯は陶唐氏 帝舜は有虞氏といふ。堯は舜に舜は禹に天下をわが子無く有能な者に禪譲した事。有名

龍逢 比干 関龍逢は夏の桀の賢臣 宴会に耽りすぎると諫めて殺された。比干は殷の忠臣 紂王の叔父 紂王を諫めて殺された。「比干は聖人」といふが聖人の心臓には七の穴があると聞いているそれを見えみようとつて胸を裂たと史記にある（『史記 殷本紀』）

と桓公かんこうが言うと、寧戚ねいせきはそこではじめて懷を探り、管仲かんちゆうの手紙を桓公に差し出した。内容は以下の通り。

臣、命を奉じ出陣し、猫山ねうさんの麓で、衛の人寧戚ねいせきという者に出遭であいました。この者は決して下賤な流れ者の牛飼うかいではなく、即戦力となる有能な人材であります。どうか補佐役として、採用なさいますよう、推薦申し上げます。もし採用なさらないで隣国に取られるようなことになってしまつては悔やんでも間に合いません。

「そなた仲父ちゆうふの手紙を持っていたのなら何故早くわしに見せなかつたのだ」

「賢君は補佐させるに足る者を選び、賢臣は補佐するに足る主人を選ぶ」と申します。ご主君が直言を嫌い阿諛あゆを好まれ、怒つたままであれば臣は寧ろ死んで相国さうこくの手紙は出さなかつたつもりでした」

桓公は大変喜び車に乗せた。その夜は宿宮し軍を休ませ、明るく火を焚かせて急いで衣冠えいこんを用意させた。

「衣冠えいこんを用意させるのは寧戚ねいせきに爵位を授与するためですか」
寺貂じじうがたずねると桓公はそうだという。

「衛と斉は近いので誰かに衛へ行かせたら如何ですか。予想通り賢人であれば爵位の件はそれが判つてからでも遅くは無いではありませんか」

「彼は広い才能が有る。あるいは衛で細かな過ちがあるかもしれないが、わしは些細なことはごだわらないつもりだ。調べて問題が見つかり、爵位どころか彼を採用できなくなつてしまつては非常に惜しい事ではないか」

そう言つて、明かりの下で寧戚ねいせきに大夫の爵位を授与し、管仲かんちゆうと一緒に國政に参画させることとした。寧戚は衣冠を換へ感謝の挨拶をして退出した。髯翁せうわうの詩がある。

粗末な衣の貧しき牛飼 堯舜に逢えざりしも桓公に遇う
角を叩き歌を歌つていなければ 熊の飛込む夢もなからんき

桓公かんこうの軍が宋の國境に着くと、陳宣公せんしんこう杵臼と曹庄公射姑はすでに到着していた。まもなく周の单子ぜんし（單蔑）の兵も到着したので互いに挨拶をして直ちに作戦會議に入つた。

寧戚が進言した。

「殿は天子の命を奉じて諸侯を糾合なさつて居るのですから、力に頼るより徳を前面に出されるべきです。臣不才ですが、宋公に講和の説得に遣らせていただきたいと存じます」

桓公は大変喜んで許可し、國境に砦とりでを築き寧戚を宋に入国させた。戚は小型の車に乗り従者数人を連れて睢陽すいよう（宋都 現河南省商丘）へ向かい、宋公に会つた。

「寧戚とはどういう男だ」

宋公は戴叔皮に聞いた。

「臣の聞き及ぶところでは、牛飼いだつたのを齊侯が拔擢して大夫にしたという事です。大変な雄弁家でどうも遊説に來たようです」
「彼にどう対処すればいいのだ」

59 熊入夢 周文王は熊が飛び込んでくる夢を見て、太公望呂尚を得たという伝説から賢臣を得る前兆の喩え

「彼を召して礼遇しないでその様子を」覧になったら如何です。もし彼の発言に不当な点が見られましたら、臣の帯を引いて合図を下さればすぐに武士に命じて捕えさせます。そうすれば斉侯の策をつぶせるでしょう」

宋公は肯いて武士に控えているよう命じた。寧戚はゆつたりとした服装で堂々と入場し宋公に拱手の礼をとったが宋公は端坐したまま挨拶に答えなかった。

「危ないですね、宋の国は」

と、戚は上を向いてため息をついた。

「わたしは爵位は公爵で、かたじけなくも諸侯の主席にあります。何をもって危険だと言われるのか」

「あなた様と周公しめつう（旦たん）様とはいずれが賢人でしょうか」

「周公は聖人だ、聖人と比較する事はできません」

「周公さまは周が国力盛んで天下泰平、周囲の夷狄を抑えていた時でさえ、吐哺握髪とほくはつで天下の賢士を受け入れたと申します。それなのに、群雄が力を競っている昨今において、二代続けて弑逆事件を起こしているにもかかわらず、周公さまに倣うことなく賢人や客人を疎かに扱い傲慢であれば、いい忠言があつてもあなた様のお耳には届きますまい。これで宋国が危険でないと云えましようか」

宋公は驚いて座を立った。

「わたしは即位して日が浅く君子の教えを聞いたことがあります、先生どうかお赦し下さい」

吐哺握髪 周公が賢者を迎える時食事中でも食物を吐き出し急いで迎え、洗髪時も洗髪を握たまま出迎えた故事から、熱心な招賢態度「史記 魯周公世家」

叔皮は宋公が寧戚に動かされていくのを見て、盛んに自分の帯を引いて合図を送った。宋公はそれを無視して寧戚にたずねた。

「それで先生は何をわたしに」教示いただけるのでしょうか」

「天子は力を失い諸侯はばらばらになり、君臣は分をわきまえず弑逆篡奪は日常茶飯事になっていきます。斉侯は天下の乱れを見るに忍びず、王命を承つて諸侯会盟を主宰致しました。あなた様も会盟に名を連ねられ、君位を天子から公認されましたが、もしこれに違背するなら公認は無効にすると天子は激怒され、わざわざ王臣を派遣され諸侯を率いて貴国の討伐にみえております。あなた様は既に先に王命に逆らっており、今また王の討伐軍に反抗しておられるわけですが、臣の予測では戦わずとも結果は見えております」

「先生はどうすべきだとお考えですか」

「愚見を申しますと、とにかく斉と会盟すべきです。それにより周天子に礼を尽くす事になり、同盟を結べば兵を動かさずに貴国は泰山の如き安定を得られます」

「北杏の会を途中で抜けたため今斉国に攻められようとしているのですが、わたしの会盟申し込みをお受けいただけましようか」

「斉侯は心の広い方ですから過去をとやかく申しません。魯は会盟に参加しませんでしたしたが柯で盟約を結び、桓公は以前侵略していた土地を返還いたしました。いわんや貴国は会に参加されていたのですから受け入れられないわけがありません」

「会の礼物には何がいいでしょうか」

第十九回

鄭厲公突、傅瑕を捉え復國

周惠王、子頰を誅し謀反を平定

「齊侯は近隣とは礼と和の精神で接しておりますから持参品の厚薄は問題ではありません。干し肉でいいでしょう、国庫を傾けるようなものは必要ではありません」

宋公は喜んで、使者を寧戚に同行させ齊軍へ遣わし講和を申し出た。叔皮は恥ずかしく真つ赤になって退出した。

宋の使者は齊侯に会って過ちをわび、同盟参加を願ひ出て、白玉十対と黄金千鎰（二万両）を献上した。

「今回のことは天子のご命令ですからわたしが勝手に決めることはできません。王臣にお願いして周王にお伝えいただきましょう」

齊侯はそう言つて献納された金、玉を王臣單子に回して宋公の講和の意向を伝えた。

「君侯がお赦しになるのですしたらそれでいいでしょう王には復命いたしておきます」

單子がそういうので、桓公は宋公に周王を表敬訪問するように言い、その後で会盟の日取りを決めることにした。單子は齊侯に挨拶して帰国し、齊、陳、曹もそれぞれ本国へ帰った。

さてこの後如何になりますか、それは次回のお楽しみ。

帰国後、管仲は桓公に進言した。

「周の東遷以来、鄭国が最強国になっていきます。鄭は東虢を亡ぼしてこれを都にし、前は嵩山、後は黄河、右は洛水、左は濟水という虎牢の険は天下に聞こえています。だから昔、庄公はこれを楯にして宋を破り許を亡ぼし王師にも抵抗し、今また楚と結託しています。楚は王を僭称している国ですが、土地は広く軍隊も大変強く漢陽諸国を呑み込み周と張り合おうとしています。もし殿が王室を庇護し諸侯に覇を称えようとされるのでしたら、楚を討たなければなりません、そのためには先ず鄭を取らなければなりません」

「わしも鄭が中原の要の位置にあるのを知っており、以前から手に入れたいと思つていたが残念ながらいい策が思いつかないんだ」

（中原 黄河流域中心の当時の中国）

寧戚が進み出た。

「鄭は君主突が二年で祭足に追放され、子忽が君主に返り咲きました。高渠弥がその忽を殺して子亹を立てました。わが先君が子亹と高渠弥を誅殺し、その後祭足が子儀を立てました。祭足は臣下でありながら主君を追放し、子儀は弟なのに兄から位を篡奪すると言ふ有様で、皆人倫に背き討伐に値します。今、子突は櫟にいて君位奪回を考えない日はありません。しかも祭足は既に亡くなつて鄭には人材がいません。誰か將

軍を櫟に送り込み突の君位奪回を援助してやれば突は殿に感謝して必ず齊に北面（臣従）すると考えられます」

桓公もこの提案に同意した。さつそく賓須無に二百乗の戦車を預けた。賓須無は櫟城二十数里のところに陣を設営し使者を出して公子突に斉侯の意向を伝えた。

鄭厲公突は、その前に祭足が死んだことを聞き密かに腹心を鄭に送込み消息を探らせていた。そこへ突然齊侯が、援軍を出して帰国させてくれるというのを聞き、大喜びで城を出て迎え大歓迎会を開いた。二人が話し合っていた時、鄭に出していた間諜から、祭仲が死んで現在叔詹が上大夫であるという報告があった。

「叔詹とはどういう人ですか」
と賓須無が訊ねた。

「治国の才は有りますが将才のある人ではありません」
突が答えた。間諜からまた情報が入った。

鄭の都に怪事件が有りました。城の南門の内側に長さ八尺の青い頭で尾が黄色の大蛇、外に一丈を超える頭が赤く尾が緑の大蛇がいて、この二匹の大蛇が争って、三日三晩激闘したけれど勝負がつかず、やじ馬が市をなしましたが誰も近寄れません。この闘いは結局十七日間続き門内の蛇が外の蛇に喰殺され外の蛇が城内に入りそのまま祖廟に入って行つて見えなくなつたと言う事です。須無は立上がつて鄭伯に祝辞を言った。

「あなたの君位奪回は決まりましたね、おめでとうございます」
「どうして」

「城外の蛇は一丈余り有りこれは兄君であるあなた様です、城内の蛇は八尺と小さいので弟君の子儀殿です。十七日目に城外の蛇が入城したのはちやうどあなた様が国を出られてからの十七年目にあたります。城内の蛇が喰殺されたのは子儀殿が君位を失なう前兆であり、城外の蛇が勝ち祖廟に入つたのはあなた様が御先祖をお祀りするといふあらわれです。わが殿が大義に基づきあなた様をみ位に就いていただくことを天下に発表した時と蛇の戦いの時が符合し、これは天意であるといえましよう」

「誠に將軍のおつしやるとおりです。今後、恩に背くことは決してございせん」

と鄭伯突は感謝した。

賓須無と鄭伯は、相談の結果大陵に夜襲をかけた。傳瑕が城を出て両軍交戦中に、思いがけず賓須無に傳瑕の後方に回られ、先の大陵城が落とされて齊の旗が立つた。傳瑕は抵抗は無理と考え仕方なく投降した。鄭伯突と傳瑕は十七年間お互いに憎み合つてきた間柄である。

「やつを斬つてしまえ」

「あなたは鄭に帰国なさりたくはないのですか？お帰りになりたいとお思いでしたらどうしてわたしを殺そうとなさるのです」

「どういふことだ」

「もしわたくしをお赦しただけならば子儀殿の首級を取つて参りますが」

「子儀を殺すのにどんな策があるというのだ、わしを騙して鄭へ逃げ帰ろうという魂胆だろう」

「鄭の国政は今、全て叔詹の掌中にあります。わたしは叔詹とは親しいので、お赦しただければ鄭に潜入して詹と謀り子儀殿の首級をお届けいたします」

「この老いばれの嘘つきめ！ わしをたぶらかすのか。今お前を放したら叔詹と一緒にたづねてわしに刃向つて来るに決まっている」

「ここで賓須無が口を挟んだ。」

「やらせてみたら如何です、傳瑕の女房姪はこの大陵にいますから樛城に人質に取ればいいじゃないですか」

「わたしが騙したら妻を殺されても仕方ありません」

傳瑕はそう言つて天を指して誓つたので突もこれをゆるした。

傳瑕は鄭に帰り、夜叔詹に会つた。詹は瑕に会うと非常に驚いた。

「そなた大陵を守つていたのではないのか、どうして此処にいるのだ？」

「齊侯は子突殿が正当な君位継承者と見て、鄭の君位につけるため賓須無を大将にして大軍で攻め込んで来ました。大陵は落ち、それがしは夜をかけて逃げてきたのです。齊兵は早晩ここへ攻め込んできます。事は緊急を要します。子儀殿の首級をいただき開城すれば富貴は保てるし苦勞をする事ありません。『禍転じて福となす』のは今です。後で悔やんでも間に合いませんよ」

叔詹は黙つて考えていてしばらくして口を開いた。

「わしは以前、突殿をお迎えしようと言張したのだが祭仲殿に阻まれたんだ。祭仲殿は亡くなった。突殿には天佑があるようだ、天意には従わざるを得まい。しかし何かいい策はあるかな」

「樛城にすぐ出兵するよう連絡を取つて、貴殿は城を出て敵と戦うふりをします。子儀殿は必ず観戦のため出て来ますからわたしが隙を見て彼を斬ります。そのあと貴殿が突殿を城に案内すれば大事は終了です」

叔詹はその案に沿つて、密使をたて手紙を突に届けさせた。そのあと、傳瑕は子儀に会い、齊兵が突を援護し攻めて来て大陵が陥落したことを報告した。子儀は大変驚いて、

「楚へ使者を出し十分な礼物を届けて救援を要請すべきだ。楚軍と城の内外から挟撃すれば齊軍を撤退させることができるはずだ」

と救援依頼を命じたが叔詹はわざと引延ばした。二日たつてもまだ使者は出発しておらず、物見の報告では樛城は既に城下に来ているという。

「臣は城を出て戦います、殿は傳瑕と城に登つて督戦願います」

叔詹がそういふと子儀は疑わず承知した。

鄭伯突が先に着いて叔詹と数合打ち合っているうちに賓須無率いる

齊兵がどどつと進軍してきた。叔詹は車を返して逃出した。

「鄭軍がやられた！」

と傳瑕が城の上から大声で叫ぶと、子儀は元々肝が小さく、急いで城を降りようとしたところを傳瑕に後から刺されて城の上で亡くなった。

叔詹は城門を開けさせ、鄭伯突、賓須無と轡をそろえて入城した。傳瑕は宮殿の清掃に入り、出遭つた子儀の二人の子も殺して突を迎えた。國人も本来厲公（突）に服していたので歓呼の声は地を揺るがした。厲公は賓須無に手厚い礼品を贈り、十月に齊へ出向いて盟約を結ぶ約束をして、賓須無は帰つて行つた。

厲公が復位して数日のうちに概ね人心は安定した。そこで厲公は傳瑕を呼び出して、

「そなたは大陵を守っていた十七年間、ずっとわしを拒んできたがそれは旧君に忠実であつたという事だ。しかしそのあと命が惜しくなつてわしのために旧君を殺してしまつたな。わしにはそなたのころころ変わる心が読めないんだ。わしは子儀のために復讐しようと思つて」
 そう言つて力士に命じて刑場で斬刑に処した。ただその妻孥は殺さず赦してやつた。髯翁は詩にして嘆じている。

鄭突 世になき奸雄 事成れば協力を得し人も又殺す
 傳瑕 須臾の命を惜しまねば 永く忠臣の名を得しものを

原繁は子儀を擁立したのでその追及を恐れて、病氣と称し老齢を理由に退官を願ひ出たが、やはりそれを責められ自殺に追い込まれた。更に自分の追放に加わつた公子闕も殺した。叔詹は足斬の刑で死は免じられた。

衛に出奔して三年になる公父定叔（共叔段の子滑の子）は呼び戻し祭足が既に死んでいるので不問とし、共叔段の祀を継がせた。叔詹は正卿のまま、堵叔、師淑は大夫に任じられ鄭の人々はこの三人を『三良』と呼んだ。

さて、鄭伯突（厲公）が復国し、衛曹二国も昨冬同盟を求めて来ているので、桓公はまた大会盟を開こうとしたが、管仲はこれを引き止めた。

「同盟の大会は簡便であるべきです」

「簡便とはどういうことだ」

「陳、蔡、邾は北杏以来ずっと者に対し二心が有りません。曹伯は大会には出席しませんでした。既に宋討伐戦には一緒に出兵していません。この四国は今回は呼び寄せる必要はないかと存じます。ただ、宋と

衛はまだ会っていませんので一度は会つておく必要があります。諸国の心が一つになるのを待つてそのときこそ全体盟約会議を行うべきだと考えます」

そこへ突然、周王が宋の表敬訪問の答礼に単蔑を遣わして衛まで来ているという報告があつた。

「宋とは講和の会合をすることになっています。衛は通り道なので、殿がご自分で衛に行かれて諸侯と親しくお会いになられたら如何ですか」と管仲が言うので、桓公はさつそく宋、衛、鄭の三国と鄭で合うことにした。单子（周単蔑）と斉侯をあわせ五人は血を敵る正式な儀式にはしないでお互い拱手の礼をして別れた（鄭の会盟）。諸侯はこのやりかたを大変喜んだ。

斉侯は諸侯の心が快く一つになったのを見て、大々的に宋、魯、陳、衛、鄭、許の諸国を幽の地に集め血をすすり会盟した（幽の会盟）。この会盟が桓公の盟主としての最初である。周釐王の三年（紀元前六七九年）の冬であつた。

さて、楚の文王熊賁は息嬀を夫人にして大変寵愛し、三年のうちに子が二人生まれ、上は熊羆、下は熊惲といった。息嬀は楚宮に三年居たとは言つても楚王とは話をしたことがないのである。理由を聞いても涙を流して答えようとしない。何度も聞いていううちに、やつと、

「二人の女で二人の夫に仕えることになり、節を守つて死ぬこともできず、恥ずかしくてお話をする事ができません」

と言つて涙が止まらなかった。
 胡曾先生は詩に詠う。

息君死し身は楚王の家に入る　ふり向けば春風の中一面の花
昔を思い言葉なく涙溢れる　ただ恨は見せじ美しき花

「これは蔡猷舞の仕業なんだ、よし、わしがそなたの仇を討つてやろう、そなたは心配することはない」

楚王はそう言つて、蔡討伐軍を出し郭に侵攻した。蔡侯猷舞は肌脱ぎになり、国庫の財宝を全て楚に提供して降伏したので楚は許して撤兵した。

ちょうどこの時、鄭伯突の復位を知らせる使者が到着した。

「突は復位して二年も経つて今頃報告に来るとはわしを馬鹿にするにもほどがあるではないか」

楚王は又鄭にも討伐軍を出し、鄭が謝罪し講和を願ひ出たのでこれも赦してやつた。周釐王四年の事で、鄭伯は楚を畏れて斉に朝見しなくなった。

斉桓公がこれに対し問責の使者をよこしたので、鄭伯は上卿の叔詹を斉国にやつた。

「わが国は楚軍に手を焼いており朝から晩までその防備に休む間もなく、このため年中行事もままならないという情況でございます。もし斉君のお力で楚を叩いていただければ、わが主君はいつでも貴国へご挨拶に上がることができるのでございますが」

肌脱ぎ　肉袒　服役　降服　謝罪などの意思表示をして肌脱ぎになって上体を表す。「肉袒して茅を、肉袒して荊鞭打ちに使う杖を負ふ。但し、肌脱ぎでも片肌脱ぎ、偏袒んだんは意味が異なる。左袒は味方すること、仏教インドの礼法では師を敬う時に右片肌を脱ぐ事を偏袒という」

桓公はその不遜な態度に腹を立て叔詹を軍中に拘禁した。叔詹は隙を見て鄭に逃げ帰りそれ以来斉から離れ楚につくようになった。

さて、周釐王は在位五年で崩御され、子閔が即位した。これが恵王である。その恵王三年の事である。楚文王熊貲は淫乱暴虐で、政治を顧みず、好戦的な人物であつた。以前巴君と一緒に申を攻めた時、楚王は友軍の巴軍にまで兵を向けたので巴君は怒つて楚軍を襲撃して打ち負かした。守将の閔傲が逃げ帰ると楚王は怒つて閔傲を殺してしまった。閔氏の一族は王を怨んで巴と内外示し合わせ、楚を討とうと約束した。巴は楚を攻撃し楚王もこれを迎撃して津で大戦となつた。支えきれなくなつた閔一族は楚軍になりすまし楚の陣中に紛れ込み、なんと直接楚王を狙う拳に出た。楚軍は壊乱し巴兵はこれに乗じて楚に大勝し、楚王は頬に矢を受けあわてて撤退した。巴君は深追いせず兵を収めて帰国し、閔氏の一族も巴君について巴へ行き、そこに住み着いた。

楚王は城に逃げ帰り城門を叩くと鬻拳は門の内側から、

「殿、凱旋ですか」

「いや、敗れた」

と楚王が答えると

「先王以来、楚兵は戦つて負けた事がありません。巴は小国なのに、ご自分で指揮して負けたとあれば笑いものです。現在黄が楚に服していませんからこれをお討ちになればお顔も立つでしょう」

と言つて門を閉じて入れなかった。

楚王は憤然と兵たちに、

「今度負けたら帰る所はないぞ」

と言つて軍隊を黄国へ移動し、自ら太鼓を打ち兵たちは死力を尽くして戦い踏陵で黄軍を破った。楚王はその夜陣中で夢を見た。夢の中で息侯が非常に怒っていた。

「わたしはあなたに理由も無く死に迫いやられ、国土は奪われ、妻は陵辱されました。だから天帝にあなたの処置をお願いしているところですよ」

と言つて楚王の頬をひっぱたいた。楚王は大声をあげて目が覚めた。その時矢傷が裂けて血が止まらなくなり、急遽撤兵を命じ湫まで帰つて来たが、そこで夜中に亡くなった。鬻拳は王の遺体を迎え葬儀を行い長子熊羆に王位を擁立した。鬻拳は、

「わたしは二度も王に罪を犯しその都度死を赦されてきた。王が亡くなった今どうして生き長らえることができよう、王に従つてあの世までお慕いするつもりだ」

と言つて家の者には、

「わしが死んだら子孫にわしが門衛であつた事を知らしめるため経皇（楚王の墓の門）の傍に葬つてもらいたい」

と言つて自刎して果てた。熊羆はこれを哀れみ、その子孫に大閭職（宮門開閉の責任者）を世襲させた。

左氏（左丘明）は鬻拳の殉死を称えたが、史官はこれに反駁している。

主の諫言になぜ兵を用いるや 閉門締出しとは更に驚き
これを忠愛と言うならば 乱族みなこれを口実にせん

鄭厲公は楚文王の計報を聞いて、これで心配がなくなつたと大変喜んだ。

叔詹は、これを聞いて次の様に進言した。

『人に頼れば危うし、人に服せば辱し』と申します。わが国は斉と楚の間にありますからいづれかに臣従しなければ即ち危うしの状態で、このままでは百年の計を立てられません。先君桓公、武公、庄公は三代にわたり王朝の卿士でしたから、列国に冠たるものがあり諸侯を抑えておりました。今、周は新王が即位されて號と晋の二国だけが王に朝見しているそうでした、王から玉や馬が下賜されたと聞いています。殿も周に朝貢し、もし王の信頼が得られて先君がたの卿士に復帰できれば、大國といえども畏れる事はありません』

厲公もその意見に同意し、直ちに大夫師叔を使者として周へ派遣した。師叔は帰つてきて、周室に大乱が起きていると復命した。

「乱とはどんなことだ」

使者は乱の内容を以下の通り報告した。

昔、周庄王に王姚、通称姚姬という愛妾がいて子類を生みました。庄王はこの子を可愛がつて大夫蕢国を師傅、教育係に付けました。子類は生来牛が好きで何百頭もの牛を飼つて、自分で五穀を餌として与えていました。牛に模様のついた服を着せて『文獸』といい、いつも従者は皆牛に乗つて出入りし、人の誇りも全く気にしなかつたようです。そして蕢国、辺伯、子禽、祝跪、詹父の五人の大夫と親密に連絡を取り合っていました。釐王は兄弟だったので止めようとはしなかつたのですが、新王になって子類は伯父の立場をかさに着て益々横暴で我儘になつてきたので新王はこれを嫌い、仲間を抑えるために子禽、祝跪、詹父の土地を取上げました。新王は更に宮殿の傍に庭園を作るために、王宮の近くに有つた蕢国の菜園や辺伯

の屋敷等を全て接収して庭園を広げました。また、料理人の石速を料理が下手だといって罷免したので彼も王に恨みを持ちました。そこで五大夫と石速が結託して謀反を起こし子類を奉じて王を攻めました。周公忌父、召伯、廖の懸命な防衛で謀反は失敗し蘇へ出奔しました。昔周武王の時、蘇の忿生は司寇(男六卿の一)刑獄警察を司るとして功があり、蘇公と呼ばれ南陽の田を封地として授けられました。忿生の死後、子孫は狄に制圧され王に叛いて封地も周に返していませんでした。桓王の在位八年、先君庄公(鄭庄公)の時、周に近いわが国の田と交換に蘇子の田を下賜されたため、蘇子と周は溝が深まりました。衛侯朔は周が黔牟の即位を援助した事で以前から周を恨んでいた事(朔が世子急を殺した仇討ちの謀反が起こり追放された時の話)もあって、蘇子が子類を奉じて衛に逃げてきたのを幸便に一緒に王城を攻めました。周公忌父は適わず召伯、廖と一緒に王を奉じて鄆国に出奔しました。五大夫は子類を王に奉戴しましたが人心は服しておりません。もし殿が兵を率いて王を復位する事ができれば、これは大変な功績であります。

「わかった。子類殿は懦弱で衛と烏合の衆をあてにしているだけだし、五大夫もろくでもない奴ばかりだ。使者を遣わし理屈で説得させたら干戈を交える事もなくかつこいじやないか」

そう言う事で、直ちに使者を鄆に派遣し、恵王にしばらく櫟邑に御幸願った。櫟は厲公が十七年住んだ所で宮室はきちんと整備されていた。そして同時に使者を出して子類に説得の手紙を届けさせた。

臣が主人に背くのを不忠といい、弟が兄に奸を働くのを不順といいます。不忠、不順は天もこれを赦しません。王子は誤って奸臣の

計にお乗りになり天子を追放されましたが、過ちをお認めになり天子を再びお迎えになれば、今ならまた富貴を得る事ができましよう。どうか早急に、ご決断願います。

子類は手紙を受取っても躊躇して容易に結論を出せないでいた。

「虎に乗ってしまった今、もう降りることはできません。万乗の地位に登られたのです、今更臣下に戻れましようか。これは鄭伯の偽りの話です。お聞きになってはいけません」

と五大夫が声を揃えて言うので子類はどうとう鄭使を追い返した。鄭厲公は櫟に王をたずねて王を奉戴して成周(洛陽)を襲撃し伝国の宝器を取り再び櫟城に戻った。恵王三年(紀元前六七四年)の事であった。

この冬鄭厲公は王を復国させるための義兵を挙げようと西虢公を誘い承諾を得た。恵王四年の春、鄭虢両君は弭で会って、夏四月に王城を囲み、鄭厲公は南門を、虢公は北門を攻撃した。虢国は急いで宮中へ子類に会いに行つたが、子類は牛の世話が終わつていないと言つてすぐには会おうとしない。虢国は、事は急を要すと子類の命令だと称して辺伯、子禽、祝晩、詹父に守備に就かせた。周の国人は子類には従わず、恵王が帰つてきたと聞くや、歓呼の声が雷鳴のようで争つて城門を開き迎え入れた。虢国は国書を書いて衛に救援を求めようとしたが、まだそれを書き終わらないうちに鐘太鼓が響きわたった、

「旧王は既に入城されて朝廷の席におつきになりました」

という報告があつた。虢国は全てが終つたことを悟り自刎して果てた。祝晩、子禽も乱戦の中で戦死し、辺伯、詹父は捕えられた。子類は西門から石速と一緒に可愛がついていた牛を前にして逃げ出したが、牛が肥え

ていて動きが遅く追つ手に捕えられ辺伯、詹父と共に斬首された。子類の乱

髯翁は子類の愚を次のように詩っている。

寵愛に甘え非道は止まず 佞臣に乗せられ奸謀を企つ
一年南面して何をせしや たゞ門を閉じ牛を養つたのみ

また、ある詩では、本件に関し斉桓公が、すでに尊王を提唱して盟主と称しているのに鄭、虢に協力していない事を批判している。

天子九廟を汚す恥辱を受けし時 鄭と虢は忠謀を繰出す
彼らに時の最重要案件を譲りしは 仲父の失策にあらざるや

恵王は復位し、賞として鄭には虎牢以東の地と王后の束帯の皮帯と銅鏡を、西虢公には酒泉邑と幾つかの酒器を与えた。一君は感謝して帰って行つたが、鄭厲公は帰途病氣にかかり帰国後間もなく没し、群臣は世子捷を擁立した。これが文公である。

周恵王の五年（紀元前六二二年）、陳宣公は公子御寇を謀反の疑いで誅殺した。公子完、字敬仲は厲公の子で御寇と仲がよかったため連座を畏れて斉へ亡命した。斉桓公は受け入れて工正（労働者の指揮監督官）に任じた。

ある日桓公が敬仲の家で酒を楽しんでいるうちに日が暮れたので、灯を点けて引続き敬仲と楽しもうとした時、敬仲が、
「臣は昼のみで結構でございます、どうして夜燭を灯してまでお願いできましようか」

と言うと桓公は、礼儀を心得た男だ、と感心して帰って行つた。

桓公は彼を賢人と認め食邑として田を与えた。即ち田氏の祖である。この年魯庄公は婚姻のため防で齊大夫高侯に会つた。

ところで魯夫人文姜は兄の齊襄公が殺された後、一日中思い出に耽り悲嘆にくれて、せきが止まらず床に臥せてしまった。内侍が莒国の医者を呼んで診察させたが、文姜はあちらの方にしばらく無沙汰だった事もあり、我慢できずとうとう医者を食事に引留め私通してしまった。医師が帰国した後も治療にかこつけて二度莒の医者へ通つた。莒医は自分の代わりに別な男を推薦したが、文姜は老いても益々さかんで、その男が襄公ほどでなかったのが非常に不満だったようである。しかし周恵王四年の秋七月、文姜の病は益々重くなって遂に帰らぬ人となった。亡くなる前に庄公に、

「齊の姫はもう十八歳ですから、早く正室として迎えなさい。決して服喪のきまりに拘ってわたしにあの世で心配させないようにしてね」と言い、更に、

「齊が覇を称えたら協力して、代々の友好関係を大切にしなさいよ」と言い終わると息を引き取つた。庄公は一般的礼法に従い葬儀を行ない、同時に遺命を遵守してその年結婚しようと思つたが、
「まだ葬儀の途中です、早すぎるでしょう。どうか三年の喪が明けるのをお待ちください」

と曹劇が引留めた。そこで、庄公は、

約三百年後齊はこの田氏に乗取られ田斉となる。孟嘗君も彼の後裔である。

「母の遺命なのだ。乗凶^{じようきよう}が早すぎるとしても、喪明^{そうめい}けでは遅すぎるのでその中間を取ろう」

と言ひ、結局一年後に、昔の縁組みの約束について高侯^{こうけい}に説明し結納の儀式も行なおうと自ら斉へ出かけた。しかし斉桓公^{かんこう}も魯の喪明^{そうめい}けまで延期するようにと自ら考えたので止む終えず延期し、周恵王の七年になつてやつと婚儀が調ひ、秋が吉だという事でその年の秋に決定した。この時庄公は在位二十四年で、年はすでに三十七歳になつていた。彼は斉の姫との結婚を大變喜び万事贅沢を極めた。しかし一方では父魯桓公が斉で死んだ事を思い浮かべると斉の姫を娶るのに非常に複雑な気持ちでもあつた。そこで桓宮を建て替へ、丹塗りの門柱、彫刻をした垂木に作り直して死者の霊を慰めた。大夫御孫^{ぎよそん}がしきりに諫めたが聞かなかつた。この年の夏、庄公は自ら斉へ迎へに行つた。秋八月姜氏は魯へ行き夫人哀姜^{あいきやう}となつた。大夫の妻たちが哀姜^{あいきやう}に贈つた贈物はみな同じく玉帛等の高級品ばかりであつた。

「男性への贈物は大物では玉帛、小物としては鳥小獸等^{ぐわう}へツト類で、女性には表敬^{へいけい}のため栗、棗類^{さうるい}くらいなものなのに、男性と同じものは、男女を区別するのは国の大切な決まりなのに、この事が綱紀の乱れの原因にならなければならないが」

と御孫^{ぎよそん}はそつと嘆いたものであるが、姜氏が魯へ行つてからは斉魯の仲は益々固まつた。斉桓公^{かんこう}は魯庄公と連合して徐、戎を討ちどちらも斉國に臣服することになった。鄭文公は斉の勢いが益々強大化してきたので攻め込まれることを心配して使者を出し同盟を結んだ。

さてこの後、如何になりますか、それは次回のお楽しみ。

^② 乗凶 父母が死んで喪服を着ひうちに結婚すること。当時喪中には結婚できなかった。しかも服喪期間が長かつた父母場^{ふぼば}3年なのでの習慣があつた。

第二十回

晋献公 ト占を無視し驪姫を立て

楚成王 乱を平定し子文を令尹にす

周恵王の十年（紀元前六六七年）、徐、戎共に斉国に臣従した。鄭文公も斉の勢いを見て畏れをなし同盟を結んだので、宋、魯、陳、鄭の国君を再び幽に集めて会盟を行った（第一次幽の会盟 前回は六七九年。今回衛が不参加）。各国は斉の意のままにならざるを得なかった。斉桓公は帰国して大宴会を開き群臣をねぎらった。酒宴の半ば、鮑叔牙が杯を持って桓公の前へ行き酒盃を満杯にして長寿を祝った。

「愉快だなあ、今日の酒は」

『明主賢臣は楽しき時こそ警戒を忘れず』と申します。殿は出奔された時の事を、管仲殿は檻車の中の事を、寧戚殿は牛飼いをしていた時の事をお忘れにならないように願います」

桓公はそれを聞き、すぐ席を立てて皆に挨拶をして、

「斉国の永遠の幸せのために、大夫の諸君と共に決して有事の警戒を忘れないようにしよう」

と言って、その日は十分楽しんで散会した。

ある日、周王の使者召伯廖が来た。召伯廖は恵王の命令を伝え、斉侯を方伯ほうはく（諸侯の長）に任じ、太公の職である征伐の専権を与えた。衛朔が子類を擁立して逆賊を助けた事に對し、王はこの十年報復ができていないので、是非王のために天誅を加えてほしいというものであった。

恵王十一年、斉桓公は子類の乱の責任を問うて衛を攻撃した。このとき衛恵公朔はすでに三年前に死んでおり子の赤が即位して懿公となった

ていた。懿公は理由も聞かないで城を飛び出して戦い大敗して帰城した。桓公は直ちに城下に進軍し王命であることを宣言し衛の罪状を述べた。

「それ等は皆先君のやった事でわたしには関係ないことです」

懿公はそう言って、長男の開方に金帛を五車に積んで斉軍に上納し講和を求めた。

「先王の定められた制度では罪は子孫に及ばないことになっている。いやしくもわしは王命を奉じているものであり、衛から何かを得ようとは考えていない」

公子開方は斉の強盛な状況を見て斉侯に仕えることを願い出た。

「そなたは衛侯の長子だから順番から言えば当然太子でしょう。それなのになぜ南面みなへすることを放棄して、わしに北面するのかね」

「主君は天下の賢侯でいらつしやいます。お傍にお仕えできればこの上もない幸せであり、君主になるよりずっといいと考えるのでございます」

桓公はそれを聞き開方を大夫に任じ豎刁、易牙と同様に可愛がったので、斉の人々は彼らを『三貴』といった。

開方はまた衛侯の娘が美人だという話もした。以前衛恵公は娘を桓公の妾に出していたが、美人の娘というのはその妹であった。桓公は使者に結納を持たせ、側女に要求した。衛懿公は断ることはできず、すぐに斉に送り出した。姉妹は長衛姫、少衛姫といいそれぞれ桓公の寵愛を受けた。髡翁は詩で皮肉っている。

衛侯の罪は山の如くも 王命奉じ如何ぞ賄賂を受取れよう

南面 君主となること。君主は南面 南向きした。北面は臣下となること。臣下が君主にまみえる時は北面する。君臣の禮そのように設定される。

尊王は大義なりなれど 功利もまた胸中に去来せり

話は変わるが、晋は姬姓で侯爵である。周成王のとき桐の葉を切つて諸侯を封じる印の玉にして弟叔虞をこの地に封じた。九代の後胤穆公に二人の子がいて長男は仇、次男は成師といった。穆公が没し仇が即位し文侯となり、文侯が没するとその子昭侯が立つたが、叔父の桓叔（成師）を畏れて曲沃を割いて彼に封じ曲沃伯といい、晋は国名を翼と改めた。この翼と曲沃を二晋という。昭侯は即位七年目に大夫潘父に殺され、潘父は曲沃伯を迎え入れたが、翼人は彼に服さず潘父を殺して昭侯の弟平を擁立したこれが孝侯である。孝侯の八年に桓叔が没し子の鰈が立ち曲沃庄伯となった。孝侯の十五年庄伯が翼を攻め、孝侯は大敗し庄伯に殺され、翼人は孝侯の弟郤を立てた。これが鄂侯である。鄂侯は即位二年に曲沃を攻め、負けて隋に出奔し、子の光が位を継いだ。これが哀公である。哀公の二年庄伯が死に子の称が立った。これが曲沃の武公である。哀公の九年武公は部下の韓万、梁宏を率いて翼を攻撃し、哀公は敗れて殺された。周桓王は卿士虢公林父に命じて哀公の弟緡に継がせた。これが小子侯である。小子侯の四年目に武公は彼をおびきよせて殺し、遂に二晋を併合し都を絳に定め国名を晋とした。

三 桐葉を切て叔虞を封じる。成王が弟叔虞と遊んでいて桐の葉を削て珪の形を作り叔虞にこの珪をお前を封じようと言った。太史が叔虞を封じる儀式を行おうとしたら成王は「これは遊びに過ぎない」と言たが太史は「天子に戯れ言はありませぬ」と諭され、遂に叔虞を唐に封じた。叔虞の子が国号を唐から晋に改めた。『史記』晋世家

四 結局晋の本流である文侯、血統は子の昭侯が傍系、成師を大邑曲沃に封じたためひさしを貸して母屋を取られる結果となり傍系武公に篡奪される事になった。

晋の国庫の宝器は全て周に運び釐王に賄賂として献上した。釐王は賄賂に弱く武公を晋侯に任命し諸侯に列した。武公は曲沃を通算して在位三十九年で没し、その子嵬諸が立った。これが晋献公である。献公は桓叔、庄伯の一族に危険を感じ後顧の憂いを除くため大夫士蔭の計を用いて誘い出し殺してしまった。その功により士蔭を大司空に命じた。そして絳を大國の都に相応しい規模も大きく壮麗なものにした。

献公は世子のとき賈姫と結婚したが子供がなかった。その後犬戎主の姪の狐姫を娶り重耳を生み、小戎允姓の娘が夷吾を生んだ。武公の晩年に斉との婚姻を持ちかけ、斉桓公は一族の女性を嫁にやった。これが斉姜である。このとき武公はすでに老齢で彼女を満足させてやる事ができなかった。斉姜は若くて美人だったので献公は彼女に私通して一子が生まれた。そつと申氏に養育を頼み申生と名付けた。献公が即位した年には賈姫が亡くなっていたので斉姜を正夫人とした。その時重耳はすでに二十二歳で夷吾も申生より年長であった。申生は夫人の子である。嫡子か庶子かが重要であつて長幼は問題外である。申生が世子に立てられ、大夫杜原款が太傅、教育係、大夫里克が少傅に任命され一緒に世子を輔導した。斉姜はそのあと女の子を生んで亡くなつてしまった。献公は賈姫の妹賈君を入れたがやはり子が生まれなかつたので斉姜の生んだ女の子（申生の妹）を賈君に育てさせた。

献公の十五年に驪戎（西戎の一族）を討伐した。驪戎は和を請うて二人の娘を献公に献上した。長女を驪姫といい、次女を少姫といった。驪姫は息嫡（楚文王夫人）より美人で姐己（殷紂王の妃）のように妖艶であつたが、智恵があり狡賢く、あれこれ悪巧みも多く、媚で哀れみを得ようとするところもあつた。政治にも口を挟みよく意見を述べしかも的を

得ていたので献公は非常に寵愛し何をするにも傍に置いた。一年が過ぎ驪姫は一子を生み奚斉と名付けた。その翌年少姫も一子を生み卓子と名付けた。献公はすでに心は驪姫に惑わされその子も可愛がり、とうとう一時あんなに愛した斉姜の事を忘れてしまつて、驪姫を夫人に立てようと思うようになり、太卜の郭偃に亀ト^{カクエン}を命じた。郭偃の卦に次の言葉が出た。

専^{カハ}之^{カクエン}渝^{カクエン}、公之^{カクエン}渝^{カクエン}ヲ^{カクエン}攘^{カクエン}ウ、一^{カクエン}蕪^{カクエン}、十年尚臭有^{カクエン}リ！

「これはどういう意味だ」

「渝は変わるといふ事ですから『専之渝』は心が変わるといふ意味です。攘は奪う事、渝は美しい物という意味ですから『攘公之渝』は心変わりして美醜逆転するといふ意味です。蕪はいい香り、蕪は悪臭です。『一蕪一蕪、十年尚臭有』は香は臭に駆逐されて悪臭が久しく消えないという意味であります」

献公は驪姫を溺愛しているから信じずもう一度史蘇に筮で占わせた。占いの結果は「觀」の卦の六二で、その詞は「窺い觀る、女貞に利す」だと言つた。

占の方法として筮と卜がある。筮は籐竹を数え八卦を立二組の八卦の組み合わせ六十四卦を基に占ふ。トは亀腹甲や獸骨を焼きてその割れ目の形吉凶を占、特に亀の腹甲を使うものを龜トと言ふ。

「觀」の卦六二上卦巽風下卦坤地の風地觀の卦である。風地觀六二の「窺利女貞の意味は次ように解釈する。柔順中正の婦人の徳を、陰柔無知の状態に置かれ、忝その徳も世中の状態もよく知る事ができない。家庭を守る婦人としての徳を正しく守っているが屋内の窓から僅かに世間を覗き見ることしかできない状態である。（立野清隆「実占」易経五月書房）

「内にいて外を見る、女子として正しい姿じゃないか。これ以上の吉があるうか」

と献公が言うと、郭偃は、

「天地が開闢して、先ず象ができ、その後数ができました。龜は象で、筮は数です。ですから占いは筮トより亀トによるべきです」

と言ひ、史蘇も、

「周礼では嫡子は二人なく、諸侯は再婚しないことになっています。これがいわゆる「觀」です。夫人の後継を立てる事は正當とは言えません。正しくなければ利が有るはずがありません。易の結果ではこれと申せません」

と言つた。献公は、

「占いで事が決まるのなら、巧妙な謀計など要らないじゃないか」

と言つて史蘇、郭偃の意見を聞かず、勝手に日を決めて太廟へ報告し、驪姫を夫人に、少姫を第二夫人に立ててしまった。

史蘇はそつと大夫里克に相談した。

「これでは晋国は滅びてしまいますどうすればいいでしょう」

「誰に亡ぼされるのだ」

「驪戎でしよう」

里克は彼の話が解せない。

昔、夏の桀王が有施を攻めた時、有施の国主は妹喜を献上し桀王は彼女に溺れて夏を亡ぼし、殷の辛（紂王）は有蘇を攻め有蘇から妲己を手に入れ彼女を寵愛して殷を亡ぼしました。周になつて幽王は褒を攻

紂王一説によれば紂とは義を破り善を損うという意味、死後諡おくりなされたものだといふ。（野田定男訳平凡社史記 殷本紀 注）

め、彼も献上された褒姒を溺愛して西周を亡ぼしました。今回晋は驪戎を攻めて女を手に入れ寵愛していますがこれで大丈夫でしょうか」

ちやうど太卜郭偃もやつて来たので里克は彼に史蘇が言つた話をした。

「晋はすでに乱れていますがいずれは滅びる事はないでしょう」

「もし内乱があるとすれば何時頃だろうか」

「善惡の結果は十年以内に現れます。十は満ち数です」

里克はその意味をすぐ理解した。

さて、献公は驪姫を溺愛していたのでその子奚齊を跡継ぎにしようと考え、ある日驪姫にそう話した。

「それはありがたいお言葉ですが、すでに申生殿が世子に立つておられ、理由なくこれを代えれば家臣たちが反対するに決まっています。それに重耳、夷吾両公子と申生殿は仲がよく、それに三公子ともその家臣がいますから彼らにだめだといつて抵抗されたら台無しになつてしましますわ」

と言つて、献公に跪いて心にもない言葉が続けた。

「申生殿が太子である事は諸侯も周知の事です。しかも太子として都合な事は何もしていません。もし大王が我われ母子のために申生殿を廢するような事があれば、わたしは人々に顔向けができず首をくぐるしかありません」

献公は彼女の言葉を信じ込み、何も言わずそのままとした。

献公には梁五と東閼五という二人のお気に入りのお大夫がいた。二人は献公の寵愛を傘に著てあれこれ聞き探つて引つ掻き回すので大臣たちは二人を「二五」と呼んで嫌つていた。更にもう一人施という頭がよくて

弁が立つ役者の美少年がいた。献公にとりわけ可愛がられ禁中にも出入りが自由だったので、驪姫は施俳優の施で優施ともいふと私通関係もち非常に親密な間柄になっていた。そこで腹にしまつておいた事を彼に話し、まず三公子をそれぞれ離して徐々に尊位の計画を進める事にした。

「辺境の防備体制強化を理由に三公子を遠くの町に追出しておいでから事を起しましょう。それには、国を思ふ忠謀と思わせる別な人の発言が必要です。それには『二五』が役に立ちます。奥方さまが賄賂で彼らを買収なさつて、口裏を合わせて進言させるのです。そうすれば殿はきつと承知なさいます」

驪姫は優施の意見に従ひ、金帛きんぱく、金、絹織物を彼を通じて『二五』に渡し彼らの協力を得るよう指示した。施は先ず梁五に会つた。

「君夫人があなたとお近づきになりたいとおっしゃられ、軽少なものですがお持ちしてご挨拶に上がりました」

梁五は驚いて、

「君夫人がどうしてわたしに。何かわたしにやらせたい事があるのですね。それをお聞きしなければいたたくわけにはまいりません」

施は驪姫の計画を全て彼に話した。梁五は話を聞いて東閼五も仲間に入れるべきだといふので、さつそく東閼五を訪ねて三人で相談した。

翌日、梁五が献公に進言した。

「曲沃は当家が最初に封じられました土地でありしかも先君の廟所のあるところでもあります。また蒲と屈は戎狄じゆうてき（周辺の少数民族）に近く国境近くの重要な町です。この三邑は他の者には任す事は出来ません。宗廟のある町に主がいなくて民の君主に対する畏敬の心が失われます。辺境の町に主がいなくて戎狄に狙われやすくなります。もし太子が曲沃

の責任者となり、重耳様と夷吾様がそれぞれ蒲、屈を分掌なさつて、殿が中央でコントロールされれば磐石の体制となります」

「太子を外に出して大丈夫だろうか」

東闕五が答えた。

「太子は君主の次の方です。曲沃もわが国では第二に重要な町です。太子でなくて誰が適任だと言えましようか」

「曲沃はわかったが、蒲、屈は荒野だ、どうやって守るのだ」

「城でなければ荒野ですが、城をつくれれば都邑になります」

そして二人は声を揃えて言った。

「都が二つ増え、これを機会に国土開拓を進め、辺境防備が確保されれば晋国にとって大変すばらしい事だと考えます」

献公は彼らの話を信じて、世子申生を曲沃に住ませ晋国発祥の宗廟の町の責任者とした。大夫の杜原款は太子に随つて行つた。重耳は蒲、夷吾は屈とそれぞれ辺境の町の責任者となり、狐毛は重耳に随い、呂飴甥は夷吾に随つて行つた。

趙夙に命じて太子のために曲沃城の城壁を高くかつ拡張させ新城と命名した。また、土蒧に蒲、屈の二城の建設の監督を命じた。土蒧はばたばたと急いで築城を終えたので、ある者が、

「城の強度はこの程度でいいのでしょうか」
と不安がると、土蒧は笑つて言つた。

「数年後には敵の城になるんだ、どうして堅固にする必要があろうか」
そして、次のような詩を作つた。

狐の皮衣に龍の角 一国三公 吾は誰にか従わん

狐の毛皮は貴人の服、龍の角は乱を象徴する。詩の意味は貴人が多く、嫡子庶子長幼の序を無視していると心配しているのである。土蒧は驪姫がわが子を嫡子に取つて代えようという謀計を予知してこう言つたのである。申生と二公子はそれぞれ遠く田舎へ移され、奚齊、卓子だけが君主の傍に残つた。驪姫は益々媚びて寵愛を独占するのである。

女色は古来禍の種 献公は昏く驪姫を偏愛
徒勞なるべし辺境の築城 知らず禁門に干戈伏せるを

この頃献公は新しく二軍を作り自らは上軍の將、世子申生を下軍の將として、大夫趙夙と畢万を率いて耿、霍、魏三国を攻めこれを亡ぼし、耿は趙夙に、魏は畢万に采邑（封地）として与えた。太子の功はますます上がり、驪姫としては面白くなく、その陰謀はさらに陰険になってきた。

さて話変わつて、楚の熊羆、熊惲兄弟は文王夫人と同腹の兄弟だが、才智は熊惲のほうが兄に優つており文王夫人（息嬀）も彼のほうを愛し、国人も彼に服している。熊羆はすでに位を継いだが、弟の存在を危険に感じ、何かに事よせ殺して後顧の憂いをなくしようと考えていたが、周りに熊惲との中を取持つ者が多いので躊躇して決めかねていた。熊羆は政治には不熱心で専ら狩を好んで三年間何もしていない。兄弟の仲は決定的となり、熊惲は密かに命知らずを集め兄が狩りに出た時を襲つて殺し、母文王夫人には病死したと報告した。夫人は変だとは思つたが深く追求しないで大夫たちに熊惲を擁立させて即位させた。これが楚成王で

ある。熊贖は政治向きの事は何もしなかったので君主とは認めず堵敖と名付け葬儀は王の礼にはよらなかった。成王は叔父の子元を令尹に任命した。

子元は兄の文王が亡くなると王位篡奪を考えた。同時に兄嫁の息嬀が大変な美人なので自分のものにしてしようと考えた。こんな男だから熊贖熊惲などまだ年端もいかないし、自分が叔父だという事もあつて全く眼中にない。ただ、大夫の鬬伯比が正直無私で才智ある人だったので勝手なことができなかった。ところが周恵王十一年（紀元前六六六年、鬬伯比が亡くなった。子元は何憚る事なく王宮のそばに大きな屋敷を立て、毎日歌舞音楽を奏し文夫人の気持ちを引こうとした。

「外の歌舞の音は何処からなのかしら」

「令尹の新館からです」

「先君は歌舞より武事に熱心で、諸侯を抑えていたから諸侯の朝見が絶えなかったわ。楚軍が中原に出なくなってもう十年になるわね。令尹は雪辱を図らないで、未亡人のわたしの近くで一日歌舞に耽っているけれど本当に恥ずかしいとは思わないのかしら」

侍女が息嬀の言葉を子元に話した。

「女性でさえ中原を忘れていないのに、わしが忘れるわけがないじゃないか。鄭を討たなきゃ男じゃない」

子元はすぐに六百乗の戦車を出し自ら中軍を率いて鬬御彊、鬬梧が大司令旗を建て前軍に、王孫遊、王孫嘉が後軍となり堂々鄭に攻め入った。

鄭文公は楚の大軍が攻めて来たので急遽大臣たちを招集して協議した。

堵敖は楚兵は大軍だから講和した方がいいと言いい、師叔は斉と同盟を結んだばかりだから堅く守って斉の救援を待つべきだと言いい、世子華は若いので強硬で城を背にして戦うべきだと言いい。叔詹は師淑の堅守案に賛成しながらも楚軍はきつとすぐに撤退すると予測した。

「令尹が自ら大将となって攻めてきているのどうして引揚げると思ふのかね」

鄭公の疑問に叔詹は自信を持って答えた。

「楚が他国を攻めるのに六百乗も使った事はありません。という事は公子元は息夫人にいい顔をするために必勝を期しているにすぎません。必勝を求めるものは逆に負けを心配するものです。楚兵がやって来たらわたしに撃退の方策があります」

議論のさ中に物見の報告があり、楚軍はすでに外郭を破り純門に入り間もなく達平に入ろうという勢いだという。

「楚兵がそこまで迫ってきたのなら講和は無理だから桐丘へ避難した方がいい」

と堵敖が言うと叔詹は、

「怖れることはない」

と言いい兵士を城内に埋伏させ、城門を開放し市民には平常通り往来させ全く楚の攻撃を怖れる様子を見せなかった。

鬬御彊ら前軍が先に到着しこの様子を見て、城中に全く動揺の様子が見えないので変に思つて鬬梧に言った。

堵敖楚ではの時代君主になる前に死んだ人を救つた。

「こんなのにどこに見えるのはきつと何か我われを騙して城に入れようという魂胆が有るに違いない。おつとり刀で入るわけにはいかん、令尹れいいんを待つて相談をしてからにしよう」

と、闕梧くわこに言つて軍を城から五里ほど下げて駐屯した。間もなく子元の率いる大軍が到着したので闕御彊くわぎきやうらは城の状況を報告した。子元しげんが自分で高みに登つて鄭城の様子を確かめてみたがやはり旗は肅然と立つており武装兵は整然と並んでいた。

「鄭には『三良』がいるからどんな策謀があるか計りかねる、万まづいことになつたら面目なくて文王夫人に会わせる顔がない。城攻めはもう少し実態を調べてからにしよう」

翌日、後軍の王孫遊から報告があつた。

「物見が探つた所では、斉侯が宋、魯と共に大軍を率いて鄭救援に来ておりまもなく到着するということです。闕將軍らは迎撃準備を整えて軍令を待つています」

子元しげんは驚いて諸將に、

「諸侯にわが退路を断たれたら背腹に敵を受け大損害を被ることになる。鄭に侵攻して達市きしまで落したのだから完勝だ」

と言つて、そつと伝令を伝えて兵士に枚はしを含ませ馬の鈴をはずしその夜のうちに陣を引き上げた。鄭兵の追撃を恐れ、陣幕、旗はそのまま放置して鄭人に見つからないように撤兵し、鄭の国境を抜け出ると、そこからは鐘太鼓を鳴らして高々と凱歌を歌いながら帰つて行つた。先行して使いの者を文王夫人のところへ遣り令尹れいいんが完勝して帰国したことを報告させた。

夫人は報告には感謝したが、

「令尹れいいんが敵を殲滅したのなら先ず国民にそれを宣言し賞罰を明らかにして宗廟に報告し先王の霊を慰めるべきです。わたしなどに報告して何になるのです」

と言つたと聞き、子元しげんはむしろ恥じ入つた。楚王熊憚ゆうらんは子元しげんが戦わずに帰つたことを聞きそれ以降彼に不満を抱くようになった。

一方鄭の叔詹しゅくせんは兵たちを督励し徹夜で城を巡回した。夜が明けて楚の陣を見て、

「楚の陣は空つぽだ、遁ずらしたようだな」

人々は未だ信じられない。

「どうしてわかるのです」

「大将のいるところは鐘がなり兵たちの声で賑わっているはずだが、今は鳥が上を飛んで騒いでいるので下に誰も居ないことが分かる。わしは諸侯の救援軍が必ず来ると思つていたが、楚はおそらくそれを先に探つてずらかつたのだろう」

そうこうしているうちに物見の者から、諸侯の救援軍は予想通り来たけれど、国境を超える前に楚軍がすでに引揚げたのを知つて、それぞれ解散して帰国したとの報告があつた。これを聞いて初めて叔詹しゅくせんの知恵に皆感心したものである。鄭は使者を出して斉侯の救援の労に感謝し、これよつて斉国に感服し二心を抱く事はなくなつた。

ところで楚の子元しげんは、自ら鄭討伐に出て功が無かつたので気分が悪く、纂算計画を更に急いだ。先ず文王夫人を手に入れてからと思つている時、ちようど彼女が体調を崩したので見舞いを装つて王宮へ行つた。そして結局宮中に寝所を移して私兵数百人を宮外に配置して三日も居座り出て

来なかつた。大夫闕廉はこれを聞いて問責のため宮門に押し入つて、彼の寢室へ行くと子元は髪を整えている所だつた。

「こは臣下がそういう事をする所ではございません、すぐに出て行つてください」

「こはわしの部屋だ、文句あるか」

「王侯と言えども、兄弟の間では勝手に相手方の部屋へは行き来できない事になっていきます。令尹は文王の弟君ではありますが臣下でもあります。臣下は臣下として守るべき礼法があります。寢所を宮中に移すなどもつてのほかです。しかもこは文王夫人がすぐ近くに居られます。男女は離れるべしという礼法をまさかご存じないわけではないでしょう」

「だまれ、楚国の政はわしが握っている。貴様にがたがた言われる筋合いはない」

子元は部下に命じて闕廉の手に枷を付け廊下に縛り上げて宮中に拘束した。

文王夫人は侍女に、急遽宮中の危難を肅清させるために闕伯比の子の闕谷於菟を呼びにやつた。

闕谷於菟は密かに楚王に許可を得て、闕梧、闕御彊およびその子の闕班と共に夜中に兵を率いて王宮を包囲し、子元の私兵と衝突したが子元方の兵はみな恐れて逃げしまった。子元は宮女たちに囲まれて酔払つて寝ていた。突然夢を破られ剣をとつて出て行つたが、そこへちょうど武装して入つて来た闕班に出遭つた。

「おまえは謀反を起す気か！」

「謀反人はあなたの方です。主君の命に依り反乱者の誅殺に参りました」

両者はすぐ宮中で斬り合いになつたが、すぐに闕御彊と闕梧がやつてきた。子元は危ないと思つて逃出そうとしたが闕班の一刀であえなく首が落ちた。闕谷於菟は闕廉の枷を解いてやり、全員で文王夫人の部屋の外で乱平定の報告をし、叩頭の礼をして歸つて行つた。

翌日早朝、成王は百官の朝見を受けた後、子元の家の取り潰しを命じ、その罪状を辻書きにして町に立てた。

文王夫人に迷つた子元を非難した鬚翁の詩がある。

ああ色事の大膽さ 身分の差も兄嫁なるも心にあらず

妄念に狂うもしかたなし 楚夫人は美しき息夫人

ところで、闕谷於菟の祖は闕若敖であり鄖子の娘を娶り、闕伯比を生んだ。若敖が死んだ時伯比がまだ幼かつたので母について鄖国に住み、鄖の宮中に出入りしていたので、鄖夫人は伯比をわが子のように可愛いがつた。鄖夫人には娘があり伯比とは従兄妹の間柄で、幼い頃から宮中で一緒に遊んだので年頃になつても変わらずそれが愛情に変わった。その娘が妊娠すると鄖夫人は頭のいい人で、伯比と離して彼を宮中に入れないようにし、娘は病氣だということにして一室に隠した。日が満ちて男の子が産まれると鄖夫人は密かに侍女にその子を衣服で包み宮外へ出し、夢沢に捨てさせた。鄖子をごまかすためと、娘の悪評を抑えるためであつた。伯比は慙愧に絶えず母と一緒に楚へ歸つた。ちょうどこの頃、鄖子は夢沢で狩りをしていた。沢の傍で猛虎がうずくまっているのを見つければ部下に矢を射させたが側に落ちて一つも当らず虎は身動き一つしなかつた。鄖子は変に思つて部下に沢の近くへ行つてよく調べさせ

た。その報告では、虎は赤ん坊に乳を与えているところで人を見ても畏れて逃げようとはしないのだという。

「これは神さまに違いない、驚かしてはいけない」

郎子うんはそう言つて、狩を終えて帰ると夫人にこのことを話した。

「夢沢へ行ったら非常に不思議なことに会つたよ」

「どうなさつたのですか？」

彼は猛虎が人の赤ちゃんに乳を飲ませていたことを話して聞かせた

「あなたはご存じない事です、その子はわたし捨てさせた子ですわ」

「えつ、そなたに捨てるような子がいるわけがないではないか」

「あなた怒らないで。その子は実はわたしたちの娘と甥の鬨が生んだ子なのです。わたしはわが子の名に傷が付くのを心配して侍女に夢沢に捨てに行かせたのです。昔、姜嫄きやうげんは巨人の足跡を踏んで懐妊したため、不吉に思つて生まれた子を氷の上に捨てたそうだが、鳥がその子を翼で覆い助けるのを見て不思議に思つて連れ帰り棄きと名づけて育てたところ、成長して后稷こうしやく（農務大臣）となり、後に周の祖となつたと聞いています。この子は虎の乳を飲んだという不思議な事があつたのですからきつと立派な人になりますよ」

郎子うんは妻の意見に従い、人を遣つて連れて帰る娘に育てさせた。一年後彼女を楚に送り鬨伯比とうはくひと結婚させた。楚の方言で乳のことを『谷』こく

『姜嫄 周朝祖先后稷名を棄すけいその母は姜嫄いふ。彼女は帝嚳の正妃であつた。ある時野に出て巨人の足跡を踏みけ妊した。不吉な子だと思つて路地裏に捨てると通る牛馬がよけて通り、林の中に置くくと人通りが多くなつた。また溝の上に置くくと鳥が翼を覆て暖めた。』史記《周本紀》

虎のことを『於菟』おとと言う。虎の乳を飲んだという意味で名を谷於菟こくおと字は子文とした。現在の夢泉於菟郷が子文の出生地である。

谷於菟は安民治國、文武両道の才覚を持つた人に成長した。父伯比は楚の大夫であつたが亡くなつたので谷於菟が後を継いで大夫となつた。子元が死んで令尹の官が空席になつたので楚王は鬨廉を令尹にしようと思つたが、

「現在楚の敵は齊です。齊は管仲、寧戚を用いて國は豊かで、兵は強くなつています。臣はとても管仲、寧戚には及ばず、その任ではありません。王が楚の政治、規律を改め中原に覇を競おうとお思いでしたら是非とも鬨谷於菟を任用すべきであります」

鬨廉はそういつて断つた。大臣たちは口を揃えて、

「令尹はやはり鬨谷於菟に限りませう」

と彼を推薦したので楚王はそれを承認し鬨谷於菟を令尹に任じた。

「齊は管仲を仲父と言つている。谷御菟も字で呼ぶ事にしよう」

楚王はそう言つて彼を字の子文と呼び（字で呼ぶは敬意を含む）、名を使わないようにした。周恵王十三年（紀元前六四四年）の事である。

子文は令尹になると、

「國家の禍は君主より臣が強くなるところに原因があります。そこで百官の封地は全員半分を國家に返還していただきたい」と提唱した。そして手始めに鬨氏でこれを行つたので皆従わざるを得

なくなつた。また郢城は南は大きな湘水が深い淵をなしており北は漢江が流れ、地勢に優れた場所なので丹陽から遷都し名を郢都とした。軍の訓練を行い、賢者を簡拔し、公族の屈完を大夫に任じ、同族の鬨章の能力を認め他の鬨族と共に軍隊を監督させ、子の鬨班を申公とするな

ど適材適所を行った。こうした一連の方策によって楚はしっかりと固ま
った。

斉桓公は楚王が賢者を登用して国がしっかり治まってきた事を
聞いて、中原制覇を狙ってくることを心配し、諸侯の兵力を集めて楚を
討とうと考え管仲に相談した。

「楚は南方で王を称し、土地は広く軍隊も強くて周天子もこれを抑え
る事ができない状態です。現在子文に国政を任せ、国内はすっかり落ち
着いています。軍事力だけではだめです。諸侯と同盟を結んだばかりで、
まだ悪しき国を亡ぼし弱き国を助けるといふ徳がなく、諸侯の心を十分
掴んではいけませんので彼らの兵が思い通りに動くかどうか心配です。殿
の威徳が広がるまで時間を稼いだ方が安全だと思います」

「先君は九代にわたる仇であった紀を亡ぼしてその土地を併合した
が、鄭は紀の属国なのに未だに服していない。これを滅ぼしたいがど
うだろう」

「鄭は小国とはいえその先祖は太公の傍流で斉と同姓です。同姓を亡
ぼすのは義に反します。王子成父にお命じになり大軍を率いて紀城を巡
視させ討伐するような素振を見せると鄭は必ず投降してきます。これ
であれば表面上は同姓の者を亡ぼしたことはならず実質的にその土地を
得たことになります」

桓公が彼の策を採用すると案の定、鄭君は畏れて投降してきた。

「仲父の策には『百慮に一失なし』だ」

と桓公は感心しきりであった。

君臣が国事を話し合っていた時、突然燕の使者が来て、山戎に攻撃さ
れているので救援をお願いしたいと言って来た。管仲は、

「楚を討とうとのお考えであれば、先ず戎を平定しておく必要があります」

ます。北方の戎の心配が無くなれば南方に専念できます」

管仲はそう言うて内々いいタイミングだとほくそ笑んだ。
さてこの後、桓公はどのように山戎を平定するのであろうか、それは
次回のお楽しみ。

第二十一回

管夷吾（管仲）

博聞強記 脩（ゆ）を語り

齊桓公 孤竹を平定

山戎は北戎の一派で国は令支（れいし）（渤海北 現 辽宁 天遼 150 km 程 北 遼）にあり、またの名を離支（りし）という。西は燕、東南は齊、魯である。令支は三国に境界を接しているが、天險の要害と強い軍隊を恃み何処にも臣従せず、しばしば中原に侵攻している。以前齊国に侵攻した時は鄭の公子忽（こう）に敗れ、いま齊侯が覇を称えようとしてしていると聞き、戎兵万騎を率いて燕、齊の連絡路を絶とうと燕に攻め入って来た。燕庄公はこれを阻止できず使者を出して間道を抜けて齊に急を告げて来たのである。管仲は桓公の下問に次のように答えた。

「目下の心配は南の楚、北の戎、西の狄で、これらは皆中原諸国の心配の種で、これを平定するのは盟主の責任でもあります。戎が燕に攻め込んで来なくてもこちらから攻めて行こうと思つていたところです。まして燕が攻められて救援を求めてきているのですから渡りに船です」

桓公は直ちに兵を率いて燕救援に向かった。軍が済水を越えると魯庄公が魯済（済水が魯を流れる部分の名）で迎えていた。桓公は魯侯に燕救援のため戎討伐に行くのだと話した。

「君侯が豺狼を倒して北方を平定して頂けるのであれば燕国だけではなくわが国もその恩恵を受けることになりますので、微力ながら出兵してお手伝いさせていただきます」

「北方は道は遠く険しいのであなたに二足労をお掛けする事はできません。お申し出は大いに心の支えになります、もし本当に助けが必要になった時はよろしくお願い致します」

と桓公が言うと、魯侯は心から感謝しそれに随った。桓公は魯侯と別れ北西に向け進発した。

一方、令支の首領密盧は燕の国境を蹂躪しすでに二ヶ月になるが子女を略奪する程度でどうしても決定的な勝利には至っていない。そこへ齊の大軍がやって来ると聞き、包囲を解いて去った。桓公の軍が薊門関（薊は燕の首都現北京）まで来ると燕庄公が迎えに出て遠路の救援の労に感謝した。

「山戎はやりたい放題して帰っただけで決して挫折して帰ったわけではありません。だからわれわれが引揚げれば必ずまたやって来るに決まっています。この機会に完全に討伐して後顧の憂いを除いておいた方がいいでしょう」

管仲の進言に桓公も同意しその方針に決まった。庄公は燕の兵も先鋒で使つてくれるようにと申し出た。

「燕の兵は連日山戎と戦いお疲れでしょうから先鋒をお願いするのはとても忍びない事です。しばらく後軍について声援をいただければ十分です」

齊侯がそう言うと庄公は感謝して次の提案をした。

「この先八十里東に、無終という国（現天津市薊県）があります。戎族の一派ですが山戎には属しておらず地勢を良く知っているので、招致なさって道案内をさせればいいでしょう」

桓公はその提案を受け、直ちに公孫隰朋に手厚い手土産を持たせて呼びに遣った。無終の首領は直ちに大将虎兒斑に二千の騎兵をつけて加勢に寄越した。桓公は彼を重く賞し先鋒を命じた。約二百里ほど行くと山道が険しく迫ってきたので燕伯に何処なのかと聞くと、

「ここは葵茲と申しまして北戎の出入りの要路です」

と言う。桓公は管仲と相談して、食料飼料等を半分葵茲に保蔵する事にし、樹を切り盛土をして砦を作り鮑叔牙を残し物資食糧の輸送を任せた。そして兵に三日間休息を取らせ、精兵強将を選抜して夜を目に継いで進軍した。

令支の密盧は斉軍が攻めて来ると聞き、速買を召して策を練った。

「敵は遠征軍で疲れていますから、陣営が出来上がらないうちに突然襲えば完勝間違いなしです」

速買のこの案に従い彼に三千騎を与えた。山中の各所に兵を伏せて斉兵が来るのを待った。虎兒斑の先鋒が先に到着した。速買は百騎だけでこれを迎撃した。虎兒斑は速買を見つけすぐ掛かって行こうとすると、

「死に急ぐな」

と速買も迎え打った。数合打ち合うと速買は負けたふりをして林の中へ逃げ込み、なにやら一声叫ぶと山中が呼応し、一斉に敵が飛び出し虎兒斑の隊は前後に両断された。必死に戦ったが馬も傷つき危うく捕えられそうになったところへ折りよく斉侯の大軍がやって来て、王子成父の恐るべき神威で速買の兵を蹴散らかし虎兒斑は救出された。虎兒斑は連れて来た戎兵を多数失う大損害をこうむり、残兵を連れて穴が有れば入りたい気持ちで桓公の前に出た。

「勝ち負けは兵家の常です。將軍、気になさることはありませんよ」

桓公がそう言うて彼に名馬を与えたので、虎兒斑は桓公の度量に感激し涙にむせんだ。

大軍はさらに東へ三十里進軍し伏龍山というところに着いた。桓公と燕庄公は山上に砦を築き、王子成父と賓須無は山の麓に陣営を構えた。大型車を繋いで砦を作り、巡回警備を行い警戒態勢を敷いた。

翌日、密盧は速買と共に自ら一万を超える騎兵を率いて迎撃してきた。何度か突撃するが斉軍が砦の前に広く並べた戦車に遮られ突破できない。午後になって、管仲が山上から戎軍を眺めると戎兵が次第に減り皆馬を下りて地に伏せ雑言罵声を発していた。

「將軍、今日こそ雪辱のときですぞ」

管仲は虎兒斑の背を抱いて激励した。

虎兒斑は戦車のトーチカを開き自国の軍隊を引き連れ飛び出して行つた。

「戎軍に奸計があるんじゃないですか」

と隰朋が心配すると管仲は、

「それは承知している」

と言うて、すぐに王子成父に左方面から、賓須無には右方面からそれぞれ側面を迂回して協力して戎軍が事前に準備している伏兵を殲滅するよう命じた。本来山戎は伏兵の計をよく使うのである。斉兵が堅く守って動かないので伏兵を谷あいにも隠し、わざと馬を下りて罵声を浴びせて斉兵を誘っていたのである。虎兒斑が近づくと戎兵は馬を捨てて逃げだした。虎兒斑が追撃しようとしたが本営から鐘が鳴ったので直ちに馬を返した。密盧は虎兒斑が追い掛けて来ないので伏兵に呼びかけ全員で攻

撃しようと思った。ところが王子成父と賓須無に左右両面から攻め込まれ伏兵はばらばらになって大敗を喫し多数の馬を失ってしまった。

速賁は密盧に提案した。

「斉軍は進軍して必ず黄台山の山あいから入って来るはずですよ。木や石で谷口を封鎖して堀を掘ってがっちり守備兵を置けばどんな大軍も飛び越えることはできないでしょう。伏龍山から二十数里は全く水の出る泉が有りませんので斉軍の飲み水は滲み出る水を吸取るしかありませんが、その水流を断てば斉軍は必ず自壊します。そこを攻めれば必勝疑いなしです。それと併せて、孤竹国に救援の使者を出しておけば万全です」

密盧は喜んでその案に沿って進めた。

ところで、管仲は戎兵が引揚げた後三日間何の音沙汰もないので変に思つて物見に探らせたところ、

「黄台山の道は塞がれてしまつています」

との報告があつたので管仲は虎兕斑を呼んでたずねた。

「別に道はありますか」

「ここから黄台山へ向かつて十五里ほど行くと搗其国へ行き着きます。もし別な道を行くならそこから西南に大きく迂回し芝麻嶺から青山口へ出てさらに東へ数里迂回すれば令支の巢窟に出ます。しかし、山は高く道は険しいので車馬の通行には不便です」

話し合つてるところへ牙将連撃が、(牙将：正副將軍の下位の軍官)

「密盧が我々の水脈を断つてしまつて軍中の水が欠乏して参りました。如何致しましょうか」

と指示を受けに來た。

「芝麻嶺は全て山道ですから数日では行き着きません。水がなければ無理ですね」

虎兕斑がそういうので緊急対策として桓公は全軍に山を穿つて先に水を見つけた者には重賞をとらせると命じた。

「蟻の巢穴のあるところには水源があると聞いたことがあります。蟻の巢穴を見つけて掘るべきです」

と公孫隰朋がいうので兵士たちは探し回つたが蟻の巢は見つからない。

「蟻は冬は暖かい山の南面に、夏は涼しい山の北側に巢を作るんだ。今は冬だから北側を探さないとでたらめに掘つてもだめだよ」

と兵士たちに教えて北側を探させると、言つた通り山腹に清冽な水を見つけた。

桓公は隰朋は聖人だと言つてその泉を聖泉と名づけ、伏龍山を龍泉山と改名した。軍中は水が手に入り歓声が上がつた。

密盧は斉軍が水には困つていないと聞いて驚いた。

「中国(黄河流域の国)には天佑があるのかな」

「斉軍に水ができたとしても遠来の軍ですから食料が続かず、我々が戦わずに守りに徹すれば、敵はやがて食料が尽きて撤退せざるを得なくなるはずですよ」

密盧は気持ちを取りなおし速賁の意見に従つた。

管仲は賓須無に食料補給に葵茲へ帰るように見せかけ、虎兕斑に案内させて芝麻嶺の道をとつて六日の予定で迂回路へ出発させた。一方では牙将連撃には毎日黄台山へ行つて戦わせ、密盧の兵を適当にあしらい陽動作戦をとらせた。この六日間戎兵は全く出て戦おうとしなかった。

「日数からすると賓將軍はもう着いている頃だ。敵が戦わないとすれば我々は座して守ってばかりはいられない」

管仲はそう言つて、士卒にそれぞれ土囊を背負わせ、最初に空の戦車二百台を前に出して堀の位置を調べておいてそこに土囊を埋めていった。そして大軍を山あいまで進め喊声を上げ一斉に木や石を取り除き進軍した。密盧は安心して一日中速買と酒を飲んでゐた。突然斉軍が攻め込んできたと聞き急いで馬に跨り敵に向かおうとしたが、戦う前に

「西からも敵が殺到してきています」

という部下の報告を聞き、速買は小路も敵に落ちてしまった事を知り戦闘意欲を失つて、密盧を守りながら東南方面へ逃げて行つた。賓須無は数里追つたが、険しい山道だし逃げ足が速いので追いつけず結局引き返した。馬、牛、羊、武器等彼らが捨てていったものは数え切れない。略奪されていた燕国の子女も取返す事ができ完勝であつた。令支人はこんな強い軍隊に会つたことがなく皆酒や料理を持って馬前に降伏してきた。桓公は一人ひとりを慰め、投降してきた者の殺戮を厳しく禁止したので戎の人々は大変喜んだ。

桓公は投降してきた戎の人になぞねた。

「そなた達の主人はどこへ頼つていったのかね」

「わが国と孤竹（河北省盧龍、灤県一帯）は隣国でもともと親しく、最近援軍を頼む使者を出していましたがまだ来てませんでしたので、恐らく孤竹へ行つたのだでしょう」

桓公はさらにその孤竹国の強弱、孤竹までの距離を聞いた。

「孤竹は東南の方向にある大国で、商朝の頃から城郭があつたようです。ここから約百里の所に卑耳溪谷がありそこを越えれば孤竹になります。しかし山道は険しく進軍は大変です」

「孤竹と山戎はぐるだ。近くまで来ているしちょうど一緒にいるのを幸い、これも討伐してしまおうぞ」

この時、鮑叔牙が牙将高黑運に食料五十台分を運んで来させたので桓公は彼を軍に留めて使うことにし、戎の投降者の中から精銳千人を選んで虎児斑の配下に付け前回損失の補充をするなど準備を整えて、軍を三日休めてから出発した。

さて、密盧らは孤竹へ行き国主の答里呵に会つて地に伏して頼んだ。「斉は強力な軍力を持つわが国に侵略してきたのです。兵をお借りしてぜひとも報復させて下さい」

「助けに行くつもりだったのですがちよつとしたトラブルがあつて遅れてしまい、思いがけずあなたに大損害をかけてしまいました。ここは卑耳の谷が深く流れが速いので筏を全部港に入れておけば、斉軍がどんなにすごい能力が有つても天を翔けるわけにはいきませんまい。彼らが引揚げるのを待つて、我われ共同で追撃しあなたの国を取戻しましょう。簡単なことです」

大将の黄花元帥は不安そうに密盧に進言した。

「敵が筏を作つてわたつて来るのが心配です。溪口に兵を置いて昼夜の見張りを着けて置く方が安全だと思ひますが」

「やつ等が筏を作つていたら我われにわからないわけがない」

答里呵は黄花元帥の進言を一蹴した。

一方、斉桓公は^{かんこう}大軍を進め、十里も行かないうちに、道は險阻な山中へ入りこころとしたり岩、草や木や竹などが茂つて道を塞いでいた。

曲りくねつて青雲に接し 怪石聳え路はなし

胡族といえど馬を下り 石窟に潜む虎をも憂う

^{かんちゅう}管仲は草木に硫黄を散布し火をつけさせた。ぱちぱちと燃えひろがり狐や兎の影はなくなり、五昼夜焼け続いて木々を根こそぎ焼き尽くした。火が消えた後、車の道の工事にかかった。諸將は山が高く険しいから車を通すのは難しいという。

「戎馬はここを走るのだ、車が行けないわけがない」

^{かんちゅう}管仲はそう言つて、山に上る歌と山を下る歌を作つて軍人に歌わせた。

山に上る歌は、

山は高く路くねり 木々は清々しく岩ころころ

うす曇り日も寒く 車を駆けて峻険を上る

風神や^{ゆじ}兪兒の助け得て 鳥の如くに羽が生え

あの山頂はもうすぐだ ^(兪兒については後述)

山を下る歌は、

上りは難く下りは易し 車は転る如く馬墜るが如し

音は轟き人は氣を吐く くねつた路を回り回つて

あつという間に平地なり 山戎叩き^{のろし}烽火消し

^{こちく}孤竹討伐の功 石に刻みて万世に伝へん

兵士が歌い始めるとあちこちでお互いに歌いだしあつという間にその歌は広がった。桓公、管仲、^{しやうほう}隰朋らは^{ひじ}卑耳の峰に立ち、その上り下りの地勢を見て桓公は感心した。

「歌がこんなに人の力を引出すというのを今日初めて知つたよ」

「臣が昔囚人車で魯から斉に護送されていた時、魯が追ってくるのが心配で、行軍を急がせるために、その時も歌を作り歌を楽しんで兵士の疲れを忘れさせ、昼夜兼行で行軍させたことがあります」

「それはどういう理由なんだろう」

「およそ人というのは、労働をしている時は精神的に疲れるもので、楽しければ労働の疲れを忘れるのです」

「なるほど、仲父が人情にも通曉しているからできた事だな」

一行は車を急がせ一斉に進発した。

幾つかの山を越えある峰に来到と、前面の車の列が糞詰り状態になつて動きが取れなくなつてしまった。

「両側は岩壁で中央に路がありますが、馬が一頭通れる程度で車の通行は不可能です」

と前方からの報告があつた。

「ここに伏兵がいたらおしまいだな」

と桓公は心配顔で管仲に言つた。

妙案が無くて困つていた時、山の窪みから突然人なのか獣なのか判らない怪物が出てきた。背は小さく一尺ばかりで素足、赤い衣を着て黒い冠を被つたその怪物は、桓公の前に歩み寄り何回も拱手の礼をし歓迎するような仕草をし、右手でちよつと衣を上げる動作をして翻つて岩壁の間を走り去つた。桓公は驚いて管仲に聞いた。

「卿は見たかね」

「いいえ、何か見えませんでしたか」

そこで桓公はその怪物の姿や行動を管仲に話した。

「臣が作った歌の中に有った『兪児』とは正にそれです」

「兪児とは何だね」

「北方に兪児という登山の神様がいるというのを聞いたことがありません。霸王だけが会うことができると言われていました。殿がご覧になったのはきつとそれです。彼が拱手の礼をとったのは殿の征伐を歓迎している意思表示であり、衣をからげたのは前方に水があるということ、右手は右のほうの溪水が深い事を表し殿に左方面から渡れと言っているのです。水が多くてどうしても渡れない場合は、幸い岩壁が守りにもなっているのです、しばらく山上に兵をとめて水勢をよく調べてから進めばいいでしょう」

管仲が兪児を知っていた事を称えた詩がある。

春秋の典籍数あれど 仲父は兪児を何処で知る

異人は異事を知る 張華の博識も驚くことはなし

水勢を調べに行った偵察隊が随分時間を要して帰ってきた。

「山を下って五里も行かない所に卑耳溪が有ります。水量は多くしかも深く冬でも涸れないようです。元々筏が有ったのですが山戎の首領が接收してしまつたようです。右へ行くとますます深くなり一丈どころ

ではないようですが、左へ行けば三里ほどで水面は広くて浅くなり、せいぜい膝の高さになります」

という報告があつた。

「兪児の靈験はあらたかだな」

と桓公は手をたたいて喜び、燕庄公も、

「卑耳の溪谷は渉れるような浅瀬はないと聞いていましたが、君侯には神の助けが有るという事でしよう」

と、ともに喜んだ。

「ここから孤竹城までどのくらい有るのでしょうか」

桓公が燕庄公にたずねた。

「溪を渉って東へ行くと、先ず团子山、次に馬鞭山、さらに双子山と

三山が三十里ほど連なっています。これは商朝時代の孤竹三代の墓です。

三山を過ぎて更に二十五里程行くと無棣城（現河北省塩山）が有り、これ

が孤竹の都城です」

庄公の説明が終わると、虎児斑が一番渡渉を願ひ出た。

「全軍が同じ所を行くと、万一敵に出遭つた時抜き差しならなくなつ

てしましますから、二手に分かれたほうがいいでしょう」

管仲はそう言つて兵士に竹を切らせ、籐で編んで瞬く間に数百の筏を

作った。車に筏を乗せて山を下り、軍を二隊に分けた。王子成父は高黒

と一緒に一隊を率いて右の方から筏に乗つて渡りこれを正兵とし桓公は

公子開方と豎刁と共にその後詰となり、賓須無と虎児斑がもう一軍を

率いて奇兵として左方面から渡渉し管仲と連繫が燕庄公とともにその後

詰を担当し、团子山の麓で両軍落ち合うことにした。

張華 晋代の武將で330 学者 文々もあり著書に『博物志』がある。神仙
奇怪な人間動物の話 古代文献についての事実や民間伝説などを記録したものであ
る。

一方、答里呵は無棣城にいて、齊兵が遣つて来ていることを知らず、小吏に卑耳溪の様子を探りに遣つた。小吏は溪中を筏で次々と兵馬が渡っているのを見て慌てて城中に知らせた。答里呵は非常に驚き、直ちに黄花元帥に命じて五千の兵で防がせた。

密盧が速買と共に先鋒として助勢を買つて出たが、黄花元帥は、

「負け癖のついた人とは一緒に仕事はできません」

と言い捨てて馬に跨り行つてしまった。答里呵が密盧に、

「西北の团子山は東から来る要路になっていますので、あなたがたで守つていただけませんか、我われもすぐに参りますから」

と云うので、密盧は口では承知したが、黄花元帥に馬鹿にされた事で非常に氣分を害していた。

黄花元帥は溪口の手前で高黒の先鋒に出会い戦いになった。高黒は黄には分が悪くなつてきたので逃げようと思つた時ちようと王子成父が来たので、黄花は高黒を捨て王子と戦つた。五十余合も打合つたが勝負がつかない。そのうち齊侯の大軍がやつて来て公子開方が右から、豎刁が左から一斉に掛かつていつた。黄花元帥は慌てて軍を見捨てて逃げてしまつたので、五千の兵は大半が齊兵に討取られ残つた者もみな投降してしまつた。黄花が単騎逃げ团子山近くまで来るとそこはすでに敵の大軍に占められていた。立っているのは皆、齊、燕、無終の旗である。これは賓須無らが卑耳溪を渡渉して先に团子山に到着していた軍である。黄花は山を越えることができず、馬を捨てて木こりに扮装し小道を這い上がつて脱出した。斉桓公は大勝して团子山に集結し、左路をとつた軍と合流し、これからの進軍について協議に入つた。

さて密盧の方であるが、馬鞭山まで来ると斥候の報告で团子山はすでに齊兵に占拠されている事がわかり、仕方なく馬鞭山に陣を張つた。黄花元帥は命からがら馬鞭山に逃げてきてそれが自軍だとわかり陣中に飛び込むと、あにはからんやそれは密盧の陣であつた。

「元帥は常勝將軍なのにどうして単身でここに見えたのですか」

密盧にそう言われ、黄花は慙愧に堪えなかつた。酒食を頼んだが、密盧は一升の煎り麦しか与えなかつた。さらに馬を頼んだら密盧が与えたのはびつこの馬だつたので、黄花は耐え難い恥辱と恨みを抱え無棣城へ逃げ帰り、答里呵に報告し、齊への報復戦を願ひ出た。

「元帥の意見を聞かずこういう事になつてしまつた」

と答里呵は後悔して言つた。黄花元帥は密盧への復讐を含み進言した。

「齊侯が恨んでいるのは令支です。今となつては密盧君臣の首を齊君に届けて講和をすべきです。そうすれば戦わずして齊軍を引揚げさせることができます」

「しかし、密盧は窮してわしを頼つてきたのに、彼ら売る事はとてもできません」

その時宰相兀律古が提案した。

「臣に敗戦をひつくり返す案がございます」

「どういふ案かね」

「わが国の北方に旱海というところがあります。別の名を迷谷といひ、砂漠で全く水も草もないところです。昔から国の人々は死者をここへ捨ててきましたので白骨があちこちに見られ、白昼でも死者の霊がさまようといひます。また、しばしば冷風が吹きすさび人も馬も立っていらなくなり、風砂が起ると一寸先もみえなくなります。もし誤つて迷谷

に入り込めば、道は曲がりくねって判別しにくく、すぐには脱出できませんし、毒蛇や猛獣の心配さえあります。誰か投降したふりをしてあそこへ誘い込む事ができれば、敵は戦わずして十中八、九は死ぬこと請け合いです。我われは軍隊を整えて敵がぼろぼろになるのを坐して待つていればいいのです。いかがです妙計ではないでしょうか」

「斉軍が簡単に畏にかかってそんな所へ行くだろうか」

「殿にはしばらく親族の方と陽山にお隠れください。城中の庶民も兵も谷あいに隠し城を空城にして、偽の投降人に斉侯に對し、主君は借兵のため砂漠のほうへ逃げていったと言わせます。彼らはきつと追いかけますからそうすればわが計にはまるというわけです」

黄花元帥は喜び、自分が行くといつて千人の騎兵を連れ計画に沿って出かけた。

元帥は途中、密盧の首を持つていかなければ斉侯は信用しないだろうし、成功さえすれば罰されることはなからうと、馬鞭山へ密盧に会いに行つた。密盧のほうではその時斉軍と對峙していて決着が着いていないので黄花が救援に来たと思つて喜んで迎えた。黄花は密盧の不意を突いて馬上で密盧の首を刎ねた。速買は怒つて刀を取り馬に跳び乗り黄花に挑戦した。両家の軍兵は主人を助けて戦ひ互いに傷ついた。速買は情勢不利とみて単騎虎児斑の陣營に投降した。しかし虎児斑はこれ信じず兵士に斬首を命じた。哀れにも令支の君臣は中原を侵略を企てたが一朝にしてともに滅んでしまった。

山在り水潤む黄台山 周圍百里広大なる令支国

燕への侵略今は昔 ああ哀れなり国は滅び身も亡ぶ

黄花元帥は密盧の兵を合わせ斉軍に投降し、密盧の首を献上してつづさに言上した。

「国主は国を傾けて砂漠に逃げていきました。国外に報復の兵を借りるためです。臣は投降を勧めましたが聞き入れません。密盧の首級を持参いたしましたの確かめの上どうか投降をお赦しねがいます。なおこの後、道案内をさせていただき国主追撃に少しでもお役に立てればと存じます」

桓公も密盧の首級を見てはそれ信じざるを得ない。すぐに黄花を前隊に置いて大軍を案内させて出発した。無棣城へ行つたがなるほど空城だったので益々彼の話を信じる事になった。答里呵との距離が離れるのを懸念して、燕庄公の兵に無棣城を守らせ残りはすぐに出発し夜を日に継いで追つた。黄花が先行して道を確かめたといふので桓公は高黒を同行させ大軍はあとからついて行つた。砂漠になった。桓公は軍を急がせたがしばらくすると黄花の姿が見えなくなつてしまった。日は暮れ一面真っ白な砂漠に濃い霧が下り全面暗くなり、鬼哭啾啾として風が激しくなつてきた。寒気が迫り身の毛のよだつような寒風が吹き荒れてきて、人馬は怖れ、気分が悪くなり行き倒れる者が続出した。桓公と管仲は馬を並べて行軍していたが、管仲は桓公に、

「臣はずつと以前に北方に旱海という非常に厳しいところがあるの聞いたことがございます。恐らくこれがそれでしよう。軍を止めなければなりません」

と言つて桓公の命令で急遽進軍を停止させ集合命令を出したが、前後の部隊は離れ離れになつた。持つて来た火気は風で燃え尽きたり吹き消

されたりで役に立たない。管仲は桓公を守り急いで馬を帰した。随行の兵士は土氣発揚と各隊員集合のため鐘太鼓をたたいた。

天地は相変わらず暗く東西南北方向が全くわからない。どのくらい進んだらうか、なんとかありがたいことに風は止み霧が晴れ空には明るい半月が出てきた。諸將は鐘太鼓の音を聞いて集まってきた。明け方に近づいて点呼をすると諸將は全員そろったが、臘朋だけが見当たらない。軍はばらばらになってひどい損害であったが、真冬のため毒蛇は冬眠中だった事と、軍隊の鉦鼓や人の声で猛獣が出てこなかったため死者や負傷者がほとんどなかった事は不幸中の幸いであつたといえる。

管仲は山谷は陰しく出口を聞く人通りもない。東も西も道はくねくね曲がりどこにも出口が見つからない。桓公は内心あせつてきた。管仲が一案を提案した。

「老馬は道を知るといいます。無終むしゅうと山戎さんじゅうの境界あたりの多くの馬は砂漠の北の方から来ていますので、虎兒斑こじはんに老馬教頭を選ばせてその馬を先頭において付いて行けば、道を探し当てることできると思っています」桓公はその意見に従い、老馬教頭を先頭に自由に歩かせてそれに随いて行つた。あつちへ曲がりこつちへ曲がりしながら結局出口にたどり着くことができた。髯翁ひげわうの詩。

蟻は水を知り馬は道を知る 人でなくとも危難を救う
浅慮の己に恃むなく 虚心に忠謀を聞くこれぞ桓公

ところで、黄花元帥は斉將高黒を連れて先行し、ひたすら陽山とうりや（答里呵とうりか）が一時身を隠しているところ）に向かった。高黒は後続の大軍が来ないので黄花に暫く待つて歩調を合わせて進むように言つたが、彼はただ急ぐば

かりであつた。高黒は怪しく思つて馬を止めようと思つたが黄花に捕えられ孤竹国主答里呵とうりかのところへ連行された。

黄花は密盧みつろを殺したことをごまかし、

「密盧は馬鞭山で破れ殺されてしまったので偽りの投降の土産に使わせていただき、斉侯の大軍はすでに旱海かんかいに放り込んでおきました。それから斉將高黒を捕えましたので処置を指示願います」

と言つた。答里呵とうりかは高黒に、

「そなた投降するのであれば重用するがどうだ」

と言つと、高黒は目をむいて大声で罵倒した。

「わが高家は代々斉の恩を受けてきている、どうして汝のごとき大羊に臣従できようか」

更に黄花に向かつて怒鳴つた。

「お前はわしを騙してこゝへ連れて来たが、わしは死ぬのは何ともない、早かれ遅かれ我軍が来てお前ら君臣も国も皆滅ぼされてしまうんだ。しかし教えてやつてももう遅いな」

黄花これを聞き怒つて自分で高黒の首を刎ねた。

高黒、真の忠臣なり！

答里呵は再び軍容を整えて、無棣城むたいを取返しにやつて来た。燕庄公は兵は少なく空城なので籠城は不可能と見て四面に火をつけ混乱に乗じて斬り抜けて団子山に撤兵し陣を敷いた。

さて、斉桓公の大軍が迷谷を出て間もなく一隊の軍に出くわした。調べさせると公孫臘朋しめいほうではないか。互いに喜び合つて直ぐ兵を併合して無棣城むたいに急いだ。途中民衆が老若を助けながら長い列になつて歩いていのを見て、管仲は部下に彼らの行き先を聞かせた。

「孤竹の殿様が燕兵を追い出してもうお城に戻っておられます。われらは指示により山あい隠れていたたので帰るところなのです」

「よし、この城を落すいい策ができた」

管仲はそう言つて、虎兇斑に信頼できる兵士を数名選ばせて、庶民に成りすまして彼らについて城中に紛れ込み、夜中に火をつけ内応する手はずをとつた。虎兇斑は指示に従つて出て行き、同時に管仲は豎刁に南門を連撃し西門を公子開方に東門をそれぞれ攻撃させた。北門だけは逃げ道として開けておき、王子成父と隰朋に二手に分けて北門外に待伏せさせ、答里呵が城を出たら捕えて殺せと指示し、管仲と桓公は城から十里外に下がって本営を置いた。

答里呵は燕兵が逃げる前に放火した城中の火を消火し、庶民を呼び戻してそれぞれの仕事につかせ、一方では黄花に軍兵を整えて戦いに備えるよう命じておいた。この日のたそがれ頃、突然砲声が四回聞こえた。間もなく齊兵が城門を包囲していると報告があつた。黄花は齊兵が来るなど思いも寄らなかつたので大変驚き兵を引き連れ城に登つて見張つた。真夜中になつて城中の四五ヶ所から火の手が上がつたので黄花は放火の犯人を捜索させた。虎兇斑は十数人を引き連れ南門へ行き城門を壊して開城し豎刁の軍を入れた。黄花は事態の急を知り答里呵を助けて馬に乗せ北に敵がいけないと聞き北門を開いて逃げて出た。二里も行かないうちに松明がゆれ大鼓が地を震わし、王子成父と隰朋の両軍が殺到してきつた。開方、豎刁、虎兇斑は無様城を手に入れ、更に兵を率いて追撃に移つた。黄花元帥は暫く必死に戦つたが力尽きて殺され、答里呵は王子成父に捕えられ、兀律古は乱戦の中で戦死した。桓公は夜明けになつて入城し、答里呵が密慮らの悪を助けた罪を責め、自ら彼を切つて獄門にし

て北門に懸け戎夷への見せしめとし、民衆の慰撫をはかつた。戎人が高黒が殺された時の不屈な態度を話すると、桓公は大変感激し、直ちに帰国後の論功行賞のために彼の忠節を記録しておくよう命じた。

燕庄公は齊侯が戦勝して入城した事を聞き、団子山から馬を飛ばして会いに来た。

祝いの挨拶が終わつたあと、桓公は庄公に言つた。

「あなたから急を聞いて駆けつけ千里の道を跋涉し、幸いにも勝利を収めることができました。今支、孤竹を滅ぼし土地は五百里広がりました。これは飛び地ですからわたしには管理ができませんのであなたにお譲りしたいと思います」

庄公は驚いて言つた。

「お蔭さまで先祖伝来の社稷を守ることができました事を感謝いたしております。これ以上何を望みましようや、どうぞ君侯の方でしかるべき人を封じてください」

「わたし方からは北に遠く離れていて管理の目が届きませんので、又夷戎が立つて謀反を起こす可能性があります。どうかお引受け下さい。東へ燕国への道はすでに通つています、召公様（周建元勳召公奭）の業績を踏まれ、長く北の守りで周に貢献していただければ、わたしとしてもうれしく思います」

燕伯もそれ以上は断れず、感謝して承諾した。

桓公は直ちに無様城で三軍を表彰し、無終国には今回の戦いに協力した功により小泉山山麓の土地を与えた。虎兇斑は感謝して先に帰つて行った。

桓公は五日間兵を休めてから行軍を再開した。令支への道が焼かれて、余燼くすぶる思いがけない惨状を見て、

「戎主は無道な男だ。草木にまで災いを及ぼしている、滅びて仕方ないよ」

と桓公は燕伯につくづく言った。

鮑叔牙が葵茲関から迎えに出てきた。

「食料が不足しなすんだのはみな大夫の功績だ」

桓公は感謝の言葉でねぎらい、燕伯には葵茲関に守備軍を置くよう指示して齊軍は帰国することになった。燕伯は桓公を送って別れを惜しみ、気が付くと国境を越え五十里も入ってしまった。

「昔から諸侯がお互いに送りあう時は国境を越えないことになっています。こんなに遠くまでお送り下さりありがとうございました。でも、わたしもあなたに失礼はできません」

桓公はそう言つて、送つて来た所までの五十里の土地を燕に割譲して感謝の意を表した。燕伯は固辞したが結局好意を受け帰つていった。燕公は後にこの五十里の土地に城を築き『燕留』と名付けた。その意味は齊侯の恩沢を燕国の人の心に留めようというものであった。燕はこの西北の五百里と東の五十里の土地の増加により始めて北方の大国になった。諸侯は桓公が千里の道を燕救援に出掛け寸土も取ろうとしなかった。齊の力を畏れないものはなく、みな齊侯の徳を称賛し感服した。史官の詩がある。

千里に出兵し北戎を平定 これ周王に対する職責なり

武を下策と言う勿れ 尊王攘夷は天下肅清の道

桓公が魯済に帰つて来ると、魯庄公は済水の河辺で歓迎の宴を設けて祝賀の挨拶をした。桓公はそれに報いて庄公に山戎、孤竹の二戎からの戦利品の半分を与えた。庄公は管仲の小谷という封地が魯との境界近辺にあるのを知つて、城を築いてやり管仲を喜ばせた。魯庄公の三十二年、周恵王の十五年（紀元前六六二年）のことである。この年の秋八月魯庄公が亡くなり魯は大乱となった。

魯国に何事が起きたのであろうか、それは次回のお楽しみ。

第二十二回

公子季友二代の魯君を擁立
齊皇子 毒蛇を言ひ当てる

公子慶父、字仲は魯庄公の庶兄（庶母即ち父の妾の生んだ兄）であり、その同母弟は名を牙、字を叔といい、即ち庄公の庶弟である。庄公の同母弟は公子友といい、生まれたとき手のひらに『友』という字の線模様があったのでそれを名にしたという。字を季といひ従つて季友といった。兄弟三人皆大夫になっているが、季友が嫡子（正妻の子）であり、一番賢者だったので庄公は彼をもつとも信頼していた。

庄公は即位三年の時郎台へ遊びに行き、台の上から美しい党氏の娘孟任を見初め、内侍に言つて呼び出させた。彼女は呼び出しに応じなかった。

「嫁に来てくれたら夫人にしよう」

と言つと、誓約してくれたらと言つので承知した。孟任は腕に傷を付けた。一年あまりで孟任は男の子を生み、名を般とつけた。庄公は孟任を夫人に立てようと母文姜に頼んだが文姜は許さなかった。彼女は実家との婚姻を強く望み、齊襄公の生まれたばかりの娘と結婚の約束を取り付け二十年待つて嫁にすることに決めていた。だから孟任は夫人にはなれなかったが、その二十年間は六宮を取り仕切ることにあった。姜氏（襄公の娘、諡は哀姜）が夫人として魯に嫁入りする頃、孟任は病に倒れまもなく亡くなったが葬儀は結局側室の礼で行われた。

姜氏には久しく子が生まれず、姜氏について側室として嫁いできた妹叔姜に一子が生まれ啓といった。庄公には先に須句子の娘で側室の風氏が生んだ子がいて名を申といった。風氏は申を季友に託して跡継ぎにしようとい画策した。季友は、

「子般が長男で、長幼の序があります」

と言つてその考えを抑えた。姜氏は夫人の位にはあるが庄公は父親を殺した仇の家の出なので、外向きは礼儀を守っているが内心はあまり愛してなかった。

公子慶父は体が大きくて意気軒昂で堂々とした男なので姜氏は彼を見初め、ひそかに内侍を通じて言葉を通じていたが遂に私通に発展し特別な間柄になってしまった。彼は弟叔牙と結託し、いつか君位を篡奪し叔牙を宰相にしようとい約束した。

淫風といえは鄭衛風は尋常の域なるも 齊風は論外なり

然るに笑止 魯再び斉と婚姻 文姜の後又哀姜

庄公三十一年の冬、雨が降らず雨乞い祭りをを行うことになった。

それに先立ち大夫梁氏の庭で舞樂が行われた。梁氏には美しい娘がいた。公子般は喜んでそつと交際し、彼もまた彼女を夫人にする誓約をした。この日梁女は階段席で舞樂を見ていたが、馬飼いの犖が塀の外から彼女の色香を見て歌を作つてからかった。

みずみずしき桃よ 冬を凌ぎ益々芳ばし

実ば熟せしうなれど 塀を超えるあたわす

共に翼を得て 鴛鴦となりたや

公子般も梁氏の傍で雨乞い祭りを見ていたが、歌声が聞こえてきたのでふとそちらを見ると馬飼いの犖ではないか。非常に怒って部下に命じて捕えて鞭三百を打たせた。血がほとばしり何度も赦しを請いやつと放免された。公子般がこれを庄公に話すると、

「犖の無礼はむしろ斬るべきで鞭ではまずい。彼が寧猛だということのみならず知っている事だ。鞭では却つてそなたに恨みを抱くだろう」もともと犖の馬鹿力は有名で、以前、稷門の城楼から飛び降りて地面につくとまた跳び上がり楼閣の角につかまって手で震わせると楼閣全体が振動したという話がある。庄公が殺した方がいいと言ったのはそういう力を恐れたからである。

「あんな匹夫の一人どうということはないでしょう」

と、たか括つていたがその馬飼いはやはり子般に恨みを持って慶父の配下になった。

翌年の秋、魯庄公は病に罹り重篤になった。庄公は慶父を疑い、わざと先に叔牙を病床に呼寄せ、国主を誰に継がせるか意見を聞いた。叔牙は案の定、慶父の才能を褒め称え、彼が国主を継げば魯は安泰だと言った。

庄公はそれには答えないで叔牙を下がらせ、次に季友を呼んで同じ事を聞いた。

「兄上は孟任様を夫人にすると盟約なさったけれど結局夫人にはなさいませんでした。その子にまた不義理ができませんか」

「叔牙が慶父を薦めるがそなたはどう思うか」

「慶父は残虐で優しさがなく、君主の器ではありません。叔牙と慶父とはつるんでいるので、そんな男の話はお聞きになつてはなりません。私は身命を賭して般を立てるつもりです」

庄公は頷いただけで遂に何も言えなかった。

季友は退出して急いで内侍に庄公の言葉として、叔牙に大夫鍼季の屋敷で待機し主命があり次第出頭するようを連絡させた。叔牙は言われたとおり鍼季の屋敷へ行つた。季友は鳩酒^三の入った瓶を鍼季に渡し叔牙を毒殺するよう命じた。同時に叔牙あてに、

「殿の命令で公子に死を賜る。これを飲んで潔く死ねばそなたの子孫は代々そなたの位を継承させよう、しからずんば、一族皆殺しとする」という一筆を届けさせた。叔牙がどうしても飲もうとしないので、鍼季は叔牙を取り押さえ耳から鳩酒を流し込むとみるまに目鼻口耳等から血を流し即死した。史官の詩がある。

周公は周室安泰の為管叔を誅す 季友魯国安寧の為に叔牙を殺す
国の為身内誅すは真の大義 何時の世もこの苦しみに耐えて来し

その夜庄公は亡くなった。季友は公子般を奉じて葬儀をとり行い、翌年改元することを告げた。

十月、公子般はいつも外家（母の里）の党氏に恩義を感じていたので外祖父党臣が病死したと聞き葬儀に参加した。

慶父は密かに馬飼いの犖に、

「そなたの鞭の恨みを忘れてないだろうな。蛟龍^二が水を離れるのを

三 鳩酒 樽は伝説上の毒鳥。その鳥の羽を酒に浸したものを鳩酒という。飲めばすぐ死ねといわれる猛毒酒。酖毒といふ。

二 蛟龍 また龍にならず、水中に隠れ、雲や雨に会つと天に昇り龍となつて古代の想像上の動物「蛟龍雲を得る」。亢龍こうりゅうは反対に天に昇り詰めた龍のこと。「亢龍勿悔」

妨げることができるのは匹夫だけだ^二。党氏の屋敷へ行つて仇を討て、わしがついてゐる」

と命じた。

「公子のお助けがあれば、やりますとも」

聶は匕首を懷に秘めて深夜党大夫の屋敷へ走つた。三更頃塀を越えて屋敷に入り建物の外に身を潜めていた。夜が明けると小内侍が門を開き水を汲みに出た。聶はその隙に寢室に入ると子般がちようどベッドを降りて靴を履こうとしていたところで、聶を見てびつくりした。

「そなた、どうして此処に」

「去年の鞭の恨みを晴らしに來たんだ」

子般は急いで枕もとの劍をとつて聶の頭に斬りつけたが、聶は左手で劍を遮り右手で般の脇腹を刺し、子般は即死した。内侍が驚いて党氏に知らせたのですぐ党家の武士がやつてきて、聶は滅多斬りにされ即死した。

季友は子般の変を聞き、慶父の仕業と知つてその災いが及ぶのを恐れ陳へ避難した。慶父は知らないふりをして聶に罪を着せ、世間に説明するため聶の一族を皆殺しにした。姜氏は慶父を君主に立てようと思つたが慶父は慎重であつた。

「未だ公子が二人いますから、これをやつてしまわなければだめです
ね」

「それじゃ申を立てるのかえ」

「いや、申は大きくなつてますから扱いにくいです。啓の方がいいで

しょう」

慶父は子般の喪を發し、訃報を届ける名目で自ら斉へ行つた。子般の変を報告し、豎刁を買収して公子啓を君主にした。年わずか八歳、これが閔公である。閔公は叔姜の子であり、叔姜は夫人姜氏の妹である。閔公は齊桓公の外甥になる。閔公は内には姜氏を畏れ、外には慶父を畏れ、その結果外家に心を寄せ、使者を出して齊桓公と落姑で會う約束をした。閔公は桓公の袖を引いて密かに慶父の内乱事件を泣きながら話した。

「現在魯国大夫で賢人といへば誰なのかね」

「季友が才德兼備ですが、今は陳国に避難しています」

「それじゃ季友を帰国させればいい」

「慶父に疑われるのが心配なんです」

「これは私が決めた事だ。誰にも口を挟ませないから心配するな」
齊桓公の命令ということで季友を待つて一緒に帰国し、彼を相国に任じた。齊侯は郎へ行きそこで季友を待つて一緒に帰国し、彼を相国に任じた。齊侯の命令ということで季友も従わざるを得なかつた。周惠王六年（紀元前六七年）、魯閔公元年のことである。

しばらくして、齊侯は、その後魯の君位に問題がないか心配になり大夫仲孫湫に様子を見に行かせ、あわせて慶父の動静も調べさせた。

閔公は仲孫湫に會うと涙を流して言葉にならなかつた。後ろに待つていた公子申と魯について話合つたところ筋が通つていたので、彼は國を治める器だと季友に言つて申に目を掛けてやるように話した。そして季友に早く慶父を処分するよう忠告したが、季友は掌を伸ばしてみせた。仲孫湫は、季友の表現した『弧掌難鳴』の気持ちを理解し、

〔弧掌難鳴 片掌だけでは音が出ない一人の力では限りある『韓非子 功名』
「わが殿に、急を要する事態が起きた場合は是非協力するように話しておきましょう」

と言っておいた。そのあと、慶父がたくさんの贈物をもって仲孫のご機嫌取にやつて来た。慶父の下心が見えるので、

「あなたが社稷（しゃしやく）（国や民）に忠実な方であれば、わが殿に贈り物をされるべきではありませんか、わたしだけがいただくわけにはまいりません」

と言って断わると慶父は怖れて引き下がった。仲孫は閔公に挨拶をして帰国し桓公（かんこう）に復命した。

「慶父を除かなければ魯は治まりそうにありませんね」

「軍を出してやつを除くというのはどうだ」

「慶父の悪事はまだ明らかではないので今のところ討伐の名目がございせん。臣の見たところ直ぐにまた変事が起こりそうに思われます。その変に乗じて彼を誅殺すればこれも霸王の仕事となるのではないでしようか」

「そうか、わかった」

閔公（びんこう）の二年、慶父は益々篡奪の気持ちが強くなっていたが、閔公が齊侯の甥でありしかも季友（きゆう）のような忠臣の輔弼（ほひつ）があるので軽々には動けない。

ある日卜齋（ぼくさ）が訪ねてきた。書斎に通すと彼は非常に怒り慶父に訴えた。

「わたしは太傅慎不害（たいふしんふがい）の領地の近くに田を持っていますが、彼にわが田を強奪されました。」主君に訴えたのですが師傅の肩をお持ちになり、却つてわたしに譲歩しろというのです。わたしはそれに甘んじる事では

きませんので、こうして公子を頼って参ったのです。何とか主君にお願いしていただけないでしょうか」

と言う。慶父は人払いをして卜齋（ぼくさ）に言った。

「殿は幼いので事がわからず言つても無駄です。もしあなたが大事を執行してもいいと言ふのなら、わたしはあなたのために慎不害を始末してもいいがどうですか」

「季友（きゆう）がそばにいますので難しいですよ」

「殿はまだ子供で遊びたい盛りだから、よく武閭門（ぶいもん）から抜け出て側近だけで密かに街で夜遊びしています。あなたが武閭門に人を伏せておいて出て来るのを待つて刺し殺し盗賊のしわざにすれば誰にもわかりません。わたしは国母の命で君主になることになっていますのでそうなれば季友（きゆう）を追放するのは掌（たなこころ）を返す如く簡単です」

卜齋（ぼくさ）は承諾した。勇士を募集して秋亜（しゅうあ）という男を採用し、彼に匕首（あいくち）を渡し武閭門に待ち伏せさせ、閔公（びんこう）が予想通り夜出てきたところを刺し殺させた。従者は驚いて秋亜（しゅうあ）を取り押さえたが、卜齋（ぼくさ）の家兵に奪い返されてしまった。慶父の方は慎不害（しんふがい）を家で殺した。季友（きゆう）は事変を聞き、急に夜公子申（ちゆうしん）を叩き起し慶父の乱を話して、二人で邾国（しゅうこく）へ避難した。

髯翁（ひんおう）の詩。

子般閔公共に弑逆の難に遭う 刃（やいば）を操る首謀は誰ぞ
魯国の乱れ悉く内宮より発す 妻を娶るに何故奇妾に限るや

さて、魯の人々は季友（きゆう）を敬愛していた。魯侯が殺され、相国（しこう）（季友）も出奔してしまつたので、國中狂つたように卜齋（ぼくさ）、慶父（けいほ）を恨んだ。この日國中でストライキが起こり、自主的に一千人以上が集まつて先ず卜齋（ぼくさ）

の屋敷を包圍し一族全貞を殺害し、慶父の方へ攻撃が移る頃になると参加者はどんどん増加していた。慶父は人心がすでに離反していると判断し国外に逃避しようとした。かつて斉侯が莒の力を借りて復国した事(乾時の役)を思い出し、斉は莒に恩があるので莒に斉へのとりなしを頼めるかもしれないし、文姜は莒の医者と交情関係があったし今の夫人姜氏は文姜の姪でもあるなど、いろいろ手ずるがあると考え商人に身をやつし車に家財をいっぱい詰め込んで莒へ出奔した。夫人姜氏は慶父が莒へ逃げたと聞いたので身の安全を考えて自分も莒国へ逃避しようと思つたが、側近たちが

「夫人は慶父さまとの関係で国人の怒りを買っているのです。一緒に同じ国へ行かれても受け入れてくれないと思います。季友殿が邾にいますので夫人はそちらへいらつしやつて季殿の情けを乞われた方がいいのではないでしようか」

というので邾国へ出奔し、季友に会おうとしたが季友は会わなかった。季友は慶父も姜氏も出奔したと聞き、公子申を魯に返し同時に斉に使者を出して今回の事件を報告した。

「いま、魯には君主がいらないのならこれを取つてしまつたらどうだろう」

と桓公は仲孫湫に相談した。

「魯は礼を重んじる国です。弑逆事件と言っても一時的な変で、国民はまだ周公の心を忘れてはいませんから取る事はできません。しかも公子申は国事に明るいいし、季友は人心を収攬し反乱を平定する能力があります。ですから守つてやつたほうがいいと思います」

桓公は納得し、兵三千人を付けて上卿の高侯を派遣し、内々に、も

し公子申に国主の能力が有れば助けて位に就けて友好を図り、能力がないと思えばこの機会に魯の土地を併合せよと命じた。

高侯は命を受けて魯に到着すると、ちょうど同じころ公子申と季友も邾から歸つて来た。公子申に会うと、容貌は端正で重厚さも感じられ、話にも筋が通つていて十分尊重に値する人物だったので季友と相談の上公子申を擁立した。これが魯僖公である。三千人の兵と魯の人々が協力して鹿門に城を築き邾(姜氏、莒(慶父)の攻撃に備えた。季友は公子奚斯を使者として高侯につけて斉へ派遣し斉侯へ感謝の意を述べ、別に莒にも使者を派遣し賄賂を贈つて慶父誅殺を依頼した。

慶父が莒へ出奔した時持ち出した魯の宝器を、莒医の紹介で莒子に献上し莒子は受け取つていたのに今また魯から丁重な贈り物が来るとそれにも目がくらみ、慶父に婉曲に言つた。

「わが国は小国なので公子をかくまつて戦争の発端になるのが心配です。どうか適当な国へお移りいただきたいのですが」

慶父がすぐに動こうとしなかったので莒子は追放を命じた。慶父はしかたなく以前斉の豎刁が魯の賄賂を受け取つて友好関係にあったので斉を頼つて行つたが、斉の国境警備官はかねてより慶父の悪業を知つていたので自分の判断では入国を許さず、汶水のほとりに仮住いさせていた。ちようどそこへ斉へお札の挨拶に行つた帰りの公子奚斯が通りかかり慶父に会つた。

「季友はきつとわしを許さないだろうが、先君の血脈に免じてなんとか一庶民でいいから命だけは助けてほしいととりなしてもらえないだろうか」

と慶父はわらをも掴む気持ちで奚斯に頼んだ。

奚斯は魯に帰って復命し、慶父の事も話した。僖公は赦そうかと思つたが季友は、

「弑逆の犯人は誅殺しなければ、後々示しがつきません」

ときつぱりと言い、

「慶父がもし自裁すれば、代々彼の祀りを絶やさないう必ず配慮する」

と、奚斯にそつと言ひ含めた。

奚斯は命令を受けて再び汶水へ行つた。慶父に命令を伝えようと思つたが言葉にならず、門の外で大声で泣き出した。慶父は奚斯の声とわから、

「子魚（奚斯）はわしに会えずに哀れに思つて泣いているんだ。結局わしは赦されなかつたのだな」

と嘆き、帯を解き木に掛けて自殺した。奚斯は慶父を入棺し僖公に報告すると、僖公は何度もため息をついた。

突然、莒国の国主が彼の弟羸驪を使者にして軍隊を率いて国境へやつて来ており、慶父が死んだという事を聞いて謝礼の追加要求をしているという。

「莒は慶父を捕えて送つてきたわけでもないのに、どこに礼の追加を要求する根拠が有るというんだ」

季友は怒つて、軍を發動して自分が迎え撃ちたいと魯侯に要請した。僖公は佩いていた宝刀を解いて、

「この刀は孟勞といい、長さは一尺にたりませんが非常に鋭利です。どうか叔父の宝になさつてください」

と言つて季友に授けた。季友はこれを佩き感謝して出て行つた。

酈まで行くと、莒の公子羸驪が陣を敷いて待つていた。

「わが魯は新君が即位したばかりで国情が安定していないから敗れたら人心が動揺する。莒が無謀なことを言うようなら策を使うしかない」

季友はそう考え、陣前に出て羸驪に直接話かけた。

「罪もない士卒が傷つけ合うことはない。公子は力持ちで組打が得意と聞いています。お互いに戦争道具を下げて公子と徒手で雌雄を決するのはどうですか」

「それはいいですな」

両者兵士を下げさせ、戦場は二人だけで打ち合つた。なかなか決着が着かず五十数回も渡り合つた。季友の子行父は年は未だ八歳だが、季友が大変可愛がつていて軍中にも連れてきていた。この時も父親の戦いを見ていて、どうも状況がよくないので、

「父上、孟勞は」

と数度叫んだ。季友はこれを聞いてすぐ気が付き、わざと隙を見せてさつと一歩踏み込んで来た所をちよつと身をかわし『孟勞』を抜き一振りすると羸驪の肩から額にかけて頭の半ばが切り裂かれた。刃に血痕は見えずまさに宝刀である。莒軍は主将が切り倒されたので交戦することもなくみな命からがら逃げ行つた。

季友は完勝して凱歌をあげて帰朝した。僖公は自ら郊外まで出迎え、功を称えて彼を上相にし、費邑を封地として与えろと言つたが季友はこれを固辞した。

「臣と慶父、叔牙は共に桓公の孫です。社稷のためとはいえ二人の身内を殺してしまいました。大義のためではありますがあってはならないことです。二人が亡くなった今、臣だけが栄尊、大邑を食つたのでは臣

は地下で桓公に会わせる顔がございません」

「二人は謀反人ですからそんなこと気にすることはないじゃないですか」

「謀反人と申しましても実際に謀叛を行ったわけではありませんし、亡くなったのも自裁したのであり武器で戦ったわけではありません。親族の誼により彼らの家の存続を図ってやりたいと存じますが如何でしょうか」

僖公は季友の意見に従い、公孫敖に慶父のあとを継がせ孟孫氏とした。慶父の字仲をとって本来仲孫といったが慶父の悪名を嫌って孟氏と改名したのである。孟孫氏の封地は成である。公孫茲に叔牙のあとを継がせ叔孫氏とし封地は郕である。季友の封地は費で汶陽の田を加封され季孫氏となった。季、孟、叔の三家が三本の足となり共同で魯の政治を執り、いわゆる『三桓』と呼ばれた。この日、魯の南門が理由もなく自然倒壊した。識者は、高くなればすなわち傾くの理、いつか下剋上で衰退する兆候ではないかと心配したものである。史官の詩に言う。

謀叛平定の論功終るに 謀反の孟叔両家の再封を許すは何故

乱世には天も公平を欠き逆臣を助く 三家は桓公の後裔なればなり

さて、齊桓公は姜氏が邾に在るというのを聞き、管仲に相談した。「魯の桓、閔両公がいずれも天寿を全うしていないが、これは皆わが齊の女が原因だ。これを処分しなければ、魯とは今後婚姻による友好関係が切れるかもしれない」

「女子が結婚したらもう夫方に責任があります。実家が嫁した女を処分する事はできません。どうしてもなさる場合は内密になさるべきです」

桓公はなるほどと言って豎刁を邾に派遣し姜氏を魯に送り返した。途中夷の宿舎で、豎刁が姜氏に、

「お方様が二君の弑逆事件に関与しておられた事は、斉も魯も知っています。魯にお帰りになって、何の面目あつて太廟のご先祖にお会いになれますか。自裁なされば蓋をすることができるかもしれません」

と言うと姜氏は戸を閉めて泣いていた。真夜中になって静かになったので豎刁が戸を開けてみると姜氏は縊死していた。豎刁は夷の責任者に言つて納棺させ僖公に急報した。僖公は亡がらを迎え葬儀を執り行い諡号を哀とし、哀姜と呼んだ。八年後、僖公は哀姜を太廟に庄公と合葬したがこれはやはり行き過ぎだったのではなからうか。

齊桓公が燕を救い魯の新政権を安定させたので、その威名は愈々高まり諸侯を心服させた。桓公は益々管仲に国事を任せ酒を飲み狩に興じた。ある日、大澤の岸辺で豎刁に御者をさせて狩りをしていた。馬は駆け車は走る。獲物比べに興じていたとき、桓公はふと目を止め何か怖れた様子でしばらく言葉がなかった。

「殿、何か驚かれるものをご覧になったのですか」

「いま鬼神を見たんだ。奇怪で恐ろしい姿だったがしばらくすると突然消えた、どうも不吉だな」

「鬼神は陰の物といいますが、昼間には見えないはずですが」

「先君（襄公）が姑禁で大猪を見られたのは昼間だったぞ。すぐに仲父を呼んでくれないか」

「仲父だって神様じゃありませんし、鬼神のことまでわかりましか」

「仲父は兪児の事だつて知つていたんだからわかるかもしれない」

「この間は、殿が兪児の様子を前もつて彼に話をされたから仲父は殿に話を合わせるように作り話をしたのかもしれませんが。今回の鬼のことはその様子を彼に教えないで仲父の言うことが殿がご覧になったものと同じであれば、仲父がうそを言っているのではない事がはつきります」

桓公は急いで車を返した。その夜鬼神に対する不安と恐れでマラリヤのような発作が起きた。

翌日、管仲と諸大夫が見舞いに駆けつけた。桓公は管仲に鬼を見たことを話した。

「わしは怖くて口に出せないんだ、仲父、どんな様子だったか想像してもらえないか」

「調べてみますからお時間をいただけましょうか」

管仲は答えられずそう言つと、傍らで豎^{かんをきつ}が、

「仲父が答えられないことはもともとわかつていたよ」

と笑いながら皮肉つた。桓公の病気は益々悪化していくので管仲は心配になり、屋敷の門に、

「君主がご覧になった鬼神について心当たりを申し出たものにはわが封地の三分の一を贈呈する」

という看板を掲げた。すると笠を肩に掛けぼろぼろの服を着た男が管仲に会いに来た。管仲は拱手の礼で彼を迎え入れた。

「殿様は具合がお悪いんですか」

「そうです」

「鬼神をご覧になって病気になられたのですか」

「そうなんです」

「殿様は大澤で鬼神をご覧になったのですね」

「鬼の様子をおっしゃって頂ければ、わたしの財産を分与しますよ」

「殿様にお会いできればお話しします」

管仲が桓公に会いに寝室に入ると、桓公は布団を重ねて坐り二人の女性に背をさすらせ、別な二人に足をたたかせて、豎^{じきやう}が茶を用意してそばに立っていた。

「殿の病気についてお話できる者が居ましたので連れて参りました。よろしゅうございましょうか」

桓公は入室を許したがぼろを着た姿に心中不機嫌であつた。直ちにその男に聞いた。

「仲父が鬼神のことを知っている人というのはそなたのことか」

「殿様は勝手に病気になられたので、鬼神のせいではございませぬ」

「しからば鬼神はいるのかいいの」

「いますとも。水に罔象^{もうしやう}あり、丘に夔^きあり、山に夔^きあり、野に彷徨^{ほうかう}

あり、沢に委蛇^{いだ}あり」

「そなた、委蛇の姿を言ってみてくれないか」

「委蛇は大きさは車輪のようで、長さは轅位^{えんぎ}で、紫の衣に朱の冠を被っています。人ではなく、車のとどろく音が嫌いであれを聞くと首をもたげるのです。これは簡単には見られず、天下の覇者しか見られないと申します」

罔象：水中に居る怪物 夔：犬のようで体に五色の紋があるという
夔：龍に似た一本足の怪物 木石の精とされる 彷徨：蛇に似て双頭、五色の模様があるという 委蛇：本文参照

桓公は笑つて思はず立ち上がった。

「これはまさにわしが見たものと同じだ」

急に気分が爽快になり病気はどこかへ飛んでいってしまった。

「そなた名は何といわれる」

「臣は皇子と申します、斉の西鄙の農夫です」

「わしに仕える気はないか」

桓公は大夫にするつもりでいたが彼は固辞して、

「君侯は尊皇攘夷を指針とされ、中国を安んじ、民を慈しまれ、農業の妨たげにならないよう配慮いただければ十分で、仕官の儀は遠慮申し上げます」

「そなたは誠の高士だな」

と言つて彼に十分な賞を下賜して帰し、管仲にも厚い賞を賜つた。これを見て豎刁は、

「皇子という男が言つたのであつて仲父は何も言えなかつたのにどうして仲父に賞を与えるのですか」

と不満そうに言つと、

『「一人で任に当たるを暗といい、多数で任に当たるを明という」もし仲父がいなければわしは皇子の話を聞けなかつたではないか」

桓公はそう彼を論し豎刁も納得した。

周恵王の十七年（紀元前六六〇年）、狄が邢を侵犯し、更に衛に軍を進めてきた。衛懿公は使者を斉に派遣し斉侯に急を告げた。大夫たちは救援すべきだと言つたが、桓公は、山戎討伐のときの傷がまだ癒えていないという理由で、翌春諸侯と連合して救援に行こうと言つて急がなかつた。

その冬、衛の大夫甯速が斉にやつて来た。

「衛は狄に破られ、懿公は殺されてしまいました。現在公子毀を君主に迎えようとしているところです」

桓公はこれを聞いて大変驚き、

「早く救援に行かなかつたわしが悪かつた」と斉侯は悔むことしきりであつた。

衛国は何故狄に破られたのであろうか、それは次回のお楽しみ。

第二十三回

衛懿公 鶴を好み国を滅ぼし

齊桓公 楚討伐の兵を興す

衛惠公の子懿公は周恵王の九年から位を継ぎ在位九年になる。逸楽に耽り性格は怠惰で、国政には無関心だが、鶴の飼育だけは非常に熱心であった。浮丘伯は『相鶴経』に鶴を次のように説明している。

鶴は陽鳥なりて陰に遊ぶ。すなわち金氣（月光）火精（陽光）に依りて自らを養う。金氣の命数は九、火精の命数は七、それ故鶴は七年で小変し、十六年で大變し、百六十年で変化は止まり、千六百年で形定まる。体は清きが故に色白し。声天に届くが故に丹頂なり。水を食するが故に嘴長く、陸に住むが故に足長し。雲を翔るが故に毛多く肉疎なり。長いので古きを吐き新しきを入れるが故に寿命は無窮なり。洲渚に集まり林木には寄らず、それ鳥類の王仙家の麒麟なり。鶴の体の特徴は、鼻高く口短く故に眠り浅く、足長く関節少なくて力強く、赤き目は遠くを見、鳳の翼、雀の羽毛は飛翔に適し、亀のような背、鼈のような腹は繁殖に適し、前が軽く後が重いため舞が上手で、太い腿細い足は歩くに適す。

鶴は純白で姿がすっきりしていてよく鳴きよく舞うので懿公は鶴を大変好んでいた。『上の好まざるどころ、下欲せず』というが、懿公が鶴を偏愛していて鶴を献納するものは大変な賞がいただけるといので獵

師は八方手を尽くして集めて献上する。宮廷の庭にはあちこちに鶴が飼われていて数百にとどまらない。これを詠った鶴の詩がある。

八方の風に乗りて鶴は舞い 九野に清しい楽を奏せり

突如雲間の志を碎かれ 王の御苑の鳥となる。

（九野 八方向と中央）

懿公は飼っている鶴にはみな位を授け俸禄を与えた。上は大夫並み、次は士階級並みである。懿公が外へ遊びに出かけるときは鶴を班に分け、身分の高い鶴は大軒という大夫並みの車の前に乗せ鶴將軍といった。鶴を養う者も俸禄を取り、民財を捧り上げて鶴の養育費に当て、たとえ飢饉があつても民を哀れむ気持ちは全くなかった。

大夫石祁子は石碯の子孫、石貽仲の子で忠実実直な人である。現在寧庄の子寧速と共に国政を預かり、共に賢臣の誉れが高い。二人は何度も懿公に諫言したが全く聞く耳を持たなかった。公子毀は恵公の庶兄である公子碩が宣姜に生ませた子で後の衛文公である。公子毀は懿公がこの様子だと将来衛は亡びると思ひ、齊桓公の妻が衛の同族の人だったので齊へ身を寄せた。衛の人々は以前から太子急子の冤罪に同情していたので急子及び寿を殺した恵公を嫌い復位した後も彼の治世が長くないようにと願ったものである。ただ公子急子にも寿にもまだ子供がいなかったし、公子碩は早死にし、黔牟もいない。いたのは毀だけであった。この人は賢人であるし人柄も非常に良かったので人心は彼に帰服していたのであるが、懿公の失政とそのため毀が齊へ出奔してしまったことでみな懿公を恨んでいた。

ところで北狄は周太王¹⁵の頃からすでに獯鬻¹⁶が強力になっていて、太王も危険を感じ岐に遷都したほどであった。周武王が統一し、周公がそれをうけ、南は荊、舒を、北は戎、狄を討伐し中国の長期平和をもたらしした。しかし、平王の東遷後、南蛮北狄が再び横暴になってきた。

北狄の首領は睥睨¹⁷といい、彼は射手数万を抱え常に中原掃討を考えていたので、山戎が斉に滅ぼされたと聞き、いきり立った。

「斉があそこまで遠征して来るとは、全く俺を馬鹿にしてやがる。手始めに先ず斉をやっつけてやる」

と言って胡騎¹⁸二万で邢に攻め込んでこれを打ち破った。斉が邢を救援しようとしていると聞き睥睨は軍を衛に移した。

懿公は鶴を連れて郊外に遊びに出ようとしていたところだったが、諜報から狄が攻めて来たという報告を聞き、驚いて直ちに兵を招集し臨戦体制を敷こうとしたが、民衆は戦おうとしないでみな城外へ逃げ出してしまった。司徒に逃亡者逮捕を命じると、瞬く間に百余人を捕えて来た。彼らに逃げた理由をたずねると、口々に言う。

「狄の攻撃を防ぐのならあれをお使いになればいいじゃないですか、どうして我われなんですか」

「あれとは何だ」

「鶴ですよ」

「鶴がどうやって狄を防ぐというのだ」

¹⁵ 太王 周文王の祖父古公亶父のこと。史記周本紀に、古公亶父が獯鬻くぐく、戎狄しゅてきに攻められ國のんを去り岐山きさんの麓に移たとある。

¹⁶ 獯鬻 殷周代に北西方いた種族すなわち秦漢代の匈奴

「戦えないのであれば鶴は無用の長物です。殿様はわれら民衆の食料を取上げて役に立たない鶴を養っておられるのです。そんな事ですから民衆はついていけないのです」

「わかった。わしが悪かった」

懿公は自らの非を認め鶴を放して民衆の意に沿おうとした。石祁子は早くしないと手遅れになる恐れがあるとせかし、懿公は直ちに鶴を放すよう命じたが、鶴はずつと養われてきたので、飼育場をぐるぐる回るばかりで飛んで行こうとはしない。

石祁子、寧速二人が民衆に衛公の悔い改める気持ちを訴えたので、その結果人々は少しずつ帰ってきたが、狄兵はすでに葵沢まで迫っているという急報が次々と入ってきた。

「狄軍は勇猛で非常に強く軽視できません。臣は斉に救援を頼ん来ようと思います」

「斉が以前王命によつて攻めて来た時、一応撤兵させはしたけれど、その後修好ができていないから助けには来るまい。ここは一戦交えて存亡をかけるしかない」

「それでは臣が出て狄を防ぎますので殿は城をお守りください」

「しかしわしが自ら出て行かなければ皆がその気にならないだろう」

懿公はそう言つて、石祁子に玉玦¹⁹を渡して、

「この玦をもつてわしに代わつて決断するように」

と国政の代理を命じ、寧速には矢を渡し、専守防衛に徹せよと命じた。

¹⁹ 玉玦 帯玉の二。Cの形の環の一部がかけている佩玉。決と音が通るので相手に決断を促すしるしとして玦を見せる習慣があったという。『史記』項羽本記に鴻門之会で項羽に范増が三度玉玦を挙げて沛公を殺す決断を迫った場面がある。

「国内の事は全て二卿に任せる。この戦いの勝ち目は薄い。再び会うことはなからう」

二人は涙を流して受命した。懿公は二卿に対する指示が終わると軍を大集合させ、大夫渠孔を大将、子伯を副将、黄夷を先鋒、孔嬰斉を後詰として進發した。途中次第に軍中に不満の声が大きくなり、懿公は夜彼らの近くまで行きそれを察した。軍中にはつぎのような歌が歌われていたのである。

鶴は禄を食み民は耕す 鶴は悠然高級車、民は戦いに敵は鋭く近寄れず だが九死に一生得たいもの

鶴はいずこで何してる われ戦々恐々戦場に向わんに

懿公は歌を聴き悶々としていた。大夫渠孔の軍法の運用が敵しすぎたため人心は益々離れていった。

熒沢に近づく千人ほどの敵がうろろうして攻め込む様子がない。

渠孔は、

「狄も噂ほどではないな」

と言いつ太鼓を打ち鳴らしすぐに攻撃を命じた。狄は負けたふりをして伏兵のいるところへ逃げ込むと突然谷図の口笛が鳴り、天地が崩れ落ちるように狄兵が跳びだし、衛軍はばらばらに分断されて互いの様子がわからなくなってしまった。衛兵はもともと戦闘意欲に欠けていたので敵の勢いに恐れをなして軍の形をなさず逃げ出し懿公は狄兵に重包围されてしまった。

「緊急事態です、指令旗を倒して、殿は兵隊の服装に着替えられ車を降りられれば今なら脱出できます。」

と渠孔が説得したが、懿公はため息をついて言った。

「諸君が助け合うためなら旗は目印だし、そうでなければ旗を倒しても意味がない、わしは死んで国民に詫びるつもりだ」

衛軍はたちまち先鋒後詰共に破れ黄夷は戦死し、孔嬰斉も自刎して果てた。狄軍の包围は益々厚くなってきた。子伯は矢に当たり車から墜死し、懿公、渠孔も相前後して狄兵に滅多切りにされ、ついに衛軍は全滅した。髯翁の詩に詠う。

鳥狂いに古の訓戒あり 鶴飼えば国を失うと

熒沢に鬼火多し 鶴に乗りて仙境に帰るらん

衛国の太史華龍滑と礼孔は狄兵に捕われ殺されそうになったが、二人とも胡人が鬼神を信仰しているのを知っていたので、

「わたしたちは衛の太史です。神霊や祖先を祭る仕事をしているから白神のところへ行ってあなた方の勝利に御加護が有るように神霊にお祈りしましょう、お祈りしないとあなた方の衛攻撃に神霊の御加護はいただけないでしょう」

と真面目な顔で言う、と、睨目はそれを信じて二人を開放した。

寧速が軍服を着て巡回しているところへ、車が一台だけで帰ってきた。太史二人だけなので非常に驚いて聞いた。

「殿は何処におられる」

「全軍壊滅です。狄軍は非常に強くて勢いがあります。座して滅亡を待つわけには参りません、何とかその切っ先を避ける必要があります」

寧速が城門を開けて彼らを入れようとすると、礼孔は

「ご主君と共に出て行って、お守りして帰る事ができませんでした。」

これでは忠臣とは申せません、あの世で殿にお仕えいたす所存です」

と言って止める間もなく劔を抜き自刎した。華龍滑は史書を散逸させるわけにはいかないと、言つて悲しみに堪えて城に入つた。

寧速と石祁子は相談して、夜陰に乗じて衛公の家族と公子申を小型車に乗せ城を出て東の宋に向つた。華龍滑も典籍を抱えてこれに従つた。

城中の庶民は彼等が出て行つたのを見て、自分らもそれぞれ助け合ひながら彼らについて逃げて行つた。人々の慟哭の声は悲痛をきわめた。狄兵は勝に乗つて長駆衛城に殺到し逃げ遅れた庶民を無残に殺戮し、更に兵を分けて追撃した。石祁子は衛公の家族を守り先行し、寧速が殿をつとめ追撃軍を食い止め、戦いながら退いた。同行した庶民の半分は狄の刃に掛かつてしまった。黄河まで来ると、ありがたいことに宋桓公が出してくれた救援軍が船を用意してくれていたので夜のうちに川を渉ることができた。狄兵はやつと引き上げ、衛の国庫および民間に蓄えられていた財貨食糧を一切合財奪つて、城郭を壊して帰つていった。

さて、衛の大夫弘演は戦前に懿公の命で陳国へ使いに行つていたが、帰つて来ると衛はすでに壊滅していた。衛公は繁沢で亡くなつたと聞きその遺体を捜しに行った。道々あちこちに骨や血肉が散らばりその惨状は悲痛この上ないものだった。捜し歩いていると懿公の大旗が沢のそばに倒れているのを見つけ、旗があるということは殿の遺体はきっとこの近くにあるはずだと思ひその周辺を探していると、ふとうめき声が聞こえた。よく見ると内侍が腕を折つて臥せていた。

「主君のご遺体はどこにあるかわかるか」

彼は傍の一塊の肉片を指差して、

「あれがそうです。わたしは殿が殺されるのをこの目で見ましたが腕の傷が痛くてそこへ行けず、国のどなたかが見えたらお教えしよう」と、ここで臥せて待つておりました」

と言う。死体を見ると、もう人の形をなしてなかったが肝臓だけは完全な形で残つていた。弘演は地に跪いて衛侯の肝臓に何度も拝礼し、大声で泣いて、生前の礼で肝臓に復命した。それから、

「殿を葬つて差上げる人がいけませんので、わたしが殿の棺になりましたよう」

と言つて従者には、

「わしが死んだら林の中に埋め、新君が決つたらこの事を報告せよ」と言つて佩刀を抜き自分の腹を切り、懿公の肝臓を手にとつて腹に収め、間もなく息絶えた。従者は言いつけ通り弘演を埋めて、小内侍を助けて車に乗せ黄河を渡つて連れて帰り、新君の消息を調べた。

一方、石祁子の方は、先ず公子申を保護して船に乗せ、寧速がそのあと遺民を集めて追いつき、河を渡つて漕邑に着いた。そこで人数を点検してみると七百二十人しかいなかった。狄人の酸鼻な殺戮を思い出すと、二人は死にたいほど悲しい思いであつた。

「国に一日たりとも主のいない日が有つてはいけない。それにしても遺民があまりにも少な過ぎる」

そこで共と膝から住民の三割の四千人余りを出させ遺民と合わせて五千人とし、漕邑に仮宮を建てさせ、公子申を君主に推戴した。これが戴公である。宋桓公御説、許桓公新臣がそれぞれ使者を出して懿公のお悔やみに来た。

戴公は以前から病気がちだったが即位後数日で亡くなつてしまった。

寧速が公子毀に君主継承要請のために斉へ迎えに行くと、斉桓公は、「もし公子が帰国しても宗廟を守ることができなければそれはわたしの責任です」

と言つて、衛国の不幸に大変同情し帰国に際し、良馬一頭と、祭服五揃のほか牛、羊、豚、鶏、犬を参百つ、更に夫人に魚軒と錦を三千端（端は二十尺）を贈った。そして公子無虧に命じ戦車三百乗で毀を護つて送り届けさせ、併せて門の材木を持参して城門を建てるよう命じた。

公子毀が漕邑（現河南滑県東園）に着くと弘演の家来が腕を折つた小内侍を連れて出頭し、弘演が懿公の肝臓を自らの体に収めたことを詳しく報告した。毀は先ず使者を遣わし棺を用意させ熒沢へ行つて納棺し、懿公と戴公の葬儀を営んだ。そして弘演に追封してその子を登用し、彼の忠義を顕彰した。

諸侯は斉桓公の徳義心と丁重な見舞の品々に感心したものである。周恵王十八（紀元前六六四年）年冬十二月のことである。

翌年の正月、衛侯毀は改元した。即ち衛文公である。戦車はたった三十乗で、君主も民間での仮住いという風に非常に惨めな状態であった。服装も食事も儉約し、民衆と同じ困難な生活をしつつ彼らを慰め慈しんだので人々は彼を賢君として称えた。公子無虧は帰国の際、狄の攻撃から守るため漕邑の防衛軍として三千の兵を残すことにした。無虧は桓公に復命して衛侯毀の草創の状況を報告し、合わせて弘演が懿公の肝臓を自分の腹に納めた話をする。

「無道の君主にこれほどの忠臣がいるのか、あの国はまだ滅びること

はないな」

と感心した。そばに居た管仲が、

「今守備兵を残して庶民に負担をかけるより、場所を選んで城造つてやるほうがいいと思います。一度の苦勞で後々安心できます」

と進言したので桓公も同意して、諸侯に協力を求めようと話し合っているところへ、突然邢国の使者が急を告げてきた。

「狄軍がまた攻めて来ました。とても支えきれそうにありません、どうか救援をお願い申し上げます」

桓公は管仲に訊ねた。

「邢を救うべきか」

「諸侯が斉に随つてきているのは、有事の際、援けてもらえると思うからです。衛を助けられなかった上にまた邢も助ける事ができなければ、覇業はおしまいです」

「じゃ邢と衛とどちらを先にすべきだろうか」

「先ず邢の心配を取り除いてやり、それから衛の城を作つてやるべきです。そうすればこの功績は永久に残るでしょう」

桓公は了解し、直ちに、宋、魯、曹、邾の各国に檄を飛ばし、薊北に集合し協力して邢を救おうと呼びかけた。宋軍と曹軍が先に到着した。

管仲が桓公に再び建策した。

「狄は今正に意気盛んな時ですが、邢もまだ力尽きる段階ではありません。敵の攻勢盛んな時に支えるのは倍の力が要ります。邢に余裕がある時に助けてもその効果は大きくありません。しばらく待った方がいいでしょう。邢は狄を支えきれず必ず潰れ狄は勝ちますが、狄も疲れています。疲れた狄を追い立て壊滅した邢を助ける、即ち労少なくして功多

しという策です」

桓公はこの策を採用し魯、邾軍の到着を待つという名目で邾北に兵を駐屯させ、邢、狄の攻守の情報を探る諜報員を出した。史臣は詩の中で、邢、衛の救援を急がなかった事を指摘して、覇者が功を得るために乱の被害を大きくするという管仲の謀略だと批判している。

救援待つ苦しみは正に逆吊り なぜに派兵を遅らせる

これまでは王事を覇事に優先し 功利は道義に譲りしに

さて、三国が邾北に兵を駐屯して概ね二ヶ月になる。狄は昼夜を休まず邢を攻めた。邢の人々は力尽き包囲を破って逃げ出して斉の陣営に救いを求めてやってきた。その内の一人が地に伏せて泣いた。邢侯の叔顔である。桓公は助け起し、

「救援が遅くなったためにこんなことになって、これはわたしが悪かったのです。すぐに宋公、曹伯と協議して狄を追い出しましょう」

と言って即日陣を払って全軍進發した。狄の首領睥睨は略奪すればいいので、戦いにはこだわらず三国の大軍が来ると聞き放火してさっさと北へ帰って行った。各国の兵が到着したときは燃える火が見えるだけで狄兵はすでに姿をくらましていた。桓公は先ず消火を命じ、それから叔顔に城が使えぬかどうかをたずねた。

「避難した民衆は大半が夷儀（現山東省聊城 晋も同名の地がある）地方におり、夷儀に遷都する事を望んでますので民意に沿いたいと思います」

と言うので、桓公は三国に命じて夷儀城を築城し叔顔に住まわせ、更に太廟も建立し、また倉庫、牛馬舎を作って、牛、馬、食料、織物類等を斉から運び込んで収納した。邢国の君臣は故国へ帰ったように非常に

喜んだ。

邢の事が全て終わって、宋、曹二君が斉侯に帰国の挨拶に行くと、

「衛国のことが未だ終わっていないのです。邢の城はできましたが衛には城がありません。何とかしてやりたいのですが」

と斉侯が二君に持ちかけた。

「君侯にお任せいたします、どうぞ指示ください」

そこで桓公はもつこ、スコップ等を携帯させて軍を衛に移した。衛文公殿は恐縮して遠くまで出迎えた。粗布の着物に粗絹の冠という喪服のままの文公を見て、桓公は気の毒でしばらくものも言えなかった。桓公はやおろ口を開いてたずねた。

「二君の力をお借りして貴国のために都をお造りしようと思っています。候補地についてご意見はございますか」

「それでしたら、すでに占って楚丘にいい場所を見つけているのです。が、何しろ国を滅ぼされて築城費がなかったのです」

「その件は任せてください」

即日三国の兵に楚丘へ行つて工事に掛かるよう命じた。更に用材を運び太廟を再建しこれを『封衛』といった。衛文公は斉侯に再建の恩を感じて『木瓜』という歌を作つて歌った。

われに投ずるに木瓜を以てす これに報いるに瓊琚を以てせん
われに投ずるに木桃を以てす これに報いるに瓊瑶を以てせん
われに投ずるに木李を以てす これに報いるに瓊玖を以てせん

瓊琚（けいぎょ） 瓊は赤玉せきぎよく 琚は佩玉おびだま 瑶は玉に次ぐもの。玖は黒の玉これは歌垣かがい、男女が集まり歌を歌ふた会の歌でこの時女はかねて思う男に好意を示し果物を投げるこれに対し男は好意を受ける印として身に

斉桓公かんこうの、僖公きこうを立てて魯国を救い、夷儀に城を建て邢国を復国させ、更に楚丘に城を建て衛国を復国させたこの三大功勞が、桓公が春秋五霸の筆頭に称えられるゆえんである。潜淵先生の詩、

東遷後 地に落ちたる綱紀 桓公諸侯を云して立て直す

魯衛邢三国救う大功勞 大義は堂々五霸の魁

さて、子文しぶんが令尹れいいんになってから楚国は公明正大になり国力が強化されてきたので、楚成王熊渾ゆうんは霸權を争う気持ちになってきた。斉侯が邢を救い衛を復活させた名声が荊襄けいじょう（楚一帯）にも伝わって来ると、成王は不快をあらわし、子文に言った。

「斉侯は売名行為で人心を捉んでおる。わしは漢東にいて、残念ながら人に慕われるほどに徳を積んでいないし人を怖れさせるほどの威厳もないが、今の斉あつて楚なきが如き状況はなんとも面白くない」

「斉侯の覇業は三十年近くになり、尊王を前面に出していますので諸侯はみな彼について行っています。残念ながら今はかなわないですね。中原を抑えたいとお考えでしたら、鄭が南北の中間にあつて中原の壁の役目を果たしていますから、先ず鄭を取るべきだと考えます」

「誰か鄭を討とうという者はいないか」

大夫鬬章とうしょうが名乗りを上げ、成王に戦車二百乗を与えられ鄭に向かった。

さて、鄭は純門に敵を受けて以来（子元しげんが息嬭そくぎの氣を引くために鄭に出兵

載のっている玉を投げ返す）これによつて両者の交情は成立するとされた（詩経國風平凡社東洋文庫の「白川静訳注より引用

して以来、日夜対楚防衛体制を取つていた。楚が攻めて来るのを探知し、鄭伯はすぐに大夫聃伯たんぱくに純門を防がせ、夜を徹して斉に急を告げた。斉侯は檄を飛ばして諸侯を檉ていに集め、鄭救援を謀った。鬬章は鄭に用意がありしかも斉がまもなく救援に来ると聞き、不利と考えて国境まで行つて撤兵した。楚成王は非常に怒り佩劍を解き鬬廉に渡し軍中で鬬章の首を切れと命じた。鬬廉は鬬章の兄である。鬬章の陣へ行き王命を隠してそつと鬬章に言った。

「国法による処分を免れたければ、功を立てて罪の埋め合わせをするしかない」

「兄上、お願いですお助け下さい」

鬬章は兄に跪いて教えを請うた。

「鄭は我々が撤退したからもう攻撃はないと思つて防備体制が緩んでいるはずだ。だからむしろ今が攻撃のチャンスだ」

兄弟は二手に分かれ鬬章が先鋒、鬬廉が後詰となった。

鬬章が枚をふくみ音をひそめて鄭の国境まで来た時、ちょうど鄭の聃伯が国境で軍の点検をしているのに出会つた。聃伯は敵来襲の報告は聞いたがどの国の兵かわからない。急いで迎撃体制を取り、突入してきた鬬章の楚軍と戦いが始まつたが、思いがけず鬬廉が近道して鄭軍の後に回つて攻め上げてきたので、腹背から挟撃されることになった。聃伯が混乱の中で鬬章に切り倒され生け捕られたため、鄭軍は鬬廉の追撃にありその大半を失ない大敗した。

鬬章は聃伯を檻車に乗せ引き続き追撃して鄭城を攻めようとしたが、兄の鬬廉は冷静且つ明晰な人で、鬬章を制止して、

「奇襲で勝つただけだ。死罪を免れるためにやった事だからもう十分

その成果は上がっている。あまり僥倖に頼つてるとさつきの勝利も水の泡になつてしまふかもしれないぞ」

と説得しその日のうちに撤兵した。

闕章は帰つて成王に会い叩頭して前回の敗戦の弁解をした。

「前回撤兵したのは敵を誘う策でありまして、決して敵を恐れたわけではございません」

「敵将を捕えた功によりしばらくそなたの罪は許すことにしよう。それにしても鄭は投降したわけではないのにどうして撤兵したのだ」

「小隊でしたので無理と考え、失敗して国威を侮られるのを心配したためでございます」

と闕廉が代わつて答えると成王はまた怒り出した。

「寡兵だから引揚げたというのは明らかに敵に怯んだという事だ。戦車二百乗を追加するからもう一度行け。鄭を倒すまでわしに会うことは許さん」

「弟と共に参る事お許しねがいます。もし鄭が投降しなければ鄭伯を縛り上げて献上致します」

闕廉がそう願ひ出ると成王はその壮語が気に入つて、闕廉を大将に闕章を副将にして四百乗の戦車を与え再び鄭に攻め込ませた。

楚は王を僭称し炎炎たる氣勢 多邦を蚕食するもまだ足りず
湊洧罪なく三たび攻めらる この苦しみ解けるのはただ覇君のみ

(湊洧 湊川と洧川の間即ち鄭国)

鄭伯は聃伯が捕えられたのを知り、再び斉に救援の使者を出した。管仲が桓公に進言した。

「殿はこの数年燕を救い、魯を立直し、邢、衛に城を与えて国を回復

させましたので、殿の恩徳は民衆に、大義は諸侯に遍く広がっています。諸侯軍を活用するのはまさに今でしょう。もし鄭を救おうとなさるのでしたらむしろ楚を討つべきです。そして楚を討つなら諸侯を大集合しなければなりません」

「諸侯を大集合すれば楚は当然準備するが勝てるかね」

「殿は蔡には恨みがあつて前々から討伐を考えておられましたね。楚と蔡は隣ですから蔡討伐を口実にして実はその向うの楚を討つのです。兵法のいわゆる『不意を突く』です」

以前、蔡穆公は自分の妹を桓公の第三夫人として嫁に出した。ある日桓公と蔡姫と一緒に小船に乗つて池で蓮を採つて遊んでいたら、蔡姫が戯れに桓公に水をかけ公が止めなさいと止めたが彼女は公が怖いのだと思ひ、わざと船を揺り動かして公の服を濡らした。桓公は激怒して、

「お前のようなやつはわしの傍には置けん」

と言つて、豎刁に命じ彼女を蔡に送り返してしまつた。蔡穆公も怒つて、

「嫁に遣つたものを返すとは何事だ」

といつて彼女をなんと楚に再婚させ楚成王夫人にしたのである。桓公は蔡侯を憎んでゐた。管仲が言つたのはこの事なのである。

「江、黄の二国が楚の横暴に耐えられずに誼を通じようと使者をよこして来ているので、わしは同盟を結んで楚を討つ時に内応させようと思ふがそなたはどう思ふかね」

「江、黄は楚に近くわが国からは離れていて、今までずっと楚についてやつと生きてきた国です。楚に背いて斉に従つた場合楚は怒つて必ず

討伐するでしょう。救つてやろうと思つても遠くてとても救つてやれません。救えなければ同盟の約束を守れず義にもとる事になります。そんな事より中原の諸侯を糾合する方が成功し易いと思います。そんなちつばけな国の力など借りる必要は全くありません。適当に断つたほうがいいですよ」

「遠方から義を慕つて来ているのに断つては人心を失つてしまうぞ」「お断りにならないければ後日江、黄が攻められた時、殿はきつと臣が今申し上げた事を思い出されることになるでしょう」

桓公は管仲の意見を聞かず江、黄両国と同盟を結び、密かに来年正月に楚討伐の軍を起す事を約束した。二君はさらに、

「楚と一緒に断つて舒に苦しめられています。世間では舒のことを『荆舒』と呼んでいます、どうしてもこれを討伐しないでは気が収まりません」

と言う。桓公は徐子(徐の君主)に密書をしたためた。徐は舒に近く、徐嬴が桓公の第二夫人という姻戚関係でもあるので、徐に命じて舒を攻め取らせ、徐子を舒城に入れて有事に備えさせた。江、黄二君はそれぞれ国境を守り出兵命令を待った。

魯僖公は季友を使者として齊侯に謝罪に来た。

「邾、莒両国とトラブルがありまして刑、衛の戦役に参加できず申し訳ありませんでした。聞くところによりまずと誼を通じてきた江、黄両国と同盟を結ばれ、引き続き征伐に出られる由、我われにも是非お手伝いさせていただきたいと存じます」

桓公は大変喜び、彼とも楚討伐についての密約をした。

その頃、楚軍が再び鄭へ攻め込んできた。鄭文公は講和して民衆に災

禍が及ぶのを防ぐとした。

「それはいけません。齊が楚と事を構えようとしているのは我々のためです。それを無視するようなことは良くありません。堅く守つて齊の救援を待つべきです」

大夫孔叔はそう言つて再び齊に使者を出し急を告げた。桓公は齊の救援がすぐに来ると噂を立てさせて楚の出足をひるませるよう指示し、期日になれば諸侯がそれぞれ軍を率いて蔡に集まり楚攻撃に協力することになっているといふくめた。一方宋、魯、陳、衛、許の君主に期日に出兵し蔡討伐を口実に楚を討つという約束を取り付けた。

翌年周恵王十三年(紀元前六六四年) 正月、元旦に齊桓公は朝賀が終わるとすぐに蔡討伐の件を打合せ、管仲を大将とし、隰朋、賓須無、鮑叔牙、公子開方、豎刁等を引連れ、戦車三百乗、兵士一万で出陣を命じた。進発の吉日は太史の報告により七日と決まった。豎刁は先に潜行して蔡を落とし各国の軍隊を集合させておきたいと願ひ出て許された。蔡は楚をあてにして全く防衛処置を取っておらず、齊軍が攻めて来はじめ兵を集めて守備に就くという体たらくである。豎刁は城下で威嚇し夜になるまで激しく城攻めを行った。蔡穆公はそれが、先年齊の宮殿で蔡姬を連れ戻すために隠れて待っていた時、彼のおかげで彼女を取り戻す事ができ、しかも送り届けてもらった、あの時の豎刁だとわかった。しかも彼が専ら私利を図る男だという事もわかっていたので、深夜密かに遣いの者に一車分の贈物を届けて買収し、攻撃を緩めるように頼んだ。豎刁は賄賂を受取った上で密かに、齊侯が七国の諸侯と連合して先ず蔡を攻め、その後楚を討つことになっているという軍事機密を縷々漏らし、まもなく各国の軍がやってきて蔡城を蹂躪するだろうから早く逃げたほ

うがいいと教えてやった。蔡侯は使者の報告を聞いて驚きその夜のうちに家族を連れて城門を開き楚へ出奔した。君主がいなくなった民衆はばらばらに逃げ散り、豎刁はそれを自分の功として急いで齊侯に報告した。

蔡侯は楚成王に会って豎刁の話を細かく報告した。成王はそこで始めて齊の計画を知り、直ちに閭兵し守備を固め、鄭に出兵していた闕章の軍に帰還を命じた。数日後齊軍が蔡に到着し豎刁が齊侯に謁見を終わった頃、七国の諸侯が次々と助勢に駆けつけ、未曾有の勢いとなった。

その七国の諸侯とは、宋御説、魯僖公申、陳宣公杵臼、衛文公毀、鄭文公捷、曹昭公班、許穆公新臣の七人で、霸主齊桓公小白を含めて八人の諸侯が揃ったわけである。許穆公は病気を冒し一番に蔡に到着したので、桓公はその労を称え序列を曹伯の上にしたがその夜穆公は亡くなった。齊侯は蔡に三日間留まり葬儀を行ない、許国には侯の礼をもって葬るよう命じた。

七国の軍は南へ向かって進軍し、楚の国境に立った。するとそこに一人の衣冠はさっぱりして風貌の瀟洒な人が、車を道の左に停めて、丁寧な腰を折って挨拶をして、「おいでになられた方は齊侯でございまいしょうか。楚国の使者屈完、久しくお待ち申し上げておりました」

と言う。屈完は楚の公族の大夫であり、楚王の命で使者として齊軍にやってくるのである。

「楚の者がどうしてわが軍が来るのがわかったのだ」

と桓公は変に思った。管仲は、

「きつと情報を漏らした者がいるんです。彼が使者で来ているということは何か言うことがあるのでしょうか。臣が大義をもって問責し、戦わずに投降させてみましょう」

と言って、車に乗って出て行き、車上で屈完に拱手の礼をした。屈完は開口一番

「わが主君は、貴国軍が弊国を攻めようとしていると聞きました、齊、楚両国はそれぞれ一方は北海に臨み一方は南海に面し、お互い影響の及ばない別な環境にいると言うのにどうしてわが国に干渉しようとなるのかを、お伺いして来るようにとの事でございませう」

と切り出した。管仲はそれに対し、

「昔、周成王は、わが先君太公望呂尚^⑤を齊に封じられ、王より召康^⑥（召公奭）を通じて、東は海、西は黄河、南は穆陵^⑦（湖北省、北は無棣^⑧）（山東省、までの間の『五侯九伯』）諸侯^⑨が王の命に従わない場合にこれを征討せよとの権限をいただき、周室を守るよう命じられております。周室が東遷して以来、諸侯は勝手な行動を取るようになって来ていますのでわが君は王命を奉じて盟主となつて先祖の遺業を復興しようするものであります。あなた方楚の国は南荊にあります、当然毎年周王に包茅^⑩を貢納する事になっているにもかかわらず王政に服さず貢納を拒絶してきましたので、仕方なく王命を奉じて討伐に参りました。さら

⑤ 太公望呂尚 先祖は四岳 夏代四方の諸侯の長官 東西南北四女として禹をたすけ呂に封じられたが、呂尚はその支族の末裔、庶民に落ぶふれた。文王が渭水の北岸で釣りをしていた呂尚に会ひ、語り合つて、「れこそ太公亡父季歷が待ち望んだ人だ」と大変喜んだ。それ故呂尚を号して太公望といふ。釣りを太公望と呼ぶのもここからきている（史記齊太公世家）

⑥ 五侯九伯 諸侯は公、侯、伯、子、男の五等に別れ、また天下は九州に分かれて、夫々に牧伯、地方官がいた。このため天下の諸侯を総括して五侯九伯といふ（野口定男訳平凡社「史記 齊太公世家」）

⑦ 包茅 茅を束ねたもので酒を漉すのに使う。祭祀に酒を注いで供えたもので、諸侯の玉の貢物の一つになっていた

に以前、周の昭王は南征されたままお帰りになりませんでした。これもあなた方の責任ではないでしょうか、お答え願います」

と切返すと、屈完は、

「周は天下を治める能力を失ってしまっていて、朝貢をしないことは天下の常識となっております。何も南荊に限ったことではありません。

しかし包茅^{ほうぼう}を収めていないのはこちらの落度であります王命に従いお納めすることにいたします。ただ昭王がお帰りにならなかった件は、ご乗船になった船が膠張りであったことによる沈没が原因でして、それは岸边の人にお聞きなつて頂く事であつてわが殿の咎ではございません。お申し出の件はわが主君に復命いたします」

と言つて車を返し帰つて行つた。

「楚人は強情で口達者で話では屈しません。進軍して迫りましょう」
管仲は桓公にそう言つて、八カ国の軍に一斉に出動を命じ陘山^{けいざん}（陘は現湖北宜都山県）に着いた。ここは漢水から遠くない。

「ここで駐屯する、進軍を厳禁する」

と管仲は命じた。諸侯はみな不審に思つて聞いた、

「軍はすでにかなり深く攻め入っています。どうして漢水を渡つて決戦体制を敷かないでこんなところで留まるのですか」

「楚が使者をよこして来ているという事は必ず防衛体制ができていくという事です。干戈を交えるともう和解はできません。ここに駐屯したのは遠くから敵の勢いを見張り、楚が我々の大軍を見て恐れたら、また使者をよこすでしょうから、その時は和解します。楚を征伐に来て楚を帰順させて帰るというのは如何ですか」

諸侯はまだ信じられず議論は紛々とするが結論を出せない。

一方、楚成王は鬬子文^{しぶん}を大将に漢南に駐屯し、諸侯軍が漢水を渉るのを待つて迎撃する体制を取つた。そこへ敵情を探りにいった諜報員が、連合軍は陘^{けい}に駐屯して動かないと報告してきた。

「管仲は用兵に通じているから万全を期さないと出兵するはずがありません。八カ国の軍が留まつて動かないのは何か計があるのでしょうか。もう一度使者を送つて連合軍の強さ加減を探つて敵の考えを見た上で和戦いずれにするかを決めても遅くはありませんまい」

と子文^{しぶん}が言つと、成王はもつともであるとして誰を使者にすべきかとたずねた。

「屈完が管仲と面識があるので今回も彼が適任でしょう」

「包茅^{ほうぼう}を貢納していないことは、臣は前回こちらの落度と認めています。殿が講和を求めのお気持ちでしたら力を尽くして参りますが、戦いをお望みでしたら別の適任者をお遣わし下さいますよう」

と屈完は成王に言つた。

「和戦いずれにするかは卿の考えに任せよう」

成王の言葉を受けて屈完は再び斉軍の陣営に向かった。

斉楚は結局どうなるのでしょうか、それは次回のお楽しみ。

第二十四回

齊桓公 召陵の会盟で楚大夫を款待
葵丘の会盟で大義により周天子を推戴す

屈完は齊軍にやつて来て齊侯に面会を求めた。管仲は、「楚の使者がまた来ました。きつと講和を求めてきたのです。礼をもつて迎えてやってください」

屈完は桓公に会つて鄭重に挨拶をした。桓公も挨拶を返し使者の来意をたずねた。

「わが主君は天子への貢納を怠つたために制裁を受けておりますが、それについてはわが君も罪を認めております。ご主君が貴軍を一舎^{一舎}下げただけましたらわが主君は命令に従います」

「大夫があなたのご主君に確実に約束を実行させるとおっしゃるのでしたら、それ以上何を要求することがあります、喜んで天子にご報告いたします」

と桓公が和解の意思を示したので、屈完は感謝して帰り楚王に復命した。

「齊侯は軍を下げる臣の要求を了承し、臣も入貢を承知しました。どうか約束はお守りくださいますよう」

まもなく諜報員が、八カ国の軍隊は一斉に陣を引揚げていると報じてきた。楚王が別に実態を探らせにやった報告も軍を三十里下げ召陵に陣を移したと言つた。

「齊軍が軍を下げたのはきつとわしを畏れたからに違いない」

楚王は譲歩し入貢する約束をした事を悔しがった。子文はこれを見て、「八カ国の君主は相手が匹夫でも約束を守っているのに、殿は匹夫を使つて国君を騙すようなことをなさるので、(匹夫は本来庶民或は身分の低い人の意。ここでは国主に対し大夫屈完を相対的に表現しているのか)」と諫めた。楚王は黙つて、金や絹などを八台の車に積んで八カ国の軍をねぎらうため屈完を召陵へ遣り、同時に青茅を一車分齊軍の前に用意して周へ貢納する意思を示した。

ところで、許穆公は召陵で丁寧な仮葬儀を終え本国へ帰り、世子業が位を継ぎ正式な葬儀を行なった。これが許僂公である。桓公に恩を感じ大夫百佗に兵をつけて召陵へ派遣した。

桓公は屈完がまた来たとの知らせがあつたので、全軍を七隊に分けて陣を敷かせ、齊軍はいつでも楚に突入できるように南に陣取り、齊軍が太鼓を鳴らせば七カ国一斉に太鼓を鳴らし、軍備を誇示して楚に中原の威勢を見せつけるよう諸侯に指示した。

屈完は齊侯に会つて軍をねぎらう贈り物を献上した。桓公はこれを八軍に分配し、青茅はチェックした後屈完に戻し、楚が自ら献納するよう指示した。そして更に屈完に訊ねた。

「大夫は我われ中原諸国の軍をご覧になったことがありますか」

「何分にも南方の田舎者で中原の盛んなる様子は存じ上げません。是非一度拝見させていただきたいものです」

桓公は屈完と戦車に同乗して各国の軍隊を見て回つたが、各国それぞれが一隊となり各隊が数十里切れることなく繋がつていた。齊軍からひとたび太鼓の音が響くと七カ国の太鼓がこれに呼応し、まさに雷鳴のように天地を震わせ驚かせた。

「わたしには、こういう軍隊が有るのでどんな戦いにも敗れる心配はないし、攻めれば必ず勝つ自信があります」

桓公は得意そうに喜色を浮かべて屈完に言うのと、屈完はこれに答えて静かに桓公に言った。

「君侯が中原諸侯の盟主になられた理由は、周王を補佐しその恩徳を広め、民衆を大切になされたからであります。いわゆる徳と礼に諸侯が服したのであります。しかし、もし武力で征服しようとなされれば、楚は小国とはいえ方城^{ほうじょう}を城とし漢水を堀としてお相手つかまりましょう。堀は深く城は固くたとえ百万の兵といえども武力には屈するものではないです」

屈完の話を聞き、桓公は自分のやり方を恥ずかしく思った。

「あなたは本当に楚国の立派な大夫です。貴国とは非修好を図りたいと思いますが如何でしょうか」

「君侯が弊国の社稷^{ししゃく}の幸せをお考えいただき同盟をお認めいただけるのでしたら、わが主人も反対の理由がありません。どうかよろしくお願いいたします」

「わかりました。結構でございます」

桓公はその夜、屈完を斉軍陣営に留めて酒宴を設けて款待した。

翌日召陵に壇を築き、桓公が盟主となり管仲が司会を担当した。屈完は楚君の命により、『今後代々にわたり友好同盟を結ぶ』という盟約書に諸侯と共に署名を行ない、桓公が先に血をすすり七カ国と屈完がそれに次いだ。管仲は屈完にそつと酈伯^{れいはく}を釈放して鄭に返すよう頼んだ。屈完

[㊦] 方城 河南省南西部に方城山がある。その北側まが楚の領地。あな 竹内照夫
訳平凡社 春秋左氏伝 傳公

もその代わりに蔡侯を許すよう頼み、両者それを了承した（これが召陵の会盟といわれる[㊦]）。

管仲は軍の引揚げを命じ帰国の途に着いた。途中、鮑叔牙が管仲に質問した。

「楚の罪といえは、王の僭称^{せんしやう}が最も重要だったのに、包茅^{ほうぼう}を貢納しなかったという些事を討伐の理由にしたのはどうしてですか」

「楚はすでに三代王を称しているの、蛮夷と同じと考えこれを避けたのです。もしそれを問題にしたら、楚はおとなしくわたしの言うことを聞くと思いますか。もし聞かなければ戦争は避けられず、お互い憎み合つて数年では平和を回復できないでしょう。そうなればこれから南北は騒然となります。包茅^{ほうぼう}を収めなかつた程度の事であれば楚も罪として受容れ易いという事です。楚に過ちを認めさせ、諸侯にいいところを見せ、戦争を回避し、周天子にもいい報告ができ、三方丸く収まつたではないですか」

鮑叔牙は感心して何度もため息をついた。胡曾先生の詩がある。

南海の霸王周に目なし 仲父よく謀を巡らし
寸兵用いず講和遂げ 斉侯の覇業を千秋に伝う

しかし、結局管仲は楚にダメージを与えなかつたため、斉が撤兵した後、楚が今まで通り中原を侵犯してきても、桓公、管仲は再び楚に対し討伐軍を出すことはできなかった。

南望し躊躇する事数十年 遠交近合の策謀尽し

[㊦] 召陵の会盟 結局これは決戦を回避し、休戦状態にしたにすぎない。

声高に下す罪状は壮なるも 僭称を改めさせてこそ万全なるも
昭王の孤魂の痛みは終に顧みられず 江黄の義拳禍を残す
歃血講和は結局何だったのか 中原の鮮血の戦い依然変わらず

〔遠交近合：戦国秦の遠交近攻とは異なる〕

江黄……長江と黄河の間即ち楚の領域

陳の大夫轅濤塗は軍の引揚げの命令を聞き、

「引揚軍がもし陳、鄭の道を通つたら、食料、衣料等の差入れ費用が莫大で国の財政に影響甚大です。東の海道を通つてもらつて、徐呂に供給役をやらせたら我われは助かりますよ」

と鄭の大夫申侯に相談を持ちかけた。

「そりやそうだ、あなた言ってみてくれませんか」

そこで轅濤塗は桓公に言った。

「北は戎を討伐し南は楚をお討ちになられましたので、諸侯の軍を東夷に見せつけてやれば東方の諸侯は皆君侯の威を恐れ周朝に従うことになるでしょう」

「大夫の言う通りだな」

まもなく申侯が桓公にちよつとお時間をいただきたいとやって来た。

「軍は長居をするな」と申します。民の負担になるからです。これから春から夏にかかり、氣候が不安定で兵は疲労する時期です。陳、鄭の道を行けば、食料や日用品の負担はそこから供出させる事になります。しかしもし東に回れば、東夷の妨害を受けて戦いになる恐れがあります。濤塗の策は自国の事しか考えてなくて上策とは申せませんが如何でしょうか」

「それはそうだ、大夫が言ってくれなければ、事を誤るところだった」

桓公はそう言つて濤塗を捕え、鄭伯には虎牢の土地を申侯に賞として与えるよう命じた。そうなると申侯は南北にわたる大城邑を持つことになる。斉侯の命令だから仕方なく従つたが鄭伯はこれより内心斉に不満を持つようになった。陳侯は賄賂を送つて再三濤塗の赦免を願い出てやつと赦してもらい、諸侯はそれぞれ本国へ帰つていった。

桓公は管仲の功を高く評価して大夫伯氏駢邑三百戸を取上げ彼に与えた。

さて、楚王は諸侯の兵が引揚げると茅の貢納を止めなくなった。

屈完は、

「斉との約束を破つてはなりません。しかも周と關係が切れているのは楚だけです。ですから斉との間を大切にしたいとおもいます。周への朝貢はわたしが斉と一緒に参ります」

「王が二人というのはどうなるのだ」

「爵の順序は置いておいて、取敢えず臣下を名乗っておけばいいでしょう」

楚王は屈完の意見に従い、早速彼を使者として、青々とした茅十車分を金や絹と一緒に天子に献納させた。

周恵王は大変喜んで、

「楚は長らく務めを怠つていたが、今このように恭順になってきたのは先王方の御霊のお陰であらう」

と言つて、文武両王の廟に報告し 昨（神に供えた肉）を楚に賜わり、
「南方を鎮め、中原には侵攻することがないように」
と屈完に言い含め、屈完も叩頭の礼をして下がった。

屈完が帰るとすぐ、斉桓公は楚の報告をさせるために隰朋を恵王の

元へ遣った。恵王は隰朋を丁寧^{ていねい}に迎えた。隰朋が世子に会いたいという
と、急に恵王の顔が曇り、次男の帯を世子鄭と一緒に呼び出した。隰朋
が恵王の顔色をそっとみると狼狽^{ろうたい}の様子が窺えた。

隰朋は周から帰って桓公に復命した。

「周には乱の兆^{しるし}が見られます」

「どうしたのだ」

「周王の長子は鄭といい、なくなった皇后姜氏の子で現在すでに正式
な東宮^{とうきゅう}（太子）です。姜氏が亡くなった後、妃子^{きし}皇后に次ぐ位の陳嬀^{ちんぎ}が
寵愛を得て皇后になり帯という子がいます。帯は迎合^{いごう}が得意で、周王は
これを可愛がり太叔^{たいしやく}と呼ばせてついには世子鄭を廃し帯を立てたいと
考えるようになったようです。臣は王の落ち着かない顔色を見て、きつ
とこれが気になっているのだと思いました。『小弁^{しょうべん}』の事件の再発が
心配されます。殿は盟主として対応をお考えになる必要があるのではな
いでしょうか」

桓公は管仲を呼び出しこれを相談した。

「周の乱を未然に防ぐ案が一つ考えられます」

「それは？」

「世子は現在支持者がなく孤独なのが心配です。周王に、各国諸侯が
太子にお会いしたいと言っているので、太子と諸侯を引合せて下さいと
お願いして頂きたいのです。一旦世子が諸侯の前に出ると君臣の關係は
そこで定まり、王といえども廃立は簡単にはできません」

桓公はその案に同意し、諸侯に来年の夏、首止^{しゅし}（現河南睢縣）に集ま

小弁^{しょうべん} 詩経小雅篇名 周幽王が褒姒^{ほうし}の子伯服を立てたくて申后を廃し太子宜臼
を申^{まこと}に追放した事を詩にしたものである

るよう連絡し、再び隰朋を周に派遣した。

「諸侯は世子にお会いして尊王の気持ちを申し述べたいと願って
います」

と隰朋が言うと、恵王は鄭を諸侯の前に出したくはなかったが、斉
の威に押され、しかも筋が通った話なので、承諾せざるを得なかった。

翌年春、桓公は陳敬仲を先に首止^{しゅし}に遣り、行宮を建設し世子鄭が見え
るのを待った。五月、齊、宋、魯、陳、衛、鄭、許、曹の八カ国の諸侯
が首止^{しゅし}に集まった。世子鄭も行宮に入った。桓公は諸侯を指導して臣下
の礼を取ったが子鄭は何度も遠慮して主客の礼で会う事にした。

「小白等は恐れ多くも封地にありまして、世子にお会いすること大王
にお会いするようで、叩頭の礼をとらざるを得ません」

「諸君、しばらくお待ち願いたい」

その夜、子鄭は桓公を行宮に招待し、太叔帯が世子の位を篡奪しよう
としている事を話した。

「小白は諸侯と盟約を結んで共に世子を推戴申し上げることに致し
ております、ご憂慮には及びません」

と桓公が言うと、子鄭は感謝にたえないようすで行宮にしばらく留ま
った。諸侯も帰ろうとせずそれぞれの宿舎で順番に従者の人々までも招
待してねぎらった。子鄭はあまり長くいて諸侯に面倒を掛けてはいけな
いと思い帰京しようとした時、桓公は引留めて、

「世子をお引き留め致したのは、大王に、我われが世子を喜んで
ご推戴申し上げており、別れ難い気持ちだという事を知っていたたくた
めで、よこしまな横車を抑えるためでもあります。今は暑い盛りですが
涼しくなれば都までお送りいたします」

と言つて諸侯との盟約の日を秋八月吉日とした。

ところで、恵王は世子鄭がなかなか帰つて来ず、斉侯が彼を推戴しているのを知つて内心不愉快であつた。その上、皇后と叔帯が朝夕傍でじくじく言うので、太宰周公孔を呼んで、

「斉侯は表面楚を征討したことになつてゐるが、実は楚にダメージは与えてはいないようだ。しかも今楚は朕に恭順を示してきてゐる、昔と違つて楚より斉が強いとは言えないのではないか。斉は諸侯を率いて世子を擁護して帰さないが、どういう考えかよくわからん。朕を何と心得てゐるんだ。太宰には面倒かけるが、鄭伯に斉を見限つて楚につき周のために一肌脱いで呉れるよう一筆書いてほしい」と頼んだが宰孔は諫言して言つた。

「楚が恭順を示してゐるのは斉の力によるものです。王はどうして長く親密にしてきた斉侯を捨てにわかに蛮夷と結ぼうとなさるのです」

「鄭伯も諸侯も斉から切り離し斉の野望を打ち砕くのだ、朕はもう決めた。太宰それ以上言うな」

宰孔もそれ以上は何も言えなかつた。

恵王は正式文書をしたため厳重に封緘して内密に宰孔に渡した。宰孔は中に何が書かれてゐるか知らず、使者を立て夜を徹して鄭伯に届けさせた。鄭伯が受け取つた手紙の内容は概ね以下のとおりであつた。

太子鄭は父の命を聞かず、徒党を組み私利私欲に耽つてゐる。彼に王位を継承させる事はできないので、朕は帯を太子にしたいと思つてゐる。もし鄭国が斉を離れ楚に就けば、太叔帯を補佐願ひ国事を任せます。

「わが先君武公、庄公は代々王の卿士で諸侯の領袖だつたが心ならず

も中絶して小国に甘んじてきた。厲公も王の復国に功労があつたのに重用されなかつたが、今王は国政をわたしだけに任せようとしておられる。諸君、喜ぶべきことではないか」

と鄭伯は喜んでいつた。大夫孔叔は鄭伯を諫めていつた。

「斉は我われのために楚に出兵してくれたのです。それにもかかわらず、斉に背き楚に従うというのは道義に反するのではないのでしょうか。しかも世子を助けこれを推戴するのは天下の大義であります。殿だけが異を唱えるというのは如何なものでしょう」

「覇者に従うより王に従つたほうがいいではないか。しかも、王にその氣がない世子をわしは助ける氣にならない」

「周の王位を継ぐのは嫡出長子ということになつております。幽王が愛した伯服、桓王の愛した子克、庄王の愛した子頹、これらは皆殿のご存じの通りです。人々はこれに服さず、結局は非業の死を遂げてしまいました。殿が大義に背き、五大夫の覆轍を踏めば必ず後悔することになります」

大夫の申侯が口を挟んだ。

「天子の命令ですから聞かない訳にはいかないでしょう。斉の同盟に従えば王命を破棄する事になります。我われが同盟から抜ければ諸侯たちもきつと心配になつて抜けて行き同盟は成立しなくなると思ひます。しかも世子は支持者が外部にあり太叔の支持者は内部で両者いづれが勝つか未だはつきりしません。ここはひとまず帰国し、しばらく様子を見たほうがいいのではないのでしょうか」

鄭伯は申侯の意見に従ひ国内に有事発生を理由に挨拶をせずに歸つた。

齊桓公は鄭伯が逃げたことを知って怒って世子を奉じて鄭を討伐しようとしたが、管仲はそれを諫めて止めた。

「鄭と周は地を接していますからきつと周の誰かが誘ったのでしよう。一人ぐらい居ても居なくても大計の大筋には問題ありません。同盟締結期日が来ているので盟約が成立してから考えましょう」

桓公は了解し、首止の旧壇において齊、宋、魯、陳、衛、許、曹の七カ国の諸侯で血をすすり盟約結んだ。(首止の会盟。共同声明は次のとおり。)

『我われは全員力を合わせ共に世子を補佐し、王室を支えることを誓う、この同盟に違背するものは、神の制裁があろう』

儀式が終わると、世子鄭は壇を降りて拱手の礼で感謝した。

「諸君は先王の御霊をもつて周室をお忘れならずわたしに、昵懇いただき、文王、武王以下皆喜び頼りにされています。もちろんわたくしも皆様のお気持ちをお忘れるものではないです」

諸侯は全員叩頭の礼を取った。翌日世子が帰るというので七カ国は皆兵をつけて送った。齊桓公は衛侯と一緒に自ら衛の国境まで送り、世子鄭は涙を流して彼らと別れた。

周王庶子を溺愛し世子危し 鄭伯王の甘言に大義誤る

首止の盟約で後継定まり 綱常の衰退免がれる

鄭文公は諸侯が会盟をすませ、鄭を討とうとしていると聞き、すぐに楚につく勇氣がなかった。

一方、楚成王は鄭が首止の会盟に加わらなかった事を知り、『われ鄭を得たり』と喜び、すぐに申侯に使者を出し鄭との修好を図った。

もともと申侯は楚に仕えていて、口が上手で貪婪かつ人に迎合する男で楚文王に可愛がられていた。文王が亡くなる時、自分の死後彼が迫害されるのを心配して白璧を与えて他国へ避難させた。申侯は鄭に走り櫟にいた厲公に仕え、厲公は彼を楚にいた時と同じように可愛がって、復国した時に大夫に任じた。そういう事で、楚の臣は申侯とは旧交があったので、彼に鄭伯に対し斉に離反して楚に付くよう勧めてくれと頼んだのである。申侯はそつと鄭伯に進言した。

「楚でなければ斉には勝てませんし、しかもこれは王命でもあります。楚に付かなければ斉、楚二国を敵に回すことになり、とても持ちません」

鄭文公はその言葉に惑わされ、そつと申侯を楚に送って誼を通じた。周恵王二十六年(紀元前六五一年)、齊桓公は同盟諸国を率いて鄭討伐に出て新鄭を嚴重に包囲した。この時申侯はまだ楚に居たのでこれ聞いて、

「鄭が楚に付きたいと言っているのは楚だけが斉に対抗できるからです。王が鄭をお救い下さらなければわたしは復命のしようがありません」

と楚王に頼んだ。楚王は大臣たちと話し合った。令尹子文は、

「召陵の役で許穆公が陣中で亡くなった時、斉は大変同情して配慮したため、許は斉に非常によく仕えています。もし許を攻めれば諸侯は必ず救援に行くでしょうから、鄭の包囲は当然解かれることになりましよう」

と進言した。楚王はこの意見に従って自ら許を攻撃し許城を包囲した。諸侯は許が包囲されたと聞くと案の鄭の包囲を解き許の救援にやって来た。楚はそれを見てすぐに許から撤兵した。申侯は鄭に帰って、これは

全て自分の功績だと得意満面になり加封を望んだが、鄭伯は虎牢の役で申侯には過分の事をしていると云つて表彰しなかった。申侯は口には出さないが鄭伯に恨みを抱いた。

翌年春、斉侯は再び鄭討伐の軍を出した。陳大夫轅涛塗は斉楚の役以來申侯に恨みを抱いていたので鄭孔叔に手紙を書いた。

申侯は以前、背信行為で斉侯に媚び虎牢の地を取り、今また、ご主君に対する背徳行為によつて楚王に媚びて自分で戦争の種をまき国民国家に災いをもたらしています。申侯を始末しなければ斉軍は戦争をやめないでしょう。

孔叔は手紙を鄭文公に差し出した。鄭伯は以前孔叔の進言を聞かず、盟約を結ばず逃げ帰つた結果、斉に二度も攻められる事になったことを後悔して、申侯の責任だとも思つていた。そこで申侯を呼びつけ、「そなたは楚だけが斉に対抗できるんだと主張するが、斉軍は何度も襲つてくるではないか。いったい楚は何をしているのだ」

と詰問した。申侯が弁解しようとしたが、鄭伯は武士に命じて彼を斬り、その首を箱に詰めて孔叔に命じて斉侯に献納させた。

「わが君は、以前、誤つて申侯の話を聞き君侯との友好関係をこわしてしまいました。謹んでここにその元凶を誅しましたので、何卒君侯のお赦しを賜りますようお願い申し上げます」

斉侯はもともと孔叔が賢臣であることを知つていたので鄭を赦し、すぐに諸侯を寧母（現山東魚台）に会した（この会盟を寧母の会盟という）。鄭文公は周天子に疑念を持たれる事を懸念して公然と出席する勇氣がなく、世子華を代理を立てて寧母に出席させた。

文公の嫡夫人には子華と子臧という二人の子があつた。文公は当初の

夫人を寵愛していたので華を世子とした。その後二人の夫人を立て、いずれにも子供ができた。嫡夫人は次第に寵愛が薄れまもなく病死した。また、南燕姑の娘が妾として鄭宮にいた。まだ鄭伯の愛を受けていなかったが、ある夜夢で、大男が蘭の花をもつて彼女に

「わしは伯儵という。そなたの先祖だ。国花をあげよう。そなたに子を受けるしるしだ、これで国は栄えるぞ」

と言つて彼女に蘭の花を与えた。目が覚めると部屋中は蘭の香りでいっぱいだった。夢の話すると同僚の女たちは、

「立派な子を生んでちようだい」
とからかつて笑つた。

その日文公が内宮へ来てすぐこの女性が気に入つた。同僚の女たちが顔を見合せて笑うので文公が理由をだずねると、彼女の夢の話をした。

「それはめでたい話ではないか。そなたの夢を正夢にしてやろう」
と言つて蘭のつばみを取つて『これがしるしだ』と言つて帯にはさんだ。

その夜お召しを受け、妊娠して子が生まれその子に名を蘭とつけた。彼女も次第に寵愛を受けるようになり文公は彼女を燕姑と呼んだ。

世子華は父親がたくさんの女を寵愛しているので、何時か世子の廃立問題が起きるのではないかと心配し、密かに叔詹に相談した。

「位を得られるかどうかは天命で、子は孝行を尽くすしかないのではないですか」

と叔詹は言つた。そこで孔叔に相談したが孔叔も叔詹と同意見だったので子華は不機嫌になった。

一方子臧は変わったことが好きで鵠の羽を集めて冠にしていたのを

師叔に咎められた。

「それは礼に反する服装ですからお止めになられたほうがいいです」それが気に入らず兄に言いつけた。それやこれやで子華は叔詹、孔叔、師叔とはしこりがあつたのである。

そんな時、鄭伯が子華を代行として会盟に参加させようとしたのである。子華は斉侯に怪しまれる事を心配してぐずぐずしている時、叔詹から早く行くようにせかされたので子華は益々恨みを強め、報復を考え、斉侯に会うと子華は人払いを願つて、

「鄭国の政治は泄氏、孔氏、子人氏、叔詹、孔叔、師叔の三氏に牛耳られています。首止の会盟から逃げ出したのもこの三氏の発想です。もし君侯のお力でこの三氏を除いていただければ、私が位を継いだ後は鄭国を貴国に帰順させ属国になりましょう」

といった。桓公はその氣になつて子華の計画を管仲に話すると、管仲は直ちに反対した。

「諸侯は礼と信によつて斉に服しているのです。子が父親の命令を聞かないのは礼に反し、甘言で自国の乱に共謀を求めるのは信とは言えません。しかもこの三氏はみな賢大夫で、鄭では『三良』と言われているのです。立派な盟主は民心に従います。民心に従わず自分の都合を通していると必ず災いが及びます。もし我々が彼らを殺したりすれば天意民心に背く事であり、斉は礼を失して天下の信頼を失つてしまう事になります。子華は近いうちにきつと罷免されるでしょうから彼の言う事はお聞きにならないほうがいいです」

桓公は子華を呼んで、

「世子の話は貴国の大事です。君主になられてからにされたら如何で

す」

と言うと、子華は顔を真つ赤にして背中に冷や汗をかいて帰つて行つた。管仲は子華の悪たくみを憎み、彼の言つたことを鄭の人に漏らしておいたのでこの情報はずでに鄭伯の耳に入つていた。

子華はそれを知らず鄭伯に嘘の復命をした。

「斉桓公は父上がご自分で出席されなかつた事が不満で、和解を拒絶しました。私はやはり楚に頼る方がいいと思います」

鄭文公はひどく怒つて、

「反逆児め。国を売ろうとしたうえ、まだいい加減なことをぬかすのか」

と言つて武士に命じ子華を幽閉したが、壁に穴を開けて逃げようとしたので鄭伯は結局誅殺した。これは管仲の筋書き通りである。公子臧は宋へ逃げようとしたが鄭伯は追跡させ途中で殺した。

鄭伯は斉侯が子華の話を信じなかつた事を感謝して再び孔叔を斉に派遣し礼を述べて同盟への加盟を申し入れた。

鄭の三良は楹の如く、撤去すれば家文え難し

子華 父命に背き国政専断を謀り 身は誅されて不孝の名を留む

これは周恵王二十二年（紀元前六五五年）のことであつた。

この冬、周恵王は病篤くなり、世子鄭は恵后が反乱を起しそうなので、先ず、下士の王子虎を斉に派遣し状況を知らせておいた。まもなく恵王は崩じた。子鄭は周公孔、召伯廖と相談し、しばらく崩御の事実を

楹 昔邸老の前に立てた一對の丸大柱、古習慣で威厳を示した

伏せて密使を出し昼夜兼行で王子虎に知らせた。虎が齊侯に話すると直ちに諸侯を洮（現山東魯鄭）に集めた。鄭文公も自ら同盟国として参加した。参加者は齊、宋、魯、衛、陳、鄭、曹、許の合計八カ国で各諸侯はそれぞれ上表を作りそれぞれの大夫を周へ派遣した。その大夫の名は、齊大夫隰明、宋大夫華秀老、魯大夫公孫敖、衛大夫寧速、陳大夫轅選、鄭大夫子人師、曹大夫公子戊、許大夫百佗で、堂々と車を連れ表敬訪問の名目で王城郊外に集まった（洮の会盟）。王子虎が先に報告していたので、世子鄭はねぎらいの使者として召伯廖を遣わしておいてから王の崩御を発表した。諸大夫は新王に謁見したいと強く要求した。そこで周、召二公は世子鄭を葬儀主宰者に奉じ、大夫たちはそのまま君命による葬儀ということにし、世子に即位を要請し、百官が朝賀し襄王となった。恵后と叔帶はこの事態の進行に苦りきったがもうそれ以上謀略を図ろうとはしなかった。襄王は翌年改元し、各国に通達した。

「無虧が年長だといって争いになったらどうする」
「周王の品位を殿がお定めになりましたように、今回会盟されます諸侯の中で最も賢者と思われる方に昭殿を頼んでおけば心配はございませう」
桓公は領いた。
葵丘につくと諸侯は集まっていた。太宰の周公孔も到着しそれぞれ宿舎に入った。この時宋桓公御説は亡くなっている、世子茲父は国を公子目夷に譲ろうとしたが目夷が受けなかったので茲父がそのまま即位していた、すなわち宋襄公である。

「周室は嫡子と庶子の身分をはっきりさせていなかったから危うく反乱が起きるところでした。殿にもまだ世子がいまないので早く立てて将来の禍根を絶つておくべきです」

襄公は盟主の招集命令を遵守し君主が亡くなったばかりだったが墨衰（小さい黒の布喪章）をつけて参加した。管仲は、

「わしには六人の子がいるがみな庶子だ。一番年長は無虧で賢いのは昭。長衛姫がわしに一番長く仕えてくれるからあれに無虧を立てる

「宋子は国を譲ろうという美德があり賢者だと言えます。しかも喪中にもかかわらず本会盟に参加し者に非常に恭順です。世子のことを託すことができるのではないのでしょうか」

洮会盟 襄王の即位は結局覇者齊侯力による。これによって周の王位決定権が諸侯に左右されるといふ事になったといえる。

桓公はその意見に従い、直ちに管仲を私的に宋襄公の宿舎へ遣つて齊侯の意向を伝えると、襄公は自ら齊侯に会いに来た。齊侯は握手して、

「将来齊の社稷をよろしく頼みます」

と諄々と公子昭の事を頼んだ。襄公は恐縮しつつ齊侯が自分に託するという気持ちに感じこれを了承した。

会盟の日、諸侯は正装して先ず天子の使者に登壇してもらいその後順次壇が上がった。壇上には不在だが天子の席を設け、諸侯はそれに対し朝見の儀に準じて北面して叩頭の礼を行ったあと、席次どおりに席についた。

太宰周公孔は胙^{ひつちう}を捧げ東に向かつて立ち新王の命を伝えた。

「天子は文王、武王を祀つた後、孔を遣わし齊侯にその胙を下賜するものである」

齊侯は階段を下がつてこれを拝受しようとする、太宰孔は遮り、

「天子から齊侯はお年を召しておられるので、労をねぎらい位を二等級進めるとともに天子に対し下拝（堂下に降りて拝する）の礼を免除する」といふ命令がございました」

と言う。桓公がそれに従おうと思つたが、

「天子が遠慮されても臣は不敬であつてはなりません」

という管仲の忠告に従い、

「恐れ多く、王命に甘んじて臣下としての務めをやめる事ができませんようか」

と言つて階段を下り、堂下より叩頭の礼をして、登壇し胙を受取つた。

諸侯は皆齊侯の礼儀に感心した。

桓公は天子の五項目の禁令、即ち、

一、泉の水流を塞ぐべからず。

二、米穀の流通を阻害するべからず。

三、世子を換えるべからず。

四、妾を妻にするべからず。

五、婦人を国事に参与させるべからず

を称えこれを書き物にして犧牲の上に置いて担当者に読上げさせ、

「ここに、我われ同盟諸国とともに友好平和に立ち戻るものである」と誓つた。歃血はしなかつたが、諸侯に信服しないものはいなかつた。

これが有名な葵丘の会盟である。

春秋は謀叛多しと言われるも、懷楚尊周は着実に奏功す

覇主桓公にあらざれば、誰か歃血なくして諸侯を信じよう

会盟が終わると桓公は突然宰孔（周の太宰周公孔）に聞いた。

「夏、殷、周三代の方が封禪の儀式をなさつたと聞きますが、それはどんなものか聞かれたことはありますか」

「古くは封は泰山で、禪は梁父で行い、泰山での封は土を盛つて壇を

葵丘の会盟 覇者齊桓公の絶頂期の会盟である。この会盟は具体的な取り決めはなく倫理的取り決めに終わっているところに特色がある。形式的にも周礼には殺牲

歃血を会盟の形式としているが、葵丘では殺牲はあるが歃血はなかつたとある。野蠻

な風習からの脱却の時期かもしれない。葵丘の会盟は『孟子』に詳しい。孟子には次の

五の盟約が挙げられている「不孝、禁止、太子の変更の禁止、妾の妻の変更の禁止

2賢を尊ぶ才を有て有徳を顕彰する3老幼、外来者旅行者の保護4宮の世襲兼任の禁止、大夫を恣意的に殺さない、5堤防を曲げず、輸入米を禁止しない」（平凡社陳

舜臣「中国の歴史」2巻

封禪の儀式 帝王がその政治上の成功を天地に報告する儀式。封は泰山の山頂、

天を祭り、禪はその麓の梁父山で地を祀る。封禪については『史記』封禪書参照

築き玉簡に金泥で功績を書いて天を祀ります。天は高いので高いところを選んでこれを崇めたのです。禪を行なう梁父は地を掃いて祀るので低い土地で、蒲で車を形取りわらで作った敷物を敷き詰めて地を祀ります。三代の王も天命を受けて挙行し天地の助けを得ることができました。隆盛を誇ったのもこのお陰です^{はげ}

「夏の都は安邑、商の都は亳、周の都は豊鎬^{ほうこう}（文王時の都豊邑と武王時以降の都鎬京の総称）で、いずれも泰山、梁父からは非常に遠いにもかかわらず封も禪もおこなわれています。その二つともわが領内にあるので、わしも天王の恩寵を頂くためにしばらくなかった大典をやつて見たいものですが、どうですか」

宰孔は桓公が自信満々の驕った様子をみて、

「できるでしょう。君侯にはだれも不可能とは申し上げられません」と答えると、桓公は翌日諸侯に諮つてみたいと言いだした。

宰孔はそつと管仲を訪ねて相談した。

「封禪のことは諸侯はおそらく誰も賛成しないでしょう。仲父殿、何とかあなたのお力でお止めするよう諫言願えませんかね」

「わが君は勝ち気で反論もできる人ですから、まともな方法では難しいですがやつてみましょう」

その夜桓公に会つてその件について話をした。

「殿、封禪の儀をなさろうというのは本当ですか」

「どうして」

「昔、封禪の祭りをした王は無懷氏^{むわいし}から周成王に至るまでに七十二家^ごございますが皆天命を受けて封を行つております」

「わしは南は楚を討伐して召陵に至り、北は山戎を征伐し^{れいし}令支を斬り、

孤竹^{こちく}を倒した。西は流砂を渡り太行へ行き、諸侯はここごとくわしに随つている。兵車の会（軍を伴う会盟）を三度、衣裳の会（軍を伴わない会盟）を六回、合計九回諸侯を会合して天下を匡^{ただ}してきた。天命を受けたという三代の王がこれとどう違うところのかね。泰山、梁父に封禪し子孫にこれを残そうと思ふがいけないか」

「昔天命を受けた方々には先ず瑞祥が現れ、それから各種の準備を行つて大典を厳かなものにいたしました。めでたい鄙上^{こうじやう}に産する黍と北里の稲を供え、王が天命を受けると江水、淮水の間に靈茅^{れいぼう}という一本に三筋のある茅が生えてこれを敷物にします。東の海からは比目^{ひもく}の魚、西の海からは比翼^{ひよく}の鳥と、めでたい物が取り寄せるまでもなく十五も集まりました。史書によるとこのため子孫は栄えたといひます。しかし今は、鳳凰も麒麟も来ず、フクロウが何度もやつて来て、めでたい穀類も生えず蓬^{よもぎ}が茂つています。こんな事で封禪をしようとしても列国の識者に笑われるだけです」

と管仲が説得すると桓公は黙つてしまつて、翌日はどうとう封禪のこととは口にしなかつた。

桓公は帰国してから、自分の功は誰にも勝ると自負し宮室の建物や生活をもますます豪華にし、乗り物、服装等の規定を天子と同じようにしたので、人々はその僭越な態度に眉をひそめた。管仲は府中に三層の楼を築き、民集まり、諸侯集まり、四夷帰服するという意味で『三帛の台』と名づけ、樹木が門を塞ぎ内外をおおつていた。さらに反玷^{はんてん}をおいて列

③ 東海から比目の魚、西海から比翼の鳥を取り寄せた：「史記 封禪書集 比目魚比翼鳥ともに雌雄並んで各々一つしかひ目あるひは翼、常^{とこ}一休となつて泳ぎあふは飛ぶ。睦まじき夫婦の喩え。白樂天長恨歌 天に在りては比翼の鳥となりや。」

国の使者を遇した。鮑叔牙はこれを見て変に思つて、

「君主がたとえ贅沢であり僭越であろうと、あなたがそんなことをしているのではありませんか」

と言つと、管仲は、

「主君は今まで苦勞を惜しまず頑張つてこれ成功されたのですから快樂を求められても良いのではないのでしょうか。もしこれを礼で縛れば懈怠してしまうでしょう。わたしがそうしているのは殿への誹謗を少しでも和らげるためです」

と言つので叔牙は口ではそうかと言いつつも内心は反対であつた。

話は変わるが、周太宰孔は葵丘から帰る途中、会盟に参加しようと駆けつけた晋献公に出遭つた。

「会はもう終わりましたよ」

と宰孔が言つと、献公は遅れたことを非常に残念がつた。

「わが国は遠いので…。それにしても衣裳の会の盛んな様子が見られなかつたのは残念だつたな」

「残念がられることはありませんよ、もう、斉侯は功にあぐらをかいて傲慢になっています。月満ちれば欠ける、水満ちれば溢れるのことでわり通り、斉が欠け溢れるのは時間の問題です。ご心配には及びません」
これを聞いて晋献公はそこから車をまた西に返して帰つて行つた。帰

反玷 土で作つた杯を置く台 諸侯が会見するとき宴会の場所に設け、献酬が済んだ杯を伏せて置いた 学研漢字源。ここでは管仲が自分の建物や門構え、本来諸侯が諸侯を遇する礼である反玷等を桓公を真似ていることを臣下の立場として僭越としている。

り着くとまもなく亡くなり、晋国は大乱になった。

この晋国の内乱の結末は如何になりますか、それは次回のお楽しみ。

第二十五回

荷息の智謀 道を借りて虢国を滅ぼし
ひやうけい
百里奚 牛飼まで落魄し遂には秦相となる

晋献公は内に驪姫りきという女に迷い、外には『二五』に惑わされて、奚斉けいせいを愛し太子と次第に疎遠しよえんになっていった。ただ太子申生しんせいは注意深く恭順きんそんであり、しかも何度も戦功があるので乗する隙がない。驪姫は役者の施に胸のうちを話けした。

「太子を廢けして奚斉を立てたいのだがいい案はないものかねえ」

「三公子は皆遠方の辺境にいますので誰も奥方様の邪魔をするものはいませんよ」

「三公子はそれぞれ非常に強いし、年もいい年だから、朝廷には部下がたくさんいてわたしにはどうすることもできないわ」

「それなら一人ずつ片付けたらどうです」

「誰からやるの」

「当然申生しんせいでしょう。彼は優しくて潔癖な性格です。潔癖な人は自分が汚れることを恥じ、優しい人は人を傷つけるのを嫌います。汚れを恥じる人は憤りを我慢できませんし、人を傷つけるのを嫌う人は人の異に入り易いのです。しかし殿は世子と疎遠とはいえ世子の人柄をよくご存知なので、いい加減な悪口を言っても信じてはもらえません。ですから奥方が夜、泣きながら、世子を一方で褒めながらその欠点を誹謗するのです。そうすればだんだんに信じるようになるでしょう」

驪姫は彼が言うように、夜、献公とのベッドの中で泣いた。献公は驚いてわけを聞いた。再三聞かれてもわざと答えないで、執拗に聞かれた

ら仕方ないという風に、

「わたしは申し上げてもきつとお信じにはならないでしょうが、わたしが泣いていたのは、もうすぐ殿様のおそばで楽しく過ごさせていただく事ができなくなってしまうのではないかと思つたからです」

「どうしてそんな不吉なことを言うのだ」

驪姫は涙を拭きながら、

「話では太子の申生殿は外見は大変お慈悲が深く見えるけれど、実は冷酷な方ですよ。現在曲沃きよくわくにおいて民衆に恩を施しておられ、民衆は彼のためには死んでもいいというほど心酔しているようですが、これはきつと将来私軍にしようという謀略だと思つたのです。申生殿はしばしば他の人に、殿さまは驪姫に惑わされそのうち国を乱す事になるだろうと言っているそうですよ。朝廷の方々は皆これを聞いていてご存じなのは殿様だけですわ。国の平和を守り殿様に災いが及ばないように、わたしを殺し申生殿にお謝りになつて恐ろしい計画を中止させてください。一人の女のために国が乱れるようなことにならないように」

「太子が民衆に慈悲を施しているからといって、わしに不忠不孝であるという事にはならんだろう」

「わたしもそう思います。けれどもわたしたち匹夫の仁は、上の方とは違つて身近なものを愛することですが、上の方の仁は国のためだと聞かれています。国のためには親子もないんじゃないですか」

「彼は潔癖で名を惜しむ男だ」

「昔幽王は宜臼殿ぎやくを殺さずに申に放免しましたが、申侯は犬戎けんじゆうを誘つて幽王を驪山の麓で殺し、宜臼殿を王に擁立しました。これが東周の始祖平王で、今になると、幽王の悪政が益々明らかになり、誰も平王が

汚い（弑逆の犯人）という人はいません」

献公はドキッとして着物を取って起きあがり、

「そなたの言うことは尤もだ、どうしたらいいかな」

「年だからと言つて位をお譲りになるのがいいと思います。そうすれば彼は満足し殿様をおゆるしになるでしょう。昔、曲沃と翼を併合したのは「親族の武公様でした。武公様は近親の情を無視されたからこそ今の晋があるのです。申生殿は同じ気持ちでしょうからお譲りになられた方がいいのではないですか」

「だめだ、わしは諸侯に対し武力も威厳もある。いま君主を降じたらどちらも失つて死んだようになってしまふよ。そなたは心配することはない、これはわしが考える」

「現在赤狄の皋落氏（こうらくし）がしばしば国境付近を犯してきてますので、申生殿を赤狄討伐に行かせて用兵能力をこゝろになつて、もし敗れたらその罪で処罰すればいいじゃないですか。勝てば皆の信頼を得てその功を奢つてきつと何か奸計をたくらむでしょうから、そこで誅殺すれば、人々は納得するはずです。勝てば辺境を安定させる事になるし、また世子の能力をすることに、一挙兩得ですよ」

「それはそうだ」

献公は申生に曲沃の兵を率いて皋落を討伐するよう命じた。小傅里（しょうふうり）は献公に思い止まるよう懸命に諫言した。

「太子は殿に次ぐ方ですから、むしろ摂政をお願いし近くで太子の仕事をこゝろになるべきで、遠く辺境におられること自体問題ですし、まして出征願うのは論外と存じます」

「申生はもう何度も出征しているじゃないか」

「以前は殿に随つて行かれたのですが今回はお一人です」

「わしは子が九人いるが、まだ太子は決めたわけではない、卿はもう余計なことは言わないでくれ」

里克は黙つて退出し狐突に話した。

「それじゃ公子は危ないな」

と言つて狐突は申生に手紙を送つて、戦いに勝つてもねたみを買うだけだから出征はしないで、むしろ他国へ逃げるよう説得した。

申生は手紙を読んで嘆息して言つた。

「ご主君がわしに戦争に行かせるのは、わしをお気に召さないからで、わしの心を測つておられるのだ。君主の命に随わなければ大罪である。命令に随つて辺境で死ねたら美名が残つてむしろその方がいいじゃないか」

申生は稷桑（しやくそう）（北狄の地）で皋落と大戦になり遂にこれを敗走させ、献公に戦勝報告をした。これを聞いて驪姫（りき）はがっかりした。

「世子はやはり用兵の能力があつたのね、どうしようもないわ」

「明らかな落ち度がないかぎりにはしばらく様子を見るしかないな」

狐突は晋国の反乱を感じて持病を理由に門を閉じて出なくなつた。

この頃、虞（ぐ）と虢（くわく）という同姓の両国が隣り合つていて、互いに助け合ひ以前から親密な関係にありどちらも晋国と地続きだった。虢公は名を丑（うし）といい驕慢で好戦的な男で晋の南境をしばしば侵犯してくるので、献公はこれを討伐しようと考えた。驪姫はチャンス到来とばかりに、

「もう一度申生殿にやらせたら如何です。威名は轟いていますし軍兵もあります。きつと成功すると思いますわ」

献公は驪姫の意見を入れることにしたが、申生が號に勝つた場合益々彼を抑えきれなくなるのを心配して決めきれず、大夫荀息に相談した。

「號に勝てようか？」

「虞、號はいまは仲が良くて、號を攻めれば虞が援け、虞に兵を向ければ號が救援するという事で、どちらを攻めるにしても敵は二国になり必ずしも必勝というわけには参りません」

「ということはやりようが無いということか」

「號公は女色に弱いと聞いています。国中から美女を探し出し歌舞を教えて、これに華麗な服装と豪華な車で號に贈り届け、下手に出て和平を求めれば號公はきつと喜んで受け入れます。彼女たちに溺れて、政治を投げ出し忠臣を疎外するようになれば、その時大戎に賄賂をやつて號の国境を侵略させ、その隙を見て攻込めば號を滅ぼす事ができます」

献公はその策を採用して、女樂士を號公に送り届けた。號公は受取ろうとしたが大夫舟之僮が引き止めて、

「これは晋が號を釣ろうとする餌です、そんな餌をどうして吞み込むうとなさるのです」

と諫言したが號公は聞かず、和平に同意してしまった。それから昼は女の甘え声に聞きほれ、夜は美人との色事に耽り、政治から目が離れてしまった。舟之僮が再び諫言すると、號公は怒つて彼を下陽の関守に左遷してしまった。まもなく大戎が晋の賄賂を受取つて予定通り號との国境を侵略し渭涇（涇水渭水交点）まで攻込んだが結局號軍に撃退されてしまった。大戎主は再び国運を賭けて軍を発動した。號公は前回の勝利をたのみ、桑田で対峙した。

献公は再び荀息に尋ねた。

「いま、大戎と號が対峙しているが、號を討伐する事ができるかな」
「虞と號のつながりを切り離す必要があります。臣に今日號を取り明日虞を取る策があります」

「そんなうまい策があるのかね」

「虞に十分な賄賂を送つて號を討つために道を借りるのです」

「號と講和したばかりで號を討つ名目がない。虞は信用するだろうか」

「北の国境警備のものに密かに號と問題を起させます。そうすれば號の辺境警備の者が文句を言ってくるでしょうから、それを口実にわたくしが虞にお願いします」

献公は今度も彼の計画通り進めると、果たして號の辺境警備の者が文句を言つて来て、遂に小競り合いになった。號公は大戎と戦争中なのでそれに構つてられない。

「號を攻めるのに名目がないという心配はもうなくなった。しかし虞への賄賂を何にしたらいいだろうか」

「虞公は物に貪婪な人ですがちよつとしたものではだめで、よほどの物でなければ彼を動かさないでしょう。でも二つの宝物を贈ればきつと同意しますが、殿が手放せるかどうか……」

「ま、何なのか言つてみなさい」

「虞公は玉璧と良馬が好きです。申し上げました二つの宝物というのは、殿が大切にしておられる垂棘の璧と屈産の宝馬です。もしこの希世の名宝を虞公に贈れば虞公は必ず道を貸してくれます。虞公は璧と馬に目がないので必ずわが計略に落ちます」

「この二つはわしの正に至宝だ、他人にやることは断じてできないものだぞ」

「臣も殿が手放せない物だという事は百も承知です。けれども、道を借りて號を討てば、號は虞の救援がないので必ず滅びます。號が滅ぶと虞は裸になり滅ぶしかありません。その時璧と馬はいずこへ行くでしょうか。璧は他人の蔵に保管され、馬は他人の厩で飼われてもほんの暫くの事です」

横合いから大夫里克が心配して口を開いた。

「虞には宮之奇と百里奚という二人の賢臣がいます。この二人がきつと見抜いて諫言して引止めると思いますがどうでしょう」

「虞公は貪婪な上あまり賢くありませんから、諫言してもまず聞かないでしょう」

献公は直ちに璧と馬を苟息に手渡し、虞へ借道の交渉に行かせた。

虞公は最初、晋が號を討つために道を借りに来たと聞いて激怒した。しかし璧と馬を見て思わず怒りを鎮め、にこにこして手に璧を転がし、目に馬を見ながら、

「これはあなたの国の至宝ではないですか、世にも珍しい宝だ。これをどうしてわしに下さるのですか」

「わが君が賢者でいらつしやるご主君をお慕い申すと共に貴国の強さに畏敬を感じ思い切つて大切にしていた宝をお贈りし、厚誼を願いたいと思つてゐる次第であります」

「そうはおつしやるが、他にわたしに何か頼みがありますのでしよう」
「號がしばしばわが南部の国境を侵略して来ており、わが君は社稷のために屈して和平を求めたわけですが、その誓いの熱の未だ冷めないうちにもう譲歩を迫ってきましたので、これを討つために道をお借りしたいとお願ひに上がった訳でございます。幸運にも號に勝利することがで

きましたら、戦利品は全て貴国にお渡しし、貴国と永く友好協定を結びたいとも申しております」

そういうと虞公は非常に喜んで乗つて来そうになったが、宮之奇がこれを諫めて、

「殿、お許しになつてはなりません。『唇滅びて齒寒し』^㉑と申します。晋がいままで同姓の国を呑み込んできたのは一国、二国に止まりません。晋がずっと虞、號を征服できなかった原因は、二国が協力し合つて

いるからで、今日號が滅べば明日は必ずわが国に災いが及んできます」
「晋君は至宝を手放してまでわしに交誼を求めてきているのだ。それなのに、少しくらいの道を貸すのを惜しむ事はないじゃないか。晋は號より十倍も強いから、號を捨てて晋を得ようというのがどうしてま

ずいのだ。もういい、下がれ。わしの事に口出しするな」
宮之奇が更に何か言おうとしたが百里奚が袖を引いてそれを引き止めた。

「わたしが殿に忠告しているのに助言しないで止めたのはどういうことだ」

宮之奇は退室後、百里奚にくつてかかった。

「愚か者にいくら良い事を言つても、珠玉をどぶに捨てるようなものだという事を聞いた事があります。関龍逢は夏の桀王に、比干は殷の紂王に誅殺されましたが、どちらも諫言が過ぎたのです。あなたも危ないように思われたので…」

「という事は虞は滅びるということだ。二人で逃げるしかないね」

㉑ 唇滅びて齒寒し 互いに助け合うものの一方が倒れると他方も倒れざるを得ない密接な関係 「春秋左氏伝 僖公五年」

「あなたは行ってください、わたしは一人者ですし、あなた程には睨まれていませんから急ぎません」

宮之奇は一族を引き連れて行き先を告げずに去って行った。荀息は帰って晋侯に復命した。

「虞公は璧と馬を受取り借道を了承しました」

献公は自ら出陣して虢を攻めようと思つたが、里克が引き止めた。

「虢を破るのは容易な事です。殿のご親征には及びません」

「虢を亡ぼす何か策があるのか」

「虢の都城は上陽ですが出入り口は下陽に有るので下陽を攻めれば虢は終わりです。私が軍を率いて下陽を攻めます、もし失敗すれば軍法に従います」

献公は里克を大将に荀息を副将に命じ四百輛の戦車を率いて虢を攻撃させた。出兵に先立ち、使者を出し出陣の日取りを虞公に連絡させた。

「大切な宝物をいただいてまだお返しができていませんので、加勢させていただきたいのですが」

「加勢いただけるならむしろ下陽関をいただきたいのですが」

「下陽は虢のものでですからそれはできませんよ」

「今、虢は犬戎と桑田で交戦中で勝敗はまだ決着していないと聞いています。助勢に来たと言つて戦車を献上すると言つて晋兵を潜ませた車を差し入れれば下陽は取れましょう。わたし方に装甲車が百乗ほどありますからどうぞご利用ください」

守将舟之僑は虞が助勢に来たと言つたの信じて、城門を開き、車を入れた。城門に入ると車に隠れていた晋兵が一斉に飛び出した。すぐ門を閉めようとしたが時すでに遅く、里克が突入し舟之僑は下陽を失つてし

まった。虢公の怒りを恐れ彼は晋に投降し、里克は彼を先導として上陽へ向かった。

さて、虢公は桑田で、晋が下陽の関を破つたことを聞き、大急ぎで兵を帰した。しかし犬戎に追撃され大敗を喫し、つき随う軍は僅か数十乗になり、上陽に逃げ込んだが呆然としてやりようがなかった。そのうち晋軍がやってきてその上陽を幾重にも包囲した。八月に包囲され十二月になつて城中には薪も食料も尽きた。連戦連敗で、士卒は疲れきり、民衆も日夜大声で泣いた。里克は舟之僑に文書を書かせ城中へ矢文を放つて、虢公に投降を諭した。

「わが先君は王の卿士だったのだ。とても諸侯に下ることはできない」と言つて夜闇に乗じて城門を開き家族を率いて京師（洛陽）へ逃げて行つた。里克もそれを追う事はしなかった。民衆は花を飾り明かりをつけて里克の入城を迎えた。民衆の心を和らげ、兵士の犯罪を厳しく取締まり、守備兵を配置した。国庫の宝蔵物は全て車に乗せ、その三割と女楽士は虞公に譲つた。虞公はこれを見て非常に喜んだ。

里克は晋侯への報告の使者を立て、自分は病氣という事にして治るまで城外に兵を休めることにした。虞公は薬を持つて絶えず彼を見舞つた。こうして一ヶ月余が過ぎた。突然晋侯の兵が郊外に来ていると物見の報告があつた。

「何をしに見えたのだろう」

「虢との戦いが終わっていないとお思ひになつて自ら増援に見えたのです」

「わしが晋侯にちゃんと説明しよう。晋君がお見えになつたのは好都合だ」

虞公は急いで郊外に出迎え挨拶をし互いに謝辞を述べた。献公は箕山きさんで巻き狩りをしようとして虞公を誘った。虞公は晋の人に自慢しようと城中の兵士、良馬、戦車を全て持ち出し晋侯と獲物の勝負をしようとした。この日辰の刻から申の刻までの予定であったが、途中で突然城中に火が出ているという報告があった。

「庶民の火の不始末による失火だろう、そのうち消えるさ」

献公はそう言つて、もう一ラウンド狩猟ゲームをやろうといったが百里奚ひかりきは密かに、

「どうも城中で異変が起きているようです、早く帰られたほうがいいと思います」

虞公は晋侯に挨拶をして先に帰ることにした。帰る途中で、庶民が次々と逃げてくるのに出遭つた。

「お城は晋軍に無防備をねらわれて襲撃されました」

虞公はこれを聞いて驚き、非常に怒つて、

「何だつて！ 皆のものの急げ」

大急ぎで城へ戻つてくると、城楼の上で欄干にもたれ、鮮やかな兜を被り威風堂々とした大将が虞公に言った。

「この間は道をお借りして、この度は国をお借りし感謝にたえません」

虞公は怒つて城門を攻撃しようすると、城の上から拍子木の合図と共に矢が雨のように降つて来た。虞公は急いで車を下げ、後統の軍を急がせた。ところが、

「後統部隊が遅れていたのは晋軍に遮られたためで、或は殺され或は投降したりで全軍晋のものになってしまいました。間もなく晋侯の大軍がここへ参ります」

という報告があり、虞公は進退ここに窮まった。

「宮きやうしき之奇の諫めを聞かなかつたのが悔やまれる」

と嘆じ、傍にいた百里奚ひかりきに言った。

「あの時卿はどうして何も言わなかつたのだ」

「宮きやうしき之奇殿の言うことをお聞きにならずに、臣の言葉をお聞きいたでけたでしょうか。何も申し上げなかつたからこそ、今日殿に随つてお傍にいられる訳でございます」

まさに危急が迫っている時、後方に一輛しゆうしききやうだけで駆けて来る戦車が見えた。それは虢国の降将舟之僮しゆうしききやうであつた。虞公は恥ずかしさに思わず顔が赤くなつた。

「あなたは騙されて虢を捨て、結局あなた自身も国を失くされましたね。今となれば他国へ逃げるより晋に投降したほうがいいと思います。

晋君は心の広い人ですからあなたを害することはなく、きつと厚遇してくれます、信じてください」

と舟之僮しゆうしききやうが説得したが虞公は躊躇して決心しかねていた。まもなく晋侯が到着し、使いを出して虞公にお会いしたいと申し入れた。虞公は従わざるを得ず晋侯の前に出た。

「わたしがここへ来たのは玉璧と宝馬を返してもらいたかつただけですよ」

晋侯は笑いながらそう言つて、後ろの車に虞公を乗せて晋の陣営へ連れて行き、彼のために宿舎を用意した。百里奚はしっかりと傍に随つていた。

どうしてそんな人に随いて行くんたと言う人に百里奚は答えた。

「私は長らくこの殿のもつて禄をいただきました。これはそのご恩返

しです」

献公は入城し民衆の不安を取り除いた。

荀息は左手に璧を持ち右手に馬を引いて献公の前に現れ、

「臣の計画は終わりました。璧は蔵に、馬は厩にお返しいたします」

と言つて献公を大いに喜ばせた。

玉璧良馬至宝といえど、どうして社稷と比べ得よう

荀息の謀計の功よりも 笑止千万虞公の愚

献公は虞公を殺そうと思つたが、荀息が、

「この愚か者は何の能力もなく、殺す価値もありません」

というので寓公の礼をもつて遇し、道を借りたおれだといつて別な

璧と馬を彼に贈つた。舟之僦は晋の大夫を拝命した。彼が百里奚を賢

者であると献公に推薦すると、献公は奚がほしくなり僦を遣わして気持

ちを伝えさせた。

「旧君がこの世におられるのでその気にはなれない」

奚は僦にこう言つて、

「君子は仇の国には付かずといひます、まして仕官など。わたしはた

とえ仕官するとしても晋以外の国にしたいです」

と嘆じた。舟之僦は彼の言葉の中に自分に対する悪意と批判を感じ非

常に憤慨した。

さてこの頃、秦の穆公は即位してもう六年になるがまだ中宮がいなか

つた。晋侯の長女伯姬を夫人にしたいと思ひ大夫繫を使者として晋に求婚した。

晋献公は太史蘇に筮卜を命じた。

卦は䷗「雷澤」《鼎妹》、卦第六爻、その繇（占いの文辞）は、

『士、羊を割くに亦血無し。女、筐を承るも亦賜り物なし。西隣より責

言を受け償うあたわす』

と出た。太史蘇はその文辞を次のように解釈した。

「西方の秦から咎めがあり和睦の兆しは見えません。士が羊を割いて

供応するにも乾いて血の無い羊では用をなさず、女が竹かごを受けても

その中身が無く空筐を受けるようなもので、共に何のいい所も無いとい

う事があります。しかも《鼎妹》が《睽》に移ると出ており、《鼎妹》

が《睽》に移るのは助けを得られない象で、この結婚は凶であります」

献公は更に太卜の郭偃に龜卜で占わせたが、結果は上吉だといった。

その文辞は、

『松柏は隣り合わせ、代々舅婿の関係をうみ、三度我が君を定む。婚

姻は吉、犯すべからず』

と出た。史蘇は筮卜の結果を主張したが献公は、

「昔から『筮は卜に如かず』と言う。トが吉だというのだからそれに

従わざるを得ない。秦は諸侯と認められて以降大きく拒みがたい力

になつていて聞く

そう言つて求婚を認めることにした。

帰国の途中、公子繫は、赤ら顔で鼻が高くあご髯をもじやもじやと

寓公 国士を失ひ或は亡命等により他国に寄寓している者

この郭公の解釈は『易経』《鼎妹》「雷沢」《鼎妹》今井三郎明治書院新釈漢文大系と『春秋左氏伝』《僖公15年》竹内昭夫訳平凡社を参考にした

生やし、両手に二本の鋤を持って田を耕している男を見かけた。その鋤を見せてもらったが側近の誰も重くて持ち上げられない。男の名を聞くと、公孫氏で名を枝、字を桑そうといい、晋君の遠い親戚だという。

「才能があるのにどうして田舎にくすぶっているんだね」

「推薦してくれる人がいなかったのです」

「それじゃわたしについて秦へ行ってみないか」

「『士は己を知る者のために死す』と申します。お連れいただけるのでしたらもとより喜んで」

繫は公孫枝を同じ車に乗せて帰国し、穆公に推薦すると彼を大夫にした。穆公は晋が結婚を承諾したことを聞き、結納を納め伯姫を迎えるために、再び公子繫を晋へ派遣することにした。晋侯は花嫁付の臣を誰にするか相談した。

「百里奚は晋には仕官したくないと言っておりその心はかり難いものがあります。この際遠くへ遣るのがよろしいかと存じます」

舟之僮がこう進言したので百里奚を花嫁付で秦へ遣ることとした。

ここで百里奚の事を説明しておこう。彼は虞国の人で、字は井伯、年は三十数才、妻杜氏を娶り一子がいた。家は貧しく、国々を遊歴したいと思っても寄る辺なき妻子のことを思うとなかなか置いて行く事はできなかった。

「男は志四方に有り」というではありませんか。働き盛りの年になって任官もしないで妻子のために家にいるようでは将来の見込みがないじゃないの。わたし、自分と子供の生活くらいは何とかないますから、あなたは私たちの事を心配なさなくていいのよ」

杜氏はそう言うて家のたつた二羽しかない雌鶏を絞めてはなむけとした。台所には薪がなかったので門のかんぬきはずし、火を起こし粟飯を作り、奚はそれを十分に食べた。別れ際、妻は子供を抱いて奚の袂を引き、

「成功して裕福になっても決して私たちの事を忘れないでね」

と涙ながらに言った。奚は毅然として旅立った。

先ず齊へ行き襄公に仕えようと思ったが推薦してくれる人がいなかった。日に日に零落して行きついに乞食をしながら鉅ちつ（現安徽阜陽県）へやって来た。この時奚は四十才になっていた。乞食の百里奚の顔を見て不思議に思った人がいた。この人の名は蹇叔という。

「あなたは乞食をなさる方ではありませんね」

と言って奚に名前を聞き、食事に呼び、時事問題を話し合った。奚は立板に水のごとく対応し、画いたものを指すように整然と説明したので、蹇叔は感心して

「あなたのような才能のある方を物乞いさせるといふのはどこか間違っているな」

と言って奚を家に留める事にし、兄弟の契りを結んだ。蹇叔が奚より一才年上なので奚は叔を兄と呼ぶことにした。蹇叔の家も相当貧しく奚は村人の牛の飼育をして自分の食い扶持を稼いだ。

ある時、齊公子無知が襄公を殺して国君になったばかりで賢者の募集をしていたので、それに応募しようと思った。しかし、蹇叔が

「先君の子が国外にいるのだから、無知は分をわきまえず篡奪したことになる。結局は不成功に終わるだろうから止めたほうがいい」と言うて引き止めるので彼の意見に従った。その後、周の王子頹が牛

が好きで、彼の牛を飼育する者を優遇するというのを聞き、蹇叔に別れを告げ周朝に向う事にした。蹇叔は、奚の希望が固いので、

「男は人に仕える場合慎重でなければならぬ。一旦主君と決めて勝手に離れると不忠と言う事になる。また逆に主君と一緒に災難に遭うというのも不智（愚鈍）と言つことになるから、十分に気を付けるよう。家事が落着いたら近いうちに周へ様子見に行くよ」と忠告して別れた。

奚は周に着いて王子類に謁見し、牛飼いの技術を進講した。類は大変喜び家臣として採用しようとした。この時蹇叔が鉅から京師へやつて来て奚と一緒に子類に会った。退出すると叔は奚に、

「類という人は志は有るようだが才能はないね。お付は皆阿諛迎合の連中ばかりで将来きつと非望（公分を超えたことを望む事）を抱いて失敗するだろう。早めに彼とは別れておいた方がいいと思うよ」と言った。叔がそう言うので奚は仕官をやめて長く別れたままの妻を

思つて虞に帰ろうと思つた。

「虞には宮之奇という賢臣がいる。古い友人で久しく会っていないからわたしも訪ねてみたいと思つていた。虞に帰ろうと思つているのならわたしも同行しよう」

と蹇叔が言うので一緒に虞へ帰つて来た。しかし、妻の杜氏は極貧のため自給できなくなり他所へ流れ落ちていき行方がわからなくなつていた。妻のことを思い感傷にふけつた。

蹇叔は宮之奇に会つて、百里奚が賢者だと説明したので彼は虞公に奚を推薦した。虞公は奚を中大夫に任じた。

「虞公の見識は非常に狭く、独断専行でおそらく大成はできない人だ

と思う」

蹇叔はそう言つたが奚は、

「わたしは長らく貧困に喘いできて、魚が陸にいたようなものです。ですから今は早くほんの少しの水でもいいから欲しい気持ちなんです」

「貧困脱却のために仕官するというのであれば引止める事はできないな。何時か訪ねてくることがあれば宋国の鳴鹿村へ来て下さい。幽雅な処で、そこで隠居していますから」

そう言つて蹇叔は帰つて行つた。奚は虞公に仕え、その後虞公は国を失ふことになったが彼は虞公を見捨てずに世話した。

「不智（愚者）にはなつてしまつたが不忠にはなるまい」

以上の経過をたどつた奚は、晋に仕官はしたくないと言つたため晋の花嫁付きとして秦へ行かされることになつてしまつた。

「濟世の才を持ちながら明主に遭つて大志を展開することもできず、老境に差掛かつて女に仕えるなんてこんな恥辱には耐えられん」

奚は途中で逃げ出して、宋へ行こうと思つたが道が険しいので楚へ行くことにした。宛城へ行くと狩をしていた宛の民間人に敵のスパイと疑われて捕まつた。

「わたしは虞の者で国が滅びたので難を逃れてここまで来たのです」

「貴様何かできることが有るか」

「牛を飼うのが得意です」

奚の縄を解き牛の世話させると牛は日に日に肥えて立派に育て上げたので彼らは大喜びした。楚王がそれを知りすぐ奚を呼び出した。

「牛を飼う秘訣は何なのだ」

「それは、決まった時間に餌を与え、それぞれの牛に合わせて世話をし、心を牛と一つにする事です」

「そなたの話は大変いい話だ、それは牛を育てる場合だけでなく、馬にも通じるはずだな」

と言つて奚を馬飼ひとして南海の放牧場に遣つた。

一方、秦の穆公は、晋の花嫁付に百里奚の名があるのに本人がいないのを変に思つた。

「虞の旧臣ですが、きつと逃げたのでしょうか」

と公子 繫ちゆうが言つた。穆公は公孫枝こうそんしにたずねた。

「子桑しやうさう（公孫枝の字）は晋にいたから百里奚の経歴を知っているだろう。どういう男だ」

「賢人です。虞公を諫めてもだめと知るとさつと諫言を止める、即ち智の人です。虞公に随いて晋へ行っても義により晋に仕えませんでした。即ち忠の人です。しかもこの人は経世の才を持っていますがそれを發揮する時を得られていません」

「どうすれば百里奚を採用できようか」

「奚の妻が楚にいと聞いています。彼はきつと楚に亡命していると思います。使者を楚へやつて調べさせたらいかがです」

使者が楚へ行つて来た報告で、奚は海浜で楚君の馬の飼育をしている

ということが判明した。

「金を積めば楚は彼を寄越すだろうか」

「それでは百里奚は来ないでしょう」

「どうして」

「楚が奚を牧場に置いていてというのは、奚が賢者だということを知

らないからです。大金を持つていけば賢者だと教えるようなものです。彼が賢者だと知れば、楚は我々に渡さずきつと自分で用いるでしょう。

逃げ出した花嫁の付人の罪を追求すると言つて安く買戻した方がいいです。これは鮑叔牙が管夷吾（管仲）を魯から連れ戻した方策です」

「なるほど」

穆公は了解して、使者を楚に遣わし五枚の黒牡羊の皮を楚王に贈つた。

「弊国の賤臣百里奚という者が貴国に逃げて来ております。今後の逃亡者への見せしめのため、五枚の牡羊の皮と交換願つて連れ帰り処罰したいと考えております」

楚王も秦との友好を考慮して、東海の者に百里奚を捕えさせ秦に引渡した。

百里奚が連行されるとき、東海の人は彼が殺されると聞いて泣いた。奚は笑つて、

「秦君は霸王の志を持つ人だと聞いている。花嫁の付人一人くらいでがたがた言うことはありえない。きつと楚からわしを連れ出して秦で使おうと思つているに違いない。これは畢竟貴への道だよ、泣く事はない」

と言ひ残し檻車かんしやに乗り去つて行つた。秦との国境に来ると秦の穆公は公孫枝に迎えに出させて先ず縄を解き、その後接見した。

「年は幾つになられる」

「やつと七十才です」

「惜しいですな、ちよつとお年を召しますな」

「私に鳥や獸を捕れとおっしゃられても、はつきり申してこの年では使いものになりません。しかし、帷幕の中で国事について計画をめぐらすのであれば私はまだ十分に若（こ）うございます。むかし呂尚（太公望）

殿が渭水の河岸で釣りをしているのを周文王に見出され、尚父しやうふといわれて周の王事を固められたのは八十歳でした。今日ご主君にお会いした臣はあの方より十歳も若わかいございます」

穆公はその気概に感動しはじめに質問した。

「わが国は戎と狄にはさまれ、中原諸国との会盟にも参加していませんが、わが国が諸侯に遅れを取らないために何をすべきかお教えいただきたい」

「ご主君がわたくしを亡国の老いばれ囚人とご覧にならないで虚心にご下問さるのでしたら、喜んで愚見を申し上げましょう。

そもそも、雍よう、岐きの地は文王、武王の王業の興った地であり、山は犬牙の如く、平原は長蛇の如く周はこれを守りきれずに秦に与えたものがあります。この自然は秦のために広がっています。しかも戎、狄の間にいるという事は兵も強いという事です。から同盟の必要はありません。現在西戎の間では秦に組するもの数十どころではありません。土地は耕作地であり民は戦闘要員でもあります。これでは中原諸侯もご主君と争うことはできません。ご主君は徳と力です。西は抑えており、中原方面へは険しい山川の險をバックに、隙を見て進めば、ご威徳により覇業はご主君の掌中にあります」

穆公は思わず立ち上がり、

「わしが井伯せいへく（百里奚）を得たのは齊侯が仲父ちゆうふ（管仲）を得たようなものだ」

と言って三日三晩二人は話し続け非常に意気投合した。そしてついに上卿に任じ国政を任せることにした。秦の人は奚のことごこを『五殺大夫』と言った（殺は黒の牡羊のこと）。楚で牛飼いをしていたのを穆公が五枚の

牡羊の皮で買い取ってきたからである。

虜囚が宰相に上りしは異例なり 仲父ちゆうふに続く百里奚
爾後西秦の名は赫々たるも

百里の身代金は只の五枚の羊皮なり

しかし百里奚は上卿じやうけいの位を断り、代わりにある人を推薦したのである。

さて百里奚が推挙した人とは誰であろうか、それは次回のお楽しみ。

第二十六回

百里奚『かんぬきの歌』で妻に再会

穆公 陳宝を手に入れ夢の証とする

秦穆公が百里奚の才能を十分認識して上卿にしようと思ったのに、彼はそれを断った。

「臣は友人の蹇叔の才能の十分の一にも及びません。ご主君が国家を治めようとなさるのでしたら、どうか蹇叔を登用下さい。臣は彼を補佐したいとぞんじます」

「あなたの才能は私自身で教わつてよくわかりました。しかし蹇叔という人はどんな人なのか聞いた事がありませんね」

「蹇叔が賢者だとはご主君だけでなく、齊、宋の人でも誰も知らず、知っているのは臣のみかもしれません。臣が以前齊の公子無知に仕えようと思つておりましたら、蹇叔が引き止めてくれましたので無知の変に巻き込まれずにすみしました。周の王子顔に仕えようとした時も蹇叔の忠告で周を去り子顔の災禍から逃れることができました。その後、虞へ帰つて虞公に仕えようと思いましたが、蹇叔はその時も虞公は仕えるべき人ではないと反対しましたが、臣は極貧に疲れその爵禄につられて彼の意見を聞かず仕官し、結局晋の捕虜になつてしまいました。彼の意見を聞けば禍から逃れ、聞かなければ身を滅ぼす羽目になつたのです。これだけを見ましても彼の智が臣よりずっと勝れていることがわかります。彼は現在、宋の鳴鹿村に隠棲しています。よろしくお召し下さいますようお願い申し上げます」

話を聞いて、穆公は心を動かし公子縶を商人に扮装させ、大金を持

たせて宋国へ行かせた。百里奚は別に手紙を書いて彼に託した。公子縶は旅装を整え牛車二輛で鳴鹿村へやつて来ると、数人があぜに腰を下ろして休憩し歌を歌つていた。

山は高くて輿も入らず 道はぬかるみ昼なお暗し
力合わせて耕せば 甘き水に肥えた土地
力を尽くして働けば 我にも五穀の分け前あり
春夏秋冬配事は何もなく飯の不安もさらになし
全て天命榮辱もなし

縶は車の中でそれを聞き、世俗を超越したものを感ぜ、
「昔から『君子は里に住み俗世を卑しむ』と言うが、蹇叔殿が住むこの辺りでは村人はみなこんな境地なんだな。きつとこれらも俗界を超越した賢者なのだろう」

と感心しながら御者に言つて車を降りて村人にたずねた。

「蹇叔さんのお住まいを存知でしょうか」

「どういつご用向きでしょうか」

「蹇叔さんのお知り合いの百里奚さんから手紙を託されて来た者です」

「それでしたら、この先の竹林をずっと入つて行つてください。左に清泉が有り、右手に岩が有ります。その間にある草庵がそうです」

縶は拱手の礼で謝して、また車に乗り半里ほど行くと草庵に着いた。辺りを見回すとなるほど幽雅な風景である。

竹林中幽邃の境 人生にこの楽しみ更に何を求めん
積み上がる数万の白石雲をなし 清泉流れ出でて谷川に入る
猿とたわむれ鹿と遊びて時を忘れる

夕焼け静かに暮れて行き 高臥先生憂を知らず

（高臥先生 高尚な心を以て隠棲する人 蹇叔を指す）

蹇は草庵の外に車を止め、従者に柴の扉を叩かせた。童子が出てきて門を開き、来意をたずねた。

「蹇先生を訪ねて参ったものです」

「先生はいないよ」

「どちらへ行かれましたか」

「隣の爺さんと石梁へ泉を見に行つたんだ。でも、もうすぐ帰つてくると思つたよ」

蹇は草庵に面倒をかけてはいけないと思ひ、外の岩に腰掛けて待つていた。

童子は戸を半分閉めて中に入った。

しばらくすると、眉が濃くて目が丸く、角張つた顔の背が高い男が鹿の蹄を背負つてあぜ道を西のほうからやつて来た。蹇はその非凡な容貌を見て、立ち上がつて迎えた。その大男は鹿の足を降ろして蹇に挨拶をした。蹇は大男に名を聞いた。

「拙者姓は蹇、名は丙、字を白乙と申します」

「蹇叔殿とはどういう関係ですか」

「父です。ところであなたはどなたさまですか。ご用件は」

「お父上のお知り合いの百里奚殿が現在秦におられますが、その方からお父上への手紙をお預かりしてまいりました」

「さようでございますか、それではどうぞ草堂にお入りになつてしばらくお待ちください。父はまもなく帰つてまいります」

と言つて両開きの扉を開けて公子蹇を先に招き入れた。蹇丙は再び

鹿の蹄を背負つて草堂に入り童子に片付けさせて、改めて子蹇に挨拶をし主客それぞれの席についた。公子蹇と蹇丙は農業の話から武芸にまで話が及んだ。丙の話は順を追つて次々と話題が続くので、

「その親にしてこの子有りだ。井伯（百里奚 殿の推薦は本物だな）」と蹇は内心驚き感心した。

お茶を飲み終わつた頃、蹇丙は童子に門のほうへ父親のようすを見に行かせた。しばらくすると童子が蹇叔が帰つた事を連絡して来た。

蹇叔が近所の二人の老人と肩を並べて帰つて来て、門の前に車が二台もあるのを見て驚いて、

「この村にどうしてこんな車が有るんだろう」

と騒いでいる。蹇丙が急いで出て行つて先ずその理由を説明した。

蹇叔はその老人たちと一緒に草堂に入りそれぞれ挨拶して席に着いた。

「息子から、弟井伯の手紙をお持ちいただいたと聞きましたが、お見せいただけますか」

公子蹇は百里奚の手紙を取り出し蹇叔に渡した。内容は概略以下のとおりであつた。

奚は兄上のおっしゃる事を聴かなかつたため、虞公に随つて何度か災難にあいました。幸い秦君が非常に賢君で、牧場にいた奚を買請けて下さり秦の政治を任せて下さる事になりました。奚は自分の才智が兄上にはとても及ばないことがわかつていますので、兄上にお助けをお願い申し上げる次第であります。秦君は兄上のことをお聞きになると急いで大夫公子蹇に命じて、贈物を持つてお迎えに上がらせました。どうかお気持ちを切り替えいだき下山願つて、常々胸にお持ちであつた大志をここで展開されることを希望いたします

ます。もし兄上がどうしても隠遁生活を捨てられないという事でございしましたら、奚も鳴鹿村で兄上とご一緒致す所存でございます。

「秦君はどうして井伯をお知りになったのですか」

「秦君が彼が賢者だと聞きつけ五枚の牡牛の皮で買請けた顛末を一通り話した。」

「わが君は井伯殿に上卿を委嘱いたしました、井伯殿は先生には及ばないから是非先生に出慮願うべきだとおっしゃってどうしても承諾なさいません。そこでわが君は先生にお越しいただくよう薄謝を添えて私を遣わしたという次第でございます」

と言つて部下に命じて車から招聘状と贈り物の品々を草堂に並べた。隣の老人も田舎の農夫でこんなすごい物を見たことがなく顔を見合わせ驚いて熱に言った。

「こんなにお偉い方がお見えになつてゐるのだつたら来なければ良かったですね」

「そんなことおっしゃらないで下さい。わが君は蹇先生にお会いするのを日照りに雨を求めるように待ち望んでいます。お二人からお勧めいただけませんかお礼は差し上げます」

二人の老人も蹇叔にいう。

「秦国がこんなに賢人を大切にしているのですしたらこの方のご意向に従つたら如何です」

「昔、虞公は井伯の忠告を聞かなかったから国を滅ぼしてしまつたのです。秦君が心から賢者の登用をお考えであれば井伯一人で十分です。」

わたしはもう世に出る考えは絶つておりますので、ご意向に沿う事はできません。どうか贈物もお引取りいただきたい。どうかそのようによろしくお伝え下さい」

「先生がお見えにならなければ井伯殿も一人では秦に留まらなかつたおっしゃつてゐるのです」

蹇叔はしばらく考えていたがため息をついて決心して言つた。

「井伯は才能がありながらそれを試すことができず長らく機会を探していた。やつと名君に巡り合う事ができたのに、わたしが彼の志を打壊す事はできません、彼のために一度参りましょう。しばらくしたらまた田を耕す生活に戻りましょう」

童子が鹿蹄が煮え上がったと言つて来たので新酒を取出して客をねぎらつた。公子蹇は西側の席（客の席）に就きで隣の老友も相伴した。瓦の杯に木の箸で、主客さしつさされつ楽しく飲んで食ひ、いつの間にか日が暮れ、蹇はとうとう草堂に泊まつてしまつた。

翌朝、二人の老人は蹇叔の送別会と言つて酒樽を提げてやつて来て、昨日と同じように飲み語らつた。蹇は白乙の才を誉め蹇叔に、彼も一緒に秦へ行って欲しいと頼んで同意を得た。秦君からの贈り物を二人の老人に分け与えて家の管理を頼み、

「すぐ帰つて来るからまた話し相手をお願いします」

と言ひ、家人には、

「草を生やさず植え付け取り入れなどの農作業はきちんと頼むよ」

といい、二人の老人には体をいたわるようにと言葉を交わして別れた。蹇叔は車に乗込み白乙丙が御者となつた。蹇は別の自分の車で並んで出発した。夜は泊まり暁に出掛けるといふ旅を続け秦の郊外に近づくと、

繫が先に入朝し穆公に拝謁して報告した。

「蹇先生は郊外まで見えております。その子蹇内も拔群の才能がありますので任用できるかと思ひまして一緒に連れてまいりました」

穆公は大変喜び百里奚に迎えに行かせた。到着すると穆公は階段を下りて蹇叔を迎え、挨拶をして席を与え、早速訊ねた。

「井伯から何度も先生のことを承っています。先生には秦を強化する方策としてどんなお考えをお持ちでしょうか」

「秦は領土は西方にあり、戎、狄に隣接しているので、地形は険しく、兵は強壯で、進んで戦うに良く、退いて守るに適しています。にもかかわらず中原諸国と同列に見られないのは威徳が皆に及んでいないからであります。威力が足りないのと誰も恐れませんが、恩徳が足りないのと誰も心を寄せません。これでは覇を称える事はとても難しいでしょう」

「威と徳と、どちらを優先させるべきでしょうか」

「徳が基本であり威はそれを補うものです。徳があつても力がなければ外敵の侵略を受け、力が有つても徳がなければ民の協力が得られず国は内部から自壊してしまいます」

「徳を敷き威を示すには具体的には何をすべきでしょうか」

「秦国は戎狄の風俗が混在していて、国民に礼の教育が欠けており、貴賤についてもはっきり認識されていません。先ず礼の規準を決め教化を行いそれから刑罰を決めます。礼の教化を行えば人民に君主に対する尊敬の念が生まれます。それから君主が恩徳を施せば、皆君主の恩を感じ、刑罰を用いてもその怖さを知るようになり、上下間は頭と手足のようになるでしょう。斉の管夷吾が率いた軍隊が天下に号令して無敵だった理由はそこにあります」

「先生のご意見に従えば天下に覇を称える事ができましようか」

「それだけではだめです。覇を称えようとすれば三戒を守らなければなりません。すなわち、貪るべからず、怒るべからず、焦るべからずの三戒です。貪れば失うもの多く、怒れば災難に遭い易く、焦ればつまり易い。大小を見て事に当れば貪る必要はありません。相手と自分の軽重を計って実施すれば怒ることもありません。緩急を考慮して計画すれば焦ることはありません。この三戒を守る事ができれば覇業の成就是有望です」

「おっしゃるとおりです。それでは現在、急を要することは何でしょうか」

「秦は西戎を国と認めています、これが秦の禍福を決める根本問題です。齊侯はだいが耄碌してきて覇業は次第に衰えております。先ず雍、渭の人々を慈しみ国内を安定させます。それから諸戎に召集をかけ服しない者は討ち、諸戎を手中に収めます。その後軍備を整え、中原で採め事が起こるのを待つて齊の遣り残しを收拾し、威徳を天下に敷けば、覇業は望まなくても秦に転がり込んで来ましよう」

穆公は大変喜び、蹇叔を右庶長、百里奚を左庶長に任命し、共に上卿にしたので『相』と呼ばれた。また白乙丙も大夫に封じられた。二人が政治を担当するようになり、法律を作り、庶民の教化を実施し、悪しきことを廃し利民済世の策を興こして、秦は立派に治まり国力は大幅に伸びた。史官の詩がある。

子繫は奚を、奚は叔を薦め、秦庭に賢臣集まる。

穆公は正に賢侯なり、傑人を得るに出自を問わず

穆公は賢才が他国で多く輩出しているのを知つて、更に募集に力を入れた。公子縶は秦人西乞術を推薦した（『史記秦本紀』では西乞術は白乙丙と共に蹇叔の子となっている）。百里奚も以前から晋人繇余が経綸（治國の方策に通じていると耳にしていたので推薦しようと思ひ、そつと公孫枝にたずねると、彼は晋で不遇をかこつていたが現在には西戎に仕えていると聞き非常に残念に思つた）。

さて、百里奚の妻杜氏であるが、夫を遊歴に出した後糸を紡いで生活していたが、その後飢饉に遭つて生活できなくなり、子供を連れて食を求めて他郷を転々と流離し、結局秦に流れ着き洗濯をして生活をしてた。その子は名を視、字は孟明といい毎日村人と狩をしたり格闘技をして全く生活の手伝いをしようとせず、杜氏がいくら言つても聞かない。

百里奚が秦の宰相になり、杜氏もその名を耳にして車中の人を遠くから見ると見たが、お互いわからないままであつた。屋敷で洗濯女を募集していたので、杜氏は応募して一生懸命洗濯に励んだ。屋敷の人は皆大変喜んでくれたが奚の顔を見ることはできなかった。ある日、奚が堂上で階下の音楽隊の音楽を聴いていた。杜氏が、

「わたしもいくら楽器を演奏できるのですが、近くでちよつと聞かせていただけませんか」

と屋敷の人に頼むと、彼女を楽隊のところまで連れて行つてくれた。

「何ができるのかね」

「琴と歌ができます」

と答えると琴を貸してくれた。

杜氏は琴と鼓を伴奏にもの悲しい声で歌つた。楽隊は皆耳を傾け静か

に聴いていた。すばらしい歌だったのでもう一曲歌えと言ふと、

「わたしは流れ流れてこゝへ来たので発声を長くやっています。相君に歌詞をお聞きいただきたいので堂上で歌わせていただけないでしょうか」

と杜氏が言うので百里奚に許可を求めると、奚は堂の左でやれと彼女の願いを許した。杜氏は柔和な面さで袖を調え張りのある声で歌つた。

百里奚五羊皮よ 別れの時を思い出す

門を焚き薬味を搗いて雌鶏を煮たあの時を

今は君 富貴になりてわれを忘るや

百里奚五羊皮よ 父美味し肉 子は飢えに泣く

夫は綾の錦 妻は洗濯女

ああ君 富貴になりてわれを忘るや

百里奚五羊皮よ 昔君去りわれは泣き

今日君はわれと遠くに隔たりて座す

ああ君富貴になりてわれを忘るや

百里奚はその歌を聴き愕然とした。前へ呼んでみると正にあの時の妻ではないか。大変驚き、しばらくしてやつと口を開いた。

「子は何処にいるのだ」

「村中を狩をして走っています」

人を遣つて彼を呼び出し、この日やつと夫婦父子が水入らずになった。

穆公は百里奚の妻子が見つかったと聞き、穀物千鍾（50kg）、黄金絹等

一車分をお祝いに下賜した。翌日奚は子孟明を連れてお札に参上した。

穆公は視を見て大夫に任じ、西乞術、白乙丙とともに將軍としこの三人

を『三帥』といつて兵権を管掌させた。

姜戎の吾離が凶暴に侵略して来たが、三帥がこれを討伐し、吾離は晋へ逃げたので瓜州、現甘肅省最邊の土地を全て手に入れることができた。この時、西戎の首領赤斑は秦が非常に強く勢いづいたので繇余を使者として秦に派遣し繇公の人物を観察させた。繇公は彼と庭園をめぐり三休台に登つて、宮室の庭園の美しさを自慢した。

「これを造つたのは鬼神ですか人ですか、いずれにしてもすごいぶん手がかかっていますね」

繇公は繇余のこの言葉を奇異に感じて、

「あなた方戎夷は礼も法もなく、どうやって統治しているのですか」とたずねると繇余は笑つて、

「礼や法が中原諸国の乱れの原因です。上の者が法律を作り庶民を取り締まるというのは少しは効果がありましようが、次第に輕視するようになり、礼樂の名を借りてごまかし、法の威を借りて下の者を虐めるようになつて、天下に怨嗟が広がり謀叛の芽が生じる事になります。戎夷はそんなことはありません。上は素朴な優しさで下に接し下は忠信を以つて上に仕え、上下一体となっています。ごまかし合う事はなく、法を煩わせる事ありませんので、問題点もすぐ解決します」

繇公は何も言わずに別れた後、その話を百里奚にした。

「彼は晋の大賢人で、臣も彼の名はよく存じています」

繇公は不機嫌な顔つきで不安そうに、

「隣国の聖人は敵国の憂いなり」と言うではないか。繇余が賢人で戎が重用しているという事はわが国の不安要因ではないか」

「内史廖は非常に智謀のある人ですから彼にお諮りになられたら如

何でしょうか」

繇公は廖を呼び出して彼の話を聞いた。

「戎主は辺境の田舎者で中国の歌声を聞いたことがないはずですから、試しに女樂人を送つてその志を削ぎ、繇余は期日になつても帰さないで留置しておきます。戎夷の政治がいい加減になり上下が互いに疑い出せば討伐も簡単です。家来を手に入れるなどなお更簡単です」

繇公はその案に同意し、繇余と同席し食器を共にして食事をし、いつも蹇叔、百里奚、公孫枝等を順番に同席させ、戎の地形や兵の強さの実態をたずね、他方では内史廖に、着飾らせた音楽のできる美女六名を連れて戎へ挨拶に行かせ、その女樂人を戎主に献納した。戎主赤斑は大喜びで、昼は音楽を聴き、夜は夜の楽しみに耽り政治を疎んずるようになった。

繇余は秦から一年ぶりに放免されて帰つて来た。戎主はその遅かったことを怪しんだ。

「臣は毎日返してくれと頼んだのですが、秦君がどうしても返してくれなかったのです」

そう弁解したが、戎主は二心有りと疑つて彼を疎んじるようになった。繇余は戎主が女樂人にのめりこみ政事を顧みようとしないので、いやがられる諫言をせざるを得なかったが、戎主は聴こうとしない。繇公は密かに人を遣つて彼に招聘したい意向を告げると、繇余は戎を捨て秦に帰順してきたので車卿に拔擢し二相の補佐とした。繇余は早速戎を討つ案を献策し、三帥の兵は戎の国境に入つても知り尽した道を行くように進軍したので戎主赤斑は抵抗できず遂に秦に降つた。

眞は百里の忠言聞かず虜囚となり、戎は繇余去りて国を失う

ひつぎよう
畢竟治国は賢才による 見上齊の覇業 秦の強さを

西戎主赤斑は諸戎の領袖だったので、赤斑が秦に投降した事を聞くと諸戎はみな惧れをなし土地を献上して臣従して来た。穆公は論功行賞を行いた宴会を開いた。群臣が代わるがわる長寿を祝つて来る酌を受け、思わず酔つ払つて内宮へ帰つて横になったきり目覚めなかつた。宮人は驚いて外に知らせたので家臣たちがお見舞いに詰め掛けた。世子罃は太医を呼び診察させた。脈拍、呼吸は正常だが、目を開けず物も言わず動きもしない。太医は鬼神が取り付いていると言つて内史廖に祈禱を命じたが、内史廖は、これは氣絶しているだけで夢を見ているのだから自然に醒めるのを待てばよく、驚くことはないと言い、祈禱も意味がないと言つてしなかつた。

世子罃は枕元で見守り寢食の時も片時も離れなかつた。付つきりで五日目、穆公はやつと目覚め、顔には雨のように汗が吹き出て、何度も「変だな」という。世子は跪いて

「気分は如何です、どうしてこんなに長い間お休みになつたのですよう」

「長かつたのか」

「五日以上眠つておられました。夢を、一瞥になつておられたのではございませんか」

「そなた、どうしてそれがわかる」

「内史廖がはつきりと申しております」

穆公は廖を枕元に呼んだ。

「わしは、ある婦人の夢を見た。妃嬪（きひん）（皇后に次ぐ高位の女官）のよう

な装束で、姿はとても端麗、肌は雪のごとく白く、手には天上の割符を持つて、天帝の命令でわしを呼びに来たと言ふのだ。わしは随いて行つた。突然雲の上にいるようであたりは縹渺（ひょうびょう）として果てしない。そのうちある宮城に着いた。赤と青に光り輝き玉階は九尺あつて上から玉簾が下がつており、婦人はわしをその階下へ連れて行つて拝礼をした。すぐに簾は巻き上げられ、黄金の柱、錦綉で飾られた壁に目を奪われた。天子の衣冠をつけた王が玉の机にもたれて坐つていて、左右に、威風堂々とした侍衛が立つていた。

『甘酒をとらせよ』と王が言うと、内侍らしき人が碧玉の杯で酒を注いでくれた。その甘い香りは何ともいえないいいものだった。王は晝簡を取出して側の者に渡すと、堂上でわしの名が大声で呼ばれた。

『汝に晋の内乱平定の任務を与える』と言ふのだ。わしが受任と感謝の挨拶を済ませると婦人はまたわしを宮城から連れて出た。婦人の名を聞くと、

『わたしは宝夫人と申します。太白山（たいはくさん）の西麓に住んでいて、あなたの配下ですがご存じないですか。夫は葉君で南陽に別居しております。一、二年に一度わたしに会ひに来ます。あなたがわたしのために祠を立てて下さればあなたを霸主にして差し上げましょう』という。

『わたしに平定せよという晋の乱というのはどんな乱ですか』と聞いてみたが

『天機漏らすべからず』と言つて婦人は何も言わなかつた。鶏鳴が聞こえる頃、雷鳴のようなすごい音がしてわしは驚いて目が覚めたのだ。これは吉だろうか凶だろうか』

「晋侯は今驪姫を寵愛していて太子を疎外していますが、これで平安

が保てるわけがありません。天命は殿のほうに向いていて、これは吉です」

「宝夫人とは何者だろう」

「臣はこんなことを聞いたことがあります。先君文侯の時、陳倉の男が地中から袋が膨れたような薄黄色で尾が短く足がたくさん鋭い嘴のある怪物を捕まえました。彼は先君に献上しようとしたが、途中で二人の子供に出会い、その子供たちがその怪物に、

『お前死人を虐待して、今生きた人間に捕まったんだろう』と言って手を打って笑うので、どういう事だと聞くと、

『こいつは《い猶』^いといって地下で死人の脳を食ってその精気を取りそのうち変身するんだ、気をつけた方がいいよ』と子供たちが言います。そうしたらその《い猶」^いは人間の口ぶりで、

『そいつらは陳宝^{ちんぼう}という雌雄の雉の精で、雄を捕まれば王になれ、雌を捉えれば覇者になれるんだぞ』^いというのです。陳倉の男は^い猶をすてて童子たちを追いかけてましたが彼らは雉に変身して飛んでいつてしまつたという事です。男がこれを先君に報告すると、その事を書類にして蔵に保管するよう指示されたということです。臣が今それを管理していますのでご覧いただけます。陳倉は太白山の西にありますから陳倉、太白山山近辺で狩をなさつてその形跡をよく調べてみられたらいかがでしようか」

穆公はその文書を取り寄せて見ると、廖の言う通りであつた。そこで廖に今回の夢を記述させて先ほどの文書と一緒に蔵に保管させた。

翌日、^い穆公は朝廷に出て家臣たちの挨拶が終わつた後、車を用意させ太白山へ巻き狩りに行った。そこから西へうねうねとの伸びて陳倉山に

続く。狩が始まるとある者が無傷の玉のように光彩を放つ一羽の雉を網で捕まえたがあつたという間に石に変わってしまった。でも色や輝きは変わらないので穆公に献上した。

「これがあの宝夫人です。雌を得たものは覇者になります。陳倉に祠を立てればきつと福が得られるでしょう」

内史廖がそうお祝いを言つたので、穆公は大変喜び、香湯で洗ひ錦のふとんを掛け玉の箱に収めて、即日大工と材木を集めて山上に祠を立てた。祠を宝夫人祠と名付け、山の名を陳倉山改め宝鶏山とし、春秋の二回祭祀を行うことにした。祭りの朝には山上に鶏の鳴き声が聞こえ、その声は三里以上も聞こえたという。一、二年に一度、十数丈の赤い光が見られ、雷鳴が殷々と聞こえることがある。この時が葉君が会いに来た時なのである。葉君は雄雉の神で南陽に別居しているという。四百余年後、漢光武帝が南陽に生まれ、兵を挙げて王莽を誅し、漢を中興した後漢皇帝となつたのは、雄雉を得たものは王になるという証である。

さて秦穆公はどのようにして晋の乱を平定したのであろうか、次回のお楽しみ。

王莽 前漢末平帝を毒殺し幼帝を立て摂政となるがその後自立し帝位につき新を建国する。復古主義政策が現実にはそぐわず在位十五年で赤眉の乱で殺される。

第二十七回

驪姫 巧妙に申生を謀殺

献公 死に臨み荀息に奚斉を託す

晋献公が虞、虢二国を併合した事を群臣たちは皆祝つたが、驪姫だけは内心面白くない。彼女は世子申生を虢討伐に出したかったのに里克が代行してまたもや勝つてしまつて目算がはずれ、しばらく手のつけようがなくなつてしまつたからである。そこでまた役者の施（以下優施ともいふ）と相談した。

「里克は申生の小傳だし功績はあるし位も高いのでとてもかなわないわ、どうすればいいかしら」

「荀息は璧と馬で虞と虢二国を滅ぼしその知恵は里克を上回りますし、功績も里克の下ではありません。荀息に奚斉様と卓子様の傳（教育係を兼ねた補佐役）を頼めば里克に対抗して余りあります」

驪姫は献公に頼んでついに荀息を奚斉、卓子の傳とした。そしてさらに施に、

「荀息を我われの与党にする事はできましたが、里克が朝廷にいたのではやろうとしている事が全部ばれてしまします。彼を追い出す方法はないかしら。そうすれば申生をやる事はできるんだけれど」

「里克は外見強そうに見えますが内面はかなり心配性ですから、彼に利害を説明すれば朝廷で中立の立場を守らせる事はできます。その後こちらに引き込んで利用すればいいのです。奥方様、特別料理をお作りいただけますか。彼は酒が好きですから、彼と飲みながら話をして腹を探つてみたいと思うのです。わが仲間に入れば大成功ですし、だめでもわ

たしが役者として冗談だといえは問題にはなりません」

驪姫は承知し施のために宴会の準備をした。

「大夫殿には虞、虢の間を駆け巡られ、苦勞様でございました。大夫殿に一献お酌をさせていただきますたく存じますので、一度わたしをお呼びただけでないでしょうか」

と言つて施は予め里克の了解を取つておいた。そして酒を提げて里克の家へ行つた。克とその妻の孟氏は客として西の席^西に坐り、施は改めて挨拶をし酒を勧め、傍で接待しながら笑いを添えて座を和ませた。座が盛り上がりつた頃、優施は立ち上がり長寿を祝つて舞を舞つて、孟氏に言つた。

「ちよつとお酒をいただけますか、ご主人のために新しい歌を歌おうと思ひますので」

孟氏はサイの角の杯に酒をついで施に与え、羊の肉を食べながら歌の題を聞いた。

「題名は『暇豫』^{かよ}といいます。大夫がこの歌をお聞きになりご王君にお仕えになれば永く富貴がえられるでしょう」と言つてちよつと喉をととのえ歌い出した。

有閑逸楽の人生ならむしろ鳥のほうがいい

人はみな茂れる木に集まるに あなたはどうして一人枯れ木に
茂れる木は賑わうも 枯れ木は斧でばつさり

どうして枯れ木に止まるのか

西席 古礼においては主の席は東側、客の席は西側にあつた。また天子の膳が天子に対して坐る場合も西側であつた。

歌い終わると里克は笑いながら聞いた。

「茂った木とか枯れ木というのは何の事なのかね」

「これは人に譬えているのです。母が夫人なれば子は君主に、すなわち幹は太くなり枝は茂り鳥たちはこれを頼りに集まります。これを茂った木に譬えています。母がなくなれば子は誹謗を受け災難が及び、即ち幹が揺るぎ葉は落ち鳥は棲まなくなります。これを枯れ木に譬えているのです」

そう言い終わると施は帰って行つた。

里克は内心非常に心配になり、食事を片付けさせ、しばらく一人で庭を徘徊した。夕方になつても夕飯を取らず灯芯をかき立てて(明るくして)床に就いたが寝返りばかりして寝られずあれこれ思い悩んだ。

「優施は主君にも夫人にも寵を得ていて禁中にも出入り自由だから今日の歌は必ず意味があるはずだ。未だ何かあるはずだから、夜が明けたらもう一度確かめてみよう」

しかし夜中まで待てず我慢できなくなつて側近に、

「話があるのでそつと優施を呼んで来てくれ」

と言つて呼びに遣つた。施は呼び出しの理由がわかつていたので急いで衣冠を調え遣いの者に随いて行つた。直接里克の寢所へ通された。里克は施に椅子を与え彼の膝をなでながら言った。

「先ほどの『茂る、枯れる』は大体の事はわかる、曲沃の人のことだろう。そなたが知っている事を隠さないで詳しく教えてくれないか」

「以前からお話申し上げようと思つていましたが、大夫が曲沃の人の傳ふですから怪しまれると思つて申し上げなかつたのです」

「わしに掛かる災を未然に教えてくれたのはわしのことを思つてくれている事だ。そなたを咎めるつもりはない」

施は里克の耳元で声を下げて、

「ご主君はもう夫人の願いをお聞きになり、太子を殺し奚齊けいせい殿を立てる計画でございます」

「もう計画を止めることはできないのか」

「夫人がご主君の寵愛を受けていられる事はご存知の通り、中大夫荀息がご主君の信頼を得ておられるのもご承知の通り。内外を夫人と中大夫が仕切つていれば、止めたくても止められないでしょう」

「主君の命とはいえ太子を殺すことはわしにはできません、しかし太子をかばつて主君にたてつくことも問題だ。中立を通す事はできるかね」

「それは大丈夫ですよ」

優施は帰って行つた。里克は坐つたまま夜明けを待つて、ちよつと氣になつて昔の書簡を取出した見ると、指折り教えてちよつと十年であつた。里克は驚いてため息をついた。

「卜筮の予言は本當にすごいな」

彼は大夫邴鄭父の家へ行き人払いを頼んだ。

「史蘇の卜筮の結果がいま現実になつたよ」

「何かあつたのですか」

「昨夜優施が来て、『主君が太子を殺して奚齊を立てようとして』と言ふんだ」

「あなたはどう返事されたのですか」

「わしは中立の立場になると言つたんだ」

「それは火を見て薪を加えるようなものじゃないですか。あなたは、

表面上そんな事信じないという振りをすべきですよ。相手方に信じていないと思わせれば、きつと氣にして極端な事はしなくなると思えますよ。あなたは太子側の太樹です。その地位で機会を見て殿にお考えを変更されるよう進言なさったらまだ可能性はありますよ。あなたが中立を保てば太子は孤立してしまいます。禍には立ち向かうべきじゃないですか」

「しまった、あなたともう少し早く相談しておけばよかった」

里克は車に乗るときわざと車から落ち、翌日は足の怪我を理由に参内しなかった

羊の肉と役者の舞 太子を葬る一曲の歌

喰うべし識見なき大臣 中立は争いを煽るなり

優施が復命すると驪姫は大喜びで、その夜献公に言った。

「太子は曲沃が随分長くなりました、私は彼の事が気掛りです。彼を一度都へ呼んでやつては如何でしょう。いつも太子の僻地勤務を解いてやりたいと思っていますのです」

献公は驪姫の話をきいて申生を呼び戻した。申生は呼び出しに応じて帰ってきて、先ず献公に会い挨拶をして、驪姫に挨拶をしに内宮へ行った。驪姫は食事を用意して、言葉では大変歓迎の意を示した。

翌日申生は歓迎会のお礼に内宮へ行った。驪姫はまた引き留めて食事を出した。その夜、驪姫はまた献公に向かって涙ながらに訴えた。

「わたしは礼を尽くそうと都に帰してあげたのに、申生がまさか私に非礼をはたらくとは考えてもいませんでしたわ」

「どういことだ」

「わたしが太子を昼飯にお引留めすると酒を催促し、生酔いになる

とわたしに『父が老いたらどうします』と言うのです。わたしは怒って答えませんでした。そうすると太子はまた、『昔わたしの祖父が年を取ってわが母の姜氏を父に残しました。今父が老いると残されるのは誰でしょう』などと言ってわたしの手を取ろうとするのです、わたしは拒みましたが。もしお疑いでしたら、わたしが太子と庭へ出ますから楼台からご覧になれば、礼を失した挙動が有るかどうかきつとお分かりになります」

「よし、わかった」

翌日、驪姫は申生に庭園へ遊びに来るよう誘った。驪姫は予め髪に蜜を塗っていたので蜂や蝶が次々とその髪に集まってきた。

「太子、蜂や蝶を追っ払って頂戴」

と驪姫が言うので申生は後ろから袖で払ってやった。献公がこれを遠方から見てみると本当に女をからかっているように見え、非常に怒って直ちに申生を誅殺しようした。驪姫は跪いて、

「太子は私が殿にお勧めして帰ってもらったのです。もし殿が太子を処刑なさったら、人は私の差し金と思うでしょう。しかも宮中のもやもやしたことは外部の人は未だ知りません。しばらく我慢しましょう」と言うので、献公は申生を曲沃に返し、密かに罪科を探させた。

数日後、献公が翟桓に巻き狩りに行っている時、驪姫と優施は相談して、

「『主君が、齊姜さまの夢を』覧になつて『飢えに苦しんでおられる』という事です。速やかにお祭りをしてあげて下さい」

と使者を出して太子に言つてやった。齊姜の祠は曲沃にもあった。

申生は直ちに祭壇を設け齊姜を祀つて、献公にその胙を送った。献

公はまだ巻き狩りから帰っていなかったの、昨は宮中にそのまま置かれてあった。六日後に献公が帰って来た。驪姫は酒に鳩毒ちんどくを入れ、肉に毒薬をつけて献公に出して言った。

「夢の中で斉姜さまが飢えに苦しんでおられるのを見て我慢できず、殿が外出したので太子殿に曲沃で祀るように申しました。その昨が届きましたがお帰りまで待つておりました」

献公が杯を取って飲むとしたとき、驪姫が跪いてさへぎった。

「外部からの酒食は試食が必要です」

「そうだな」

献公が杯の酒を地面にこぼすと、すぐ地面が膨れ上がった。献公は驚いて肉を一切れ犬に投げてやると、呑みこむや否や即死した。驪姫は信じられない振りをして、小内侍を呼んで嫌がるのを無理にその肉を食わせると目鼻口耳から血を吐いてこれも死んでしまった。驪姫は驚いて急いで堂を降りて、

「ああ、神さま。この国はそのうち太子のものなのに、殿はもうお年なのに、なぜもう少しの時間が待てずに殺そうなどと思ったの」

と涙を流して叫んだ。そして献公の前に跪き、むせながら、

「太子がこのような事をした原因はただただわたしと親子にございます。殿その酒肉をわたくしに下さい、むしろ私が殿の代りに死ねば太子の気持ちも晴れるでしょう」

と言つて酒を取って飲むとした。献公は急いで取返し、怒りで声も出なかった。驪姫は泣いて地に伏し、

「太子は無慈悲な人だわ、父親でさえ殺そうとするくらいだから他人ならなおさらだわ。殿が最初太子を廃すると言われた時わたしは反対し

ました。庭園での戯れでも殿は赦さないとおっしゃいましたが、わたしは説得しましたが、殿が危うく殺されそうになった今となれば、お止めしたのはむしろわたしの間違いでしたわ」

献公はしばらくしてやつと驪姫を手で支えて言った。

「立ちなさい。すぐにこの事を群臣に公開し犯人を誅殺する」

直ちに朝廷に出て大夫たちを集めて議事に入った。狐突はずっと閉門し外へ出ていないし、里克は足の怪我を理由に、祁鄭父は外出中という事で、三人は欠席したがその他は全員集まった。献公は申生の謀反を群臣に報告した。彼らは献公が以前から謀略を巡らしているのを知つていたので、皆顔を見合わせえて反論はしなかった。

「太子は無道なり、臣が討伐にまいります」

と東閼五とうかんごが言つたので献公は

「太子は將兵を抱え用兵が上手である慎重を期すように」

と注意して直ちに彼を大将として梁五りやうごを副将として二百乗の戦車を率いて曲沃に向かわせた。

狐突は門を閉じて外には出なかったが、絶えず部下に朝議のようすを探らせていた。『二五』が軍を動かすと聞き、曲沃へいくのだと判断し急使を出し太子申生に密報した。申生は太傅杜原款にこれを話した。

「昨ひもちぎは宮中に六日間も放置されていたのです。宮中で誰かが毒をいれたのは明らかです。皆わかつてはるはずですから道理をきちんと説明すべきです。手を束ねて死を待つてはなりません」

「殿は驪姫がいなければ安心できず食事もう喉を通らない状態だ。寵愛すでにここに至つているとすれば、いくら事情を説明してもわかつてもらえないだろう。益々罪は重くなる、たとえ説明できたとしても、殿は

驪姫を飛ばして彼女を罰することはできないし殿の心を傷つけることにもなる。きつぱり自尽した方がいい」

「とりあえず他国へ避難し、後図を計っては如何です」

「殿は君主殺害の罪で私を討伐に来られるのだ。父殺しの汚名を持つて国外に逃亡すれば、人々は私をフクロウのように残忍な男と見るだろう。かりに私が国外で真相を公表したとしたら、それは即ち父上が悪者だと言う事になるし、父親を誹謗し家内の醜い事を外に言いふらせば諸侯の物笑いの種にされるだけだ。国内で父母に容れられず、外国へ行つて諸侯に軽蔑されたのでは、困窮を重ねる事になり、それに死を恐れて生を食う事になってしまう。『君を憎まずこれ仁、難儀を重ねずこれ智、死を恐れずこれ勇なり』と言うではないか」

そこで狐突に返信を書いた。

申生は罪人であり、敢えて生を食うとは思いません。父君はすでにお年を召しておられ奚齊はまだ若く、国家は多難の時ですので、あなたに晋国の補佐をお願いいたします、申生は死してもあなたから頂いた実にも多くの事に感謝し、決して忘れるものではありません。手紙を書き終え、北面して父君に挨拶し首をくくり果てた。

太子の死の翌日東閼五の兵が到着した。申生がすでに自殺していたのを知って、杜原款を捉え献公に報告した。

「世子は罪は逃れられないと知り、臣が行く前に死んでおりました」
献公は原款を太子の罪の証人にしようとした。杜原款は大声で呼ばわった。

「天よ、冤罪なり。この原款死なずに捕虜になつて参りましたのは太子のお心を主君に明らかにするためであります。昨は六日も宮中に置い

てあつたのに毒がこんなに長い間変質しない事がありましたか」

驪姫は慌てて屏風の後ろから、

「原款は太子の補導ができなかったのです、何をなさつておられるのです、早く殺してください」

と献公に言った。献公は力士に命じて銅錘どうすい（大型ハンマー）のような古代の兵器で杜原款の頭を打砕いて殺した。君臣は皆でつと涙を流した。

梁五と東閼五が優施に、

「重耳、夷吾は太子と同じ仲間だ。太子が死んでも二人が生きていれば安心はできないぞ」

と言うと彼は驪姫にその話をして二人の公子を呼び寄せるよう言った。

驪姫は夜、また献公に泣きついて訴えた。

「重耳と夷吾は申生とグルで、申生の死をわたしのせいにして、毎日練兵して晋を襲おうとしているようですわ。わたしを殺すのを口実に実は謀叛を図っているのです。よくお調べ下さい」

献公はまだ信じられない。

翌日早朝近臣が報告してきた。

「蒲と屈の二公子がご挨拶のため閼所のところまでいらつしやつていましたが、太子の変を聞かれて直に引き返されました」

「挨拶もしないで帰るとはやつぱりグルだったのだな」

そこで、献公は寺人ぼてい、勃鞞を蒲へ公子重耳の逮捕に、賈華を屈へ公子夷吾の逮捕にそれぞれ派遣した。

寺人しにん 士良の宮廷内の近侍 寺は侍の意 宮中の侍女 女婢を監督する小臣 後に去勢された宦官が担当し、後の東漢当初より専ら宦官を指した。

それを知つて狐突（こつとつ）（重耳の母方の祖父）は次男の狐偃（こゑん）を呼んで指示した。

「重耳殿は駢脇（へんきやく）（二枚あばら骨）で腫が二つあり容貌もなかなかしつかりしておられる。日ごろから大變賢明な方だし将来大事を成せる方ですが、しかも太子が亡くなつた今、次はあの方でなければならぬ。そなたは大至急蒲（こも）へ行つて毛（こも）（狐毛）狐偃（こゑん）の兄と協力して重耳殿の出奔をお助けして後図を計りなさい」

狐偃は父の命を受け、昼夜兼行で蒲城へ行き重耳に会つた。

重耳は驚いて狐毛、狐偃と出奔の協議をしていると、早くも勃鞞（はくきやく）の軍が着いた。

蒲人は門を閉じて守ろうとしたが重耳は、

「君命だ、抵抗するな」

と命じた。勃鞞は蒲城（ほじやう）に攻め入り重耳の屋敷を包囲した。重耳と狐毛、狐偃は后園に逃げたが勃鞞は剣を振り上げ追つてきた。毛と偃は先に扉を乗り越えて重耳を助けようとしたが、重耳は勃鞞に袂（たもと）を捉まれ斬り付けられた。しかしすんでのことで袂を切られただけで脱出し、三人は翟国（ていこく）（重耳の母は翟の狐氏の娘）へ出奔した（この時重耳は十七才であつた）。勃鞞はしかたなく袂（たもと）を持って復命した。

翟君は青龍が城の上に蟠（ばん）居（き）している夢を見て事前に予想していたので、晋の公子が来たのを喜んで受け入れた。まもなく城下に小型の車が数輛相次いでやつて来て慌ただしく開門を要求している。重耳は追手かと疑つて城の上から矢を射させた。

「わたしたちは追手ではありません、晋の臣で公子に随従致したいと思つて参つたものです」

と城下から大声で叫んでいる。重耳が城に登つて見ると、首領格の一

人は趙衰（ちやうし）である。字は子余（しよ）。大夫趙夙（ちやうしやく）の弟で晋の大夫である。

「子余が来てくれるとは思ひもよらなかつたよ」

直に開門を命じて城に入れた。他にも、胥臣（しよじん）、魏犇（ゑいぶん）、狐射姑（こやこ）、顓頊（てんきつ）、介子推（かいしすい）、先軫（せんしん）、とみな知名人物であり、その他雑作業を受け持つ壺叔（こしやく）など数十人がいた。

重耳は驚いて、

「あなたたちは朝臣じゃないですかどうしてここに」

と聞くと、趙衰以下声をそろえて、

「主上は徳を失なわれ妖姫を盲愛（もうあい）して世子を手にかける有様で、晋は早かれ遅かれ必ず大乱が起ります。普段公子はお心広く下士にも優しい方ですので、一緒に緒致したいと考えたわけです」

と言う。翟君も感激し全真城（ぜんしんじやう）にいれ皆に接見した。

重耳はこれを聞いて感動し目に涙を浮かべて言つた。

「諸君は心を合わせて助けに来てくれた。この恩を忘れては本當に罰（うし）が当る」

魏犇（ゑいぶん）は腕（うで）まくりをして、

「公子が蒲城（ほじやう）に赴任（しゆにん）されて数年（すねん）が経ち、蒲人は皆公子のためなら喜んで死ぬるものばかりですから、翟（たい）の助けを借りて絳城（けいじやう）を襲撃（しやうげき）すれば、朝廷には憶懣（おくまん）が溜（たま）まっていますので必ず内応者（うちおうしや）が出て、君側の奸賊（けんそく）を除き国家も庶民（しよじん）も安心させる事ができます。逃亡（とうぼう）人などとは言わせませんよ」

といきまぐの、重耳が、

「そうは言つても、やはりそれは父君を驚かせることになって、亡命（むうめい）者のやることではない」

となだめた。魏嬖は猛者だから重耳が聞く気がないのをみて、

「公子は驪姫の輩を猛虎か蛇蝎のように畏れておられますが、そんなことでは大事の達成は何時の事でしよう」

と言つて齒ぎりして地団駄を踏んだ。狐偃は魏嬖に、

「公子は驪姫を畏れているのではなく、大義名分を大切になさっているんだよ」

と言つと魏嬖は黙つた。古人は重耳の亡命に随従した諸臣の盛んなる様子を次のように詩にしている。

蒲城の公子讒言に遭い、雷の如く西方に出奔

袋を担ぎ剣を佩び随う者列をなす

これらの英雄全て山西の賢士なり

山西の好漢競つて随い雲呑み雨吐き星を胸に

文臣は国の柱石 武將は勇躍虹を駆ける気概あり

君は知らずや趙成子の冬の日の暖かさを

見よや司空季の六韜三略経国済民の智

二狐は尊親にして臨機応変の策あり

魏嬖の武勇人中の虎 賈佗の力千鈞を軽しとす

顛頤意気軒昂迎合なし 率直な先軫腹蔵せず

介子推節操を守る孤高の人

百鍊琢磨いずれ甲乙つけ難き股肱なり

流浪の遍歴齊楚秦 常時寢食共にして

艱難の中に主臣の心定まりぬ 古来真の主には天佑あり

虎は風を呼び龍は雲を呼び 梧桐に鸞鳳集まりぬ
朝廷は正にもぬけの殻となりぬべし

重耳は幼少の頃から謙恭で仁厚、下の者にも礼を尽し、十七才の時から狐偃に父の如く仕え、趙衰に師事し、狐射姑を兄の如くに接してきた。凡そ朝野、国内外の知名な人とは好んで交際してきたので、彼が国外に逃亡して辛苦の中にあつても英傑がつぎつぎ慕つて集まつてきたのである。

一方大夫卻芮と呂飴甥は腹心の契りを交わし、號射は夷吾の母方の舅で、この二人だけは屈に出奔し夷吾の方に就いた。夷吾は彼らから、賈華の軍がまもなくやつて来ると聞かされ、直ちに兵を集め城の防衛を計つた。賈華はもともと夷吾を逮捕するつもりは無く、屈城に到着するとわざと包囲を緩め使いを出して、

「公子、急いで逃げてください、晋の兵が続いてやつてきます、そうなるとても守りきれませんから」

そつと夷吾に知らせた。

「重耳兄が翟に居るから翟へ行くのはどうだ」

と夷吾は卻芮に相談した。

「主君は二公子が共謀しているから討伐するのだとはつきりおつしやつていました。今別々に出ても同じところへ逃げれば、驪姫が言つた通りになつてしまいます。晋の兵は翟へ行くでしょうから、梁がいいでしょう。梁なら秦に近いし秦は強く姻戚関係もありますので、ご主君が亡くなつた後その力を借りて帰国することも可能です」

卻芮の意見に従つて夷吾は梁へ行くことにした。賈華は追撃が間に合

わなかつた風に装つて逃げられたと復命した。

献公は大変怒り、

「二公子の一人も捉えられないで何をしていたのだ」

と言つて賈華かかを捉えて斬ろうとした。邳鄭父ひていは、

「殿は以前、蒲ほくつ、屈くつそれぞれに城を築かせ兵を集めて防衛を強化させておられますので、賈華の罪とばかりは申せません」

と賈華を弁護し、また、梁五も、

「夷吾殿は凡才で、思慮が足りませんが、重耳殿は賢者の評判が高く、多くの者が彼に随つており朝堂はもぬけの殻です。しかも翟はわが仇敵でもありますので、翟を討つて重耳殿を除き将来の禍根を断つべきです」と言うので献公は賈華を赦し、勃鞞はつぎを呼び上げた。勃鞞は賈華が殺されそうだったことを聞いて心配になり、自ら進んで翟討伐を願ひ出て認められた。

勃鞞の兵が翟城を攻めて来ると翟君も采桑に布陣して二ヶ月余り堅守した。

「父子の恩愛は絶つことはできないものです。二公子の罪過もはつきりしているわけでもありませんし、すでに国外へ逃避しているのですからこれを無理に追撃して殺すのはほとんど意味のないことではないでしょうか。しかも翟に確実に勝つてという保証ありません。徒に内戦が長引けば隣国の笑いのものです」

と邳鄭父が進言すると献公もいささか気持ちを入れ替え勃鞞に撤兵を命じた。

献公は多くの公子たちの殆どが、重耳、夷吾派であることを心配し、将来必ず奚齊けいせいの邪魔になると考え全員国外に追放した。国内に晋の公族

をいなくして、奚齊を世子に立てた。百官は『二五』と荀息以外は皆切齒せつし扼腕やくわんし、病氣や老齡を理由に官を辞していった。周襄王元年紀元前六五一年、晋獻公二十六年のことである。その年の九月、献公は葵丘の会合に出掛けたが途中で病に罹り帰国すると、驪姫は献公の足元で泣いて訴えた。

「殿は公族を全て追放されたわたくしの子を世子に立ててくださいましたが、もし殿が亡くなられたら、わたしは女だし奚齊は幼いので公子たちが連合し内外呼応して攻め込んで来たら母子は誰を頼りにすればいいのでしょうか」

「心配することはない。太傅荀息は忠臣だから二心はない。わしが幼君を彼に託しておこう」

献公は荀息を枕元と呼んで質問した。

「士の人格としては忠信が基本だというが、そなたはどういう事を忠信であると考えてるか」

「主人に力を尽くすことを忠といい、死んでも約束を違えない事を信といいます」

「わしは太子をそなたに託したい。よろしく頼むぞ」

荀息は叩頭して答えた。

「死力を尽くしてお守りいたします」

献公は思わず涙をこぼした。驪姫は幕の外で声を上げて泣いた。

数日後献公は亡くなった。驪姫は奚齊を抱いて荀息に預けた。年は十才であった。荀息は遺命を守つて奚齊の名で葬儀を主宰した。驪姫も遺命により荀息を上卿に、梁五、東閼五を左右の司馬に任じ、軍を率いて国内を巡行し、非常事態に備えた。国政は事の大小にかかわらず全て

荀息が執り行つた。翌年新君の元年とし諸侯に訃報を流した。

さてこの奚斉の君主の地位は如何になりますか、それは次回のお楽しみ。

第二十八回

里克 二人の孤主を殺し

秦穆公 晋の乱を平定す

荀息は公子奚斉を擁立し、百官みな葬儀に参加したが狐突だけは重病を理由に出席しなかった。

里克は密かに祁鄭父にいつた。

「どうとう子供を立てたな、それじゃ逃亡中の公子はどうなるのだ」「これは荀息のやつたことだから、とりあえず彼の考えを探ってみましょう」

二人は荀息の屋敷へ行つた。荀息は快く二人を招き入れた。

「主上がなくなつても、重耳殿夷吾殿の両公子が国外におられます。叔殿（荀息）は上卿じゃないですか。長子の公子を君主にしないで主上お気に入りの下賤な女の子を立てても誰も随いて来ませんよ。三公子を支持する人は奚斉母子を骨の髄まで恨んでいますが主上に遠慮していただけです。これを知れば彼らはきつと事を起し、秦や翟は外から援軍を出し、国内にも内応者が現れるに違いありません。これを防ぐことができませんでしょうか」

「わしは先君の遺託を受けて奚斉殿をお助けしているわけで、奚斉殿はわが主君なのだ。これ以外の事は考えられん。もしわしの力が及ばなければ死をもつて先君にお詫び申し上げるつもりじゃ」

「死んでも何の役にも立ちません、どうして改めようとはなさらないのです」

「わしは先君に、忠信の考え方を申し上げて奚斉殿を託されたわけで、

たとえ無益であつても先君との約束を違へることはできん」

二人は再三説得したが荀息の意思は固く遂に考えを変えさせる事ができずに辞去した。

「叔（荀息）を同僚の誼で説得したのに、かたくなに聞こうとしない。どうするか」

「彼は奚斉殿、我われは重耳殿とそれぞれの考えがあるのですから仕方がないですよ」

そこで二人は密約して腹心の武士を変装させ侍衛に紛れ込ませ、奚斉が靈堂にいた隙に刺し殺した。優施がそばに居て剣を抜いて助けようとしたが彼も殺された。一瞬の大乱である。荀息は先君の靈前に居てちやうどそこになかったので、変を聞いて驚き、急いで戻つて来て奚斉の死体を抱いて大声で泣いた。

「遺命によつて奚斉殿を託されていながらお守りできなかったのはわたしの責任だ」

と言つて頭を柱にぶつけて死のうとした。驪姫は急いでそれを止めさせ、

「先君の埋葬もまだ終わつていないではないですか、あなたはそういうことも考えられないのですか。奚斉が死んでも卓子（たくし）がいます。卓子を立てればいいのです」

と荀息に言つた。荀息は靈堂の守護に過失があつた者数十人を処罰し、大臣たちを召集し會議を開いて僅か九歳の卓子の君位継承を決定した。里克（りき）と邳鄭父（ひてい）は知らないふりをして會議には参加しなかつた。

「奚斉殿が殺されたのは里克と邳鄭父が前太子申生の報復のためにやつたに違いない。會議に出てこないのが何よりの証拠だ。やつらを討

たせてください」

と梁五（りやうご）が言つたが荀息は、

「二人は晋国の老臣だからその支持者も多く、かなりの大夫が彼らの門下生だから二人を片付けるのは非常に難しい。取敢えずこの件はそつとしておき、彼らを安心させておいて、葬儀を済ませ元号を変えて新君の位を安定させてからゆつくり考えた方がいい」

と言つ。梁五は退朝後東閤（とうかく）五に言つた。

「荀息は謀略というものがなくて、やる事が回りくどくて遅いわ。とてもじゃないが彼を当てにはできん。里と邳は仲間だが、里克のほうが前太子の冤罪の復讐心が強いから、里克をやつてしまえば邳はきつとひるむよ」

「里克をどうやってやるんだ」

「近く葬儀がある。東門に伏兵をおいておいて、葬送の時突如彼を襲わせる。その時は彼といえども単なる一人の男でしかないじゃないか」

「よし、それで行こう。わしの食客（きやく）（食客として抱える家来）に屠岸夷（とがんでい）という三千鈞を担いで凸凹道（とつこうみち）を走る力持ちがいる。爵禄で釣れば彼は使える」

話は決まり屠岸夷を呼び出して話をした。ところが夷は以前から大夫（だいふ）（すいせん）驪過（りか）と親しいのでそつとその謀事を彼に相談した。

「この件、どうしたらいいでしょう」

「故太子の冤罪は国中悲憤を感じない人は居ない。これは皆驪姫（りき）母子の仕業なんだ。今、里、邳の二大夫は驪姫の仲間を殲滅して公子の重耳殿（じゆうじ）を君主に迎えようと頑張っている。これは義拳（ぎけん）なんだ。そなたがもし佞臣（ねいしん）を助けて忠に仇するような事をしたら、それは不義に加担することにな

なる。わしらもそなたを絶対に許さないし、そなた自身万代に悪名を残すことになるんだぞ、そりや、まずかうが」

「断わるのにはどうしたらいいでしょう」

「断ればまた別な者に頼むだろうから、承諾したふりをして逆に彼らを誅殺すれば、そなたの功となる。富貴と名声を得るのと不義により命を捨てるのとどちらを取るかね」

「大夫のおっしゃるとおりですね」

「間違いはないね」

「お疑いでしたら盟約を結ばせてください」

二人は鶏を犠牲にして盟約を結んだ。

夷が帰った後驪過は邳鄭父にこのことを報告し、鄭父はそれを里克に話して、それぞれ家兵を揃えて葬送の日に一斉に立つことを決めた。

その日になった。里克は病氣と称して葬儀に参加しなかった。屠岸夷は東閼五に、

「諸大夫がみな葬儀に参列しているのに里克だけが出てこないというのは、天が彼を始末しようとしているのです。わたしに兵三百をお預けいただければ彼の屋敷を包囲して殲滅したいと思いますが」

東閼五が喜んで兵三百を与えると、屠岸夷は形だけ里克の屋敷を包囲するふりをした。里克はわざと墓所へ人を遣つて荀息に変事を知らせた。荀息は驚いて訳を聞いた。東閼五は、

「里克が隙に乗じて乱を起したようですが、家兵に守らせています。うまく行けば大夫の功ですし、だめでもご迷惑はおかけしません」

荀息は胸にとげが刺ささったような不安で、早々に葬儀を切り上げ、直ちに『二五』に兵を付け加勢に行かせ、自分は卓子を連れて朝堂で吉

報を待った。東閼五の兵が先ず東門に着いた。屠岸夷は報告するふりをして彼に近寄りきつと手を伸ばし首をひねりちぎったので士卒はこれを見て騒ぎ出した。屠岸夷は大声で叫んだ、

「公子重耳殿が秦、翟の軍を率いて城外まで来ている。わたしは里克大夫の命を受けて、太子申生殿の冤罪をすずぎ仇を討つために奸佞の輩を誅殺し、公子をお迎えしようとしている。われに随う者はついて来い、随う気のない者は去れ」

兵士たちは重耳が君主になると聞き、みな大喜びで付き従った。梁五は東閼五が殺されたと聞き、急いで朝堂へ帰り、荀息と一緒に卓子を奉じて出奔しようとした。しかし屠岸夷に追われ、里克、邳鄭父、驪過も家兵を率いて追つて来た。梁五は逃がられず自刎しようとしたが、屠岸夷に片手で捉えられ里克に一刀両断された。その時左行、大夫共華も家兵を率いて加勢に来て一斉に朝門に攻め込んだ。里克は剣を離さず先行し皆彼に従った。側近連中は皆恐れ散つていったが荀息は顔色を変えず左手に卓子を抱き右手で袖を上げて子供をかばった。卓子は怖がって泣いた。

「子供に何の罪があるのだ、子供を殺すくらいならわしを殺して、この先君の血は絶やさなくてくれ」

「それを言われるなら申生殿はどうなのだ、申生殿だって同じ先君の血を受けているではないか」

里克はそういつて屠岸夷を振り返り、

「左行 春秋時の爵、軍制の名 中右左三行の二。晋侯は上中下三軍のほかに三行という軍を設けて狄人に備えた 平凡社 春秋左氏伝 傳公八年 竹内照夫訳 実質六軍であるが、王軍は六軍諸侯は三軍という決まりに配慮したもののみ 訳者

「早くやれ」

というとは彼は荀息の手から卓子を奪い取り階段に投げつけた。ギヤと一声卓子は即死した。荀息は怒って佩劍を抜き里克に斬りかかったが、これまた屠岸夷に斬り殺された。宮中にどつと兵がなだれこんで行った。驪姫は最初は賈君の宮へ逃げ込もうとしたが彼女は門を閉じて入れなかった。その後宮の花園へ逃げ橋の上から池に飛び込んで死んだ。驪姫の妹は卓子を生んだが特別な寵愛も受けておらず権力をもてあそぶこともなかったので殺さないで別室に閉じ込め、『二五』および優施の一族は根絶やしにされた。髯仙が驪姫を嘆じた詩がある。

讒言で申生殺したるは何故か

幼き吾が子に国を与えんとの母の愛か

一朝母子共に死す 馬鹿けたあの時の暇豫の歌^三

また、荀息が主君の狂った命令に盲従して庶子を立てようとした事を、死んで当然と詠われている。

臨終の君の乱命に随うべきか 頑迷なり死して忠たらんとは

璧馬の智謀今はいずこ 君臣手を束ねし空しき一幕

(璧馬の智謀 至玉の璧と名馬で虢公虞公を離間させ併合した謀)

里克は百官を朝堂に集めた。

「妾の子は除きました。公子の中では重耳殿が最年長で当然君主を継がれるべきです。大夫の皆さん、同意なさる方は、署名願います」

「これには狐老大夫(狐突)の署名もないとためでしょう」

^三 暇豫の歌 驪姫が里克を申生から離反させるため優施に命じて里克に歌で聞かせた歌(第7回)

と祁鄭父がいうので里克はすぐに迎えの使者を出したが、

「わたしは二人の息子を重耳殿に随従させていますので、お迎えに賛成すれば弑逆に加担したことになります。突はもう年なので諸大夫が決めになった事に従いましょう」

と、婉曲に断った。

里克が一番に署名し、次に祁鄭父、以下共華、賈華、驪過等合計三十数名が署名した。里克は直ちに屠岸夷にその書面を持って翟へ行かせ公子重耳をお迎えするよう命じた。

重耳はその書類に狐突の名がないのを見て変に思った。

「こうしてお迎えが来ているというのにお帰りにならないのは、何時までも居候を続けられるおつもりですか」

と魏嬖が気色ばむと、重耳は、

「わからないか、公子はまだまだたくさんいるんだ。わしでなければならぬ理由はない。しかも幼い公子が二人も殺されたばかりでそちらの支持者も未だまだいる。入国して搜索しても簡単に掃討できるものではない。天佑があればそのうち機会があろう」

となだめた。狐偃も葬儀に乗じた反乱で大義名分がないから行くべきではないと言った。という事で使者には謝って断わる事にした。

「重耳は父の罪を得てあちこち逃げ回っている者です。生きておられる時にこの機嫌伺もできず、亡くなっても葬儀に出席して弔うことさえできなかつたのに、乱に乗じて国を取るといふような事はできません。大夫の皆さんに、別な公子を擁立されるようお伝え下さい。重耳はどうしてもお受けできません」

屠岸夷は仕方なくそのように復命した。里克はもう一度重耳に使者を

出そうと思つたが大夫梁繇靡が別な意見を言つた。

「公子であれば皆君主になる資格があります。夷吾殿を迎えたら如何です」

「夷吾殿は性格が貪欲で残忍です。貪欲な人は信頼できないし、残忍であれば皆が親しめない。そういう意味では重耳殿の方が適任なのですから」

「でも他の公子たちよりはいいのではないですか」

大勢もその方向なので里克は仕方なく屠岸夷を梁繇靡につけて梁へ夷吾を迎えにやつた

さて、公子夷吾であるが、彼は梁へ亡命して梁伯の娘を妻にし圉という息子が一人いる。梁で気楽に毎日晋国内で事が起こるのを期待しそれに乗じて帰国しようと考えていた。献公が亡くなるとすぐ、呂飴甥に命じて屈城を襲撃してこれを占拠した。荀息は国内問題にかまけてそれを詰問する余裕がなかった。奚齊、卓子が殺され、諸大夫が重耳を迎えようとしているというのを呂飴甥の手紙で知り、夷吾は號射、卻芮と相談し、重耳との晋爭奪を考え始めていた。ちょうどその時梁繇靡が迎えに来たので大喜びし、

「天は重耳から国を取り上げ、われに与えんとするものなり」

と思わず喜びが顔色に出た。しかし卻芮は夷吾が即答するのを引き止めて次のような進言をした。

「重耳が国を手に入れたくないわけがありません。断つたのはきつと何か計略があるのです。簡単に信じてはなりません。そもそも、国内にいて外国から主君を迎えようとする場合、皆大きな欲を持っているもの

です。現在晋の臣たちは里克、祁鄭父の言うがままですので二人に賄賂を贈つて利で釣るべきです。それでもまだ危険は有ります。虎穴に入るには必ず利器が必要です。強国の力を借りる必要があります。晋の隣国といえは秦が最強です。秦に使者を出し頭を下げ入国の援助をお願いするのです。秦が了承すればすぐにも入国できます」

夷吾はその意見に従つて里克に汾陽の田百万、祁鄭父に負葵の田七十万を与える約束を書類にし封緘し、これを持たせ先に屠岸夷を帰して報告させ、梁繇靡には秦に手紙を届けさせ、晋の諸大夫が夷吾を歓迎している旨を説明させた。

秦穆公は蹇叔と相談した。

「晋の乱はわしが平定することになっている。天帝が先に夢でお示しになっている事だ。重耳と夷吾はどちらもなかなかの公子と聞いているので、どちらかを選んで入国を援助しようと思っている。どちらがいいだろうか」

「重耳は翟にいるし夷吾は梁でどちらも非常に近いですから、献公の弔問という名目で使者を出して二公子の人柄を見せたらいかでしよう」

穆公はその意見に従い公子繫を使者にして先ず重耳を、それから夷吾という順で弔問させた。

公子繫は翟へ行き重耳に会い秦君の名でお悔やみを言つた。挨拶が終わると重耳はすぐ退出してしまつた。

繫は従者に伝言を頼んだ。

「公子が機を見て帰国なさる時は、わが君は援助いたしたいと申しております」

重耳はこれを趙衰に話した。

「国内から歓迎されているのを断っているのですから、外の助けを借りて入国するというのはうまくないでしょう」

重耳は使者に会って、

「主君の命に背き逃亡中のこの重耳にわざわざお悔やみのご使者を賜り感激に堪えません。逃亡者には何もありませんが、親子の情だけは大切にしたいものです。父が亡くなってしまった今どうしようもありませんが、身分不相応な事は考えておりません」

そう言つて大声で泣き、叩頭して退出し、自分のことに就いては一切口にしなかった。公子縶は重耳が乗つてこないのので、賢明で私心の無い素晴らしい人物だと内心感心して帰った。

次に梁国の夷吾を訪ね同様にお悔やみを述べた。挨拶の後、

「大夫はご主君の命でお悔やみにおいでいただきましたが、他に何かあるのでしょうか」

と夷吾はたずねた。縶はこゝでも、

「機を見て帰国しようとなさるときは……」

と水を向けると夷吾は大喜びで叩頭して感謝した。夷吾は退室して郊外に言つた。

「秦はわしが帰国するのを認めたよ」

「秦がそういうのは、我われから何かを巻き上げようとの魂胆でしょう。土地を大きく割譲したほうがいいですよ」

「大きく割譲したら晋の損が大きいではないか」

「帰国しなければ、公子も梁山の一匹夫に過ぎません。晋の寸土も持つことはできませんよ。他人のものです何を惜しまれますか」

夷吾は再び公子縶に会つて、その手を握り、

「里克、邰鄭父二人ともわたしを迎えてくれていますので彼らには厚く褒賞を与えてやりました。仮にご主君のお力で国主となることができましたら、ご主君が東遊される場合に便利のように、東は虢の地まで、南は梁山まで、内側は梁の境界までの黄河以西の五つの城市を差し上げ、ご主君のご恩の万分の一でもお報いしたいと考えています」

と言つてすぐ約束証書を作り公子縶に渡し非常に満足するようなようすであつた。公子縶に遠慮する気配が見えたので夷吾は更に加えて、

「秦君に宜しくお伝え下さい、小生、公子のご好意を決して忘れません」

と言つて公子縶に黄金四十鎰と玉の帶飾り六対を渡し、縶はこれを受取つた。史臣の詩がある。

重耳父を亡くした憂い有り 夷吾は国を得て嬉々と喜ぶ

弔問受ける心中を窺えば 両者の品性明らかなり

縶は穆公に復命し、両公子に会つたようすを縷々説明した。

「つまり、重耳のほうで夷吾よりはるかに賢明だと言つことだな。よし、それじゃ重耳を帰国させよう」

と穆公が言つと縶は諫めて言つた、

「殿は晋君を立てるのに本当に晋のことを心配なさつておられるのですか。天下に覇を称えるのはお諦めになるのですか」

「晋とわしの覇業と何の関係があるんだ。わしは天下に名を成したい気持ちは変わらんよ」

「殿が本当に晋のことを心配なさるのでしたら賢君を選ぶべきです。」

ただ、殿が天下に覇業を成そうお考えでしたら賢者は置くべきではありません。晋国に立派な君主を立てると言う事はとりもなおさず、我々にとつては強大な敵国ができると言う事です。馬鹿殿が立てば我国より強くはならないでしょう。どちらが有利でしょうか」

「なるほど、そなたの話で目が覚めた」

穆公は公孫枝に戦車三百乗を与え、夷吾を帰国させた。穆公夫人は晋の故世子申生の妹で穆姫^{ぼくき}といい、幼い頃獻公の二番目の妃賈君^{かくん}に育てられた大変賢徳な人である。公孫枝が夷吾を晋へ帰国させると聞き、夷吾に手紙を書いた。

公子が晋へ帰り晋君になつたらきつと賈君を大切にしてあげて下さい。内乱の時出奔した公子たちは皆冤罪です。葉が茂れば幹も栄えるといひます。公子たちを帰国させてやって下さい。それが晋の守りを固めることにもなるはずです」

夷吾は穆姫の気持ちを大切にしこれを読み直し一つ一つ心に留めた。この頃、斉桓公は晋の内乱を聞いて、これを併合しようと諸侯と謀り、自ら高梁まで出てきた。しかし秦軍が出てきており、周恵王も大夫王子党を晋に派遣していたので、方針を変更して、公孫隰^{しやくしやく}朋を派遣し周、秦両軍に会つて共に夷吾の君位継承を援助することにした。呂飴甥^{りょいせう}も屈城から出てきた。桓公は結局斉に帰った。里克、邳鄭父は国舅狐突に全般責任者になつてもらい、群臣を引き連れ君主の車を準備して晋国の境界まで迎えに出た。夷吾は絳都に入り即位し恵公となり、すぐにその年を元年とした。周襄王二年（紀元前六五〇年）のことである。晋国の人々は今もともと重耳の賢明さを慕つて君主になつてもらいたかったのだが、夷吾ということになつて大いに失望したものである。

恵公が即位しその子圉^{ぎよ}を世子とした。狐突、虢射^{かくしや}を上大夫に、呂飴甥^{りょいせう}、卻芮^{げくぜい}を中大夫に、屠岸夷^{とがに}を下大夫に任じその他のものは改めて現職を任じた。梁繇靡^{りやうようび}を王子党の帰国に随行させ周へ派遣し、また韓簡^{かんかん}を隰朋^{しやくぼう}の帰国につけて齊へ派遣しそれぞれ協力に対し感謝の意を表した。秦の公孫枝^{しんし}は河西五城を受取るために晋に残った。だが恵公は五城の割譲がもつたいなくなり群臣と協議した。虢射は呂飴甥に目配せをし次の様に言わせた。

「殿が秦に与えるとおつしやつたのはまだ君主でない時でした。現在、国主としてのお考えで譲れないとおつしやれば秦はどうすることもできないでしょう」

里克はこれに反論する。

「殿は国主になられたばかりで強い隣国の信頼を失うことは好ましくありません。ここは約束を実行すべきです」

卻芮はこれに対し強硬論を述べた、

「五城を秦に割譲するということは晋はその半分を失うという事です。秦がいくら強いといつても我われから五城を抜くことはできません。しかも、先君が大変苦勞してやつと手に入れた土地です。これを放棄することはできません」

「そういうことがわかつていながら何故そういう約束をしたのですか。約束して実行しなければ、秦を怒らせることになります。先君は曲沃から国を興し土地もちつげなもので過ぎませんでした。が、国政の管理を強化することによって小国を併合しながら大国に上がつてこられました。政^{まつりごと}をきちんと行い隣国と友好を図っていけば、五城を失う事はそう心配する事ではないのではないのでしょうか」

卻丙は里克のこの正論を口を極めて批難した。

「里克殿が言うのは秦のためではなく、汾陽の田百万がもらえなくなるのを心配して秦を例にとつて言っているだけです」

邳鄭父は里克に腕を押し合図をしたので里克はそれ以上言わなかった。

「割譲しなければ信を失うし、すれば国力を弱めてしまう。一、二の城を与えてお茶を濁すわけにはいかないか」

「一、二城を譲ったところですべての信頼を回復できるわけはありませんから、ここは秦に戦いを挑むべきで割譲に就いては断つたほうがいいです」

呂飴甥がそう言うので恵公は彼に秦への断り状を書かせた。内容は以下の通り。

わたくし夷吾はご主君に河西五城の割譲をお約束いたし、おかげさまで帰国し社稷を守る事ができました。ご主君のご好意を思いますと直ちにお約束を実行いたしたく存じますが、『土地は先君が宮々と作り上げてきたもので、国外へ逃亡中に勝手に他人に譲る約束をするのはおかしい』と大臣たちが申します。わたくしもこれにとでも対抗できません。決してご恩を忘れるものではないと思いますが、事情ご諒察の上、何卒しばらく実行を猶予いただきたくお願い申し上げます。

「誰か秦へ謝りに行ってくれる者はいないか」

邳鄭父が名乗り出た。恵公はこれを許した。

もともと、恵公は帰国するとき邳鄭父にも負葵の田七十万を与える約束をしていたが、恵公は秦との約束を守らない位だから、里、邳との

約束を守る気などあるわけがない。鄭父は口には出さないが内心非常に不満を持っていたので、今回の使者の役を進んで受諾し秦君に訴えるつもりだったのである。鄭父は公孫枝に随つて秦へ行き、穆公に拝謁し国書を提出した。

穆公はこれを見て机を叩いて怒り、

「わしは初めから夷吾は君主の枠ではないとわかつていたが、くそ、やつぱりやつに騙されたか」

と激高して邳鄭父を斬ろうとした。公孫枝がこれを見て穆公を引き止め、

「これは邳鄭父の罪ではありません、彼をお許しいただきとう存じます」

「わしに背かせるように夷吾をそそのかしたのは誰だ、そいつを手打ちにしてやりたい」

「お話がございます。どうかお人払いをお願いいたします」

邳鄭父がそう言うのと、穆公は幾分和らいだ表情になり左右のものを下からせた。鄭父に拱手の礼をとり話を求めた。

「晋の諸大夫はご主君の恩を感じていないものではなく約束を守るべきだと申しておりますが、呂飴甥と卻丙の二人だけが反対しているので。晋へ使節を出していただき、うまく二人を秦国へ呼び出して処刑し、重耳殿を帰国させていただければ、わたしと里克が夷吾を追放し内応しようと考えておりますが、如何でございましょうか」

「妙案だな、もともとそれがわしの本心だったのだ」

そこで呂飴甥と卻丙を誘い出して処刑するために、大夫冷至を邳鄭父の帰国につけて晋へ親善使節の名目で派遣した。

呂、卻の運命や如何に、それは次回のお楽しみ。

第二十九回

晋惠公 群臣を大誅殺し

管夷吾 病床で後任宰相の是非を論ず

里克は本来公子重耳^{ちゆうじ}を君主に迎えるつもりであつたが、どうしても承諾せず、逆に夷は多額の賄賂を褒賞に帰国を求めてきたので仕方なく彼を迎えることにした。しかし惠公は即位後、その約束を全く反古にしてしまったのである。しかも、驪射^{かきしや}、呂飴甥^{りよいせう}、卻芮^{けきせう}という個人的な家臣を重用し、代々の旧臣をみな疎んじたので里克は内心不満であつた。秦との約束の土地割譲を実行すべきだと惠公を説得した時も、明らかに正論だが、卻芮^{けきせう}に里克は自分の利益を守るために言っていると反対され、むかむかとしたが我慢して反論しなかつた。

退朝後も恨みが表情から消えなかつた。卻鄭父^{ひていは}が秦へ使いすることに、卻芮^{けきせう}は里克との謀略を恐れて密かに探らせた。卻鄭父も卻芮^{けきせう}たちに目を付けられる事を配慮して里克に挨拶をしないで出発した。里克は卻鄭父と話をしようと彼を呼びに遣つたがすでに出発したあつた。里克は自ら追いかけたが間に合わなかつた。このことはただちに卻芮^{けきせう}に報告された。芮^{けきせう}は惠公に会つて、

「里克は殿から彼の政治権力を取上げられ、汾陽^{ふんやう}の田ももらえないので恨みをもつて、卻鄭父^{けいていふ}が秦へ行つたのを自分で追つて行つたようです。きつと何か謀略があつたのだと思います。里克は昔から重耳と親しかつたと聞いています。殿の即位は彼の本心ではないので万一重耳と謀つて内応されたら防ぎようがありません。死を賜つて後顧の憂いを絶つておくべきと考えます」

「里克はわしには功積がある。何と言つて殺すのだ」

「克は奚齊と卓子を弑逆し、先君の遺命を受けた荀息を殺しています。これは大罪です。帰国に功積があつたというのは私恩に過ぎません。弑逆罪を追求するのは公義（公の道徳）であります。明君は公義を私恩に優先するものです。臣に討伐をお命じください」

「よし、行け」

惠公は里克討伐を許した。

卻芮は里克の屋敷へ行き、里克に惠公の意を伝えた。

「晋侯のご命令で参りました」

『あなたが居なければわたしは君主にはなれなかつたのであなたの功績は忘れることはできない。しかし、あなたは二人の君主を弑逆し一人の先君の遺命を受けた大夫を殺しました。わたしは先君の遺命を奉じて、あなたの私に対する功が絶大である事を勘案しても先君への大義を捨てることはできない。どうか自裁されますよう』
というのが晋侯のお言葉です」

「臣がその大義とやらを捨てなければ殿は君主にはなれていない。罪を着せようとすれば口実はいくらでも有る。命令はわかりました」

里克はそう言つて、佩剣を抜き地を踏んで、

「神さま冤罪です、忠節を尽くしてきましたのに罰せられるとは。何の面目あつて荀息に会えましようか」

と叫んで自刎して果てた。卻芮が復命すると惠公は非常に喜んだ。髯仙は詩に言う。

夷吾を迎えし直後に死を賜う あの時何ゆえ申生を助けざる
中立の下策なりしを今知れり 名声はこれ荀息に及ばず

群臣の中には惠公が里克を殺したことを不満に思うものが多かった。祁華、共華、賈華、驪過たちはみな不満を口に出していた。惠公は彼ら除こうとしたが卻芮が引き止めた。

「祁鄭父は秦にいます。今余り誅殺を行うと叛心を引出すようなもので好ましくありません。しばらく辛抱ください」

「帰国の際、秦夫人に、賈君の面倒を見ることと、公子たちを帰国させる事を頼まれているが、これはどうだ」

「公子たちが君位を争おうとしないものがあるでしょうか。帰国を許してはなりません。賈君の面倒を見て秦夫人の顔を立てておけばいいではありませんか」

惠公は賈君に会いに行つた。賈君の容色は未だ衰えていなかったもので惠公はふと淫心を起した。

「秦夫人からあなたを喜ばせて差上げなさいと言いつかつて参りました。いやだとおっしゃらないでくださいな」

と言つて賈君を抱こうとすると、宮女たちは皆笑みを浮かべて下つて行つた。賈君は惠公の威を恐れて辛抱して彼の言いなりになった。事が終わると賈君は涙ながらに言つた。

「わたしは不幸にも先には先君に先立たれ、今またあなたとこういうことになつてしまいました。わたしの身は何も惜しくはありませんが、亡くなつた太子申生さまの冤罪をあなたに晴らしていただいて、秦夫人（申生の妹）にお会いした時に、この貞操を守れなかつた罪償いしたいのです」

「驪姫の二人の子供が殺されたことで太子の冤罪は晴れたんじゃない

いですか」

「故太子は今なお新城で粗末な葬儀のままだと聞いています。墓をお移して差上げおくりな諡をお付けすれば数々の冤罪を受けた魂も安らげると思いますが、それが人々が期待している事でもあると思うのです」

恵公はこれを認可し、郤内の従弟げきない郤乞を曲沃へ遣つて土地を選び改葬させた。そして太史に諡を検討させ、大変親孝行だったので『共世子』という諡にし、更に狐突を新しい墓へ遣つて祭りを取行わせ諡の報告をさせた。

郤乞は曲沃へ行き、棺その他の埋葬用の諸用具は特別にあつらえ全てきちんと整えた。申生の遺体を掘り起こすと、顔色は生きてるように張りがあつたが、臭気が鼻を突いて近寄れない。役人は臭くて鼻をおおひ吐き気をもよおして仕事にならない。

郤乞はこれを見て墓の前に香を焚き、申生の死体に向つて

「太子はご生前は清浄がお好きでしたのに、亡くなられて何故不浄になられたのでしょうか。不浄なところに太子がいらつしやれるはずがありません。どうかお静まり下さいませよう」

と慇懃に挨拶すると、臭気はたちまち消え去りいい香りに変つた。郤乞は申生を新しい棺に納め高原の地に改葬した。曲沃の人たちは町を空っぽにして野辺の送りに参列し涙しないものはなかった。

三日後、老臣の狐突こつとが供え物を持つて来て、恵公の名義で申生の霊を祭つて拝礼し、『晋其太子之墓』と墓碑を書いた。全て終わつて狐突が車を返し帰城しようとした時、突然前方から林の如き旗やおびたしい軍隊が一隊の車馬を取囲んでやってきた。狐突が誰かといぶかつて慌てて避けようとすると、一人の正装をして笏ひしを持った鬚ひげも髪かみも斑まだらに白い老

人がゆつくりと車を降りて狐突の前に来て拱手きしうの礼を取り、

「太子が、お話があるので国舅こくわうに」足勞願あしろうかんしたいとおつしやております」

よく看るとその老人は太傅たいふの杜原款とげんかんではないか。狐突はしばらくぼんやりとして杜原款がもう亡くなつてゐる事を忘れ、

「太子は今何処におられるのですか」

と聞いた。杜原款は後ろの大型車を指差し、あれが太子の車だと言うので狐突はその車の前へ行つた。太子申生は冠を被り剣を佩き生前と同じ姿で、御者を下し狐突を乗せて、

「国舅、私を覚えていますか」

と声を掛けた。狐突は突然申生に会い涙が出て来た。

「太子が冤罪でなくなられ、国中の人々は悲しんで涙を流さぬ者はございませぬ。ましてこの狐突どうして太子の事が忘れられましようか」

「天帝はわたしに仁孝にこうだった事を憐れまれて、喬山きやうざんの主に命じられた。わたしは、夷吾が賈君かくんに無礼をはたらいた事や彼の貪婪卑劣を憎んでいるので彼を葬り去ろうと考えている。秦の穆公が非常に賢明だからむしろ彼に晋国を譲つたらどうかと思つているが、国舅はどう思いますか」

「太子が晋君を憎んでおられても、その民には何の罪もありません。しかも晋の先君にも何の罪もございませぬ。太子が同姓を捨て、異姓に社稷を譲るとおつしやるのは仁孝にもとるのではないでしようか」

「国舅の言う事はなるほどその通りだ。だがわたしはもう天帝にこの事を奏上してしまつてゐる。奏上し直すから、まずはここで七日待たれよ。新城の西のはずれに祈禱師がいるがその者を通じて国舅に結論を伝

えよう

杜原款とげんかんがもう行かなければならないということで、狐突こつとつが車を降りようとした時よろけて倒れ、起き上がった時は車馬も旗も太子も杜原款とげんかんもみな跡形も無くなっていた。

狐突は新城の休憩所で横たわっているのに気がつき驚いて傍の者にたずねた。

「わしはどうしてこんな所で横になっているのかね」

「国舅殿は太子のご供養を終わられ、火を焚いて神に祝詞のりとを唱えだした途端、突然席上で倒れられ人事不省に陥られました。どんなにお呼びしてもお気づきになりませんでしたので、車にお乗せしてここまで帰ってお休みいただいております。何事もなくて安心いたしました」

狐突は今はすべて夢の出来事だと判ったが、不思議な事だと思いい、この事は誰にも言わず体の具合を理由に数日此処に留まる事にした。

七日目の未申ひつじあき（十五時）の頃、門番が城西の祈祷師が面会を求めていると言ってきたので招じ入れるよう指示し、予め人払いをして待っていた。祈祷師が入って来て、

「私は霊媒で、神霊に話を伝える者です。喬山きやうざんの主故太子申生しんせいさまから、『再度天帝に奏上したところ、その者を罰してその子孫を断絶させるが、晋国の社稷しやくと民には累を及ぼさない事にした』と国舅殿にお伝えせよとおっしゃいました」

狐突はわからないふりをして罰すると言うのは誰をかと聞いたが、彼女は喬山の主申生はそれだけを伝言せよといったその意味は言わなかったと言う。

狐突が口外無用と言って十分な礼を取らせると祈祷師は大変感謝し

て帰って行った。狐突は帰京し密かに祁鄭父の子祁豹にこの話をした。

「今の主君は行動が常軌を逸していますからきつといい死に方はないでしょう。晋にはやはり重耳殿ちゆうじですね」

と話し合っているとき守衛から祁鄭父ひていはが秦から帰国して現在復命中だという連絡があったので豹は直ちに帰って行った。

祁鄭父は秦の大夫冷至れいしと一緒に帰ってきた。冷至は車に数台の贈り物をもつて晋へ答礼に来たのである。絳都じやうとの郊外まで帰ってきた時突然里克りくくが誅殺された情報が入った。鄭父は疑念を抱き秦国へ引返そうかと思いい、また、子の豹が絳城にいるので自分が逃げたら必ず豹に累が及ぶだろうという心配もあり、躊躇して決めかねていた。その時ちょうど大夫の共華きやうかと郊外で会った。鄭父が里克の件のいきさつを聞くと共華は一部始終を話して聞かせた。

「都へ入るかどうかを迷っているのです」

「里克殿と同じ考えの人は、わたしもそうですが未だたくさんいます。が、今は里克殿一人だけで他の者には波及していません。しかもあなたは秦に出張中だったのだから知らないふりをしたほうがいいでしょう。畏れて逃げ出すと罪を自供したことになります」

祁鄭父はその意見に従い、そのまま車を急がせて絳城に入った。鄭父は先ず復命を終わってから、冷至を恵公に引き合わせ謁見させた。冷至は国書と贈り物を恵公に献上した。国書の内容は概略以下の通りであった。

晋と秦は婿舅の関係の国である。土地は晋、秦どちらにあっても変りはない。諸大夫もそれぞれの国のために励めばいい事で、わたしは諸大夫の気持ちに傷つけてまで必ずしも土地を手に入れようと

するものではない。しかし他国討伐の協力は頼みたいので呂飴甥りよたいせいと郤芮けいじの両氏に秦に来てもらい顔を合わせて協議したいのでよろしく最後に追伸として、土地の譲渡約束証書はお返しいたしますと一行添えられていた。

恵公は小者で、過分な贈り物を見、約束証書が返ってきたので内心大変喜び、すぐにも呂飴甥りよたいせいと郤芮けいじを秦に出そうと考えた。

郤芮と呂飴甥はそつと話し合った。

「今回の秦使は好意で来たのではないぞ。礼物が過分すぎるし話もうま過ぎる。これは誘いの手だ。行けば我われを脅迫して土地を取ろうとしているのだ」

「わたしも秦が本気で晋を喜ばせているとは思えない。きつと郤鄭父が里克が殺された事を聞いて、秦と共謀して秦で我われを殺し反乱を起そうとしているのだと思う」

「鄭父と克は功を共にして来た間柄だから、克が殺されれば鄭父も不安にならないわけがない。あなたの言うとおりで。現在群臣のうち半数は里、郤の与党だから、もし鄭父が反乱を企てたら更にもっと同調する者がいると考えられる。先ず、秦使を返してゆつくりやつらの様子を監察して見てみよう」

そこで恵公に頼んで、

「晋国は君主が変わったばかりで未だ安定していないので、今しばらく二臣に余裕ができるまで待つて欲しい」

と言つて秦使には帰つてもらつた。呂、郤の二人は腹心を使つて毎夜郤鄭父の門の近くに潜ませ動静を探らせた。鄭父は呂、郤に全く動きが見えないので、夜密かに祔ききよ、共きやう華、賈か華、驪り過等を鄭父の家へ集め

五鼓位まで謀議を行つた。腹心は呂、郤に見て来た事を詳細に報告した。

「彼らは決定に難航しているようだがきつと謀反に違いない」

郤芮は呂飴甥と相談して屠岸夷とがんいを呼んだ。

「そなたには大変な災いが目前に迫っているがどうするつもりだ」

「禍とはどこからですか」

「そなた、以前里克を助けて幼君を殺しただろう。すでに克は法に服したが、殿はそなたを始末する気でおられる。わしらはそなたが恵公即位に功積があつたのをよく知っているから、誅殺されるのを見るのは忍びないので一声掛けてやつたのだ」

「わたしは力があるだけで人に踊らされ何が罪になる事なのか判からなかったのです。大夫殿どうかお助けください」

「殿の怒りを解くのは難しい。しかし、そなたが禍を逃れるのに一つだけ方法がある」

夷は跪いてどんな方法を聞いた。郤芮は彼を助け起こしそつと言つた。

「郤鄭父は里克の仲間で何人かの大夫と謀反の陰謀を企てている。それは今の君主を追放し公子重耳ちゆうじを君主にしようとしているのだ。そなたは殿に誅殺されるのを恐れるふうをして鄭父に会つて一緒に陰謀の仲間に入るのだ。彼らの内情を探つて事前に自首すれば鄭父の負ふ葬さうの田三十万をそなたに与えよう。しかも重用され罰せられる心配はなくなるのだ」

「誅殺されるのが助かるとすれば大夫のお陰です、協力させてください。ですが、わたしは話が下手なんですけどどう話をしたらいいでしょうか」

「わしが教えてやろう」

問答の言葉を考へて夷に覚えさせた。

その夜、夷は内々の事があると言つて邳鄭父の門を叩いた。鄭父は酔つて寝ていると言つて会おうとしなかったが、夜がふけても門から去らうとしないので招じ入れた。夷は鄭父に会うと跪いて、

「大夫、わたしをお助けください」

「どうしたのだ」

「里克殿を助けて卓子たくしを殺したのでわたしを制裁すると、主君がおつしやつていらっしゃるのです。どうしたらいいでしょうか」

「今は呂、卻の両氏が朝廷の大権を握っているから、あの方々に殿の仲を取持つてもらうのが一番だよ」

「これは呂、卻の陰謀なのです。わたしはやつらの肉を食つてやりた**い**ほど恨んでいるのにそんなやつらに頼んでも何にもなりませんよ」

邳鄭父は未だ十分には信じられない。

「それでそなたはどうしたいと言ふのだ」

「公子の重耳殿は仁孝厚く、人々から尊敬されみなが君主に推戴したいと願つています。しかも秦も夷吾の違約を憎んで重耳殿を君主にしようと思つているようです。もし大夫の手紙をいただければ、わたしが夜を日に繼いで重耳殿にお届けいたします。重耳殿に秦、翟の協力をお願いしていただき、大夫は故太子の与党を糾合なさつて内応し、先ず呂、卻の首を挙げ、それから重耳殿をお迎えすればいいでしょう」

「そなた心変わりはいらないだろうな」

「わたしに二心あれば一族皆殺しに会うでありますよ」

夷は指を噛み切り血を流してそう誓つた。

邳鄭父はついに彼を信じて、翌日の三更にもう一度集まつて相談しよ

うと約束した。

翌日の三更に屠岸夷が約束通りやつて来ると、邳鄭父の家にはすでに祈奉、共華、賈華、騅遄が集まつていて、他に叔堅、累虎、特宮、山祈の四人が居た。みな故太子申生の門下である。鄭父と屠岸夷をあわせ十名が血をすすつて、共に重耳を助け君主に擁立しようと同盟を誓い合つた。後の人の詩がある。

屠岸の救命願ひは疑うも 呂卻の奸謀とは知る由もなし
強手に更に強手あり 一人の巧詐で九人危うし

邳鄭父は皆をもてなして酔つて別れた。

屠岸夷はそつと卻丙に報告した。

「そなたの話は証拠がない。邳鄭父が書いた手紙があればその罪がはつきりするんだが」

夷は翌日の夜、再び邳鄭父を訪れ重耳を迎える彼の手紙を催促した。鄭父はすでに書き終え、最後に九名の署名と花押が書かれていた。十番目が屠岸夷で彼もそこへ署名し花押を書いた。

「十分に気をつけて、決して粗相なきよう」

鄭父は封緘を終えそういつて夷に手渡した。

屠岸夷は手紙を手にして、至宝を手にしたように直ちに卻家に飛び込み丙に見せた。丙は夷を屋敷に匿い、手紙を袖に入れて呂飴甥と一緒に国舅虢射を訪れ、つづさに状況を説明し、

「早くこれを除かないと不測の事態が起こります」

と訴えた。虢射は夜宮門を叩いて恵公に会い、邳鄭父の陰謀を細かく説明した。

「明朝すぐにも、彼らの面前で手紙を証拠にその罪を明らかにしていただきますたく存じます」

翌日早朝、恵公は呂、卻に指示して予め壁際に武士を伏せておいた。百官の朝の挨拶が終わって、恵公は邳鄭父呼び出し詰問した。

「そなたがわしを追放して重耳を迎えようとしていることがわかったので、そなたを罰せざるを得ない」

鄭父が弁解しようとするや卻丙が剣を持って大声で言った。

「おまえは屠岸夷とがんいを使つて重耳を迎える手紙を届けさせようとしたではないか。幸いにも屠岸夷を城外で我われの部下が捕え手紙を探し出したのだ。共謀者は全部で十人、すでに屠岸夷が白状している。弁解無用だ」

恵公は手紙を机の前へ投げた。呂飴甥りよういせうがこれを拾つて名を読み上げ武士に捕えさせた。共華だけは出席しなかつたので別途逮捕しに行った。八人は急なことで顔を見合わせ、弁解の余地もなくどうしていいかわからなかつた。

恵公は朝門へ引出し斬首せよと命じた。するとその中の賈華かかが大声で呼ばわつた。

「臣は先年先君の命で屈へ討伐に参りました時、個人的に殿を逃がして差上げた功がございますが、一命をお助けいただく事はかないませんか」

「おまえは先君に仕えていたのに勝手に殿を逃がし、今また殿に仕えていながら密かに重耳に通じている。こころかわる小人め、早く刑に就け」

呂飴甥にそういわれると賈華は言葉もなかつた。八人はなすすべもな

く刑に赴いた。

さて共華であるが屋敷で鄭父等が事漏れて誅殺されたことを聞き、すぐ家廟に別れの挨拶をして朝廷へ出頭しようとしたが、弟の共賜ききうしが、

「出頭するという事は死ぬ事です。どうして逃げないのですか」

「邳大夫が秦から帰つた時入国を勧めたのは実はわしなのだ。人を死なせて自分だけ生きるといふのは男ではない。わしは死にたいわけではないが、邳大夫に背くわけにはいかん」

そう言つて逮捕官が来る前に急いで朝廷に出て死を請うて刑死した。邳豹は父親が誅殺された事を聞き急ぎ秦国へ避難した。恵公は里克と邳鄭父の一族を皆殺しにしようとしたが、卻丙は、

『罪は妻子に及ばず』というのが古来からの決まりです。誅殺が過ぎると人々は警戒するようになります。大量殺戮をして人々を怖がらせる必要はないでしょう」

と諫めたので恵公は各一族に免罪を知らせ、屠岸夷を中大夫に昇進させ賞として負葵ふきの田三十万をあたえた。

ところで、邳豹は秦へ出奔し、穆公ぼくこうに会つて伏して泣きながら、父親の計画の始終を一通り縷々説明し、一つの案を建策した。

「晋侯は秦の大恩に背き、百官は恐怖に陥り民衆は帰服していませんもし一軍を率いて攻入れれば必ず内部から崩壊し、君主の改廃はご主君の思い通りになりましょう」

穆公は群臣に相談した。

「邳豹の案にしたがつて晋を攻めるといふことは臣を助けて君主を討つ事になり、大義にもとります」

と蹇叔が言い、「百里奚も言葉を加えた。

「民衆が服していないとなれば必ず内変が起こりましようから、それまでしばらく待つてからでも遅くはないでしょう」

「わしもこの案にはちよつと心配な面がある。一朝にして九人もの大夫を殺して皆の心が離れないのはどうしてだろう。しかも内応がなければ成功はおぼつかないからな」

と言つてこの件は取上げず、邲豹を留めて秦の大夫に取り立てた。晋惠公の二年、周襄王の三年（紀元前六四九年）のことである。

この年、周の王子帯（襄王の腹違い弟叔帯）は賄賂を使つて伊、雒の戎族と友好を結び、京師（都洛陽）を攻撃させた。帯が内応する約束で諸戎は王城を包圍した。周公孔と召伯廖が縣命に固守するので、王子帯はあえて戎軍と連絡を取ろうとはしなかつた。襄王は諸侯に使者を急派した。秦穆公、晋惠公共に周王とは友好関係を維持したいので各々軍を率いて周救援に向かつた。戎は諸侯の軍がやってくるのを知つて東門を焼いて略奪して去つた。惠公と穆公は氣まずそうに顔を合わせた。惠公は又穆姫の密書を受取つた。そこには晋侯の賈君に対する無礼や、公子たちの帰国を実行していない事等問題点を数え上げ、速やかに前非を改め昔のいい関係を失わないで欲しいとあつた。

惠公は秦侯の攻撃を受ける事を心配して早々に撤兵した。心配した通り邲豹が穆公に晋軍への夜襲を勧めた。しかし穆公は、「同じように勤王のためにここへ来たのだから、たとえ私怨があつてもそんなことをすべきではない」といつて帰国した。

この時斉の桓公も管仲を周救援に派遣したが、戎兵問題は終わつたと聞き、使者を送つて戎主に詰問した。戎主は斉軍の威力を恐れて、

「我われ諸戎族が京師を攻めたのは、王子帯殿の指示によるものです」と謝つて白状したので襄王は帯を追放した。子帯は斉国へ出奔した。

戎主は使者を京師に送り詫びを入れ講和を申し入れ襄王もこれを許した。襄王は管仲が即位に功があつた事を思い出し、今また戎との講和の労に報いるため大宴会を催し上卿として礼遇しようとした。だが管仲は控えて、

「国、高のお二人がおられます、恐れ多くとてもお受けできません」と言つて再三辞退し下卿の礼遇を受けて帰国した。

この冬、管仲が病に罹り、桓公は自ら見舞つた。非常に瘦せているのを見てその手を取つて、

「病氣はかなり重いように見えるが、不幸にも再起できないような事になつた場合は誰に政を任せたらいいだろうか」

この頃、寧戚、賓須無が相前後して亡くなつており、管仲はため息をついて、

「寧戚は残念だつたですねえ」

ほうしやくが

「彼の他に誰か居ないかね、鮑叔牙にしたいがどうだろう」

「鮑叔牙は君子です。しかし善悪をはつきりさせずぎるので政には向きません。善行を好むのはいいのですが、悪行を憎みすぎると人は耐えられなくなります。人の欠点を見ると絶対それを忘れないところが鮑叔牙の短所なのです」

高国 高国懿仲と高虎 周天子が命た監國 諸侯の国を監督する役である

「隰朋はどうだ」
しゅうほう

「概ねいいんじゃないでしょうか。彼は下の者の意見を聞くのを恥としないし家に居ても公のことを念頭に置いています」

管仲はそう言ってからため息をついて、

「天は隰朋をわが舌として生み賜りました。体が死んで舌だけ存在できましようか。殿は隰朋を長くはお使いになれないかもしれません」

「ならば易牙はどうだ」
えきが

「殿からご質問がなくても臣は申し上げるつもりでしたが、易牙、
じゅちやう 豎刁、開方の三人は絶対に近づけてはならない連中です」

「易牙は自分の子を殺して調理してまでわしの口を楽ませくれた男だ。愛児よりわしを大切に思ってくれている者だ、それでも疑う必要があるか」

「人情に子を愛するに勝るものではありません。彼はそれに耐えたのですからその冷たさは殿にだってどうだかわかりません」

「豎刁は自分から去勢してわしに仕えたという事は自分の体よりわしの方を考えてくれている男なんだが」

「人情としては自分の体を一番大切にするものです。彼はそれに耐えたのですから、いざと言うとき自分のためには殿だつてわかりません」

「衛の公子開方は千乗の太子を捨ててわしの家臣になった男だ、わしも彼を幸せにしてやりたい。親の死にも駆けつけず父母よりもわしを大切に思っている男だ、疑うことはない」

「人情として父母に勝る親しきものはありません。その父母に背いて殿についたのです。殿にだつてどうでしょう。しかも千乗の君主の位は誰も抱く望みです。千乗を捨て殿につくその望みは千乗を超えるものの

はずです。決して近づけてはなりません国の乱れのもとになります」

「この三人はわしに仕えて久しいが、仲父はいつもはどうして一言も言わなかったのかね」
ちやうふは

「臣が申し上げなかったのは、それが殿のご意向にかなっていたからです。これを河水に譬えますと臣が溢れないように堤防となっていたわけです。今その堤防がなくなろうとしています、将来溢れて洪水になる心配があります。必ず遠ざけるようお願いいたします」

桓公は黙って帰って行った。

さて管仲の生死は如何なりますか、それは次回のお楽しみ。

第三十回

秦晉 龍門山で大戦（韓原の戦）
穆姫 死を賭して晋侯の大赦を要求

管仲は病床で桓公に、易牙、豎刁、開方の三人を遠ざけ、隰朋に国政を任せるようにと言った事を、傍で聞いていた誰かが易牙に報告した。易牙はそれを聞いて鮑叔牙に会って、

「仲父は宰相に推薦したのは叔殿ですが、殿が仲父の病氣見舞いに行った時、国政を任せるべき人は叔殿ではなく隰朋を推薦したというのを聞いてわたしは不満なのです」

と言った。鮑叔牙は笑って、

「それこそ、わたしが仲を推薦したゆえんじゃないですか。仲は国に忠実であり、彼には友人など私事は頭にはないのです。彼がわたしを司寇にしたのは君におもねる者を駆逐するためそれだけです。もし国政の担当者となるとあなた達の入る余地はありません」

と答えた。易牙は顔を真っ赤にして引き下がった。

一日たつて桓公がまた管仲を訪れたがその時はもう何も言えなくなっていた。鮑叔牙、隰朋は涙を抑えられなかった。その夜管仲は亡くなった。

桓公は慟哭して、

「仲父よ、ああ何という悲しい事だ。天は終にわが腕を折ってしまった」

と嘆き悲しみ、上卿の高虎に手厚く葬儀を行なわせ、生前の封地はそのまま子に継がせ、世襲の大夫とした。

易牙は大夫伯氏に、

「昔、殿はあなたの駢邑三百を取上げて仲の功の賞としましたね。仲父は死んでしまったのですからどうして殿に言って返してもらわないのです。わたしが横から口添えしてもいいですよ」

と言うと彼は涙ながらに、

「わたしには功がなく封地を失ったのです。管仲殿は死んでもその功は歴然と残っています。何の面目があつて殿にそんな事を頼めまじょうか」

と言った。易牙はこれ聞いて、

「仲は死んでもなお、伯氏をこれだけ心服させる事ができる。わしらは本当に小人だな」とため息をついた。

さて、桓公は管仲の遺言にそつて公孫隰朋に国政を任せた。しかし、一月足らずで隰朋は病死してしまつた。

「仲父は本当に凄い男だ。どうしてわしが隰朋を使える期間が長くないかわかつたのだろうか」

と桓公は管仲の先見に舌を巻いた。そこで鮑叔牙を朋の代わりにしようにとしたが、牙は固辞した。

「現在、この朝廷に卿に勝るものはいないんだが、卿が譲りたいと思う者が誰かいるね」

と桓公が聞くと、叔牙は答えた。

「臣が善悪をはつきりさせることは殿のご存知の通りです。殿が必ず、易牙、豎刁、開方を遠ざけていただけるといふ事でございましたらお受け致します」

「仲父も強くそれを言った。必ず卿の意向に随おう」

桓公はそう言つて即日三人を罷免し、入朝を禁止したので鮑叔牙も隰朋の後任を受諾した。

この頃杞国が淮夷に侵掠され、斉に救援を求めて来た。桓公は宋魯、陳、衛、鄭、許、曹の七カ国の君主を糾合し、自ら杞国救援に出掛け、都を縁陵に移した。諸侯はやはり斉の命令に従い、斉は鮑叔を使つて管仲のやり方を踏襲した。

話変わつて、晋は恵公が即位してから毎年穀物が不作で、五年目は大凶荒となつた。国庫は空になり、民間でも食料を使い尽くし、恵公は仕方なく他国に援助を頼むことにした。秦は近いし姻戚関係もあるけれど、以前の約束を未だ果たしてなくて不義理のままになっているから言い出しにくい。

卻芮が進言した。

「我われは約束を破つたわけではなく実施日の延長を頼んだだけです。秦が援助を断れば秦が先に我われとの關係を絶つことになるので、約束不実行の理由ができます」

恵公はそれもそうだなと思ひ、大夫慶鄭を使者として宝玉を持たせて秦へ派遣した。穆公は群臣を集めて相談した。

「晋は約束の五城割譲も実行していないのに、飢饉だからと言つてまた食料援助を頼んできたが、どうしたものか」

淮夷 淮河下流地域に根拠を埒部族
縁陵 現山東省昌樂 杞国 姫姓は当初雍丘 河南省杞県に建都したが淮夷を避け縁陵に遷都した

蹇叔、百里奚は声を揃えて言つた。

「天災はどの国も避けられない事ですから、災害には援助して人民を救済するのは天理です。天理にしたがえば必ず我々にも福が巡つて参ります」

「晋には施してばかりじゃないか」

「施しをして後に逆に施しを受ける事になれば損はありませんし、施しを受けて何度も信義にもとる行動をとれば、民衆にも見捨てられ世間から爪弾きにされるだけです。ここはやはり救援すべきです」
公孫枝もそう言つて賛成したが、邳豹は父の恨みもあり手を振つて反対した。

「晋侯が無道であるための天罰です。この飢饉に乗じて討伐に出れば晋を滅ぼすことも可能です。チャンスは逃すべきではありません」

繇余も援助に賛成の意見を表明し、

「仁者は相手の危機に乗じて利を求めず、智者は僥倖で功を得ず」といいます。援助は当然だと思ひます」

と言つた。最後に穆公が、

「忘恩不義なのは晋の恵公であり、飢えているのは晋の民だ。君主が悪いからといって民衆に苦難を押し付けるわけにはいかないな」

と言つて渭水から数万斛（一斛は百升19リットルの食料を、黄河、汾水、雍水、絳水の間を船先と船尾がくつ付き合うほどの舟を出して『汎舟の役』と名付け晋の各地へ送り飢饉を救つた。晋国の民衆は感激に涙しい者はなかつた。史官は穆公の善を讃えて詩を作っている。

晋君の無道が招きし天災に 秦は雍から絳へ舟を連ねて粟送り 憎む相手に恩を施す 何と秦穆公の度量の広さよ

翌年の冬、秦国が天災に見舞われてほとんど収穫がなく、逆に晋国は大豊作であった。

穆公は蹇叔、百里奚にほつとした表情で言った。

「豊凶はどちらにも発生しうるものだと言った二卿の言葉を思い出すよ。もし去年晋へ送るのを断わっていたら今年の飢饉を晋に助けてもらうことはできなかったな」

しかし傍らから邳豹が言った。

「晋君は貪婪で信頼のおけない人です。お頼みになってもきつとだめでしょう」

穆公はまさかと思い、冷至に命じて宝玉をみやげに持たせて晋へ食料救援依頼にやった。

恵公は秦の依頼に応じて河西地区の食料を送ろうと思ったが、これも邳芮がさへぎった。

「食料をお送りになるということは、やはり土地と城も秦に割譲されるお積もりなのですか」

「わしは食料を送れと言っているのだ、土地の件は別の問題だ」

「では食料をお送りになるのは何のためですか」

「去年の『泛舟の役』のお返しに決まっているではないか」

「去年の事よりむしろ、帰国の時の恩の方がずっと大きいのではないでしょうか。その大恩に対する報恩はお捨てになり去年の小恩に報いようとなさるのは妙じやないでしょうか」

「臣が去年殿の命を奉じて秦へ行った時、秦君は何も言わず気持ちよく承諾されました。今回救援物資を出さなければきつと恨まれますよ」

と慶鄭が口を挟むと、呂飴甥が邳芮の発言を支持する考えを述べた。

「秦が晋に食料を送ってきたのは晋のためではなく、五城のことがあからずです。食料を送らなければ秦を怒らせることになりますが、食料を送っても土地を割譲しなければやっぱり秦を怒らせる事に変わりはありません。同じことなら送る必要はないのではないのでしょうか」

「人の災いを喜ぶ、これ不仁なり。人の施しに背く、これ不義なり」といいます。仁、義を無視してどうして国が守れましょうか」

と慶鄭が言うのと、続いて韓簡も口を開いた。

「鄭殿の言われるとおりだと思います。去年秦の救援がなければ、殿はどうなさるおつもりでしたか」

大臣たちは次々論争に参加し甲論乙駁の論議が続いた。

號射が進言した。

「去年天は晋を飢饉にして秦に与えたのですが、秦はこれを取らずに逆に食料を貸し与えて救ったのです。なんとも馬鹿な話です。今年は秦を飢饉にし晋に与えようとしているのです。晋は天意に逆らわずこれを取るべきです。梁伯（梁は夷吾の亡命先、梁伯は彼の舅）と示し合わせて機を見て秦を討ちその土地を山分けするのが上策と考えます」

恵公は號射の意見を採用し、秦使冷至に伝えた。

「わが国は毎年の飢饉で民は流離し、今年は少々できが良かったため流れ出ていた者たちが次第に帰って来だしたところです。いまは僅かに自給するのがせいっぱいで、残念ながら援助できるほどの蓄えはございません」

「わが君は姻戚の誼もあり、土地のことには触れず、食料を出し、『困ったときは助け合うものだ』とはつきりとおっしゃって、主君の危急を

救われたのです。それにもかかわらずお断りになられたのではわたしと致しましても復命のしようがございません」

と冷至が言う、呂飴甥と郤芮が大声を出して、

「あんたらは以前、邲鄭父と示し合せて金でわしらを誘い出そうとしたであろう。お天道様がお前らの奸計をお見破りになって幸い事なきに至ったが、今回またむだ口を叩いて晋から食料を巻き上げようと言うのか、欲しかったら腕すくで取りに來い」

と冷至を罵倒した。冷至は憤懣やるかたなく退出した。慶鄭は退廷後、太史郭偃に、

「晋侯は背徳によって秦を怒らせてしまった。禍はもうそこに来ていゝるよ」

と「言う」と郭偃も、

「今年の秋沙鹿山が崩れ、倒木が河をせき止めてしまったが、山川は国の基だから晋国存亡にかかわる禍が近いと思われるが、あなたの言う禍がそうなのかもしれない」

不安そうにいった。史臣は晋惠公の忘恩を詩にしている。

遠路船を泛べて飢窮を救えど 秦の飢饉は救われず

古来忘恩の徒は数々あれど 惠公の如きは他に聞かず

冷至は秦君に復命した。

「晋は秦を救済するところか、逆に梁伯と一緒に秦討伐軍を起そうとしています」

「夷吾がそれほど道を外れた男とは思ってもなかった。そういう事であれば先ず梁を討ち、それから晋を片付けてやる」

穆公はすごい剣幕で怒りだした。そこで百里奚が次の様に進言した。

「梁伯は土地が好きで国土は広々としていますが、城郭や宮室に使つて民衆のためになつていないため庶民は皆不満たります。こんな状態で人々を晋の加勢に駆出せるわけがありません。しかし晋は君主が無道であつても、呂、郤が力を發揮して絳州（首都）の人々をその気にさせれば、西鄙（西の国境付近の町）は震え上がりましょう。兵法にありますが『先んずれば人を制す』です。ご明断な殿が晋侯の亡恩の罪を咎め大夫たちに晋討伐を命ずれば必ず勝てましょう。余勢をかつて梁の弱点を突けば枯葉を振り落とすようなものです」

穆公はその意見に従い、三軍を編成し蹇叔、繇余を残して太子罾の補佐とし、孟明視に国境周辺を巡邏させ諸戎を抑えさせた。穆公と百里奚は中軍を率いて、西乞術、白乙丙に穆公の兵軍を守らせ、公孫枝を右軍の将、公子繫を左軍の将として、戦車合計四百乗を繰出し堂々と晋国へ向け進發した。

西鄙から惠公に緊急事態の報告があつた。惠公は群臣に意見を聞いた。「秦は理由もなく兵を起し国境を侵してきた。どう防ぎ止めるか」

「秦軍は殿が秦の恩義に背いたから攻めて來たのです、故なき事ではございません。謝罪して講和し五城を割譲することで信頼を回復して干戈を交えるのを回避すべきです」

慶鄭がこう進言すると惠公はひどく怒つて、

「堂々たる千乗の国が土地を割譲して講和を求めるなど、君主として何の面目があるというのだ」

と怒鳴りつけ、先ず慶鄭を血祭りに上げ、直ちに迎撃に向かえと命じた。しかし虢射が、

「まだ出兵もしていないのに先に將軍を斬るというのは軍として不利です。しばらく命令を猶予して從軍させ功で罪を償わせるべきです」と申し出たので恵公はその意見に従った。

この日軍を大檢閲して戰車六百乗を選び、卻歩揚、家僕徒、慶鄭、蛾析を左右に分け、恵公自身は號射と中軍にあつて全軍を指揮し、屠岸夷に先鋒を命じ、絳州を出て西に向かった。晋侯の車を引く馬は鄭が献上した『小駟』と言う馬である。体はきやしゃで首の毛は潤いがあり歩き方がおとなしいので日ごろから恵公のお気に入りであつた。

「昔から出征の大事には本国産の馬を使うのが常識になっています。乗る人の気持ちを汲んで指示によく従い道にも慣れていますので戦争には本国産が使われるのです。殿はこれから大敵に臨まれるのですからこの馬は好ましくありません」

慶鄭がここでもこう忠告したが、

「この馬に慣れてるのだ、余計なことを言うな」

と罵倒された。秦軍はすでに黄河を東に渡り三戰して三勝。守將はその度に皆逃げ去り、秦軍は長驅進軍して韓原、現山西省内郷で駐屯した。

晋恵公は秦軍が韓まで来ているのを知り額にしわを寄せて意見を聞いた。

「敵はもうかなり深く進攻して来ている、どうすべきか」

「殿が自ら招かれた事です、どうして今頃そんなことをお聞きになるのですか」

「鄭、無礼だぞ、下れ」

晋軍は韓原から十里ほどの所に駐屯し、韓簡に秦軍の規模を探らせた。

「秦軍の数は我々より少数ですが、闘志は我々を十倍も上回っています」

す

「どうしてわかる」

「殿は最初に秦に近いという事で梁へ出奔され、継いで秦の援助で国主になられ、さらに秦の救済によつて飢饉を免れました。秦の三回の恩恵に対し一度もお返しをしていませんので、秦の君臣に溜まった憤懣が今回の出兵の原因です。ですから三軍皆絶対勝つべしという任務感があり、その気鋭はみなみなならず我が軍の十倍を超えるでしょう」

「それじゃ慶鄭の言う事と同じじゃないか、そなたまでそういうのか。何と言つてもわしは秦と決戦する」

恵公は怒つてそう言い、ついに韓簡を使者にして秦軍へ送り、

「戰車六百乗で君侯をお待ちいたします。撤兵なさるならよし、さもなければ、わたしが止めようと思ひましてもわが三軍がなんと申しましようか」

と言つて、対秦宣戰布告をした。

「青二才が何を世迷言を言つてるんだ」

穆公は笑つて、

「国が欲しいと言われるから国にお送りし、穀物が欲しいとおっしゃるから差上げました。今回は戦争をおねだりですね。ご希望でしたらどうして嫌と申しましよう」

と公孫枝に自分に代つて晋の使者に言わせた。韓簡は退出して、

「秦の言うことには筋が通っている。わたしも死に場所を考えておく必要があるな」

とため息をついて言つた。

晋恵公は郭偃に車右を誰にすればいいかを占わせた。その結果、慶鄭

以外に吉と出た者はいなかった。

「鄭は秦寄りだから使えない」

「と云つて家僕徒を車右にし、卻歩揚を御者にして韓原の秦軍を迎えた。百里奚は高みに登つて晋軍の数が非常に多いのを見て、

「晋侯の死は時間の問題ですが、敵は数が多いので力ずくの接近戦は不利です。暫く兵を抑えて戦わない方がいいでしょう」

と進言した、穆公は天を指して、

「晋は何度もわしに背徳行為をしている。天はお見通しだ、必ず勝たせて下さるはずだ」

と云つて軍を龍門山の麓に布陣して晋軍を待った。

間もなく晋軍がやつてきて両軍対峙し、それぞれ太鼓を打ち鳴らし攻撃を開始した。晋の屠岸夷は百斤（25 kg）以上もある鉄の槍を持つて先頭立つて秦軍陣に突入し、行くところ敵なく秦軍は壊走した。

秦将の白乙丙が屠岸夷に挑み両人は五十合も打合ったが勝負がつかず、カッカしてどちらも車を跳び下り組み合った。

屠岸夷が大声で

「貴殿とはどうしても決着を付けなければならん、余人の助けを受け
ては男とは言えんぞ」

と云うと白乙丙も負けず、

「独力で生け捕りにしなけりや英雄じやない」

と、周りの者に誰も手を出さずと命じ、互いに拳を突き足で蹴り、取つ組み合つて陣の後方へ行つてしまった。

惠公は屠岸夷が敵陣を崩したのを見て、急いで韓簡、梁繇靡に秦の左軍に突つ込むように命じ、自らは家僕徒等を率いて右軍に攻め込み中軍

に集合するよう打ち合わせておいた。

穆公は晋が兵を二路に分けて攻めてきたのを見て彼もまた秦軍を二路に分けて晋軍に当てた。

右軍に攻め込んだ惠公は公孫枝にばったり出会つた。家僕徒に当らせ

たが、公孫枝は音に知れた万夫不当の勇者である。家僕徒など問題でない。惠公は家僕徒が危ないと見て、彼に手綱をとらせ急遽自ら助勢に入つた。公孫枝は戟を横にして大声で、

「来るなら二人一緒にかつて来い」

と一喝した。その声が雷のようで国舅の虢射は驚いて車に伏せ、出る勇氣もなかつた。

惠公の愛馬小駟は戦陣を経験したことがなく、公孫枝の怒喝に驚き暴走して制御のしようもなく、とうとう泥沼に突つ込んでしまった。

卻歩揚は小駟に鞭を当て泥沼から引出そうとするが、馬に力がなく泥沼から足を抜くことができない。ちょうどそこへ慶鄭が通るかかった。

惠公は

「慶鄭助けてくれ」

と叫んだ。

「虢射大夫はどこですか、何故わたしを呼ばれるのです」

「とにかく早くそなたの車に乗せてくれ」

「殿は小駟がいいんでしょ、誰かに言つて助けに来させましよう」と言つて行つてしまった。歩揚は他の車を探しに行こうとしたが、い

かんせん秦兵に取り囲まれ逃げられなくなつてしまった。一方、韓簡たちの一軍は秦の左軍に攻め込み、ちょうど穆公の中軍に出遭つた。すぐ秦将西乞術と戦いになり、三十余合打合ったが勝負がつ

かない。そのうち蛾哲がせきもやって来て二人に挟撃され、かなわず韓簡かんかんの戟に刺され車から落とされた。だが、

「敗将など役に立たん、秦君を捕えるのが先だ」

と梁繇靡りょうようびが大声で叫んだので韓簡は西乞術せいきじゆつを置き去りにして晋兵を率ほくらういて穆公を追って行った。

「何と逆に晋の捕虜になってしまうとは、天道様は何処におわすのか」
穆公ぼくこうが嘆きながら逃けていると、突如、西の方から三百人ばかりの勇士の一隊がやって来た。

「待て待てえー、わが恩人に手を出すな」

と大声で叫んでやって来る。その三百人はみな髪はぼさぼさで片肌を脱ぎ手には大刀、足は草履で飛ぶように走る。腰には弓を懸け、大魔王の部下の鬼兵のようである。たちまち晋軍の中へ斬り込み刀を振回して人を見れば叩き斬った。韓簡と梁繇靡は慌てて防ぎに回った。更にまた北のほうから一人車を飛ばしてやってくるのが見えた。慶鄭けいていである。

「戦うのはやめろ、主君が龍門山のぬかるみで秦兵に包囲されているんだ、速く行って救え」

と大声で呼ばわった。韓簡たちは鬭争心を失い、晋侯救援のため壮士達を置き去りにして龍門山へ急いだ。ところが、この時晋惠公はすでに公孫枝に捕えられ、家僕徒、號射、卻歩揚等もみな捕えられ本営のほうへ連行されていたのである。

「秦君を捕えておけば交換できたのに、われ慶鄭のために過までり韓簡は恵公が捉えられたのを知り、こう言つて嘆いた。梁繇靡も、

「殿がそうなった以上われらには帰るところが無い」と
と言い韓簡と共に武装を解いて秦の陣営に投降し恵公と一緒になっ

た。

一方、秦の穆公と西乞術はあの壮士三百人に助けられた。秦軍は勝に乗って攻め、晋軍はがたがたに崩れ龍門山の麓は死体如山のように積み重なった。六百乗の戦車のうち逃げる事ができたのは二、三割に過ぎなかった。慶鄭は晋君が捉えられたと聞き秦軍をこっそり脱出し、重傷を負つて地に倒れていた蛾哲がせきを見つけ助けて車に乗せ、一緒に晋国へ帰った。髯翁がこの「韓原の戦い」のようすを詩にしている。

龍門山下死屍累々 暗君の忘恩の報いなり

勝負は君主の善悪で決着せり 天何ぞこれを見落とさん

秦穆公は本陣へ帰つて百里奚ひやくりけいに言つた。

「井伯せいはく（百里奚）の忠告を聞かなかつたために危うく晋の失笑を買うところだつたよ」

例の三百余人の壮士が陣前に揃つて叩頭の礼を取った。

「そなたたちは誰なんだ、どうしてわしを命がけで助けてくれたのかね」

「主君は以前良馬を無くされた事を記憶きこごさいませんか。我われはその馬の肉を食つた者たちです」

それは以前穆公が梁山へ狩に行った時の事である。

夜、良馬が数頭いなくなつたので役人に探しにやつた。探し尋ねて岐山の麓まで行くと、三百人ほどの野人が集まつて馬の肉を食つていた。役人はこの事を穆公に報告して、すぐ兵を出せば逮捕できますと言つた。

「馬はもう死んでしまつたのだ。こんな事で人を殺せば、人々はわたしを人より畜生の方を大切にする男だと言うだろう」

穆公はそう言つて、使者に陣中の美酒を数十甕持たせて岐山へやり、「この酒は、『良馬の肉を食つても酒がなければ寂しかろう』と、わが君がそなたたちに下さつたものである」

と伝えて彼らに与えた。

野人は叩頭して感謝し、その酒を皆で別けて飲んだあと、

「馬を盗んだことを罰しないばかりか、酒がないと寂しかろうと美酒まで賜つた君主のこの大恩、いかにして報いるべきや」

と声をそろえて感激したものである。

最近穆公が晋を討つというのを聞きつけ、三百余人は皆命を捨ててつもりで韓原へ加勢に駆けつけたのである。ちょうど穆公が包圍されてるところに出遭い、力を合わせて勇気を奮い起こして救出したのである。

瓜を植えれば瓜がなり 豆を植えれば豆がなる

薄き施しには薄き返礼 厚き施しには厚き返礼

施し受けて返礼せざれば これ何ぞ禽獸に異ならん

「野人でさえ恩を忘れないのに、晋侯というやつは何と言う男なんだ」

穆公は彼らに非常に感心して、仕官をしたい者があれば爵禄をもつて

迎えようと言つと、

「われらは野人です、ご主君のご恩に報いるために参つたので、仕官をいたす気持ちにはございません」

と声をそろえて言うので、穆公は十分な礼の品々を用意したが彼らはそれも受取らずに帰つて行つた。

穆公はその態度に感心してやまなかつた。後人の詩が有る。

韓原の山麓に両雄相戦う 晋の大軍穆公を悩ます

過日馬盜を赦さざりせば この日の自由どうして得られよう

将校を点検すると、白乙丙だけがいな。穆公は兵士に「あちこちくまなく探させた。ふと土坑の中からうなり声が聞こえたので中を見ると、

白乙丙と屠岸夷が互いにつかみ合つて転がり込んだのであろう、共に力

尽きて意識が無かつたがそれでも互いに相手をつかんで離していなかつた。兵士は二人を離してそれぞれ車に乗せ本陣へ連れて行つた。穆公が

白乙丙に何か聞いたが何も答えられない状況だった。二人が命がけで戦つていた状況を細かく奏上すると穆公は非常に感心し、

「兩人いずれも好漢である。誰かこの晋將の名を知っている者はいないか」

と尋ねると公子魮が車の中から見て、

「これは屠岸夷です。臣が以前晋の二公子の葬儀に行つた時、夷が大臣の命で迎えに来てまして宿舎で遭いましたから知っています」

「この者を秦で使うのはどうじや」

「それはいけません。卓子の弑逆も、里克の殺害もいずれも彼が手を下したものです。むしろ今日こそ天誅を加えるべきです」

穆公はそれを聞いて屠岸夷の斬首を命じた。そして自らの錦袍を脱

いで白乙丙に掛けてやり百里奚に命じて先に寝台車で本国へ返し医者に診させた。薬を飲んで養生したが、ひどい吐血があり回復に半年ほどか

かつた。

さて穆公は大勝して、本陣を引揚げることにし、晋侯に言った。

「お嫌でなければわが秦へお出でいただけますか、わたしに問題があるのでしたらあなたにお詫び申し上げなければなりません」

恵公はうつむいて何も言わなかった。

穆公は公孫枝に命じて戦車百乘で晋君を秦へ護送した。號射、韓簡、梁繇靡、家僕徒、卻步揚、郭偃、卻乞らはみな、髪は乱れ汚れた顔で野宿しながらついて行ったがあたかも葬儀の列のようであった。

穆公は人づてに晋の大夫たちに言った。

「あなたたち君臣で『晋の粟が欲しかったら力づくで取りに來い』とおっしゃいましたので、君主を捕えてとにかく頂戴に來ました。やり過ぎでしたかね。あんな君主でもないかと心配ですか？あまり心配する事はないでしょう」

「主君にはわが主君の愚を憐れまれて非常に寛大なご処置を頂戴してまいりました、決して行き過ぎたご処置とは申せません。天地の神もお聞きになっておられますので主君をお返し下さいとお願ひ申し上げる状況ではございません」

韓簡等は叩頭してそう言った。

秦軍が雍州の境界まで帰ってきたところで穆公は群臣に相談した。

「わしは天帝の命を受けて（警告）があった事、晋の乱を平定して夷吾（晋恵公）を即位させたが、その晋君がわが恩に背いて天帝のご機嫌を損ねてしまった。そこで晋君を捧げて天帝をまつり天恩に答えたいと思うがどうか」

公子繫は賛成したが公孫枝は、

「それはなりません。晋は大国です。晋人を捕虜にしたことですのでに

恨みに思っています。その上君主を殺せば益々晋人の怒りは大きくなり、晋が我々に報復しようとする気持ちには、我々が晋に対して持った気持ち以上に強くなってしまう」

と反対した。繫はそれに対し、

「臣は徒に晋君を殺してしまおうというのではなく、公子重耳殿を代わりに立てるべきだと申しているのです。徳なき者を誅し、徳あるものを立てるという事であれば怨まれることはありません」

と言うと公孫枝は、

「公子重耳殿は仁徳のある人で、父子の場合も兄弟の場合も帰国に対する態度はかわらないでしょう。父親が亡くなった時に事を起さなかった彼が、弟の死に乗じる事がありましか。もし重耳が帰国しなければ他の者を立てることになり夷吾と何も変わりませんし、重耳が入国したら秦を弟の仇と考えるでしょう。そうすれば夷吾を廃しても新たに重耳と言う仇を立てることになりますので、だめだと申し上げているのです」

「それでは、晋侯を追放、拘禁、復帰の三案のどれにすべきだろうか」
公孫枝が答えた。

「拘禁は匹夫に對することであって秦にとつては無益です。追放すれば必ず帰国を謀る者が現れます。復帰させるのが一番です」

「それじゃ今回の戦いで得るところなしだな」

「ただ復帰させるだけではなく、河西五城を割譲させ、世子圉をわが国に人質として取る事を条件に講和を許すのです。そうすれば晋君は終生秦を憎むこともなく、後日父親が亡くなって子が継いでも圉に恩を与えておけば、晋は代々秦を尊敬し、その利益は大きいと考えます」

「子桑の考えは数代に及ぶものだな」
しろう
ぼくろう 穆公はそう言うて恵公を靈台山の離宮に移し千人を付けて守らせた。

晋侯を城内へ連れてこようとしたとき、突然、内侍の一人が喪服姿で現れた。夫人に何かあったのかとたずねようとすると内侍の方から夫人の命を奏上した。

「天帝は秦晋の仲を裂いて戦争にしてみました。晋君が捕えられたのはわたしのお恥でもあります。晋君が押送されて来たら、その時わたくしも死なせていただきます。そのため、わざわざ内侍たちに喪服を着せて主上の軍をお迎えに上がりました。もし晋侯がお許しをいただければ、わたしもお許しいただくことになります。主上のお裁きをお待ちいたしております」

と言う。穆公は驚いた。

「夫人は後宮でどうしているのだ」

「夫人は晋君が囚われたとお聞きになると、後園の高殿の上にお粗末な部屋をお造りになり、太子に喪服をお着せになって宮殿を出られ、そちらにお住みになっておられます。台下の周辺には薪を何重にも積み上げて、朝夕のお食事を運ぶものもそれを踏んで上り下りしています。晋君が入城したら台の上で死ぬから火をつけてわたしを焼いてほしい、それが姉弟の情なのです、とおっしゃっておられます」

穆公はため息をついた。

「子桑（公孫枝）は晋君を殺すなと言う。殺せば夫人も死んでしまうところだった」
すいづ

内侍にその衰経（喪服に用いた麻の被り物と帯）を脱がせて、穆姫に、近いうちに晋侯は赦して帰すことにしていると伝えさせた。

穆姫はやつと宮殿に帰った。内侍が恐縮しながらたずねた。

「晋侯は利に目がくらんで義に背き主上との約束を破つたのです。それに夫人がお願いしたことも実行していません。今日の虜囚の恥は自ら招いたものです。夫人はどうしてそんなに悲しまれるのですか」

「仁者は憎めども親しきを忘れず、怒れども礼を捨てず」といいます。もし晋侯が秦で死ぬことになれば、わたしも咎を免れられません」
 内侍たちは夫人の賢徳を口々に話し合った。

さて晋侯はどのように帰国したのであろうか、それは次回のお楽しみ。

重耳亡命流浪の旅

下記図は次回以降晋重耳（後の文公）が驪姫の乱後亡命し復国するまでの各国遍歴図です

